

大学教育センター年報

第 16 号



平成24年 3 月

茨 城 大 学
大学教育センター

目 次 (第16号)

頁

巻頭言	佐 藤 和 夫 (大学教育センター長) ……………	1
平成23年度教養教育シンポジウム……………		3
「茨城大学におけるGPA制度について」		
平成23年度教養教育FD研究会……………		39
「eポートフォリオの導入と今後の展開～ポートフォリオの教育的意義～」		
各基礎教育専門部会からのFD報告……………		53
授業アンケートの結果について……………		71
教養科目推奨授業選定の経過及び結果……………		99
ニュースレター「ローザ・ブルムラ」の軌跡……………		101
: No.42 (平成23年4月号)～No.43 (平成23年10月号)		
キャリア教育部活動報告……………		117
理系質問室の活動報告……………		129
初年次学生の欠席者調査報告……………		131
多読室利用状況報告……………		133
RENAND I 活用報告……………		135
平成23年度大学教育センター活動内容……………		141
(1) 学外シンポジウム等の参加報告		
(2) 大学教育センター活動の経過		
(3) 大学教育センター関係委員名簿		
(4) 大学教育センター理系基礎教育部教科書編集委員会報告		
平成23年度大学教育センター専任教員研究活動……………		173
平成23年度大学教育センター年度計画実施報告対処資料……………		181

巻 頭 言

茨城大学大学教育センター長
佐藤和夫

前年度末の3月11日に発生した東日本大震災はその巨大さ故に翌23年度にも影響が及び、本学では入学式が中止され、教養科目のスタートは例年より3週間ほど遅い4月25日から開始することを余儀なくされた。入学者全員を収容できる茨城県立武道館も、本学で最も収容人数の多い講堂も地震被害のため使えず、新入生ガイダンスは学部の定員に応じ1～4分割、4部制で実施した。学務課の周到な計画と手配や保健管理センター、各学部の協力のお陰で4月末には教養教育をスタートさせることができた。授業時間の確保についても先生方に課題等の出題をお願いして補っていただいた。こうしてスタートは変則であったが、その後は大きな混乱もなく、最後は普段とほぼ変わりなく終えることができたのである。

本センターの第一義的な使命は教養科目の円滑な運営と実施である。最初こそ震災余波や原子力発電所事故の影響で教員の一部に退職者が出るなどのやや紆余曲折があったものの、専門部会長始め関係教職員の迅速な対応で実施計画に盛り込んだ科目を開講することができた。深く感謝申し上げたい。

二つ目に教育点検支援の活動がある。まずシラバスを通じて一つ一つの授業をしっかり組み立てていただき、最後に学生によるアンケート調査を行い、その結果に基づき各担当教員に改善をお願いしている。このシステムについては理解が進み、100%に近い科目で実施されている。さらに本センター独自の全学に向けての啓発活動がある。近年力を入れてきたのは新しいGPA制度の施行であり、これは訪問調査の実施やシンポジウムなどを開催し、十分な助走を経て平成25年度からCAP制度も含んで開始することになっている。

三つ目は「キャリア教育」であり、これは本センターが「司令塔」とされた「就業力育成GP」（平成22年度から始まった文部科学省選定の優れた教育実践の取り組み）の計画に従って各学部と協力して教養と専門の区別を超えた「学士課程教育」の柱として進めていくことになる。本年度は従来の「主題別ゼミナール」と「情報関連科目」を就業力育成の観点から「フレッシュマンゼミナール」と位置づけて試行した。来年度から本格実施する。なお、本GPの内容と成果については別冊で刊行する予定である。

以上主要な業務について述べたが、本センターには全学的な教育課題を整理し、解決法を探り、提言する機能が求められている。期待は十分理解しつつも、まだ組織も小さく所属する教職員も少ない。加えて内外の課題はいよいよ大きくなり、その対処はますます困難になりつつある。さはさりながら全学の協力を得て少しでも前進して、明るい展望を開いていきたいと願っている。

平成23年度茨城大学 教養教育シンポジウム

『大学教育センターシンポジウム 2011』 実施報告

大学教育センター 教育点検支援部

実施概要 シンポジウム副題 茨城大学における GPA 制度について
日時 平成 23 年 11 月 2 日 (水) 13:30~16:00
会場 茨城大学総合研究棟 (K 棟) インタビュースタジオ
(日立地区・阿見地区へ VCS 配信)
対象 大学の教職員
主催 大学教育センター、教育改革推進会議

平成 23 年度の大学教育センター主催のシンポジウムが標記の通り開催された。テーマは「GPA」である。大学教育センターではこれまで、平成 21 年度 FD 研究会（講師：山梨大学・日永龍彦教授）、平成 22 年度シンポジウム（講師：一橋大学・米山高生教授）等を通して、本学での GPA 本格導入に向けた議論を進めてきた。現在、茨城大学における GPA 議論は成熟しつつあり、具体的には、100 点満点の得点を GPA の基礎的数値とする（いわゆる「Letter Grade」への置き換えはしない）ひとつの方式が提案され、導入に向けた最終的な検討が進められている。このような背景のもと、本学で検討している GPA 方式の「基」を考案された半田智久教授（お茶の水女子大学教育開発センター）を招き、標記の副題のもとシンポジウムを開催する運びとなった。本シンポジウムは、「機能する GPA」と題された半田教授による講演に始まり、続いて茨城大学の GPA 制度案の説明および現状報告（学内者による）の 2 部構成で進行した。詳細についてはプログラム等を参照していただきたい。

なお、本シンポジウムの参加者は計 97 名で、内訳は、水戸地区 66 名、日立地区 8 名、阿見地区 23 名（日立・阿見へは VCS 配信）であった。本報告には関連資料として下記の書類を添付したので併せて参考にさせていただきたい。（梅原守道）

添付資料一覧

- [1] シンポジウム開催案内（ポスター）
- [2] シンポジウム当日の配布資料
- [3] 参加者対象の事後アンケート集計結果



半田教授



会場の様子

※シンポジウムの全資料を小冊子にして、全教官に配布した。

茨城大学における新しい GPA 制度について

大学教育センター長
佐藤和夫

1. 「新しい？」

本学における GPA 制度は古くて新しいテーマである。一応の結論はすでに平成 13 年度「授業の在り方に関する実施小委員会」で出されており、翌 14 年度から 15 年度にかけてデータを収集し、平成 16 年度に導入の予定であった。当時導入の中心にいた副学長は国立大学で 2 番目の導入になると豪語していたが、退任後にはいつしか GPA は表舞台からは消えていった。ただその後導入された教務情報ポータルシステム（LiveCampus）には GPA の機能が付属していて実際には算出できるのだが、使われないままになっている。どのような GPA なのかは後出の後藤教務情報係長の発表を聞いていただきたい。

→ **資料 1** 第 5 回議事メモ参照

2. 「再び」そして「新たに」

そして再び第 2 期中期計画の中で「評価点平均制度」（=GPA）の本格導入が打ち出された。しかしながら計画のほとんどがそうであるように途中経過とゴールについては書かれているものの、具体的な手順も方式も示されていない。そこでその実現のために平成 22 年度に全学教務委員会のもとに森野浩大学教育センター長を座長とする GPA 検討ワーキンググループが設けられ、計 4 回（6 月 24 日、8 月 5 日、10 月 28 日、1 月 27 日）の検討を重ね、全学の合意と課題が取りまとめられた。

→ **資料 2** 「茨城大学における GPA 制度の導入にむけて」（大学教育センター年報第 15 号 10 頁以下）参照

3. 新しい GPA 制度を導入するに当たって

大学教育センターは平成 23 年度の第 2 回教育改革推進会議に前年度までの GPA 検討ワーキンググループによる検討結果を報告した。同時に新しい GPA 制度の案を夏休み中にまとめ、次回会議に提案するよう要請された。

→ **資料 3** 平成 23 年度第 2 回教育改革推進会議資料

4. 新しい GPA 制度の提案

夏休み明けの 10 月 13 日に開催された第 3 回教育会議で大教センターから新しい GPA 制度が提案された。この方式の要点は「機能する GPA」（fGPA）にある。これは 100 点法による評価を直線的にグレードポイント（GP）に変換する方式であり、以下のように算出される。

$$GP = (100 \text{ 点満点の得点} - 55) / 10 \quad (\text{ただし } GP = 0.5 \text{ 未満は } 0.0)$$

$$GPA = \Sigma (GP \times \text{当該履修科目の単位数}) / \Sigma (\text{履修科目の単位数})$$

この方式を研究と実践の両面から推進してきたのが本日特別講演の講師としてお迎えしたお茶の水女子大学の半田智久教授であり、先生が勤務された信州、静岡、お茶の水女子の各大学ではこの方式が導入されている（信州大学は来年度から実施予定）。

→ **資料4** 平成23年度第3回教育改革推進会議資料

5. これから

1)各学部での検討

新しい GPA 制度では算出方式と導入の時期は統一して行われるが、単位の上限設定（CAP）や GP の対象となる科目については各学部ごとに定めることになっているのでこの部分を中心に検討いただくことになる。

2)教育改革推進会議での結果集約

各学部の結論は教育改革推進会議で集約し、実施に向けて具体化されていくことになる。

3)LiveCampus の整備

GPA が実際に学生の成績表あるいは成績証明書に明示されるためには LiveCampus の更新が必要となる。次年度にそれが予定されているとのことであり、学生の学修指導の成果を上げるためにも、中期計画を達成するためにも新しい GPA 制度を LiveCampus の更新に合わせて実現しなければならない。

授業の在り方に関する実施小委員会（第5回）

日時：平成13年11月1日（木） 13時30分から

場所：事務局第二会議室

1. 学則26条の5第2号規定の別表「評価の内容」の表記について
各学部から対応について報告がされた。

- 1) 人文学部：原案に代わる申し出はなく、原案通りで評価することになる。
- 2) 教育学部：種々意見が出たが、「理解」を「修得」に置き換えることで対処したい。
- 3) 理学部：(欠席)
- 4) 工学部：様々な意見が出て一本化できなかった。
- 5) 農学部：H.14年度は原案で対処する。

工学部も含め、具体的科目での表記変更提案はなく、結局原案を大学教務委員会に提案することになった。

2. 評価点（GPA）制度を導入するに当たっての検討事項について

1) 小委員長より、H.14～15年度にかけてデータを収集し、H.16年度に導入できるかどうか、今後検討していきたい、との方針が表明された後、今後の検討課題として

- ① 登録期間をいつまでにするか
- ② 再履修・再試験をどう扱うか
- ③ 学生の不服申し立て制度を設けるのか

の3点が示された。

2) 富山学生課長補佐より、資料「評価点（GPA）制度の検討事項について」に基づき、下記4点を中心に説明があった。

- ① GPAの基準点
- ② GPA導入の利点と欠点
- ③ 低い評価点、欠試、取り止め等の取り扱い
- ④ 実施するための整備

茨城大学における GPA 制度の導入にむけて

森野浩、佐藤和夫、岡山陽子¹

1. はじめに

本学においては授業の質の保証を求める全国的な流れを受け、第 2 期中期計画で「評価点平均制度」（以下 GPA と略す）の本格導入を目指している（R111a02-2、R111b04-4）。この制度は単に単位を積み上げるだけではなく、全体として習熟度を向上させることをねらいとしている。すべての制度がそうであるようにこの制度にも長所と短所がある。一方では学生によりよい評価を得させる作用をもつが、他方で評価点を上げるために修得の困難が予想される科目が避けられる傾向がある。

そのような問題点を洗い出しながら、それらを克服して導入に向けて歩み出すため、平成 22 に年度に全学教務委員会のもとに森野浩（大学教育センター長）を座長とする GPA 検討ワーキンググループが設けられ、計 4 回（6 月 24 日、8 月 5 日、10 月 28 日、1 月 27 日）の会合で検討が重ねられた。

また大学教育センターでは平成 22 年度教育改善経費に「GPA の制度設計に係わる基本的調査と共通理解の推進」を申請し、これが認められたことから、先進事例の調査と全学的な共通理解を促進するためのシンポジウムを中心に活動を行った。以下に平成 22 年度の諸活動について概略を報告する。

2. GPA 検討ワーキンググループでの検討結果について²

今年度の検討結果とシンポジウムでの報告・議論の結果、以下の 3 点の合意が得られた。

- 1) 目的を学習支援及び履修指導の一つの手段として活用することに置く。
- 2) 成績分布の基準化については、各科目群等を単位としての努力目標とする。
- 3) 第 2 期期間中は卒業要件化を見送る。実績を評価の上、第 3 期の計画を立てる。

またその中で以下のような点も明らかになった。

- 1) 大学の構成員に GPA 導入の目的や意義についてさらに共通認識を深めること
- 2) GPA 制度の内容には地域や大学によりかなりの差異があることから、「国際標準」とされているものよりも本学にふさわしいシステムを目指すべきこと
- 3) GPA 制度は学士課程全体で扱って初めて有意義なものになること

以上のことから今期中期計画・中期目標は以下のように修正することが妥当であろう。

H22：GPA 制度の問題点を洗い出し、整理する

¹ 森野浩：理学部教授、前大学教育センター長、佐藤和夫：人文学部教授、大学教育センター長、岡山陽子：大学教育センター准教授

² 2. に関するまとめは森野浩による。

H23：合理的な GPA 制度を提案し、全学の合意を得る（教養科目だけ実施しても導入の利点は少ない）

H24：GPA を制度として（CAP 制や履修指導などとセットで）学年進行（？）で実施に移す

H25：前年の結果を検証し、改善を図る

H26：導入後 2 年の結果を検証し、改善を図る

H27：導入後 3 年の結果を検証し、改善を図るとともに第 3 期の計画を策定する

今後の具体的課題としては以下のようなものがある。

- 対象科目の選定（教養科目及び専門科目）
- GPA 計算式の確定（GPA か FGPA か）
- 6 段階評価方式の再検討（茨大方式（一橋大学方式）を継承するか？）
- 成績申し立て制度と履修指導体制の整備
- CAP 制度と、学習支援の観点からの関係確立
- LC（ライブキャンパス）との連動の確認
- GPA 数値を成績証明書に記述するか否か（成績表には記述）

以上からわかるように GPA 制度の定着のためには長期に渡る検討を踏まえて慎重に進展を図る必要があること、また各学部教務委員長と大教センター執行部で構成される委員は比較的短期で交代する可能性があることから、座長の指名に基づきこの制度に造詣の深い特別委員を職指定によらずに委嘱するのもよいと思われる。

3. 調査報告

A. 国際基督教大学³

国際基督教大学を訪問したのは平成 22 年 8 月 30 日、同大広報センター長、大西直樹教養学部教授に対応いただいた。

a. 重要なポイント

* GPA は単なる成績の平均値ではない。カリキュラム改革である。

* 「科目の登録制度」、「教員の成績への考え方（成績の付け方）」、「学生サポート」を徹底しないと成功しない。

* GPA には「厳格な GPA 制度」と「そうではない GPA 制度」がある。「厳格な GPA 制度」でないと世界基準とならない。

b. 科目の登録制度

同大は 3 学期制を取っており学生は、4 年間で、12 回、科目を選択できる。⁴

³ 以下 A. 及び B. は岡山陽子が調査を担当した。

⁴ <http://www.icu.ac.jp/liberalarts/educational/system.html>

茨城大学で GPA を導入するに当たって

大学教育センター
佐藤和夫

1. WG の結論は第 2 期中期計画中は卒業要件とはしないこと。
→ 厳格な GPA ではなく、「ゆるい」GPA
2. それでも GPA は学習支援、履修指導に役立つ。また学習成果の指標の一つとなる。
3. そのためには厳格（正確）な成績評価が前提となる。
← クラス人数、教育技術等の問題もあり、分布管理はうまくいかない。反対も多い。
→ ルーブリックによる評価も一案（末尾参照）
4. 合理的な GPA 算定方式の導入
→ 資料「茨城大学における GPA 制度の導入にむけて」参照
5. その他の前提
 - CAP 制の導入（学習時間の確保、ただし学習させる授業展開も重要）
 - しっかりした履修指導・学習支援体制
 - 異議申立て制度
6. 解決すべきこと
 - 再履修制度（成績の上書き）
 - 取止めの時期（GPA 算入・非算入の分かれ目）
 - GP の対象となる科目の選定
 - 成績証明書での扱い
 - ...
7. 今後の予定（大教センター）
 - GPA 案の作成（夏休み中）
 - シンポジウムの開催（11/2（水）、講師：半田^{もとひさ}智久お茶の水女子大学教育開発センター教授）

資料 4

平成 23 年 10 月 13 日

茨城大学新 GPA 制度（案）

大学教育センター
佐藤和夫

1. GPA 制度導入の目的

茨城大学では第 2 期中期計画・中期目標として各学部のポリシーを踏まえ教養教育並びに専門科目の教育改革を推進すること、その重要な柱となる学習の質を確保するための指標として GPA 制度を導入することとしている。

この計画・目標を達成するため全学教務委員会は平成 22 年 6 月に GPA 検討ワーキンググループを設置し、検討を重ねた。また大学教育センターでは教育改善経費の支援を受け、調査・研究を行ってきた。これらの結果と成果に基づき本センターとしては以下のような新しい GPA 制度を提案する。

2. GPA とは

GPA (Grade Point Average) とは履修科目の成績評価 (Grade) に応じて評点 (Point) を付与し、単位の重み付けをした平均 (Average) のことであり、以下の計算式で算出される。

$$\text{GPA} = \Sigma (\text{履修科目の GP} \times \text{その科目の単位数}) / \Sigma (\text{履修科目の単位数})$$

3. GPA の長所

1) 学習成果が見えるようになる

文字による評価 (Letter Grade = LG、本学では A+、A、B、C、D、E) が並んだ成績表を見たときの漠然とした「よい」、「悪い」の印象ではなく、成果がはっきり数字で示される。「よりよい成績を取ることを実感できる。」 (お茶の水女子大学 HP)

2) 履修申告の精選が進む

必要以上に科目を履修して負担が過剰になり、履修科目の得点が下がれば、GPA にマイナスに作用するので、不必要な科目登録を避け、計画的な履修を促す。

3) 各種の選考や表彰に活用できる

単位の重み付けのある数値なので、単位の実質 (学習における努力の量) が反映され、学部・専攻を越えた比較ができるようになり、奨学金等各種選考の透明性が増す。一方大学は実質が反映されるように単位設定を行う必要がある。

4. 本学での GPA 算出方式

本学では成績評価を 100 点満点で行い、その数字を LiveCampus に入力すると、文字による評価 (Letter Grade = LG) に置き換えられる。よく見られる GPA 制度ではこれに 4、3、2、1 等のポイントを与え、平均を出している。せっかく元々数値で出ている評価をわざわざ文字で置き換え、これを再び数値化すれば、当然ながら元の 100 点法による数値がかえって不正確なものとなる。したがって本学では 100 点満点の得点を GPA の基礎的数値とし、算出に当たっては合理的な GPA 方式を追求してきた半田智久氏の成果 (機能的 GPA = fGPA) に基づく下記の算定式を提案する。

$$GP = (100 \text{ 点満点の得点} - 55) / 10$$

(ただし GP=0.5 未満は 0.0)

$$GPA = \Sigma (GP \times \text{当該履修科目の単位数}) / \Sigma (\text{履修科目の単位数})$$

これにしたがえば、50～59 点の範囲の得点 (評価 D) は単位にはなるが、GP は 0 (ゼロ) となる。

5. CAP 制

単位の上限設定を行う。何単位を上限とするかは学部毎に定める。

(参考)

北海道大学：半期 21～24 単位 (学部毎)

一橋大学：年間 50 単位 (教職に関する科目及び教科に関する科目を除く)

岡山大学 (理学部)：年間 42 単位 (成績優秀者は次年度 47～52 単位に緩和)

宇都宮大学 (教育学部)：半期 24 単位 (GPT が 55 以上かつ GPA が 2.75 以上の者は 30 単位に緩和)

ICU：13 単位 (3 学期制、アドバイザーの許可により 18 単位まで緩和)

6. 学生への通知

- 1) 成績表に学期 GPA と通算 GPA の両者を表記する。
- 2) 成績証明書にも記載する。

7. 履修取止め期間

- 1) 前期：5 月の第 4 週
- 2) 後期：11 月の第 3 週または第 4 週

(参考)

北海道大学：「履修取消し」制度、学期末試験に近い時期 (6 月及び 12 月)

一橋大学：「履修撤回」、夏学期：5月下旬、冬学期：11月上旬（詳細はWEBサイトで連絡）

岡山大学：履修登録取消の期間

○前期： 5月の第4週目（月曜日～金曜日）

【平成23年度は、5月23日（月）～5月27日（金）】

○後期： 11月の第3週目または第4週目（月曜日～金曜日）

【平成23年度は、11月14日（月）～11月18日（金）】

宇都宮大学：「聴講届確認期間」、各学期の授業開始後4週間程度、教務委員会が年度ごとに定め、授業計画等行事予定表に記載

ICU：2週間の Window-shopping Period 内に取りたい授業に出て、履修するかどうかを決める（この期間以後は学生の都合で取り消しできない。例外は医師の診断書がある場合のみ）。

8. GPAの対象とならない科目

- 1) 100点法による得点評価を行わない合否のみの科目
- 2) 卒業要件に算入しない科目（教育学部を除く教職関連科目など）

9. 成績の上書き

○不合格科目のみ認める

上書き制度：過去に履修した科目を再度履修し、総履修登録単位数（GPA計算式の分母）を増やさずに成績評価を上書きする。ただしCAPにはカウントされる。

10. GPAの活用

- 1) 学生への履修指導
 - 2) 優秀者表彰制度の創設
 - 3) 各種選考等での利用
- 等

11. 実施へのプロセス

- 1) 教育改革推進会議で周知・試行期間等について検討し、実施に移す。
- 2) 学年進行とする（← LiveCampus のプログラム特性による）

大学教育センター
シンポジウム2011
平成23年11月2日(水)

新GPA計算式による シミュレーションと その利用

評価室
畹田敏行

コンテンツ

- GPAの計算結果
 - 学生の成績データを用いた成績分布
 - GPA値と他の成績データとの関係
- GPAの利用について
 - 大学の中期計画とGPAの関係
 - 認証評価とGPAとの関係
 - 想定されるGPAの活用方法

計算に用いたデータ

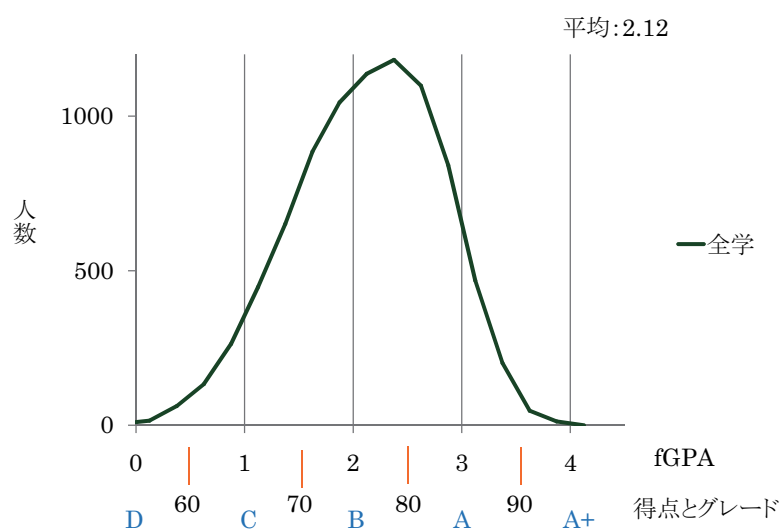
- 07年度入学生から11年度入学生のデータを使用。
- 対象学生の2007年度から2011年度前期までの成績データを使用。
- 「取止」については計算から除外。
- 「合格」および認定単位についても除外。
- 計算に用いた成績数と学生数

	全学	人文	教育	理学	工学	農学
成績数	451,808	101,298	108,972	59,949	147,490	34,099
学生数	8,496	2,100	1,828	1,100	2,834	634

3

全学のfGPA分布

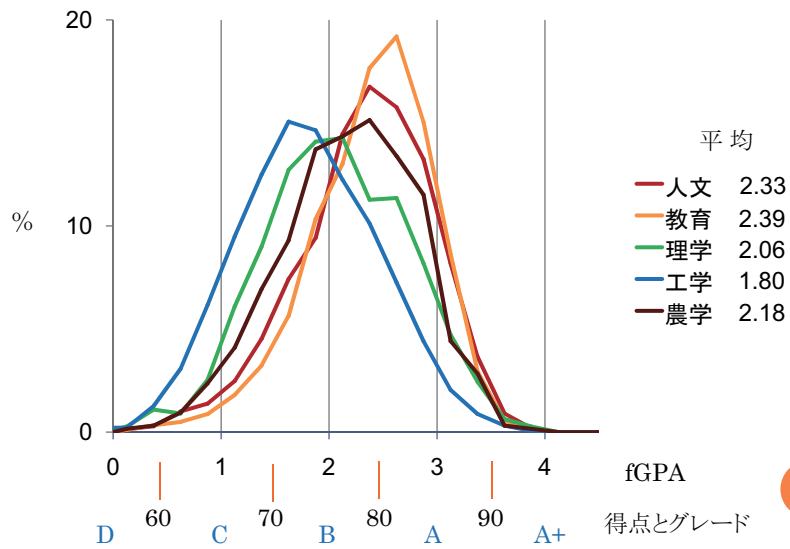
(0.25ポイント刻み)



4

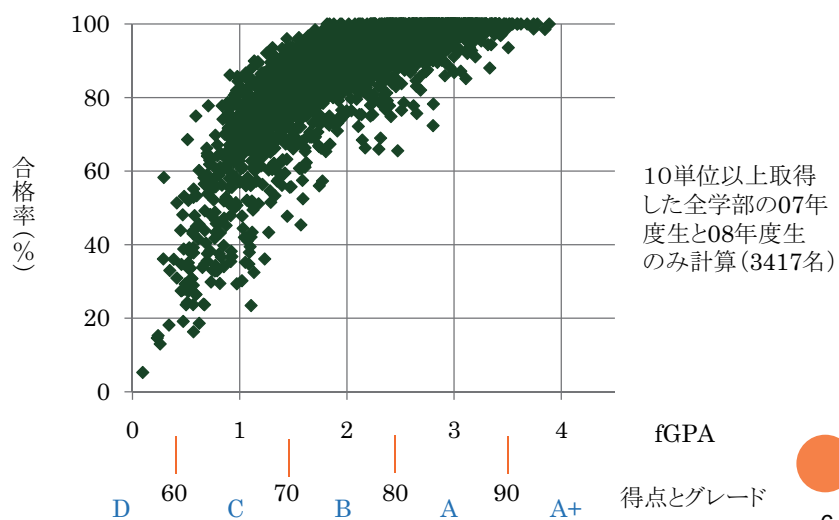
各学部の所属学生のfGPA分布

(0.25ポイント刻み)



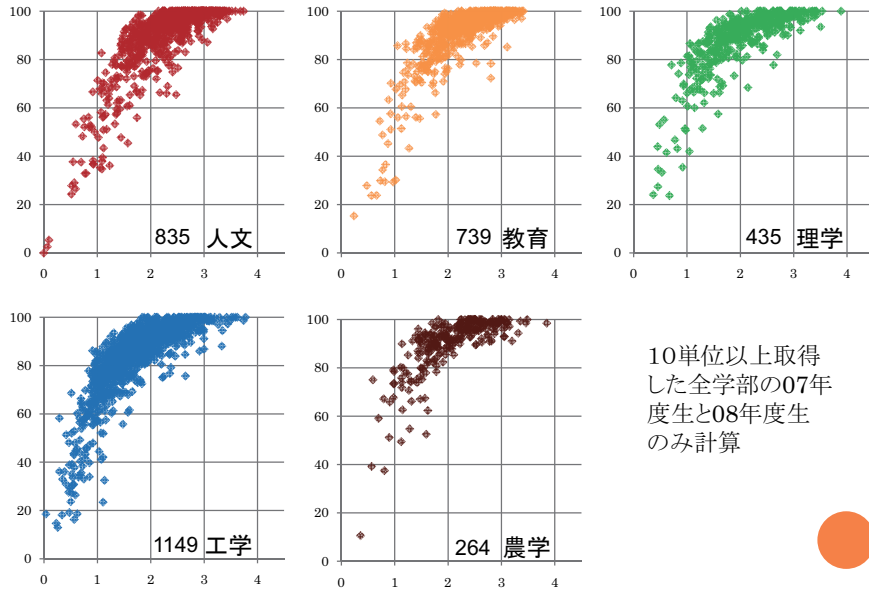
5

合格率とfGPA



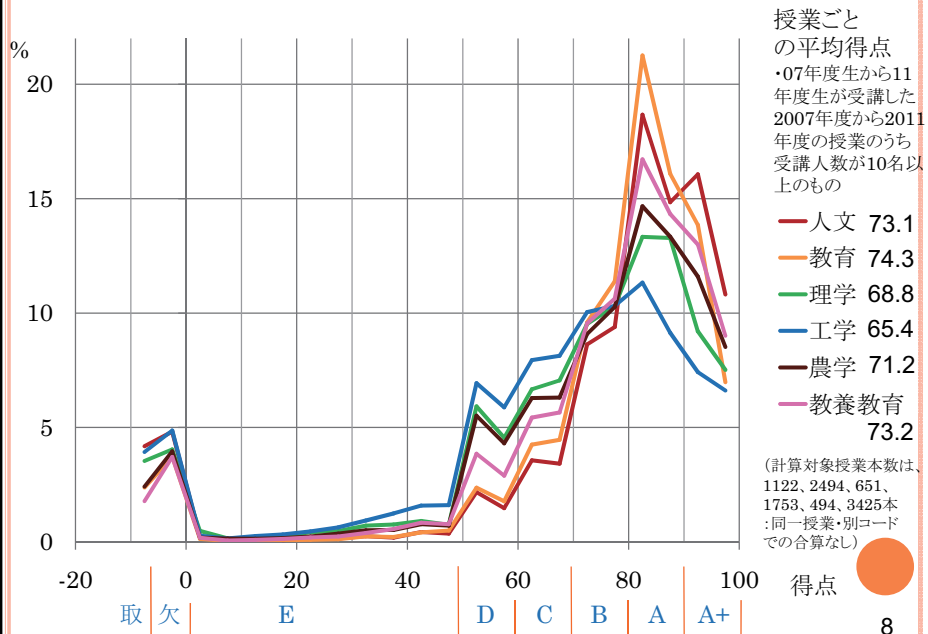
6

合格率とfGPA（学部別）



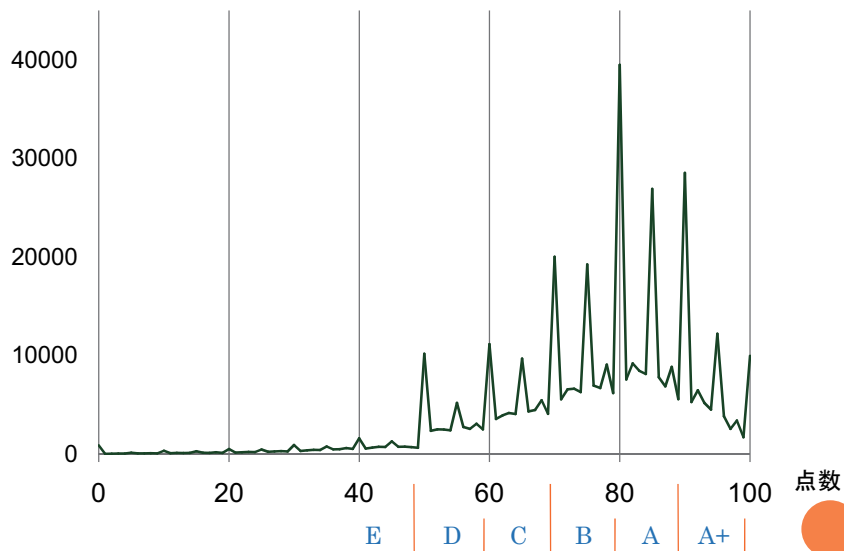
7

各学部等の平均的な授業の得点分布（5点刻み）



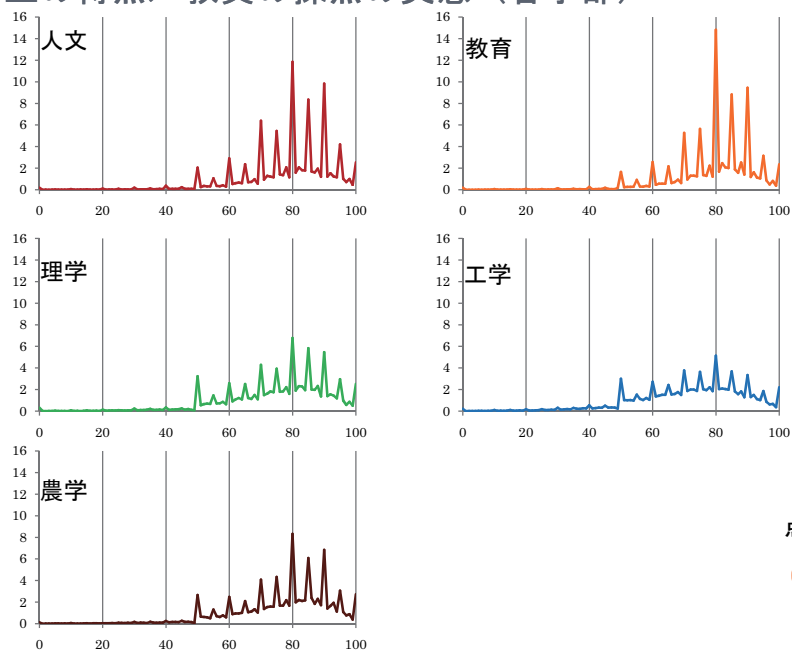
8

学生の得点／教員の採点の実態（全学）（1点刻み）



9

学生の得点／教員の採点の実態（各学部）（1点刻み）



10

データについて

- 本日紹介できなかったデータとしては、以下のデータなどがあります。各学部・学科でのFDなどに応じて、グラフや表、説明等をご要望いただければ、学内各所に伺いますので、お気軽にご相談ください。
 - 各学科やコースごとの成績分布(GPA、生点数)。
 - 全学生や全授業の成績を等高線図化したもの。
 - ある学年の学生の学年進行と成績分布の変化。
 - 学生の学年進行と成績の変化傾向。
 - 修得単位数の年時変化
 - ..などなど

評価室(事務局3F)

電話 水戸8572

11

中期計画との関係

[教養教育の成果と改善]

■2 習熟度別教育を教養教育科目の中に定着させる。さらに、教養教育の**修得状況の思わしくない学生**について修得度を改善する。

(R111a02)

計画施策: **教養教育の修得状況について「GPA」などの適切な指標を使用した学生指導** (R111a02-2)

[専門教育内容と方法の改善]

■4 学士課程教育の**修得状況が悪い学生**について、修得状況の向上を図り、卒業生の質を確保する。(R111b04)

計画施策: **「GPA」活用拡大のための環境整備** (R111b04-4)

(計画施策: 学習管理制度を導入し各年次において修得状況を把握し改善)

12

中期計画との関係

- ・中期計画の議論の際のポイントは、**効果的な学習支援**の実施などにどのようにGPAを活用するか、など。
- ・(切り捨てのためではない)退学勧告について議論された[卒業要件に用いるような議論ではない]。
- ・基本は、エンrollment・マネジメント(総合的學生管理)の視点に立った**早期発見**、**早期対応**。



13

認証評価との関係 (基準5)

5-3-② **成績評価基準**が組織として**策定**され、**学生に周知**されており、その基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。

【留意点】

- 成績評価基準について、例えば授業の出欠状況、レポート、中間テスト、最終試験の組合せにより、成績(A、B、C等)を判定するといった成績評価方法も分析。
- GPA制度を実施している場合には、その実施状況について分析。
- 学生に対して、刊行物の配付・ウェブサイトへの掲載等の方法により周知を図っているかを分析。
- 成績評価、単位認定が適切に実施されているかについて分析。



14

認証評価との関係（基準6）

基準6 学習成果

6-1 教育の目的や養成しようとする人材像に照らして、学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、**学習成果**が上がっていること。

6-2 卒業(修了)後の進路状況等から判断して、学習成果が上がっていること。

この基準では、大学の教育を通じて学生が身に付けた学習成果(ラーニング・アウトカム)について評価される。

【学習成果(ラーニング・アウトカム)】

教育プログラムや教育コース等、一定の**学習期間**終了時に、**学習者が獲得し得ると期待される知識・技能・態度等**。「教員の視点にたった教育」から「学生の視点にたった教育」への転換、すなわち、「**教員が何を教えるか**」よりも「**学生がどのような能力を身に付けるか**」に重点を置かなければならないとの考えから、大学教育を巡る議論において、従来、用いられてきた「教育成果」に代わって、この用語が多用されるようになってきている。

15

認証評価との関係（基準8）

8-1-① 教育の取組状況や大学の教育を通じて学生が身に付けた**学習成果**について**自己点検・評価**し、教育の**質を保証**するとともに、教育の質の**改善・向上**を図るための**体制**が整備され、機能しているか。

【留意点】

○ 教育活動の状況及び学習成果に関するデータや資料を収集・蓄積する担当組織、責任体制、収集・蓄積の状況を分析。

○ 教育活動の状況及び学習成果を自己点検・評価及び検証するための取組について、自己点検・評価及び検証の実施体制、具体的な検証事例等を分析。

○ 評価結果を質の向上や改善に結び付けるための継続的な取組(継続的な方策の立案から実施までのプロセス、PDCAサイクル等)が実施されているかを分析。

16

認証評価との関係（基準 8）

8-2-① ファカルティ・ディベロップメントが適切に実施され、組織として**教育の質の向上や授業の改善**に結び付いているか。

【留意点】

- ファカルティ・ディベロップメントの実施内容・方法及び実施状況（教員参加状況を含む。）を分析。
- ファカルティ・ディベロップメント自体が、学生や教職員のニーズを把握し、組織として適切に実施されていることを分析。
- ファカルティ・ディベロップメントの後、どのような方法（システム）で改善に結び付けるのか、また、把握された問題点等に対する具体的改善事例を示しつつ機能状況を分析。

認証評価との関係（試論的整理 1）

- GPAのみでは、内部質保証を説明するデータとしては十分ではない。
 - 例えば、**グレードごとの成績評価基準**が教員ごとに異なるため。
 - ただし、原則的に教えている内容が異なるのだから、**統一基準は不可能**（標準的なものを示すことは可能）。
 - 従って、単純に「GPAが2.0以上の学生」といっても、それは何らかの質を保証するものではない。（比率固定化やある程度のガイドラインを設けても、あまり意味が無いのではないか？：GPAはLOの指標ではない？）
- 認証評価で求められているものは学習成果である。これは、教員が何を教えたか、ではなく、**学生が何を学んだのか**、ということである。
 - **成績評価基準**がグレードごとに**明記**され、そこに**求められる能力**が表示されている必要がある。つまり、学生に何を学んで何をモノにしていれば、どのグレードの成績が付与されるのか、**学生側の視点**に立った記載が必要ではないか。

認証評価との関係（試論的整理 2）

- シラバス等に各グレードごとの成績評価基準を明記し、学科などの教育プログラム単位(教育目標を持つ最小構成単位)で議論の上、グレードの持つ意味について合意を形成することが合理的か？
 - **グレードの意味が合意**されて初めてGPAは意味を持つ？(各授業相互間での**成績の等価性**):しかし、たぶん、実際にやってみると、結構、難しいと思うので、最初は、**出来る範囲でやればよい**のではないか。
 - 段階別の成績評価基準の明記は、学内でも既に進行中。
 - 成績評価の**正確性**という面では、これがないといくら**異議申し立て**制度を設けてもあまり効果が無い？
- [ルーブリックなどを用いたラーニングアウトカムアセスメント(LOA)は、まだ日本では研究途上なので、すぐには使えない。]
- 内部質保証システムとしては、教育プログラムごとに教育目標の達成状況などを確認し、自律的に改善する必要があると考えられるが、その際に用いる成績データなどを信頼性を確保する上でも成績評価基準のある程度の統一は必要ではないか。

19

まとめ

- とにかく、このGPA制度を導入し、**使えるところから**使い始め、走りながら考える(使いながら手直ししていく)ことが肝要ではないか。
- 例えば、**学生支援**などには、一定程度、**活用することができる**のではないか。(エンロールメントマネジメントに近いものは複数の学部で導入中なので、GPAなどを用いて、効果的指導を行う。)
- 今後、GPAを活用した**内部質保証システム**については、全学や各部局で議論していただく必要がある(認証評価のため、中期計画のためだけでなく、学生のためにも)。
- 教育活動の状況及び学習成果に関するデータは、成績だけでなく学生や企業への意見聴取結果などもあるので、多面的な情報収集が必要。

20

参考:国際性を持った人材の育成ールーブリックの例

習得目標	不到達	基準にやや満たない	基準を満たす	基準を越える
文化理解	諸外国の社会事情や文化を表層的、又は断片的に紹介するのみで、考察が欠けている	諸外国における社会事情や文化を歴史的背景を通じて理解しているが、考察が個人の感想の域を出ない	諸外国における社会事情や文化を歴史的背景を通じて理解した上で、考察に一貫性がある	社会科学の理論的な枠組みから諸外国の社会事情や文化を深く理解し、考察において関連データを提示している
実践性	外国語で意思疎通を行うのが難しい	外国語で自分の意見や考察を表現できる	外国語で自分の考えや分析をスライドを用いて発表できる	外国語でグループの会議の議題設定や進行などを勤めることができる

本田寛輔氏 (IR Analyst, Empire State College, SUNY) の報告H22年8月の大学評価担当者集会における講演資料から転載

参考:本学の教養教育の成績評価基準

区分	評価基準	評価の内容
A+	100点 ～90点	授業内容を十分に理解(学修)することができた。 他の授業や関連する専門領域に活用することができる。
A	89点 ～80点	授業内容を8～9割理解(学修)することができた。 他の授業や関連する専門領域に活用することができる。
B	79点 ～70点	授業内容を7～8割理解(学修)することができた。 自分の力で他に活用する道を開くことができる。
C	69点 ～60点	授業内容を6～7割理解(学修)することができた。 糸口を与えれば他に活用する道を開くことができる。
D	59点 ～50点	授業内容を5～6割理解(学修)することができた。 他への活用は困難である。
E	49点～	授業内容の半分以下しか理解(学修)できなかった。 再履修することが望ましい。

Live Campusにおける GPAの現状

現状の特徴

1. 評価(A+、A、B...)で計算
2. 算入しない項目あり
評価“取止“の算入不可
認定科目(NA、NB等)の算入不可
学科ごとに算入しない科目の設定ができる
成績の上書き不可
3. 入学から現在までの一括計算
4. 証明書への記載不可、WEB上でのみ確認
5. CAP制との連動なし

例えばこんな場合

科目番号	科目名	担当教員	科目区分	単位区分	単位	評価	修得年度
K5AAZ300	総合英語(レベル3)		外国語(総英3以上)	選必	2	A+	2011
T8001500	情報物理		必修科目	必	2	欠試	2011
T4068000	通信ネットワーク論		選択科目	選択	2	B	2011
T4070500	物性工学		選択科目	選択	2	取止	2011
T8001000	化学概論		選択科目	選択	2	D	2011
T8008000	電波工学		選択科目	選択	2	A+	2011
T8011500	光通信工学I		選択科目	選択	2	B	2011
T8040900	数学解析I		選択科目	選択	2	B	2011
K5AAK101	総合英語(レベル1)◇認定	指定なし	外国語(総英)	選必	2	NA	0000
K5AAK201	総合英語(レベル2)◇認定	指定なし	外国語(総英)	選必	2	NB	0000
K5D11201	独語I		外国語(独語)	選必	1	E	2009
K5D11201	独語I		外国語(独語)	選必	1	D	2010
K6011201	身体活動		健康・スポーツ科目	選必	1	B	2009
K6011202	身体活動		健康・スポーツ科目	選必	1	C	2010
K8011101	情報処理概論		情報関連科目	選必	2	B	2010
K1134301	人間と歴史		分野別教養(人文)	選必	2	B	2009
K1163601	人間とコミュニケーション◇認定	指定なし	分野別教養(人文)	選必	2	NA	0000
K1163602	人間とコミュニケーション◇認定	指定なし	分野別教養(人文)	選必	2	NA	0000
K2114401	社会科学の概観◇認定	指定なし	分野別教養(社会)	選必	2	NA	0000
K2151401	社会と経済◇認定	指定なし	分野別教養(社会)	選必	2	NA	0000
K2161401	社会と経営◇認定	指定なし	分野別教養(社会)	選必	2	NA	0000

評価が“取止”は除外

科目番号	科目名	担当教員	科目区分	単位区分	単位	評価	修得年度
K5AAZ300	総合英語(レベル3)		外国語(総英3以上)	選必	2	A+	2011
T8001500	情報物理		必修科目	必	2	欠試	2011
T4068000	通信ネットワーク論		選択科目	選択	2	B	2011
T4070500	物性工学		選択科目	選択	2	取止	2011
T8001000	化学概論		選択科目	選択	2	D	2011
T8008000	電波工学		選択科目	選択	2	A+	2011
T8011500	光通信工学I		選択科目	選択	2	B	2011
T8040900	数学解析I		選択科目	選択	2	B	2011
K5AAK101	総合英語(レベル1)◇認定	指定なし	外国語(総英)	選必	2	NA	0000
K5AAK201	総合英語(レベル2)◇認定	指定なし	外国語(総英)	選必	2	NB	0000
K5D11201	独語I		外国語(独語)	選必	1	E	2009
K5D11201	独語I		外国語(独語)	選必	1	D	2010
K6011201	身体活動		健康・スポーツ科目	選必	1	B	2009
K6011202	身体活動		健康・スポーツ科目	選必	1	C	2010
K8011101	情報処理概論		情報関連科目	選必	2	B	2010
K1134301	人間と歴史		分野別教養(人文)	選必	2	B	2009
K1163601	人間とコミュニケーション◇認定	指定なし	分野別教養(人文)	選必	2	NA	0000
K1163602	人間とコミュニケーション◇認定	指定なし	分野別教養(人文)	選必	2	NA	0000
K2114401	社会科学の概観◇認定	指定なし	分野別教養(社会)	選必	2	NA	0000
K2151401	社会と経済◇認定	指定なし	分野別教養(社会)	選必	2	NA	0000
K2161401	社会と経営◇認定	指定なし	分野別教養(社会)	選必	2	NA	0000

＜課題＞
評価としての
“取止”
をどうするか

認定科目(NA,NB等)は除外

科目番号	科目名	担当教員	科目区分	単位区分	単位	評価	修得年度
K5AAZ300	総合英語(レベル3)		外国語(総英3以上)	選必	2	A+	2011
T8001500	情報物理		必修科目	必	2	欠試	2011
T4068000	通信ネットワーク論		選択科目	選択	2	B	2011
T4070500	物性工学		選択科目	選択	2	取付	2011
T8001000	化学概論		選択科目	選択	2	D	2011
T8008000	電波工学		選択科目	選択	2	A+	2011
T8011500	光通信工学I		選択科目	選択	2	B	2011
T8040900	数学解析I		選択科目	選択	2	B	2011
K5AAAK101	総合英語(レベル1)◇認定	指定なし	外国語(総英)	選必	2	NA	0000
K5AAAK201	総合英語(レベル2)◇認定	指定なし	外国語(総英)	選必	2	NB	0000
K5D11201	独語I		外国語(独語)	選必	1	E	2009
K5D11201	独語I		外国語(独語)	選必	1	D	2010
K6011201	身体活動		健康・スポーツ科目	選必	1	B	2009
K6011202	身体活動		健康・スポーツ科目	選必	1	C	2010
K8011101	情報処理概論		情報関連科目	選必	2	B	2010
K1134501	人間と歴史		分野別教養(人文)	選必	2	B	2009
K1163601	人間とコミュニケーション◇認定	指定なし	分野別教養(人文)	選必	2	NA	0000
K1163602	人間とコミュニケーション◇認定	指定なし	分野別教養(人文)	選必	2	NA	0000
K2111401	社会科学の概観◇認定	指定なし	分野別教養(社会)	選必	2	NA	0000
K2151401	社会と経済◇認定	指定なし	分野別教養(社会)	選必	2	NA	0000
K2161401	社会と経営◇認定	指定なし	分野別教養(社会)	選必	2	NA	0000

予め設定しておいた算入しない科目

科目番号	科目名	担当教員	科目区分	単位区分	単位	評価	修得年度
K5AAZ300	総合英語(レベル3)		外国語(総英3以上)	選必	2	A+	2011
T8001500	情報物理		必修科目	必	2	欠試	2011
T4068000	通信ネットワーク論		選択科目	選択	2	B	2011
T4070500	物性工学		選択科目	選択	2	取付	2011
T8001000	化学概論		選択科目	選択	2	D	2011
T8008000	電波工学		選択科目	選択	2	A+	2011
T8011500	光通信工学I		選択科目	選択	2	B	2011
T8040900	数学解析I		選択科目	選択	2	B	2011
K5AAAK101	総合英語(レベル1)◇認定	指定なし	外国語(総英)	選必	2	NA	0000
K5AAAK201	総合英語(レベル2)◇認定	指定なし	外国語(総英)	選必	2	NB	0000
K5D11201	独語I		外国語(独語)	選必	1	E	2009
K5D11201	独語I		外国語(独語)	選必	1	D	2010
K6011201	身体活動		健康・スポーツ科目	選必	1	B	2009
K6011202	身体活動		健康・スポーツ科目	選必	1	C	2010
K8011101	情報処理概論		情報関連科目	選必	2	B	2010
K1134501	人間と歴史		分野別教養(人文)	選必	2	B	2009
K1163601	人間とコミュニケーション◇認定	指定なし	分野別教養(人文)	選必	2	NA	0000
K1163602	人間とコミュニケーション◇認定	指定なし	分野別教養(人文)	選必	2	NA	0000
K2111401	社会科学の概観◇認定	指定なし	分野別教養(社会)	選必	2	NA	0000
K2151401	社会と経済◇認定	指定なし	分野別教養(社会)	選必	2	NA	0000
K2161401	社会と経営◇認定	指定なし	分野別教養(社会)	選必	2	NA	0000

例として
総合英語は
算入しないとする

成績の上書きが出来ないため

科目番号	科目名	担当教員	科目区分	単位区分	単位	評価	修得年度
K5AAZ300	総合英語(レベル3)		外国語(総英3以上)	準必	2	A+	2011
T8001500	情報物理		必修科目	必	2	欠試	2011
T4068000	通信ネットワーク論		選択科目	選択	2	B	2011
T4070500	物性工学		選択科目	選択	2	取止	2011
T8001000	化学概論		選択科目	選択	2	D	2011
T8008000	電波工学		選択科目	選択	2	A+	2011
T8011500	光通信工学I		選択科目	選択	2	B	2011
T8040900	数学解析I		選択科目	選択	2	B	2011
K5AAK101	総合英語(レベル1) <認定	指定なし	外国語(総英)	準必	2	NA	0000
K5AAK201	総合英語(レベル2) <認定	指定なし	外国語(総英)	準必	2	NB	0000
K5D11201	独語I		外国語(独語)	準必	1	E	2009
K5D11201	独語I		外国語(独語)	準必	1	D	2010
K6011201	身体活動		健康・スポーツ科目	準必	1	B	2009
K6011202	身体活動		健康・スポーツ科目	準必	1	C	2010
K8011101	情報処理概論		情報関連科目	準必	2	B	2010
K1134301	人間と歴史		分野別教養(人文)	準必	2	B	2009
K1163601	人間とコミュニケーション <認定	指定なし	分野別教養(人文)	準必	2	NA	0000
K1163602	人間とコミュニケーション <認定	指定なし	分野別教養(人文)	準必	2	NA	0000
K2111401	社会科学の概観 <認定	指定なし	分野別教養(社会)	準必	2	NA	0000
K2151401	社会と経済 <認定	指定なし	分野別教養(社会)	準必	2	NA	0000
K2161401	社会と経営 <認定	指定なし	分野別教養(社会)	準必	2	NA	0000

不合格(評価E)となった科目

翌年合格し評価D

どちらも算入

合計38単位のうち

算入するもの

A+: 2単位

A : 0

B : 11単位

C : 1単位

D : 3単位

E : 1単位

欠試: 2単位

計20単位

単位	評価
2	A+
2	欠試
2	B
2	取止
2	D
2	A+
2	B
2	B
2	NA
2	NB
1	E
1	D
1	B
1	C
2	B
2	B
2	NA
2	NA
2	NA
2	NA
2	NA

算入しない

取止: 2単位

認定: 14単位

(NA、NB等)

設定した総合英語

: 2単位

計18単位

GPA計算式 にあてはめて計算

$$= \Sigma(\text{評価} \times \text{評点}) / \text{総単位数}$$

$$= \frac{(A^+\text{の単位数} \times 5) + (A\text{の単位数} \times 4) + (B\text{の単位数} \times 3) + (C\text{の単位数} \times 2) + (D\text{の単位数} \times 1)}{\text{不合格科目を含む総単位数}}$$

$$= \frac{(2 \times 5) + (0 \times 4) + (11 \times 3) + (1 \times 2) + (3 \times 1)}{20}$$

$$= 48 / 20 = 2.40 \quad \text{評点の変更可}$$

GPAの確認方法

学生は成績参照画面から自分のGPAが確認できる

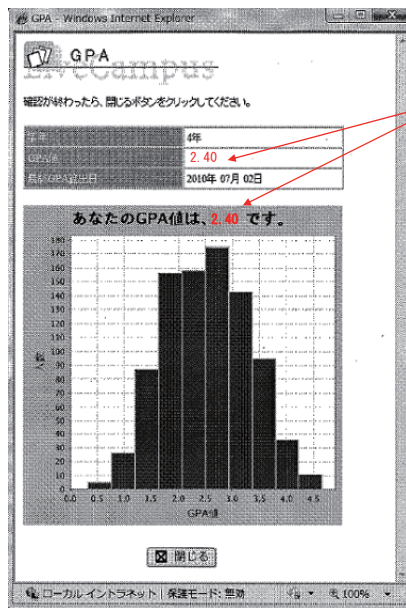
成績情報 成績情報 成績情報

成績情報 単位取得情報

メニュー GPA 成績表 成績簿

科目番号	科目名	担当教員	科目区分	単位数	評点	取得年次	取得科目名	取得年次
E5AAZ300	総合英語(レベル5)		外国語(実用以上)	2	A+	2011		
T0011300	基礎物理		必修科目	2	卒業	2011		
T1400300	通信ネットワーク論		選択科目	2	B	2011		
T407000	物性工学		選択科目	2	中止	2011		
T003000	化学概論		選択科目	2	D	2011		
T008000	電気工学		選択科目	2	A+	2011		
T0011300	光通信工学I		選択科目	2	B	2011		
T004900	経営概論I		選択科目	2	B	2011		
E5AAE101	総合英語(レベル1)の修習		外国語(実)	2	NA	0000		
E5AAE201	総合英語(レベル2)の修習		外国語(実)	2	B	0000		
E211101	地理I		外国語(地理)	1	B	2009		
E211201	地理II		外国語(地理)	1	D	2010		
E2011201	身体運動I		健康・スポーツ科目	1	B	2009		
E2011202	身体運動II		健康・スポーツ科目	1	C	2010		
E2011101	情報処理概論		情報処理科目	2	B	2010		
E213401	人間と歴史		分野特許(人文)	2	B	2009		
E216301	人間とコミュニケーションI		分野特許(人文)	2	NA	0000		
E216302	人間とコミュニケーションII		分野特許(人文)	2	NA	0000		

“GPA”をクリックすると



GPA確認画面

通算のGPA値のみ記載

成績通知書 } 記載なし
成績証明書 }

教員はこの画面を
見ることができない
(GPA値を知ることができない)



見るには
(閲覧権限の設定要)

- ・学生に印刷させる : 紙
- ・事務職員に印刷させる : 紙
- ・学務課からもらう : CSVデータ
(データ提供依頼が必要)

CAP機能

(GPAと連動していないが設定は可能)

学部、学科ごとに設定可

一年間の上限単位数の設定可

→ 設定単位数以上の履修登録はできない

講義形態による選別不可

~~集中講義のみ除く~~

~~卒業要件外科目を除く~~

<課題>

単位数はカリキュラムデータにあり、科目データに無い



履修登録前にカリキュラムの作成が必要

現有機能と新GPA(案)の違い

現有機能

- ・評価×評点で計算
- ・認定単位は除く
- ・通算GPA値のみ
- ・成績上書き不可
- ・帳票への記載不可

新GPA(案)

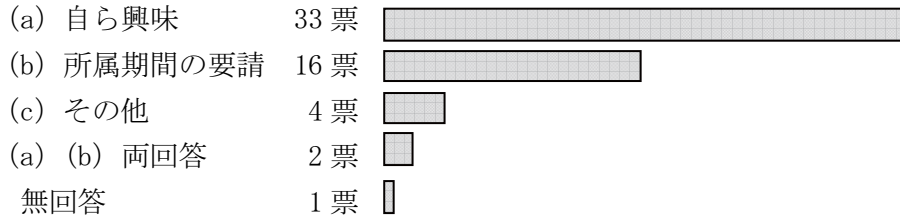
- ・点数で計算
- ・認定単位も算入
- ・学期毎、通算とも
- ・成績上書き可
- ・帳票へ記載

新GPAを実現するには要カスタマイズ

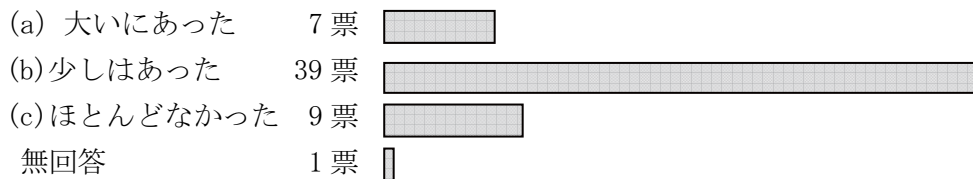
大学教育センターシンポジウム 2011 参加者対象の事後アンケート集計結果

回答数：56

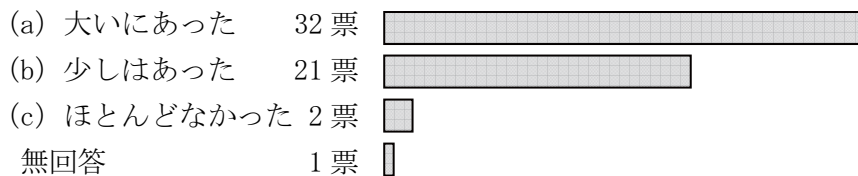
1. 今回のシンポジウムへの参加の動機は、次のうちどれにあたりますか。



2. 茨城大学が導入する GPA に関する情報はすでにお持ちでしたか。



3. 今回のセンターシンポジウムに参加して得るものがありましたか。



4. 設問 3. で (a) または (b) と答えた方に：どのような収穫があったかお知らせ願います。

- ・ fGPA についてわかった。(4 票)
- ・ 絶対的相対評価については、ゼミ成績の評価に使っていたのでなじみがあったが、全学的にできるようになれば便利と思う。
- ・ 茨大の GPA についての現状と今後の予定
- ・ お茶女子大の学習アドバイスのしくみは参考になる。
- ・ LG→GP 変換の問題点がよく分かった。
- ・ 修学指導を効率的から効果的に行うための学修プロセス評価を取り組む手法が大いに収穫がある。
- ・ 絶対的相対評価の真意がよく理解できたように思う。
- ・ GPA を学生が利用する (できる) メリット
- ・ とりわけ「絶対的相対評価」を知ったこと。また「次の世代に引き継ぐ」(半田)を再認識したこと。
- ・ fGPA の考え方がよく分かった。
- ・ “制度の問題” という指摘 (教員、評価者の問題ではない)

- ・ 企業等の認識、関心の紹介（アメリカ）⇒行為状況を反映？
- ・ カリキュラム・ポリシーと学生のパフォーマンスとの関係
- ・ **GPA** 算出の根拠
- ・ 寫田先生のデータとご発表は大変興味深かった。
- ・ 成績素点から **GPA** を算定する際に生じる問題点の解消する方法について有益な情報を得ることができた。
- ・ **fGPA** がこれまでの **GPA** の問題点を解決する方法として提示してくれたので、この方法を大いに取り入れるべきと思う。教員も 100 点満点で成績入力すれば、**LG**、**GPA** ともに正當に評価しうるので、特に労力の増大を感じずに済む点が良い。
- ・ **fGPA** と **GPA** の大きな違いが理解できた。
- ・ **GP** の式の意味が理解できた。
- ・ 本学の **GPA** 導入計画が正式に理解できた。
- ・ 大学が何をしようとしているのかわかった。
- ・ **GPA** のメリットがようやくよく判った。
- ・ この度は中のシステムについて、ある程度理解できた。
- ・ 半田先生の講演の中の“**functionalGPA**”や絶対的な相対評価
- ・ **fGPA** による茨城大学の現状
- ・ 効果的な算出方法もあるということがわかったこと（茨大の現状での算出は全く無意味）
- ・ 検討段階の確認ができた。
- ・ 関連する情報を得ることができた。
- ・ **GPA** の算出方法の適切さ（理論はわかりませんが）
- ・ 評価の分析は学部間の基準等のちがいを反映していることが非常にわかり興味深かった。
- ・ 現状、問題の一部がわかってよかった。
- ・ **GPA** を使うことによって個々の学生に対して、細やかな指導をすることができることが分かった。
- ・ 茨城大学の現状についてよくわかった。
- ・ **GPA** と単位の意味の実質化についての理解
- ・ **GPA** の考え方
- ・ 茨大の現状と今後の制度について
- ・ 本学の成績データ
- ・ **GPA** の意義
- ・ **GPA** の制度設計上の問題点がわかりやすく解説されていた。またその問題点の解決法についても提案があった。半田先生の講演が良かった。
- ・ 現時点で **GPA** を導入している大学の%がわかったこと。しかし、米国 100%、アジア 91%と多くの大学で導入されているようだが、そのメリットは講演からあまり見い出されなかった。

- ・ GPA 導入に向けての課題がきちんとおさえられていることを聞いたこと→この課題をどのようにクリアできるかが重要。
- ・ 茨大が既に GPA を導入していると報告していることには問題がある。
- ・ これまでの GPA 制度と fGPA の違いが分かった。
- ・ 学生の成績分布について傾向がわかった。
- ・ GPA の多様なやり方を知った。
- ・ GPA について本気で考えているヒトがいるということが分かった。
- ・ 「GPA」に関して何がポイントか自体がよくわかっていなかったなので、大変勉強になりました。
- ・ GPA が単に評価の数値化というだけでなく、教育の質保証とも関連する幅広い論点を含むことが理解できた。
- ・ GPA 導入に向けた検討状況を初めて知ることができた。
- ・ GPA の機能の認識が深まりました。
- ・ 現在多くの大学で取り入れられている GPA の方法が、ほぼまちがっているという事実に驚いた。
- ・ 導入予定の GPA の概要
- ・ 各学部による成績評価分布の差
- ・ GPA (評価方法) の多様性
- ・ GPA の出し方が面白かった。
- ・ 成績評価の問題点について気づかされた。
- ・ 学生の不利益等について企業を示すこと。
- ・ fGPA の優位点
- ・ GPA に関する国内、国外の情報がよく理解できた。
- ・ 目的、利用について例が参考になった。(企業の見方についてが、とくに参考になった。) 評価室はもっと表に出て活躍してほしい。
- ・ fGPA と絶対的相対評価
- ・ 実際に運用実績のある大学での中心的な方からの生の解説が聞けて、ずいぶん頭の中で整理されたと思う。
- ・ 日本及び世界における GPA 制度に関する知識が得られた。
- ・ GPA についての再認識が出来た。

5. 「GPA」に関して、課題やご意見をお書きください。

- 素点から直接変換すれば、公平で良い方法と思います。
- 質の保証のためには、GPA を卒業要件や進級条件にしないといけない。
- 「絶対的相対評価」の方式は導入すべきではない。
- 学務課における取組が今後の課題となると思う。教員も同様に積極的に考えてゆく必要がある。
- 学生の不利益にならない GPA であってほしい。
- 進路を見つけあぐねている学生、ドロップアウトしそうな学生の早期発見、早期対応に効果を上げるよう、運用してほしいです。罰（退学勧告）によって勉強させようとしても、たぶんあまり効果は無いと思われます。
- GPA の導入には大きく二つの目的があると思います。「社会（企業等）に対する通用性」と「学習支援」ですが、後者がより重要だと考えます。学生のための GPA という観点が第一義的だと考えます。学習支援には CAP 制の導入も連動すべきである。
- 教育改革の観点からは“待ったなし”の状況では？走り出さなくては、課題も意見もリアルにならない。
- 明日の最善よりは今日の次善を！茨大の“神学論争”を終焉させよ。
- 厳しいものにしないと意味がないと思う。
- GPA の意味づけと利用
- 少人数の科目（卒論やゼミ、外書講読など）について客観的な成績評価が難しい。
- 単位認定の定義（予習→講義→復習のサイクルを基本とすること）にあった厳格な成績評価がされることを学生だけでなく、教員全員が自覚した状況が整わなければ GPA は意味を持たない。CAP 制も同様である。GPA を用いて学生の卒業時点での質の向上を考えるならば再履修制度の導入は必要だろう。
- 60 点未満の GP がゼロになってしまうのは、学生側の受け止め方を考えると、問題はないか検討していただきたい。場合によっては、一般的に行われている 60 点以上を合格という基準へ変更することを検討してほしい。
- GPA に関連した中期計画の発想は管理に重きが置かれ、悪い数値の場合に焦点をあてすぎている。よいものを推奨し、進学等の優価策をとるなど、やはり学生に意欲をもたせる方向が先にあるべきだ。
- 早く fGPA を導入してもらいたい。
- 敗者復活の可能性は？
- 成績評価の厳格化。全学で統一させるのか各学部毎かの方針が必要。
- GPA は導入すればいいのではなく、それを活用して学生に対する修学指導を行う体制の構築を同時に採用しなければならない。また教育の質保証の観点に GPA が応えられるものではなく、別途、成績評価の均質化の方法を検討する必要があるだろう。それは認証評価の点でも避けられないだろう。
- GPA の利用法

- ・ GPA と JABEE との関係はどのようになるのだろうか。
- ・ 認定単位をどうやって導入するのかが分からない。
- ・ GPA の学生の活用方法、メリットは何か。
- ・ 本学に GPA を導入した際に生じる学生への退学勧告と学生に対する教育上のセーフティネットとの関係について検討を願いたい。
- ・ 100 点満点の成績をどう出すかまでが問題なのは変わらない。そこは教員の裁量として残すべきであり、今回の方法はここを特に、そこなうものではなかった。逆にいうと教員は、100 点満点をどのようにつけるかを考えていくべきで、それは GPA とは独立した問題として残っている。強制ではなく、色々な例を挙げていくと、自然と評価法も高まるであろう。そういう機会はないか？
- ・ 思い付きやいきあたりばったりで実施するのではなく、十分な検討・調査が必要
- ・ 学生が GPA に興味がわき、行動に反映させようと思う環境づくりが重要だと思います。
- ・ 全教員がついていけるかな？
- ・ 「fGPA」と「絶対的相対評価」で実施すれば非常に有効かと思った。
- ・ 履修申告室を受け付けた学生のみ履修可という現在の制度をどうするのか（申告なしに勝手に登録したものの扱い）
- ・ 社会的ニーズを確認し、実施となれば茨大の看板制度となるような外部への PR（質の保障として）←ハンパな実施が一番よくない
- ・ 総合英語のような意味のない「質の保障」はやめるべき
- ・ 成績証明書に記載することは充分慎重に取り扱うべきと考えます。
- ・ 学部間の評価基準を統一しなくてよいのでしょうか？（表彰や就活時の公平性のため）
- ・ 成績評価に相対的評価を大いに加味してしまうと、意味のない評価になってしまうのではと思う。
- ・ 本学は 50 点以上が単位となり、D が多い学生は不利益を生じないか。
- ・ 厳格な成績評価、特に授業毎の差をどうなくしてゆくかが大問題。
- ・ 本学に合った形の「GPA」を作れば良い。
- ・ 絶対的相対評価は教員の教育についての自由を保ちつつ、組織としての学生支援のためのデータを与える（成績評価基準をそろえるのと同じ意味をもつ）ので、fGPA と同時に導入するのがよいのでは。
- ・ 昨年のシンポジウムに比べ、参加者も増え、講師先生のプレゼンも大変わかりやすかったので、本学でも導入に向けて前進できるのではなかろうかと思う。私としては fGPA の導入は賛成である。
- ・ 各学部の事情を考慮して評価基準の設定を希望します。

6. 大学教育センターで取り上げてもらいたい内容や実施方法などについて、お気づきの点があればお知らせ願います。

- 四年一貫の外国語教育の在り方について→英語だけでなく中国語も含めて
- 学位プログラムと学部間共同教室体制
- 100点満点で成績をつけるための、教員の方法のスキル向上のための例をあげていただきたい。シンポジウム以外にも広く広報してほしい。
- カリキュラムディベロップメント等、ワークショップ形式のイベントを企画していただきたい。
- 教育シンポは学生にも公開すべきと思います。又、大学HPのイベントにも掲載して下さい。

自由記述については明白な誤字脱字を除き、原文のまま掲載した。

大学教育センター 教育点検支援部

大学教育センターシンポジウム2011

茨城大学におけるGPA制度 について

大学教育センターでは、標記のシンポジウムを企画しました。すでにGPAは導入されていますが、その成果を感じる状況になっておりません。新しい観点で、GPAの積極的な活用を考えて行きたいと思っております。多くの先生方の参加をお待ちしております。

プログラム

- 1) 開会の辞 (13:30-13:40)
田代尚弘 (茨城大学教育担当副学長)
- 2) 特別講演 (13:40-14:40)
「機能するGPA」
半田智久 (お茶の水女子大学教育開発センター教授)
質疑応答 (約10分)
- 3) 休憩 (14:50-15:00)
- 4) 茨城大学のGPA制度案 (15:00-16:00)
新しいGPA制度案について
佐藤和夫 (大学教育センター長)
新GPA計算式によるシミュレーションと
その利用
畠田敏行 (評価室助教)
LiveCampusにおけるGPAの現状
後藤裕之 (学務部教務情報システム係長)
質疑応答 (約20分)
- 5) 閉会の辞 (16:20-16:30)
戸嶋浩明 (大学教育センター副センター長)

司会 勝本真 (大学教育センター副センター長)

茨城大学

水戸市文京2-1-1



シンポジウム概要

- 名称 大学教育センターシンポジウム2011
- 日時 平成23年11月2日(水)
13時30分～16時30分
(受付13時より)
- 会場 茨城大学理学部インタビュースタジオ
工学部E1棟3B教室 VCS配信
農学部第一会議室 VCS配信
- 対象 大学の全教職員
- 主催 茨城大学 大学教育センター
教育改革推進会議

申込・問い合わせ先

学務課大学教育センター係 (事前受付)

E-mail entry2011@mx.ibaraki.ac.jp

電話 029-228-8414

平成 2 3 年度茨城大学教養教育 F D 研究会

『大学教育センターFD 2011』実施報告

大学教育センター 教育点検支援部

実施概要 シンポジウム副題 eポートフォリオの導入と今後の展開
～ポートフォリオの教育的意義～

日時 平成 23 年 8 月 3 日 (水) 14:00～17:00
会場 茨城大学人文学部 B 棟コール教室
(日立地区へ VCS 配信)

対象 大学の教職員
主催 大学教育センター

平成 23 年度の大学教育センター主催の FD 研究会が標記の通り開催された。テーマは「ポートフォリオ」である。茨城大学は平成 22 年度に文部科学省就業力育成支援事業において GP:「根力育成プログラムの構築」が採択され、大学教育センターが司令塔となってこの取組を推進している。取組の大きな柱のひとつがポートフォリオである。本学におけるポートフォリオの導入・整備状況はこれまで、個々の学部の特徴(事情)をふまえた慎重なものとなっており、GP 推進のためにはより統一的な仕組みのポートフォリオが求められる。こういった背景の中、本学においてポートフォリオに対する構成員の理解を深め、体制をより充実させることを期して、標記の副題のもと研究会を開催する運びとなった。講師として、ポートフォリオや eラーニングなどをはじめとする教育・教授システム構築に優れた実績をお持ちの鈴木克明教授(熊本大学社会文化科学研究科システム学専攻長)を招いた。今回の FD は、まずは本学のポートフォリオの状況について学部(人文・工・理・教育)からの報告を行い、次いで鈴木教授による特別講演(演題:インストラクショナルデザインの視点に立ったポートフォリオの教育的意義)の 2 部構成で進行した。詳細についてはプログラム等を参照していただきたい。

なお、本研究会の参加者は計 46 名で、内訳は、水戸地区 39 名、日立地区 7 名(日立へは VCS 配信)であった。本報告には関連資料として下記の書類を添付したので併せて参考にいただきたい。(梅原守道)

添付資料一覧

- [1] FD 研究会開催案内(ポスター)
- [2] FD 研究会当日の配布資料
- [3] 参加者対象の事後アンケート集計結果



鈴木教授



会場での質疑の様子

特別講演：

インストラクショナルデザインの視点に立ったポートフォリオの教育的意義

熊本大学大学院教授・教授システム学専攻長 鈴木克明

ibstpi 理事・日本 eラーニングコンソシアム名誉会員・日本教育メディア学会副会長

日本教育工学会・教育システム情報学会・日本医療教授システム学会理事

メール：ksuzuki@kumamoto-u.ac.jp専攻 Web サイト：<http://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/>**■eラーニングの導入がやりっぱなしの教育を防ぐ？**

- 1) eラーニングは残る。残るものはちゃんとやらなければみつともない。教育の再点検が始まる契機がある。
- 2) 大学教員は「教育技術」の体系的訓練を受けていない。教育については無免許運転という自覚から。
- 3) 4年間でどんな付加価値をつけて卒業させるのか。→IDの視点で大学をデザインする鳥瞰図

■ID (Instructional Design) とは何か？

IDとは、教育活動の効果と効率と魅力を高めるための手法を集大成したモデルや研究分野、またはそれらを応用して学習支援環境を実現するプロセスのことを指す。日本では 2000 年頃からの e-Learning 普及とともに注目を集めるようになった用語であり、カタカナで、またはIDと略されて表記されることが多い。欧米では古くから教育工学の中心的概念として広く用いられてきた。[出典：鈴木克明(2005)「[総説]e-Learning 実践のためのインストラクショナル・デザイン」『日本教育工学会誌』29 巻 3 号 197-205]

→IDを学ぶ：教員は、第二の専門として、職員は、協業できる専門家になるために、学生は、学習スキルを身につけるために、ICT環境を活用して大学を「いつでも学んでいる人」でいられる場所に再設計するために

■授業改善の目的は教育効果の向上だけではない：IDの3つのゴール

- ・教育効果：学生の実力がつく、期待にこたえるだけの卒業生が出せる。自信を持って単位を出せる。
- ・教育効率：短時間で、無駄なく。学生も教員も省エネ。これまでの投資が活用できる(例：教材の再利用)
- ・魅力：さらに勉強したいと思うようになる(継続動機)。楽しい授業、成長の実感。教えることが楽しい。

■ポートフォリオと授業改善：授業改善をどう実現するか？

- ・各教員の資質向上：より良い授業にしようと思う気持ちと裏づけとなるスキル＝授業デザイン力
- ・カリキュラム整備：各教員の努力が全体としてよく構造化できること＝教育システムの構造化
- ・改善支援システム：教育重点の学部としてのカルチャー醸成と物的・精神的サポート＝マネジメント

■ポートフォリオの意義：eラーニングをここから始めよう

- a. ネタ探し(情報検索) → 自己ベストでは不十分。せつかくの情報とみんなでも共有し効率を高める。
- b. 学習者用リンク集(ポータルサイト) → あるものは活用する。メンテナンスは調査・報告課題として学生にやらせると、教員は楽ができて学生の自己学習力も育成できる。
- c. 確認クイズ(出席点代わりに毎回用いる) → 基礎知識の確認手段として有効。講義が理解できたか自分で確認する手段を提供。合格するまで何度も挑戦させる。記録も残る。
- d. 掲示板での意見交換・グループ作業・相互評価 → 応用力育成に有効。自主性に任せてはいけない。採点基準を明示して点検者の指摘事項の妥当性も採点の対象とすることもできる。
- e. 学習成果の集積と発表(ポートフォリオ) → リフレクションとアピール力育成に有効。専用システムを整備して機関として取り組むと、教育目標と科目課題との関係が整理できる。

■ポートフォリオと ARCS モデル(ポートフォリオをうまく活用すれば学習意欲につながるということが ID で説明できます)

A: 導入の効果(おもしろそうだな)、変わっている・今までと違う[A1]、定期的な省察の機会＝変化性[A3]

R: コンピテンシー直結(やりがいがありそうだ)、グループ学習＝プロセスのやりがいを与える？[R3]

C: 蓄積で成長の実感(やればできそう)、中間的評価＝成功の蓄積[C2]、やり方の工夫＝自己制御[C3]

S: 公開とアピール性(やってよかった)、学習成果をアピールにつなげる＝自然な結果[S1]、ほめて認める教員と仲間からの称賛＝肯定的な結果[S2]、予め伝える評価軸＝公平性・一貫性[S3]

表 V-1 学習意欲を高める作戦（教材づくり編）～ARCSモデルに基づくヒント集～

■注意(Attention)<面白そうだなあ>■

目をパッチリ開ける：A-1:知覚的喚起 (Perceptual Arousal)

- ・教材を手にしたときに、楽しそうな、使ってみたいと思えるようなものにする
- ・オープニングにひと工夫し、注意を引く（表紙のイラスト、タイトルのネーミングなど）
- ・教材の内容と無関係なイラストなどで注意をそらすことは避ける

好奇心を大切にす：A-2:探求心の喚起 (Inquiry Arousal)

- ・教材の内容が一目でわかるような表紙を工夫する
- ・なぜだろう、どうしてそうなるのという素朴な疑問を投げかける
- ・今までに習ったことや思っていたこととの矛盾、先入観を鋭く指摘する
- ・謎をかけて、それを解き明かすように教材を進めていく
- ・エピソードなどを混ぜて、教材の内容が奥深いことを知らせる

マンネリを避ける：A-3:変化性 (Variability)

- ・教材の全体構造がわかる見取り図、メニュー、目次をつける
- ・一つのセクションを短めに押さえ、「説明を読むだけ」の時間を極力短くする
- ・説明を長く続けずに、確認問題、練習、要点のまとめなどの変化を持たせる
- ・飽きる前にコーヒブレークをいれて、気分転換をはかる（ここでちょっと一息…）
- ・ダラダラやらずに学習時間を区切って始める（学習の目安になる所要時間を設定しておく）

■関連性(Relevance)<やいがいがありそうだなあ>■

自分の味付けにする：R-1:親しみやすさ (Familiarity)

- ・対象者が関心のある、あるいは得意な分野から例を取り上げる
- ・身近な例やイラストなどで、具体性を高める
- ・説明を自分なりの言葉で（つまりどういうことか）まとめて書き込むコーナーをつくる
- ・今までに勉強したことや前提技能と教材の内容がどうつながるかを説明する
- ・新しく習うことに対して、それは〇〇のようなものという比喻や「たとえ話」を使う

目標を目指す：R-2:目的指向性 (Goal Orientation)

- ・与えられた課題を受け身にこなすのではなく、自分のものとして積極的に取り組めるようにする
- ・教材のゴールを達成することのメリット（有用性や意義）を強調する
- ・教材で学んだ成果がどこで生かせるのか、この教材はどこへ向かっての第一歩なのかを説明する
- ・チャレンジ精神をくすぐるような課題設定を工夫する（さあ、全部覚えられたかチェック！）

プロセスを楽しむ：R-3:動機との一致 (Motive Matching)

- ・自分の得意な、やりやすい方法でできるように選択の幅を設ける
- ・アドバイスやヒントは、見たい人だけが見られるように書く位置に気を付ける
- ・自分のペースで勉強を楽しみながら進められるようにし、その点を強調する
- ・勉強すること自体を楽しめる工夫を盛り込む（例えば、ゲーム的な要素を入れる）

■自信(Confidence)〈やれできそうだなあ〉■

ゴールインテープをはる：C-1:学習要求 (Learning Requirement)

- ・ 本題に入る前にあらかじめゴールを明示し、どこに向かって努力するのかを意識させる
- ・ 何ができたらゴールインとするかをはっきり具体的に示す (テストの予告：条件や基準など)
- ・ 対象者が現在できることとできないことを明らかにし、ゴールとのギャップを確かめる
- ・ 目標を「高すぎないけど低すぎない」「頑張ればできそうな」ものにする
- ・ 中間の目標をたくさんつくって、「どこまでできたか」を頻繁にチェックして見通しを持つ
- ・ ある程度自信がついてきたら、少し背伸びをした、やさしすぎない目標にチャレンジさせる

一歩ずつ確かめて進む：C-2:成功の機会 (Success Opportunities)

- ・ 他人との比較ではなく、過去の自分との比較で進歩を確かめられるようにする
- ・ 「失敗は成功の母」失敗しても大丈夫な、恥をかかない練習の機会をつくる
- ・ 「千里の道も一歩から」易しいものから難しいものへ、着実に小さい成功を積み重ねさせる
- ・ 短いセクション (チャンク) ごとに確認問題を設け、でき具合を自分で確かめながら進ませる
- ・ できた項目とできなかった項目を区別するチェック欄を設け、徐々にできなかった項目を減らす
- ・ 最後にまとめの練習を設け、総仕上げにする

自分で制御する：C-3:コントロールの個人化 (Personal Control)

- ・ 「幸運のためでなく自分が努力したから成功した」といえるような教材にする
- ・ 不正解には、対象者を責めたり、「やっても無駄だ」と思わせるようなコメントは避ける
- ・ 失敗したら、やり方のどこが悪かったかを自分で判断できるようなチェックリストを用意する
- ・ 練習は、いつ終わりにするのかを自分で決めさせ、納得がいくまで繰り返せるようにする
- ・ 身に付け方のアドバイスを与え、それを参考にしても自分独自のやり方でもよいことを告げる
- ・ 自分の得意なことや苦手だったが克服したことを思い出させて、やり方を工夫させる

■満足感(Satisfaction)〈やってよかったなあ〉■

無駄に終わらせない：S-1:自然な結果 (Natural Consequences)

- ・ 努力の結果がどうだったかを、目標に基づいてすぐにチェックできるようにする
- ・ 一度身に付けたことを使う／生かすチャンスを与える
- ・ 応用問題などに挑戦させ、努力の成果を確かめ、それを味わう機会をつくる
- ・ 本当に身に付いたかどうかを確かめるため、誰かに教えてみてはどうかと提案する

ほめて認めてもらう：S-2:肯定的な結果 (Positive Consequences)

- ・ 困難を克服して目標に到達した対象者にプレゼントを与える (おめでとう! の文字)
- ・ 教材でマスターした知識や技能の利用価値や重要性をもう一度強調する
- ・ できて当たり前と思わず、できた自分に誇りをもち、素直に喜べるようなコメントをつける
- ・ 認定証を交付する

自分を大切に使う：S-3:公平さ (Equity)

- ・ 目標、練習問題、テストの整合性を高め、終始一貫性を保つ
- ・ 練習とテストとで、条件や基準を揃える
- ・ テストに引っ掛け問題を出さない (練習していないレベルの問題や目標以外の問題)
- ・ えこひいき感がないように、採点者の主観で合否を左右しない

——出典：鈴木克明 (2002) 『教材設計マニュアル』 北大路書房

著作権表示付きで配付自由(c)2002 鈴木克明

<主張：学生をいつまでも甘やかしてはいけない。やる気を自分でコントロールさせよう！>

表 V-1 学習意欲を高める作戦（学習者編）～ARCSモデルに基づくヒント集～

■注意(Attention)<面白そうだなあ>■

●目をパッチリ開ける：A-1:知覚的喚起 (Perceptual Arousal)

勉強の環境をそれらしく整え、勉強に対する「構え」ができるように工夫する
眠気防止の策をあみだす（ガム、メンソレータム、音楽、冷房、コーヒー）

●好奇心を大切にす：A-2:探求心の喚起 (Inquiry Arousal)

なぜだろう、どうしてそうなるのという素朴な疑問や驚きを大切にし、追及する
今までに自分が習ったこと、思っていたことと矛盾がないかどうかを考えてみる
自分のアイデアを積極的に試して確かめてみる
自分で応用問題をつくって、それを解いてみる
不思議に思ったことをとことん、芋づる式に、調べてみる
自分とはちがったとらえかたをしている仲間の意見を聞いてみる

●マナーを避ける：A-3:変化性 (Variability)

ときおり勉強のやり方や環境を変えて気分転換をはかる
飽きる前に別のことをやって、少し時間をおいてからまた取り組むようにする
自分で勉強のやり方を工夫すること自体を楽しむ
ダラダラやらずに時間を区切って始める

■関連性(Relevance)<やりがいがありそうだなあ>■

●自分の味付けにする：R-1:親しみやすさ (Familiarity)

自分に関心がある、得意な分野にあてはめて、わかりやすい例を考えてみる
説明を自分なりの言葉で（つまりどういうことか）言い換えてみる
今までに勉強したことや知っていることとどうつながるかをチェックする
新しく習うことに対して、それは〇〇のようなものという比喻や「たとえ話」を考えてみる

●目標を目指す：R-2:目的指向性 (Goal Orientation)

与えられた課題を受け身にこなすのではなく、自分のものとして積極的に取り組む
自分が努力することでどんなメリットがあるかを考え、自分自身を説得する
自分にとってやりがいのあるゴールを設定し、それを目指す
課題自体のやりがいが見つからない場合、それをやることの効用を考える
例えば、評判があがる、報酬がもらえる、肩の荷がおろる、感謝される、苦痛から開放される

●プロセスを楽しむ：R-3:動機との一致 (Motive Matching)

自分の得意な、やりやすい方法でやるようにする
自分のペースで勉強を楽しみながら進める
勉強すること自体を楽しめる方弁を考える
例えば、友達（彼女／彼氏）と一緒に勉強する、好きな先生に質問する、秘密にしておいてあとで（親を）驚かせる、友達と競争する、ゲーム感覚で取り組む、後輩に教えるなど

■自信(Confidence)〈やればできそうだなあ〉■

●ゴールインテープをはる : C-1:学習要求 (Learning Requirement)

努力する前にあらかじめゴールを決め、どこに向かって努力するのかを意識する
 何ができたらゴールインとするかをはっきり具体的に決める
 現在の自分ができることとできないことを区別し、ゴールとのギャップを確かめる
 当面の目標を「高すぎないけど低すぎない」「頑張ればできそうな」ものに決める
 目標の決め方に注意し、自分の現在の力にあった目標がうまく立てられるようになるのを目指す

●一歩ずつ確かめて進む : C-2:成功の機会 (Success Opportunities)

他人との比較ではなく、過去の自分との比較で進歩を認めるようにする
 失敗しても大丈夫な、恥をかかない練習の機会をつくり、「失敗は成功の母」と受けとめる
 「千里の道も一歩から」と言うが、可能性を見極めながら、着実に、小さい成功を重ねていく
 最初はやさしいゴールを決めて、徐々に自信をつけていくようにする
 中間の目標をたくさんつくって、「どこまでできたか」を頻繁にチェックして見通しを持つ
 ある程度自信がついてきたら、少し背伸びをした、やさしすぎない目標にチャレンジする

●自分でコントロールする : C-3:コントロールの個人化 (Personal Control)

やり方を自分で決めて、「幸運のためでなく自分が努力したから成功した」といえるようにする
 失敗しても、自分自身を責めたり、「能力がない」「どうせだめだ」などと考えない
 失敗したら、自分のやり方のどこが悪かったかを考え、「転んでもただでは起きない」
 うまくいった仲間のやり方を参考にして、自分のやり方を点検する
 自分の得意なことや苦手だったが克服したことを思い起こして、やり方を工夫する
 「何をやってもだめだ」という無力感を避けるため、苦手なことよりも得意なことを考える
 「自分の人生の主人公は自分」と認め、自分の道を自分で切り開くたくましさと勇気を持つ

■満足感(Satisfaction)〈やってよかったなあ〉■

●無駄に終わらせない : S-1:自然な結果 (Natural Consequences)

努力の結果がどうだったかを自分の立てた目標に基づいてすぐにチェックするようにする
 一度身に付けたことは、それを使う／生かすチャンスを自分でつくる
 応用問題などに挑戦し、努力の成果を確かめ、それを味わう
 本当に身に付いたかどうかを確かめるため、誰かに教えてみる

●ほめて認めてもらう : S-2:肯定的な結果 (Positive Consequences)

困難を克服してできるようになった自分に何かプレゼントを考える
 喜びをわかちあえる人に励ましてもらったり、ほめてもらう機会をつくる
 共に戦う仲間を持ち、苦しさを半分に、喜びを2倍にする

●自分を大切にする : S-3:公平さ (Equity)

自分自身に嘘をつかないように、終始一貫性を保つ
 一度決めたゴールはやってみる前にあれこれいじらない
 できて当たり前と思わず、できた自分に誇りをもち、素直に喜ぶことにする
 ゴールインを喜ばない場合、自分の立てた目標が低すぎなかったかチェックする

出典：鈴木克明（1995）『放送利用からの授業デザイナー入門』日本放送教育協会 著作権表示付きで配付自由(c)1995 鈴木克明

<主張：学習心理学を知らなくては良い授業は設計できない>

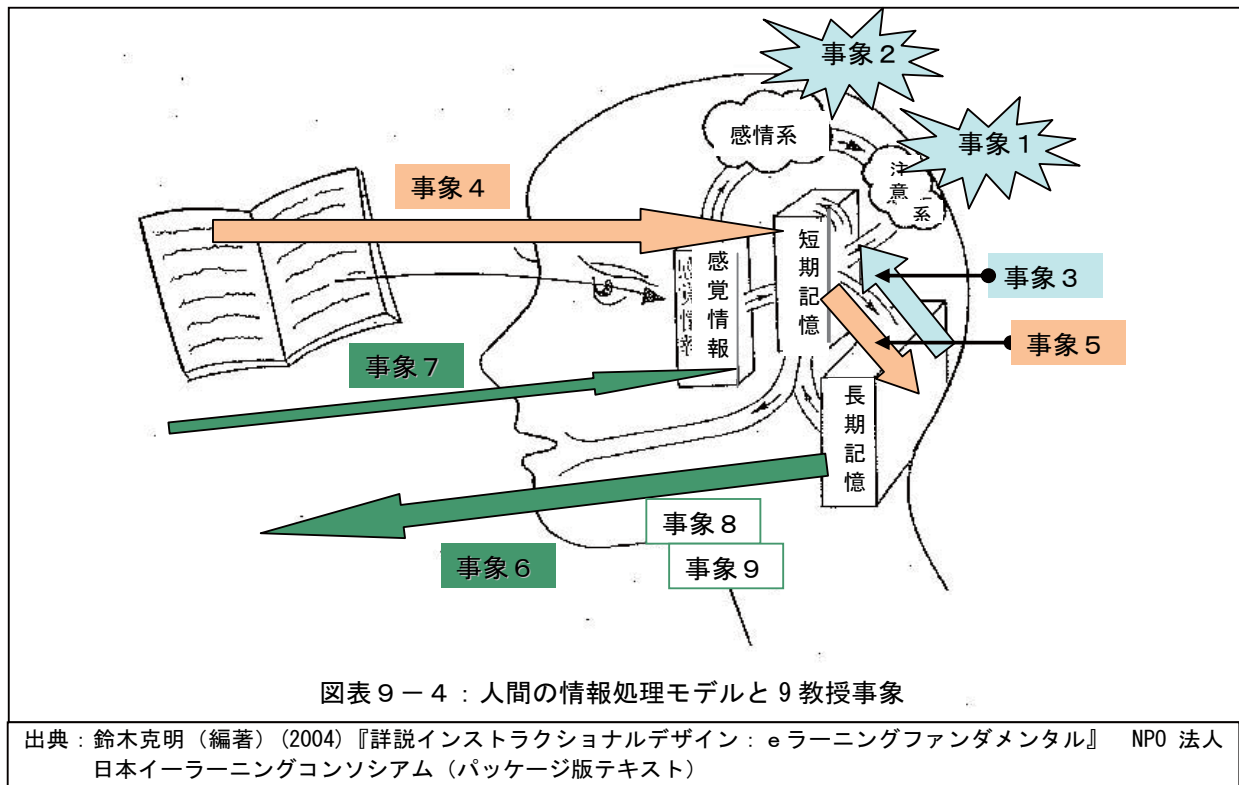


表 II-1. 学習プロセスを助ける作戦～ガニエの9教授事象に基づくヒント集～

導入：新しい学習への準備を整える

1. 学習者の注意を獲得する >>情報の受け入れ態勢をつくる

- パッチリと目が開くように、変わったもの、異常事態、突然の変化などで授業を始める
- 今日もまたあのつまらない時間がきたと思わないよう、毎時間新鮮さを追求する
- えーどうして？という知的好奇心を刺激するような問題、矛盾、既有知識を覆す事実を使う
- エピソードやこぼれ話、問題の核心に触れるところなど面白そうなところからいきなり始める

2. 授業の目標を知らせる >>頭を活性化し、重要な情報に集中させる

- ただ漠然と時を過ごすことがないように、「今日はこれを学ぶ」を最初に明らかにする
- 何を学んだらいいのかは意外と把握されていない。何を教え/学ぶかの契約をまずかわす
- 今日は何を教えるのか/学ぶのが明確に伝わるように、わかりやすい言葉を選ぶ
- どんな点に注意して話をきけばよいか、チェックポイントは何かを確認する
- 今日学ぶことが今後どのように役に立つのかを確認し、目標に意味を見つける
- 目標にたどりついたときに、すぐにそれが実感でき、喜べるようにあらかじめゴールを確認する

3. 前提条件を思い出させる >>今までに学んだ関連事項を思い出す

- 新しい学習がうまくいくために必要な基礎的事項を復習し、記憶をリフレッシュする
- 今日学ぶことがこれまでに学んできたこととの何と関係しているかを明らかにする
- 前に習ったことは忘れていたのが当たり前と思って、改めて確認する方法を考えておく
- 復習のための確認小テスト、簡単な説明、質問等を工夫する

情報提示:新しいことに触れる**4. 新しい事項を提示する >>何を学ぶかを具体的に知らせる**

- 手本を示す/確認する意味で、今日学ぶことを整理して伝える/情報を得る
- 一般的なレベルの情報（公式や概念名など）だけでなく、具体的な例を豊富に使う
- 学ぶ側にとって意味のわかりやすい例を選ぶ/考案する、あるいは自分の言葉で置き換える
- まず代表的で、比較的簡単な例を示し、特殊な、例外的なものへ徐々に進む
- 図や表やイラストなど、全体像がわかりやすく、違いがとらえやすい表示方法を工夫する

5. 学習の指針を与える >>意味のある形で頭にいれる

- これまでの学習との関連を強調し、今まで知っていることとつなげて頭にしまい込む
- よく知っていることとの比較、たとえ話、比喩、ごろ合わせ等使えるものは何でも使う
- 思い出するためのヒントをできるだけ多く考え、ヒントの使い方も合わせて覚えるようにする

学習活動:自分のものにする**6. 練習の機会をつくる >>頭から取り出す練習をする**

- 自分の弱点を見つけるために、本番前の予行練習を失敗が許される状況で十分に行う
- 自分で実際にどれくらいできるのかを、手本を見ないでやってみて確かめる
- 最初は部分的に手本を隠したり、簡単な問題から取り組むなど、練習を段階的に難しくする
- 応用力が目標とされている場合は、今までと違う例でできるかどうかやってみる

7. フィードバックを与える >>学習状況をつかみ、弱点を克服する

- 失敗から学ぶために、どこがどんな理由で失敗だったか、どう直せばよいのかを追求する
- 失敗することで何の不利益もないよう安全性を保証し、失敗を責めるようなコメントを避ける
- 成功にはほめ言葉を、失敗には助言（どこをどうすれば目標に近づくか）をプレゼントする

まとめ:でき具合を確かめ、忘れないようにする**8. 学習の成果を評価する >>成果を確かめ、学習結果を味わう**

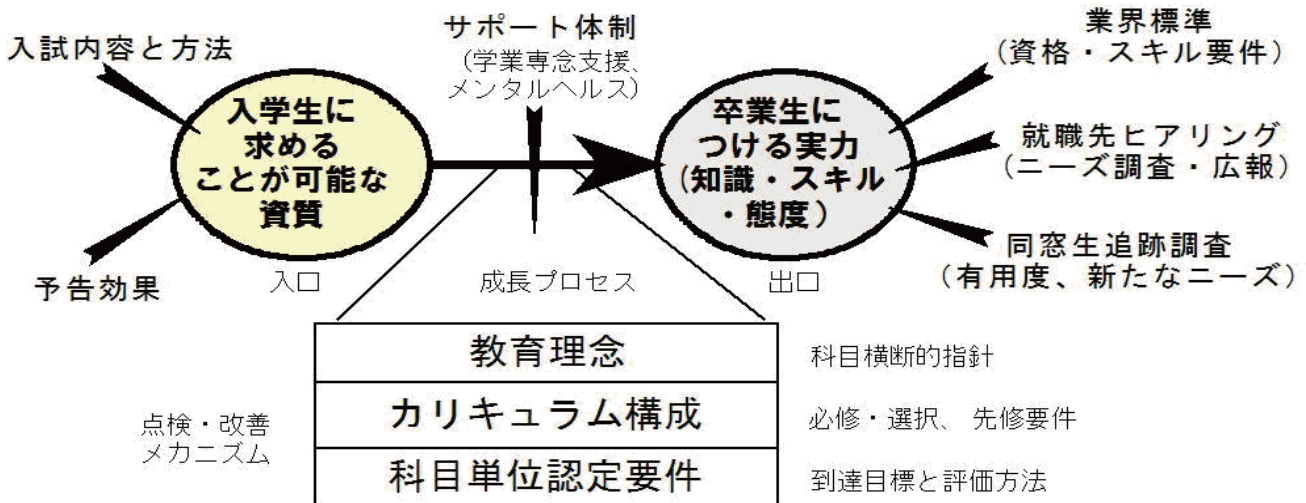
- 学習の成果を試す「本番」として、十分な練習をするチャンスを与えた後でテストを実施する
- 本当に目標が達成されたかを確実に知ることができるよう、十分な量と幅の問題を用意する
- 目標に忠実な評価を心掛け、首尾一貫した評価（教えてないことをテストしない）とする

9. 保持と転移を高める >>長持ちさせ、応用がきくようにする

- 一度できたことも時間がたつと忘れるのが普通。忘れたところに再確認テストを計画しておく
- 再確認の際には、手本を見ないでいきなり練習問題に取り組み、まだできるかどうか確かめる
- 一度できたことを応用できる場面（転移）がないかを考え、次の学習につなげていく
- 達成された目標についての発展学習を用意し、目標よりさらに学習を深めていく

出典：鈴木克明（1995）『放送利用からの授業デザイナー入門』日本放送教育協会

出典を明記したこの表の複製は、著作権者が認める行為です。ご活用ください。



eラーニングの質	達成指標	主なID技法
レベル3： 学びたさ (魅力の要件)	継続的学習意欲、没入感、つい余分なことまで、将来像とのつながり、自己選択・自己責任、好みとこだわり、ブランド、誇り	動機づけ設計法 (ARCSモデル) 成人学習学の原則
レベル2： 学びやすさ (学習効果の要件)	学習課題の特性に応じた学習環境、学習者のニーズにマッチした学習支援要素、共同体の学びあい作用、自己管理学習、応答的環境	学習支援設計法 (9教授事象) 構造化・系列化技法
レベル1： わかりやすさ (情報デザインの要件)	操作性・ユーザビリティ・ナビゲーション・レイアウト、テクニカルライティング	プロトタイピング 形成的評価技法
レベル0： うそのなさ (SME的要件)	内容の正確さ、取り扱い範囲の妥当性、解釈の妥当性、多義性の提示、情報の新鮮さ、根拠・確からしさの提示、適正な著作権処理、	ニーズ分析法 職務分析法 内容分析法
レベル-1： いらつきのなさ (精神衛生上の要件)	アクセス環境、十分な回線速度、IT環境のレベルに応じた代替利用方法、サービスの安定度、安心感	学習環境分析 メディア選択技法



デザイン要素

オンライン要素	オフライン要素 (f2f)
シラバス・課題の提示 eラーニング教材(情報提供・練習) BBS、チャット、協同作業支援環境 電子図書館 (指定図書・指定論文) 外部情報源へのリンク	対面講義、演習・輪読、実習 ゼミ・発表会、見学会 テキスト・CD-ROM (郵送) 図書館、参考資料リサーチ スクーリング、合宿・懇親会 オリエンテーション

1. 今回の全学FDへの参加の動機は、次のうちどれにあたりますか。

- (a) 自ら興味 19票
- (b) 所属機関の要請 8票
- (c) その他 4票

2. 茨城大学が導入するeポートフォリオに関する情報はすでにお持ちでしたか。

- (a) 大いにあった 13票
- (b) 少しはあった 9票
- (c) ほとんどなかった 9票

3. 今回の全学FDに参加して得るものがありましたか。

- (a) 大いにあった 17票
- (b) 少しはあった 14票
- (c) ほとんどなかった 0票

4. 設問3. で (a) または (b) と答えた方に：どのような収穫があったかお知らせ願います。

- ・ ポートフォリオの統一の難しさがよく分かりました。
- ・ Eラーニングとの関係の重要性
- ・ カリキュラムと各授業との関係について具体的に説明されたのはよかったと思います。「学ぶことを学ぶ」ことと「専門知識を学ぶ」こととで、学問分野によって関心が異なるということには新しい気づきが得られた気がします。
- ・ 我々は教育スキルについては素人であることの再確認
- ・ 学生を育てることに対する意識が学部によってずいぶん異なることに驚いた。
- ・ IDの考え方
- ・ ARCSモデル、IDについて知識を得た。
- ・ eポートフォリオ導入に向けた課題が判った。
- ・ 学部によってポートフォリオに大分違いがあるのが分かった。
- ・ 各学部でポートフォリオに求めている内容が大きく異なる現状が理解できた。
- ・ 人文学部の取り組みに期待したい。
- ・ 講演によってeラーニングについての知識が少し増えた。
- ・ ポートフォリオの大学教育における位置づけと効果
- ・ 人文学部ポートフォリオについての説明は具体的で理解しやすかった。
- ・ 鈴木先生講演も参考になる情報が多かった。
- ・ 本学のポートフォリオの取り組みについて
- ・ IDについて
- ・ IDという考え方について知ることができた。
- ・ 「学力をへらすように」というのは重要

- ・ 長崎で聞いたことをあらためて確認した。
- ・ ポートフォリオの使い方や考え方、意義について理解が深まった。
- ・ 各学部の考え方、進捗状況などがよくわかった。
- ・ 特別講義ではポートフォリオに対する心構えに目を開かれた。
- ・ 人文の「偏差値はやめた方がいい」はとても有益な忠告でした。
- ・ 学生の自覚、責任感、達成感を養う手段としてのポートフォリオの魂を伺うことができた。
- ・ 講演をお聞きし、広い観点からポートフォリオについて学ぶ機会が得られ、よかったです。
- ・ ポートフォリオの意義、ポートフォリオについて
- ・ ポートフォリオの使い方の可能性
- ・ 鈴木先生のお話がとてもよかった。
- ・ ポートフォリオとは何かについての情報
- ・ 鈴木先生の講演
- ・ ポートフォリオの基本的活用の仕方を理解することができた。
- ・ ID に関する基本的事項について理解することができた。授業及びカリキュラムデザインという観点から応用していきたい。
- ・ インストラクショナル・デザインについて理解が深まった。
- ・ ARCS モデルが分かりやすかった。
- ・ 面白そうだな、やりがいがありそうだな、やればできそうだな、やってよかったな
- ・ 授業をなぜどのように行うかという話をなかなか聞けないので、自分の授業の振り返りに役立った。
- ・ 学習成果の集積としてのポートフォリオが自分の能力を客観的に認めてツールとしての効果に興味があり、参加させていただきました。インストラクショナルデザインとしての ARCS モデルなど動機づけのできる視点を興味深く拝聴しました。ありがとうございました。
- ・ 各学部でのちがいと共通性、課題をはじめてすべて一回でまとめてきくことができた。

5. 「eポートフォリオ」に関して、課題やご意見をお書きください。

- ・ 「自己診断ポートフォリオ」には意味があると思いました。東京五輪のころの遠藤、小野、加藤のようなひたむきな演技もよいが、ロス五輪のときの具志堅タイプのパフォーマンスで点数を意識した方がいまだきの若い人は伸びやすい、ということもある。
- ・ 教員、学生の負担がふえない形式で効果を上げることが可能か？
- ・ 全学的な共通フレームワークを作り、最低限共通の項目ができれば、システム開発がスムーズにいくのではないかと思う。(各学部の独自性も生かしながら)

- ・ 何のため（誰のため）のポートフォリオなのかということ、見失わないよう運用してほしい。（本来は学生が自律的に学習できる（自分を成長させられるように）なるべきものである。）
- ・ 教育学部のカルテはすばらしい方式であるようだが、少人数対象のシステムを web 化する意味があるのかどうか疑問である。
- ・ 学生が継続して使えること、かつ教員の重荷を増えすぎないように更に考えたいです。
- ・ これからが大変→学生はきちんと積み上げてくれるか、教員はよく理解して役立ててくれるか
- ・ 各学部の状況（各学部におけるポートフォリオの必要性など）が紹介されて良かった。全体をまとめる電子ポートフォリオの実現は厳しいのではないか。
- ・ 教員の関与の拡大を急ぎすぎてはいけない。
- ・ どのように活用していくのか
- ・ 導入例、特に具体的な課題や問題点を知りたい。
- ・ 目的意識のある学生には役立つかもしれない。
- ・ アクセス権の設定は個人情報保護法の観点から慎重であるべきだが、担任を経験した立場からいえることは、対象学生のデータをすべて閲覧できなければ意味がない。運用でカバーすることを考えるべき。
- ・ どのように活用するかが問題。きちんと担任に伝えるガイダンスが必要であると思う。
- ・ 成績へのアクセスについて：教育の一部なので担当教員はアクセスできるべき→Live Campus で制限されている理由がわからない。
- ・ 「大学教育の改革」の手段として有効に機能することを願っています。
- ・ まずは運用し、随時改訂していく姿勢が必要かと思えます。
- ・ eラーニングということではレナシティとの関係がやはり重要かと思えます。そのあたりをセンター、就業力 GP の方でもしっかり考えていただきたい。

6. 教養教育 FD 研究会で取り上げてもらいたい内容や実施方法などについて、お気づきの点があればお知らせ願います。

- ・ 教育スキルの教員向けの教育
- ・ 健康・スポーツは大学の教養教育として必要か？
- ・ 根力（ねぢから）、就業力育成等も重要であるが、その前に学生のマナーを向上させるための方法（教育）に関するテーマを検討してほしい。

自由記述については、明白な誤字脱字を除き原文のまま掲載した。

大学教育センター 教育点検支援部

大学教育センターFD 2011

eポートフォリオの導入と今後の展開

～ポートフォリオの教育的意義～

大学教育センターでは、標記のFDを企画しました。今回は、就業力育成支援GP[根力育成プログラムの構築]の大きな柱である、ポートフォリオをテーマにして開催いたします。この機会にポートフォリオに対する理解を深め、今後の利用に活かして頂きたいと思います。多くの先生方の参加をお待ちしております。

プログラム

- 1) 開会の辞 (14:00-14:10)
佐藤 和夫 (茨城大学 大学教育センター長)
- 2) 各学部報告 (14:10-15:10)
人文学部
工学部
理学部
教育学部
- 3) 特別講演 (15:20-16:20)
鈴木 克明 (熊本大学教授)
- 4) 質疑応答 (16:30-16:50)
- 5) 閉会の辞 (16:50-17:00)
勝本 真 (茨城大学 大学教育センター副長)

司会進行 梅原守道 (大学教育センター講師)

茨城大学

水戸市文京 2-1-1



FD概要

- 名称 大学教育センターFD 2011
- 日時 平成23年8月3日(水)
14時～17時 (受付13時30分より)
- 会場 茨城大学人文学部B棟2Fコール教室
- 対象 大学の全教職員
- 主催 茨城大学 大学教育センター
- 申込・問い合わせ先
学務課大学教育センター係
- E-mail entry2011@mx.ibaraki.ac.jp
(事前受付)
- 電話 029-228-8414

各基礎教育専門部会からのFD報告

人文系基礎教育専門部会の FD 報告

人文系基礎科目専門部会長
山田 桂子

1. 運営状況・運営体制など

人文系基礎教育専門部会は専門部会長（人文学部）1名と兼任教員4名で運営されている（3名人文学部、1名教育学部）。この専門部会の下に、専任教員からなる人文系科目担当者会議がある。

次年度の担当体制は、まずは専門部会長が原案を作成し、それを専門部会で審議した後、人文科目担当者会議で審議・承認する、というのが通常の手続である。例年であれば、原案は6月中に作成され、それが7月中に専門部会と人文系科目担当者会議にかけられる。ここで承認された原案に基づき、次に各科目区分の担当者が翌年度の担当コマ数・開講時間・授業題目を決め、それを部会長に報告する。通常後期が始まる頃にはこれらが出揃っていることが望ましい。

専任教員の担当分については以上のような手続きで決定されるが、非常勤分については部会長と大教センター、また非常勤を必要とする各学部と交渉の末、本数を決定する。本数と科目が決定したら、非常勤の手配が行われる。

これ以外の業務としては、年末頃に専門部会がシラバスチェックなどを中心となっていく。

2011年度は、分野別教養科目を57本、分野別基礎科目を15本、全体で72本開講した。このうち、分野別教養科目では工学部向けに4本、農学部向けに2本開講し、分野別基礎科目では工学部で4本を開講した。非常勤講師は分野別教養科目で12本、分野別基礎科目で4本である。2011年度は非常勤削減が大きく、ここに上げた数字のうち当初配分は6本で、あとはセンターからの追加配分2本を除

ば8本が学部からの移行分である。当初配分6本のうち工・農開講が3本を占める。来年度もこれまで通りの率で非常勤を削減すると仮定すると、工・農分での非常勤削減は現実的に難しいから、水戸開講分の当初配分を今年限りで全廃する計算になる。このことの問題は最後の課題のところでも触れるが、一方今後部会長がセンターとの間で面倒な非常勤確保交渉をしなくて済むようになるだろう。

クラスサイズの点では、特に人数の多い授業は「人間とこころ」で、心理学系の授業に多い。また、工学部の必修科目「技術者倫理」もクラスサイズが大きい。上に述べたように非常勤削減がある一方で専任教員の人数が増えるわけではないから、順当にいけばクラスサイズは今後すべての授業で増加するだろう。

2. 授業アンケートのまとめ

●2011年度学生アンケート

- ① 前期は43、後期は34の授業について、学生アンケートが実施された。
- ② 受講者満足度の分布を見る限り、全体的な傾向としては、一部の科目を除き学生の満足度は概して高い。それ以外の科目では満足度にばらつきのあるものの、受講生全体が不満足に傾いているような授業は全くない。
- ③ 学生はあまり予習・復習をしていない。しかしながら、それと授業への満足度とはあまり関係が見られない。
- ④ アンケートのQ1とQ2はほぼ連動する。つまり、新しい知識や技術が身に着いたという実感を得るほど授業全体への満足度は高くなり、逆にその実感が低いと授業への満足度も低く

なる傾向にある。ただし、新しい知識や技術を得られた実感があっても授業への満足度が低い場合や、またその逆（新しい知識や技術を得られた実感以上に満足度が高い）の場合もある。

- ⑤ 教員側の授業への準備や学生とのコミュニケーションの有無および熱意といった他の質問項目は、ひとつひとつが単独では授業への満足度に直結しない。全体的にバランス良く高い評価にある場合に、全体の満足度が高くなる傾向にあると思われる。

●2011年度教員自己点検結果

- ① 前期は 39、後期は 32 の授業について教員の自己点検がなされた。
- ① 一部を除いて、ほぼ全員が学生アンケート結果を素直に受け入れることができると考えている。
- ② 学生アンケート結果にやや不満があっても、教員は自分の授業を「自信を持って学生に勧められる」と考える傾向がある。また、学生アンケートの結果に不満がない場合も、ほとんどの教員は自分の授業を「自信を持って学生に進められる」と考えている。このことは、教員側の教育意欲が高いことの表れと解釈できる。
- ③ 教員はあまり自由記述欄を書きたがらない。

3. FD 報告

2011年度、全体のFDは特に開催されなかった。しかしながら、専門部会および人文系科目担当者会議においては一定の意見交換がなされた。また、部会長と一部の教員間でも意見交換があった。主な意見・問題点は次のとおりである。

- ① 教養科目を毎年度に2本以上担当している教員の負担軽減問題。
- ② 教育学部教員の担当体制の抜本的改善の問題。
- ③ 工学部開講の「技術者倫理」、水戸開

講の「人間とこころ」のクラスサイズと非常勤削減の問題。

4. 今後の課題

上記ですでに述べた点について、以下の通り説明を追加する。

- ① 非常勤時間削減の問題。
人文系科目のクラスサイズは小さくなく、また小さいものの中には授業の性格上、受講生数を増やすことが難しいものもある。2011年度非常勤時間は、免除職や割愛といった専任教員担当分の代替分を除けば、純粋にプラスアルファとしての非常勤は3本しかなかった。来年度はこれが全廃されるだろうから、今後少なくともクラスサイズから来る学生の高い満足度（学生と教員の距離が近く、キメの細かい指導ができるという点で）を維持することが難しくなるだろう。
- ② 教員は依頼されれば1科目は教養科目を担当するという大教センターの方針は、今のところ一部の教員に正しく理解されていない。中には校務や研究の負担が増えれば、勝手に担当本数を減らせると信じて疑わない教員がいる。また、「1本」の意味を1学期15回分だということ認めずに、「1本」の負担を拒否する教員もいると聞いている。非常勤削減と教員数減少が同時に起こっている時、担当本数の方針をトップダウンで徹底させ、専任教員の担当数を安定的に確保する必要がある。もしそれができない場合は大学としてマスプロ授業を方針として公的に示すしかない。マスプロでは将来的にはアンケートの満足度は下がっていくことが予想される。この時に、その責任を教員が「自己点検」というロジックで押しつけられることになるのは問題であろう。

以上

自然系基礎教育専門部会のFD報告

自然系基礎教育専門部会長
岡田 誠

平成23年度は、途中交代で部会長を拝命した上、東日本大震災の影響によって学年歴が圧縮され時間的余裕がなくなったこともあり、部会FDを開催することができなかった。したがって、ここでは平成22年度実施授業に関する学生授業アンケートのクラス満足度の傾向を概観することで、5教科別における自然系教養授業の現状について分析をすることとした。

平成22年度前後期で行われた自然系分野別基礎・教養授業のうち、学生アンケートが実施された83授業であるが、今回の分析で、統計的な有意性を確保するため、アンケートの有効回答数が15以上であった78授業を選び、さらに自然科学の概観等5教科以外の科目の3授業およびクラス満足度が平均値と比べ極端に低かった1授業を除き、74授業を対象として行った。

クラス満足度の平均は 0.70 ± 0.11 であり、例年のことであるが系別平均値としては教養授業中最も低い値であった。分野別基礎、教養および科目別のクラス満足度の平均値および標準偏差は以下の様になっている。()内の数値は対象授業数である。

分野別教養	
身近な数学	0.80 ± 0.04 (4)
身近な化学	0.74 ± 0.08 (4)
身近な生物学	0.66 ± 0.12 (7)
身近な地球科学	0.80 ± 0.10 (5)
分野別基礎	
数学	0.72 ± 0.12 (21)
物理学	0.63 ± 0.13 (20)
化学	0.73 ± 0.07 (6)
生物学	0.66 ± 0.08 (5)

地球科学 0.65 ± 0.01 (2)

また、分野別教養と分野別基礎の違いを見ると、以下の様になっている。

分野別教養 0.74 ± 0.11 (20)

分野別基礎 0.69 ± 0.13 (54)

以上より、全体的には分野別教養の平均クラス満足度がわずかに分野別基礎のそれを上回っている。棄却率を5%としたときのクラス満足度信頼区間がおよそ0.04程度と算出されるので、両者の平均値の差はぎりぎり有意といえるレベルになっている。これを教科別にみると、化学および生物学ではほぼ同じ値であるが、数学および地球科学で分野別教養の平均クラス満足度の値が分野別基礎のそれを大きく上回っている。これら教科の平均満足度0.80という値は、教養科目全体の平均値程度となっており、分野別教養の数学・地球科学分野の授業において、他学部向けの授業内容の構築に関する取り組みがより進んでいることを示唆するように見える。

分野別基礎科目の中に着目すると、数学・化学の平均クラス満足度が0.72程度であることに対して、物理学・生物学・地球科学のそれが0.65前後と明らかに低くなっている。数学・物理学については、統一教科書を用いた授業が行われており、内容も統一されているが、クラス満足度のばらつきは他と比べて大きくなっている。これらの点については今後原因の検証を行っていきたい。

以上、雑駁ではあるが、クラス満足度による自然系教養授業の傾向の分析を行った。次年度は部会FDを開催し、こうした分析をさらに進め教養授業改善に役立てていきたい。

総合基礎教育専門部会 FD 報告

総合基礎教育専門部会長

安田健一

1. はじめに

平成 23 年度の総合科目授業本数は前期 33 本、後期 38 本、計 71 本で、開講バンドごとの内訳を表 1 に示す。

表 1 開講本数

開講時期		本数	平均受講者数
前期	火曜5限	20	78
	集中	7	22
	水戸以外	6	27
後期	火曜5限	17	57
	金曜3限	13	79
	集中	4	24
	水戸以外	4	33

これより、相変わらず後期金3の授業本数が少なめであり、今後も改善の余地がある。一方クラスサイズに関しては昨年度に比べ平準化が進んだが、学長主催の大規模授業の効果によるものと思われる。

総合科目における学生のクラス満足度全平均値は前後期とも 0.82 であり、全体としてはほぼ良好な結果と考えられる。

2. 受講者数とクラス満足度

学生のクラス満足度に影響を与えるファクターとしてクラスサイズとの関係が考えられ、昨年度と同様に両者の関係を調べた。図 1 に平成 23 年度の受講者数とクラス満足度の関係を示す。ばらつきが大きいものの、前期、後期に分けて 1 次近似した線が右下がりになることから、受講人数が増えると満足度が下がる傾向は認められる。このことからクラスサイズの一層の平準化が望まれる。

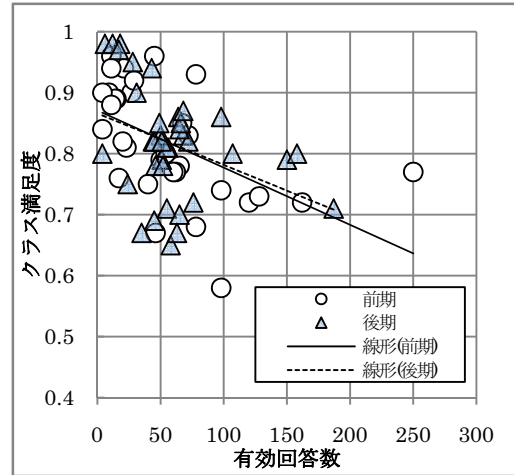


図 1 有効回答数とクラス満足度の関係

3. 総合科目のあり方

現在の総合科目は 9 つの系から構成されており、平成 23 年度の授業本数の内訳を表 2 に示す。しかし表からわかるように系ごとの数に差があり、一方でそもそも 9 つという数が多すぎるのではないかと、もう少し単純化してもよいのではないかと意見がこれまでも部会内に少なからずあった。さらに H24 年度からは就業力育成・ステップアップ系科目が加わり 10 の系となる。

表 2 総合科目授業本数の内訳

	前期	後期	計
物質・生命系	3	4	7
認知・数理系	0	1	1
環境・政策系	4	4	8
文明・技術系	3	8	11
人間・文化系	10	7	17
表現・言語系	1	4	5
身体・行動系	1	3	4
生活・福祉系	6	2	8
社会・国際系	5	5	10
計	33	38	71

さらに授業題目やシラバスを見る限り、総合科目以外の分野の方がふさわしいと思える科目も散見された。以上のような背景から、センター長，企画実施部長，キャリア教育部長を交えた総合科目見直しの検討が行われた。

まず現状のガイドラインは「複数の分野に関わるテーマ，特定地域のテーマや時事的テーマを学修し，総合的・全体的に物事を捉える態度を養う。さらに，これらを通して，物事を主体的に判断し，実証的な態度や批判的能力を身につけるとともに，生涯学習的な能力を高める。」とある。これを補足する意味で以下のような内容が提案された。

- ・先端的な、新しい分野
- ・持続可能な社会に関するテーマ
- ・安全・安心な暮らしや社会の構築
- ・自然科学と社会の関わり
- ・言語・芸術・身体の要素を含んだ内容
- ・社会で生き抜く知識、技術、能力などを身につけさせる内容

そこでこれらを受けて科目群を集約し，

- 1) 先駆・先端系
- 2) サスティナビリティ系
- 3) 科学技術社会系
- 4) 社会人力強化（根力育成）系

などにまとめてはどうかというあたりまで議論が進んでいる。

しかし，上記4項目からはずれる授業は他の分野に移動させる必要があるなど，総合科目内のみで問題解決できない部分もあり，当面は現状のままとして本件は継続審議となった。教養科目全体としてどうあるべきかという大局的な見地からの判断も必要であろう。

4. 学生から見た総合科目

学生アンケートにおける分野独自の質問項目として「この授業は総合科目にふさわしいと思いますか」という問いがあり，これに関する分析を行った。入学したばかりの1年次生にとっては難しい質問と思われるが，全科目の平均ポイントは0.92と高く，それなりにふさわしいと感じていることがうかがわれる。

次に，このふさわしさとクラス満足度の関係を見てみると，図2のように極めて良い相関があった。すなわち，総合科目としてふさわしいと感じるほど満足度も高くなっている。

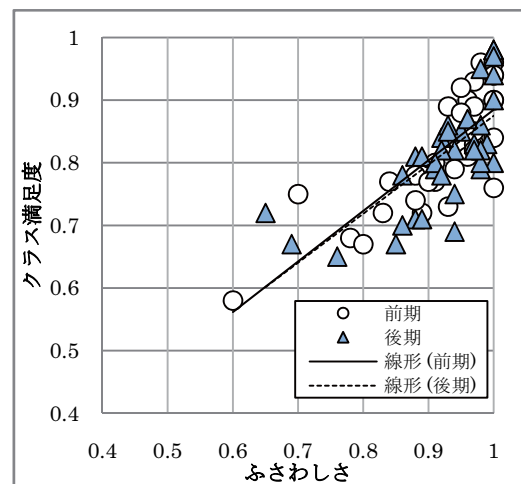


図2 ふさわしさの値とクラス満足度の関係

このことから，総合科目の特色を一層際立たせることが学生の興味関心を引き付け，ひいては満足度の向上につながるのではないかと考えられる。

5. まとめ

授業アンケート結果の分析などから，総合性を高めることが満足度向上にとっても重要なことがわかった。今後も総合科目のあり方に関する議論を深めるとともに，現状での効果的なFDの進め方を探っていきたいと考える。

外国語専門部会 FD 報告

外国語専門部会長 神田 大吾

1. 運営状況・運営体制など

23年度の外国語の授業科目名、科目当たり本数及び合計本数は以下の通り。

○ドイツ語	47本
○フランス語	25本
○中国語	60本
○朝鮮語	16本
○スペイン語	18本
○日本語	16本
計	182本

本数は22年度に比べ、ドイツ語とフランス語が各2本ずつ、計4本減となっている。これは非常勤時間を前年度より5%(本数にして4本)削減するよう求められたためである。未修外国語担当教員会議において、外国語ごとの平均クラスサイズを勘案して審議した結果、ドイツ語とフランス語の一部を合同クラスにする等の調整を行い、各2本ずつ削減することとなった。クラスをまとめて履修人数(クラスサイズ)を大きくすることは外国語の教育上は決して望ましいことではないが、大学の直面している厳しい財政状況の中では止むを得ない措置であった。

2. 授業アンケートのまとめ

授業アンケートは前学期75本、後学期55本を対象に行われた(月曜と木曜に同一教員が教える連動クラスは「1本」としてアンケートが行われるので、上記開講本

数とは一致しない)。対象となる科目全てで行われたので、実施率は両学期とも100%である。

その結果を見るに、「この授業のクラス満足度」がおおむね0.70から0.90の範囲に収まっている。例年と変わらぬ傾向であり、全体としては「特に問題はない」と言えるだろう。

個別の項目を見ると、「Q7:この授業のための学習(予習・復習など)に十分な時間をかけましたか?」の回答に科目間でかなりばらつきが見られる。懸念される事態ではあるが、何時間の学習で「十分な時間」と判断するか、学生個々によってまちまちと推測されるので、来年度以降、質問項目に変更を加えた上で、改めて検証していきたい。

旧年度とは異なる、今年度の特殊な現象として、前学期の「Q9:講義室の広さや席数、その他設備の面で不満を感じることはありませんでしたか?」について、例年に比べ異様に低い数値の出ている授業が幾つも見られる。これは、「設備の面で不満」があったためと思われる。具体的には震災後の原発事故により、特に七月から大学として厳しい節電を行わざるを得ず、気温が上がり始める午前10時頃には早くも空調が止まり、学生が噴き出る汗をぬぐいながら一日の授業を受けていたことを反映したものであろう。これは大学自体の努力で解決できる問題ではないので、次年度以降、このような事態が繰り返されないよう祈るばかりである。

3. FD 実施状況

FD は、23 年度後学期の成績報告の分析が出るのを待って、24 年度初頭に行った。評価室 嶋田敏行氏に分析結果を報告していただいた。GPA 換算結果によれば、日本語以外の五カ国語について、(A)1.53、(B)1.99、(C)2.34、(D)2.51、(E)3.14 となった。三カ国語が 2 点近辺に位置する一方、一カ国語が厳しい評価、別の一カ国語が甘い評価となっている。同じ未修外国語でありながらこのような格差が生じるのはやはり好ましくなく、GPA 制度の本格導入を控えた 24 年度中には担当教員間で共通理解を図り、何らかの「申し合わせ」を行うことが必要となるだろう。

FD ではまた、習熟度別制度を巡って、山形大学等への出張調査結果が報告され、習熟度別制度について意見が交わされた。

4. 今後の課題（新しい試みなど）

未修外国語科目について、習熟度別履修制度を導入するかどうかは昨年度から持ち越しの課題である。

現在、初歩から始める「Ⅰ」が前学期に開講され、その次の「Ⅱ」が後学期に開講されているので、大半の学生は学期ごとに段階を踏んで学習を進めているが、前学期

で「Ⅰ」を落とした学生は、半年間の空白を経て翌年の前学期に履修しなおさねばならない。中教審答申等で推奨されている、いわゆる「やり直しの機会」を学生に与える観点からすれば、後学期に再履修者用の「Ⅰ」、それに連動して前学期に同「Ⅱ」を開講することが理想である。しかしながら、「ドイツ語」「フランス語」「中国語」「朝鮮語」「スペイン語」と五種類の科目についてこの制度を導入すると、新たに 20 本の授業を開講しなければならない。専任教員が既に各人 4 本の教養科目を担当している現状において、更なる授業負担を課せば、専門教育への影響が懸念される。また、前記のように非常勤時間の削減を求められる状況下で、新たに 600 時間の非常勤時間を捻出するのは不可能である。

課題の解決に向け、当部会は苦しい選択を迫られている。調査した幾つかの大学では、いずれも習熟度別制度を導入してはいなかった。もしも「教育の質保証」の観点から本学においてはこの制度を導入するならば、同時に「やり直しの機会」も用意することは極めて困難である。慎重に審議を重ねた上で、決断が求められる次第である。

総合英語教育専門部会 F D 報告

総合英語教育専門部会長 福田 浩子

1. 総合英語の概要および運営体制

総合英語は、茨城大学の教養英語科目として平成 17 年度に全学導入されたプログラムである。

「英語を学ぶことによって、**地域社会に生きると同時に、地球規模の視野を持ち、考え、行動できる人間**を育成すること」を理念とし、習熟度別クラス編成により、レベル 1 からレベル 5 までに分けて行う 4 技能型のクラスと、レベル 3 修了以上を対象とした特定の技能、特定の内容に焦点を当てた学術用英語の 2 種類のクラスによって構成されている。本学では、総合英語 4 単位取得およびレベル 3 修了を卒業要件とすることによって、教養英語の量的・質的保証を行っている。

総合英語の 4 技能型レベル別授業では、CEFR(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment)の考え方を参考にして開発した総合英語のレファレンス・レベルに基づき、それぞれのレベルの Can-do Statements (能力記述文)を開発し、平成 18 年度より使用している。このことにより、学生、教員ともにそのクラスの具体的な到達目標を「～ができる」の形で共有し、最初と最後に Can-do Checklist を使用して、授業に参加する前にまず何ができ何ができないのか、何を目標に学習していくのか、授業に参加した結果、何ができるようになったのか、何がまだできないのかを技能別に意識させ、成績のレターグレードだけでなく、自分の英語の運用能力を明確に認識し、生涯学習の一環としての自律的学習や次の目標設定に役立てられるようにしている。

シラバスも Can-do Statements を達成するという観点から、テキストでの学習と、

スピーチやライティングなどの学生の活動、教室外での自律的学習などを柱に、スケジュールとともに精密に組み立てられ、担当教員間での共通理解や質的な改善を目的とした F D を学期ごとに行うなど、「理念→目標→レファレンス・レベル→レベルごとの Can-do Statements→シラバス→授業→評価」とプログラムの一貫性と透明性が保てるようにデザインされている。

このような構成であることから、成績評価は、いわゆるテストだけではなく、スピーチやライティングなどの活動や自律的学習の評価などを含めた多面的な評価をレベルごとに採用し、評価基準も同一レベルで統一している。

すなわち、茨城大学では、「教員間の共通理解の下、到達目標や成績評価基準を明確化する」「多面的な評価」「外国語コミュニケーション能力の評価の厳格化」(「4. 成績評価」)(文部科学省 2009)という中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」で求められていることを、平成 17 年度以来、独自の方法で実施してきたわけである。

また、本プログラムは「主体的に学ぶ姿勢・態度を持たせること」「双方向型授業や能動的活動に参加する機会を設ける」こと(「3. 教育方法の改善」)、「授業計画の明確化」(「2. 単位制度の実質化」)(文部科学省 2009)といった点でも、「学士課程教育の構築に向けて」の方向性に合致する内容となっている。

運営体制としては、各学部からの委員も含む総合英語教育専門部会が、ガイドライン・基本計画・実施計画の立案など主として企画的な面を担い、総合英語専任教員で構成されている総合英語教育部が、専門部会で決められた内容の実施・運営等を行っ

ている。

レベル別授業にはレベルごとにレベルコーディネータを置いて、授業内容や評価方法等、同一レベル内の質の管理を行い、プログラムとして各レベル間の整合をとるためのスーパーバイザ的な役割を部会長が担っている。

平成23年度の教養英語の受講学生数は、前学期2,479名（週延べ4,860名、うち工学部Bコース英語Ⅰ、英語Ⅱ、英語Ⅲが98名）で75クラス（うち工学部Bコースが3クラス）、後学期1,940名（週延べ3,795名、うち工学部Bがコース英語Ⅰ、英語Ⅱ、英語Ⅲ85名）で66クラス（他に工学部Bコースが3クラス）であり（大学教育センター2012: 10）、総合英語は同一授業題目で週2回対面授業を行うため、本数としては前学期144本（他に工学部Bコース3本）、後学期126本（他に工学部Bコース3本）の授業を実施したことになる。その内訳は、レベル別では、前学期レベル1が3クラス、レベル2が15クラス、レベル3が41クラス、レベル4が2クラス、レベル5が1クラス、後学期レベル1が1クラス、レベル2が3クラス、レベル3が17クラス、レベル4が30クラス、学術用英語は前学期10クラス、後学期12クラスである。

これだけ多くのクラスを運営し、共通シラバス、共通教材、共通の評価基準を使用したレベル別授業の質を一定に保つためには、各レベルのレベルコーディネータが重要な役割を果たしている。また、レベル内のことだけでなく、プログラム全体のデザインや教授法を共有化することも重要である。そのため、レベル固有の内容についてはレベルごとに行うFDが、総合英語プログラム全体に関わるFDとしては、専門部会主催の全体FDが極めて重要であり、いずれもこのプログラムの質の保持、向上のためには、欠かせないものである。

2. 授業アンケートのまとめ

ここで授業アンケートについて触れておこう。

「平成23年度・前学期教養科目アンケート集計報告」によると、総合英語の学生アンケートの実施状況は対象数75、実施数74で実施率98.7%。クラス満足度の平均は0.867（1.00が最高値）で前年度より0.011ポイント向上し、分野区分ごとの満足度の平均ではトップとなっている。また、教員の期待クラス満足度の平均は0.935、教員満足度の平均は0.926と、いずれも極めて高い数値が出ている。

個々のクラスを見ていくと、前学期、後学期ともにレベル別の授業ではクラス満足度が0.98、0.97という驚異的な数字のクラスも複数あり（大学教育センター2011a, 2011b）、この中からレベル4の後学期の授業が茨城大学推奨授業表彰に選定されている。

授業の基本に係る質問である①シラバスおよび評価方法の説明、②シラバスに沿った授業、③毎回の出欠確認の3つについては、それぞれ0.96、0.944、0.985（教員アンケートでは、1.000、0.971、1.000）（大学教育センター教育点検支援部2012）で前年度を上回り、シラバス、評価方法、出席など、授業の基本に関して透明性の高い授業となっていることがわかる。これは「2. 単位制度の実質化」のうち「授業計画の明確化」が行われていることを実証している。

また、それぞれの質問項目については以下のとおりで、すべての項目で前年度の数値を上回る結果となった。なお、参考までにカッコ内に前年度の数値を示しておく。

Q 1 : 全体満足	0.858 (0.838)
Q 2 : 収穫実感	0.808 (0.784)
Q 3 : 教員熱意	0.895 (0.883)
Q 4 : コミュニケーション	0.909 (0.907)
Q 5 : 質問対応	0.858 (0.850)
Q 6 : 自力解決	0.765 (0.749)
Q 7 : 学習十分	0.711 (0.672)
Q 8 : 声や板書	0.877 (0.876)
Q 9 : 教室整備	0.797 (0.796)

(大学教育センター教育点検支援部
2012: 5)

いずれも高い数値だが、特に注目したいのは、「Q4 教員は、受講生とコミュニケーションをとりながら授業を進めていましたか?」「Q5 教員は、質問や相談に対して授業内外で適切に対応しましたか?」「Q6 あなたは、わからない部分を何らかの方法(教員に質問する・自分で調べるなど)で解決するようにつとめましたか?」「Q7 この授業のための学習(予習・復習など)に十分な時間をかけましたか?」の4項目である。この4項目はいずれもすべての分野区分の中での最高の数値であり、最初の2項目からは、「双方向型授業」、残りの2項目からは「主体的に学ぶ姿勢・態度」(いずれも「3. 教育方法の改善」)の一端が見て取れる。そのほかに、「Q8 教員の声の大きさ、話し方、板書は適切でしたか?」も分野区分の中で最高の数値となっている。

3. FD実施報告

全学導入から7年、運営システムそのものについては安定してきており、授業の質の改善に力を入れられる状況にある。しかしながら、平成23年度は3.11の震災もあり、教員の異動(非常勤講師の退職・変更、7名の総合英語専任教員のうち3名が退職)や授業の開始の遅延など、例年になく多難な1年となった。そのため、授業運営やプログラムの遂行そのものに力を取られ、FDも例年に比べると回数が少なかったが、レベルの運用のためのレベル別FDと全体の教育方法の改善のための専門部会FDを以下のように行ったので紹介したい。

3.1 レベル別FD

総合英語では、発足当時より、4技能型の担当者の中で、レベルコーディネータが中心となって各レベルのFDを学期

の最初や最後に行ってきた。このFDは日々の授業運営に密着した内容であり、レベルコーディネータが使用教科書や評価方法についての説明を行い、質疑応答や担当クラスの報告・相談を行うなど、常勤、非常勤を問わず、教員相互の意見交換の場となっている。

本年度は、震災対応等による事情もあり、レベル別に固有のやり方で前学期の終わりや後学期にFDを行った。例えばレベル2はメールによるアンケート形式で各教員の考えを明確にし、その後の授業に役立てた。レベル3では、個別にメールや対面によって、教員との対話を図った。レベル4では、前学期2クラスのみだったため基本的には個別対応で行い、後学期担当教員に対しては教科書、教授用資料の配布とともに説明や情報交換、討議の形での対面のFDを行った。また、本年度新しい教科書を採用したことから、メールで教科書についてのアンケートも行った。なお、レベル1とレベル5は担当教員が1名だったため実施しなかった。

3.2 全体FD

総合英語教育専門部会主催の全体FDは「教育方法の改善」を目指し、以下のように実施した(敬称略)。

1. 日時

平成24年1月18日(水曜日)
12:20~14:10 (~13:45 予定)

2. 場所

共通教育棟1号館西棟2階 第5講義室

3. スケジュール

12:20~12:25

佐藤和夫大学教育センター長挨拶

12:25~12:40

講演「レベル授業における工夫①」

デニス・トゥール(非常勤講師)

12:40~12:55

講演「レベル授業における工夫②」

トーマス・メイヤーズ(非常勤講師)

12:55~13:10

講演「レベル授業における工夫③」
ダニエル・ワルドホフ（非常勤講師）

13:10~13:30

講演「学術用英語の授業における工夫」
永井典子（人文学部、平成 22 年度推奨
授業表彰「学術用英語」）

13:30~14:05

質疑応答

14:05~14:10

福田浩子総合英語教育専門部会長挨拶

4. 参加者 20 名（うち非常勤講師 11 名）

5. 企画・運営・司会

FD担当 岡山陽子

アンケート結果のまとめでも述べたように、総合英語の中には、クラス満足度が極めて高いものが複数存在する。そういったクラスの担当教員の授業運営上の工夫を知り、質疑応答し、情報交換することは、教員のモチベーションを上げ、新たな気持ちで授業に向かうことができるようになる。それが結果的に満足度の向上につながることは言うまでもない。

このFDでは、4 技能型のクラスを担当されている 3 名のネイティブ・スピーカーの先生方に授業の工夫について講演をしていただき、次に大学教育センター推奨授業表彰制度により表彰された学術用英語担当の先生に、プレゼンテーションの授業でどのような段階を踏んで良い発表ができるように組み立てているか、そのシラバスの立て方と授業運営の工夫について日本語で講演していただいた。

最初の 3 名の先生方の英語でのプレゼンテーションはそれぞれに個性がありながら極めて完成されたものであり、最後にプレゼンテーションの組み立て方を含む話が聞けたことによって、参加した教員も非常に刺激を受けた。

総合英語では、授業講時が重なっていることから、授業参観をすることができない。そのため、それぞれの先生方の授業の素晴らしさと英語でのプレゼンテーションの見本となるような講演を伺えて、自分の授業

を見つめ直すとてもよい機会となった。

4. 今後の課題

平成 17 年度の全学導入当時から、総合英語教育専門部会および総合英語教育部は、授業担当教員の協力を得て、運営体制の安定化と授業の質の向上を目標に尽力してきた。これはまさに「学士課程教育の構築に向けて」で示された方向性と合致していたといえよう。

一方、非常勤時間の削減など運営条件が厳しくなり、合理化を進めることも必要となってきた。このような状況下にあつて、英語教育の理想を一方では掲げながら、現実的かつ合理的に運営していくことが求められる。現在の質を保ちつつ、安定的にプログラムの運営ができるように、今後もあらゆる局面で努力していきたい。

【引用文献】

大学教育センター（2011a）「平成 23 年度・前学期・授業アンケート結果」

<http://www.cue.ibaraki.ac.jp/files/center/gakunai/anketo/H23z-all/H23z-all.html>

大学教育センター（2011b）「平成 23 年度・後学期・授業アンケート結果」

<http://www.cue.ibaraki.ac.jp/files/center/gakunai/anketo/H23k-all/H23k-all.html>

大学教育センター（2012）「教養教育実施結果報告書」

大学教育センター教育点検支援部（2012）「平成 23 年度・前学期教養科目アンケート集計報告」

http://www.cue.ibaraki.ac.jp/files/center/anketo_report/H23z.pdf

文部科学省（2009）『『学士課程教育の構築に向けて』中央教育審議会答申の概要』

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/siryu/attach/1247211.htm

情報基礎教育専門部会のFD報告

大学教育センター情報基礎教育専門部会
羽瀨裕真、大瀧保広、梅原守道、宇野美由紀

あらまし

本報告では、学生アンケートと教員アンケートを解析し、満足度の要因を探っている。2009年度からの満足度調査では、年を追うごとに徐々に向上し、2011年度が最も高くなっている。当然のことではあるが「学生・教員・TA 間のコミュニケーションを取ること」が重要であることが指摘されている。

1. はじめに

2011年度は情報関連科目を前期20科目、後期11科目の計31科目を開講した。

2011年度の教養科目の授業アンケートの項目は2009年度および2010年度と同様の内容で5段階にして実施されている。それらは、『学生の調査アンケート』と『教員の自己点検評価アンケート』からなる。情報関連科目に関するアンケートの実施結果は

学生のアンケート実施率	: 96.8%
教員点検アンケート実施率	: 93.5%
学生のアンケート提出率	: 80.9%
学生のクラス満足度の平均	: 0.796
教員の満足度の平均	: 0.873
期待クラス満足度の平均	: 0.894

であった。クラスに対する学生アンケートの提出率を図1に示す。2つのクラスを除いて60%以上の学生がアンケートを提出した。

今回は2011年度の専門部会のメンバーと情報関連科目担当で2012年3月16日にFDを実施した。今回のFDでは、(1)アンケートの解析、(2)情報基礎教育専門部会での検討事項、(3)IT基盤センター機器更新(特に、ソフトウェアおよびOSなど)に関する説明、(4)大学教育センターサーバ更新状況(特に、RENANDI の状況)説明、を行った。

本報告では、(1)の授業アンケートと教員

アンケートの解析と授業担当者からの感想をまとめる。

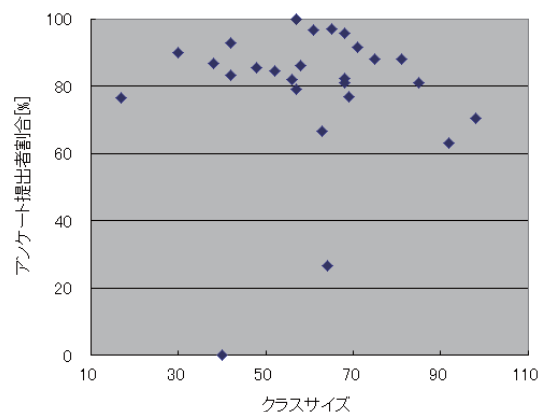


図1 クラス毎のアンケート提出率

2. アンケート調査結果

学生の調査アンケートのQ1～Q9の項目について、回答1は1.0(肯定)、回答2は0.75、回答3は0.50、回答4は0.25、回答5は0.0(否定)として点数化した。さらに、教員の自己点検評価アンケートの各項目(q1～q7、Q1～Q4)についても、学生の調査アンケートと同様に点数化した。

学生の調査アンケートのQ1～Q5、Q8の項目別満足度の平均値を“クラス満足度”とし、教員の自己点検評価アンケートのq1～q4およびq6～q7の項目別満足度の平均値を“期待クラス満足度”とする。また、教員アンケートのQ2～Q4の項目値の平均値は“教員満足度”とする。

2.1 学生アンケート結果

図2に、学生へのアンケートの項目別の平均満足度を示す。ただし、学生の調査アンケート項目Q1～Q9を取り上げる。

図2からQ7の学習時間(予習・復習に十分な時間をかけましたか)に関する項目評

点が0.571と低いことがわかる。これまでの学生アンケートでも同様の結果が示されている。授業時間外に課題制作や宿題などがあるため学習時間は必ずあると考えられるが、少ない傾向である。これは2つの理由が考えられる。1つは、「予習や復習に十分な時間をかけましたか」との設問であったため、3程度にマークした学生が多かったと考えられる。2つ目は、授業時間の多くを演習時間に割いており、授業時間外も作業に追われているため学生が予習・復習の時間とみなしていないと考えられる。

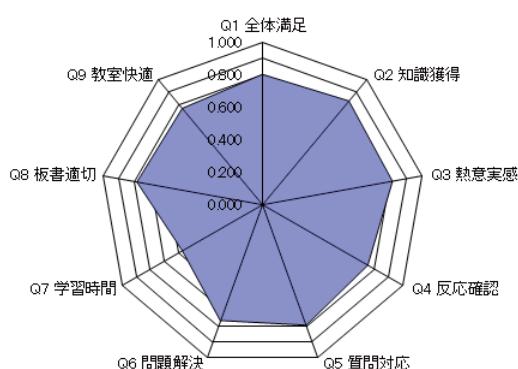


図2 学生アンケートの項目別平均満足度

今後、授業時間外の学習時間の有効活用により理解力や基礎力の底上げを図ることができると考えられる。そのため、その学習時間をどのように使うのが良いのかを検討する必要がある。

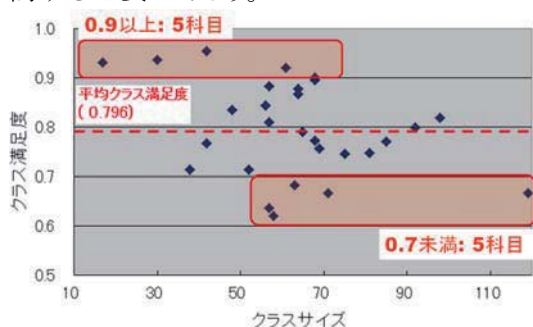


図3 クラスサイズ対クラス満足度

図3にクラスサイズに対するクラス満足度の関係を示す。全てのクラスがクラス満足度0.6以上を達成している。クラスサイズが小さいほど、クラス満足度が高い傾向にはあるが、クラスサイズが60名以上であってもクラ

ス満足度が0.8以上のクラスが存在している。クラス満足度が0.9以上の科目は5つある。また、0.7以下の科目も5つあり、正規分布状になっている。

2.2 教員アンケート

教員アンケートの教員の満足度の平均は0.873であり、期待クラス満足度の平均は0.894であった。これは学生クラス満足度の平均0.796に比べて高い値となっている。学生のクラス満足度と教員の満足度の関係、期待満足度との関係を考える。

図4に教員満足度に対するクラス満足度の関係を、図5に期待クラス満足度に対するクラス満足度の関係を示す。

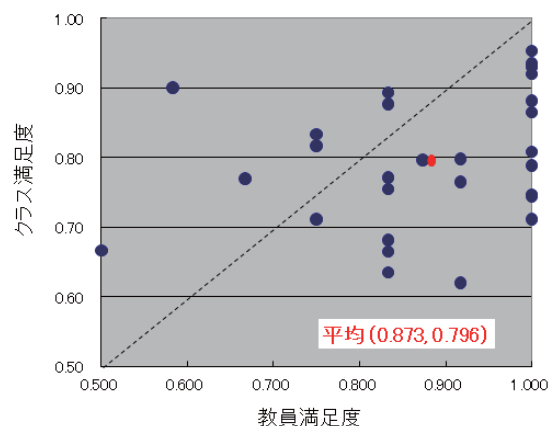


図4 教員満足度に対するクラス満足度

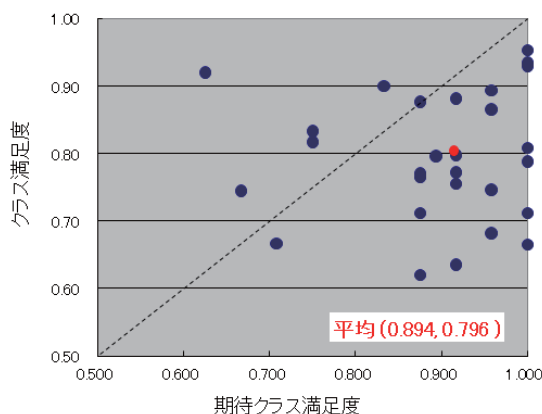


図5 期待クラス満足度対クラス満足度

図4と図5からいずれも教員の満足度や期待度が学生の満足度を上回っている。特に、教員の平均期待クラス満足度は学生の平均クラス満足度よりも0.098以上高い。こ

のことは、教員が伝えたい内容や知っておいてほしいことが授業に受けている学生に十分に伝わっていないのかもしれない。

2.3 これまでのアンケート結果との比較

2009年度、2010年度、2011年度の学生および教員のアンケートの対応項目毎の比較を表1に示す。★印がクラス満足度に反映される項目である。

2009年度、2010年度、2011年度とクラス満足度はわずかではあるが改善している。教員のアンケートについても期待クラス満足度と教員満足度がともに2009年度、2010年度、2011年度の順に少しずつ向上している。2009年度と2011年度を比較すると、クラス満足度は0.018、期待クラス満足度は0.041向上している。さらに、教員満足度は2009年度よりも0.086も向上している。これは授業計画が洗練されてきたためと思われる。

表1からクラス満足度を構成する項目のうちQ4【反応確認】とQ8【板書適切】の項目が常に低い値となっている。これらは授業内容ではなく方法なので、授業方法の洗練が望まれる。これら2つの項目はいずれも学生とのコミュニケーションが鍵になっているので、積極的に机間巡回することやTAの活用が必要不可欠であろう。

表1 2011年度とこれまでの比較

項目	2009年	2010年	2011年
Q1【全体満足】★	0.795	0.803	0.799
Q2【知識獲得】★	0.838	0.839	0.830
Q3【熱意実感】★	0.788	0.799	0.816
Q4【反応確認】★	0.729	0.741	0.751
Q5【質問対応】★	0.763	0.778	0.792
Q6【問題解決】	0.753	0.753	0.761
Q7【学習時間】	0.578	0.568	0.571
Q8【板書適切】★	0.756	0.746	0.787
Q9【教室快適】	0.753	0.762	0.770
クラス満足度	0.778	0.784	0.796
期待クラス満足度	0.853	0.875	0.894
教員満足度	0.787	0.845	0.873

表2にクラス満足度との相関係数を示す。3年度間を通して、相関係数が高いのはQ1【全体満足】ではなく、Q3【熱意実感】の項目であった。表1と表2から、やはり学生は教員とのコミュニケーションを通して、科目への親しみや楽しさを求めているように思われる。

表2 クラス満足度との相関係数

項目	2009年	2010年	2011年
Q1【全体満足】★	0.929	0.937	0.921
Q2【知識獲得】★	0.859	0.936	0.916
Q3【熱意実感】★	0.932	0.962	0.969
Q4【反応確認】★	0.950	0.930	0.911
Q5【質問対応】★	0.912	0.933	0.908
Q6【問題解決】	0.569	0.724	0.866
Q7【学習時間】	0.566	0.571	0.643
Q8【板書適切】★	0.911	0.900	0.938
Q9【教室快適】	0.671	0.598	0.793

2.4 担当教員からの感想

- 学生とのコミュニケーションに関して
 - ・「学生に問いかける回数の増加」「質問の受付時間を増加」の改善策を考えたい。
 - ・初級者用を対象としているため、学生とのやり取りを重視し、すべての学生が同じ歩調で進めるように気を配っている。
 - ・授業時間の大部分を演習時間とし、2名のTAとともに教室を巡回して随時質問に対応することで、効率的な個別説明を行うことを心がけた。
 - ・授業中に分からないことがあっても質問せずにそのままにして授業を終えようとする学生がいる。教室巡回している際に、学生からの問いかけを待つのではなく、学生に問いかけることが必要である。
- 学生間の実力差や学生の実力に関して
 - ・「パソコンに抵抗を感じる者にとっては少し高度に感じる」という意見がある一方で、「発展的な作業(操作)」を求める意見もあり、スキルのバラつきに対してこれまで以上に配慮をする必要性を再認識した。
 - ・学生個々人のソフトウェア使用の経験に大

きなばらつきがあるために、講義進行の調整に苦慮しているところがある。この点を解消する手段として、学生個人個人の経験のばらつきが少ない1年次で講義する。このことは、情報倫理教育の早期実施にも繋がる。

- ・学生は、マニュアルに示したことを行わせるのは得意だが、課題を与えて応用させると理解の不足が明らかとなったので、より課題解決に重点を置き、基礎の理解を向上させる必要があると思われる。また、情報倫理や情報リテラシーに関してはその場で聞くだけで身につけていない感じがあり、改善が必要である。

■学習時間に関して

- ・ガイダンス時、また通常の授業中でも折に触れて「授業を受けているだけでは力は身につかないこと」を説明して予習・復習を促し、かつ授業時間外に取り組む課題をいくつか出しているのだが、なかなかアンケート結果には反映されてこない。時間外学習の少なさの対策の一つとしては、個々の課題の難易度を下げて数を増やす等の取り組みが考えられる。
- ・シラバスを用いたガイダンス時に「教えてもらうのではなく、自ら調べ考えるという姿勢で受講する」よう指導しているが、学生には上手く伝わっていないようである。

■配付資料などや授業形態に関して

- ・「もう少し詳しく説明してほしい」、「説明が早い」、「操作手順を文書化して配布してほしい」等の自由記述が見られた。
- ・新設科目であり、また、震災のために、十分な資料準備ができずに授業に突入した。公開されている最新情報へのリンクを提示し、その解説と議論を行ったのでライブ感があったと思う。
- ・クラス規模は全学で最大であり、2 教室をビデオでつなぐ講義となったために、色々と戸惑う点も多かった。大教室のためか、講義中に大声で私語をする学生がみられた。

3. まとめ

情報関連科目では、アンケート結果を以下の3つにまとめられる。

- ・クラス満足度は毎年向上している
- ・学習時間に関する設問の点数が低い。基準が不明確であり、普通(3)と回答したと考えられる
- ・『十分な準備と熱意』で授業進行することが、学生満足度向上につながり易い

さらに、教員の感想からは以下の通りである。

- ・学生とのコミュニケーションを図る工夫や授業外の学習を促す工夫がされているが、学生から良い反応が得られていない。これはレポート課題の数や難易度の見直しばかりでなく、オフィスアワーの一層の活用が必要のように思われる。
- ・学生間の実力差が大きい場合があり、その対処に苦慮している。習熟度別授業も考えられるが、60名程度で行われる授業では少なからず生じてしまう。
- ・受講姿勢については、クラスサイズが大きくなると私語が目立つ。また、分からないことをそのままにして授業を終えようとする学生がいることが指摘された。この対策としては、コミュニケーションを高めることやTAの活用につきると思われる。

これらを踏まえ情報関連科目では、以下の検討が必要であると考えられる。

- ・How to 的な要素に偏らない考え方や本質を伝えられるような内容の検討
- ・全ての情報関連科目が1年次に開講されることになった。そのため、単なる専門導入科目ではなく、教養として全学的な共通項目を設定し、より内容を充実させたいと考えている。全学的にこれだけは知っているべき事柄やレベルの検討(情報倫理は必須、テキスト改定)
- ・授業外学習時間を増やすための工夫

2011年度には情報倫理のテキストを改定し、新入生全員に入学時に配付した。さらに授業担当者にも配付した。情報基礎教育専門部会では、このテキストを参考にして情報倫理の授業を行ってほしいと考えている。

健康・スポーツ専門部会報告

健康・スポーツ専門部会 上地 勝

1. 運営状況

平成 23 年度は健康・スポーツ科目では 92 本（前期 47 本，後期 45 本）の授業をおこなった。平均クラスサイズは前期が 37.2 人，後期が 36.0 人であり，前年度に比較し，前後期の差が小さくなった。これは年度最初のガイダンスで厳密にクラス分けを実施するためであろう。最も多かったクラスは後期末 2 工学部の 48 人であり，最も少なかったクラスは 2 年次全学集中（スキー）の 15.8 人であった。

2. 授業アンケートの分析

前年度に引き続き，全ての授業で学生アンケートを実施することができた。担当教員の中で，学生アンケート実施の必要性が浸透した結果であると思われる。

学生のクラス満足度を見ると，前期が 0.856，後期が 0.879 と比較的高い値を示した。しかし，前年度と比較すると，前後期ともに低下傾向にあった。その原因を探るために，平成 21 年度，平成 22 年度の結果と比較検討することとした。

図 1 に，平成 21～23 年度のアンケート結果の平均点を質問項目ごとに示した。

まず，クラス満足度であるが，23 年度後期は持ち直しているものの，全体的に評価が低下している傾向にあることが伺え，23 年度前期は最も低い値を示した。これは，質問 1 の「全体的満足度」の結果からも理解できる。質問 3 の「教員の十分な準備と熱意で授業をおこなったか」と，質問 4 の「教員と受講生とのコミュニケーション」については，高い値で推移しており，これらが全体的満足度の低下と関わっているとは考えにくい。同様の推移を示している項目が，質問 6 の「分からない点を解決するように努めたか」，質問 7 「授業のための予習・復習に十分な時間をかけたか」である。これらの項目は，元々，全体的に学生からの評価が低い項目であり，

実技である健康・スポーツ科目では，対応することが難しい項目と言えるが，工夫次第では，十分に対応可能であると思われる。

全体的な傾向として見られるのが，どの年度においても前期よりも後期のほうが学生からの評価が高いということである。その傾向が顕著なのが質問 9 の「施設設備への不満」である。授業アンケートを実施する時期は，前期は 7 月末から 8 月上旬の酷暑期，後期は 2 月の厳寒期となるが，とりわけ酷暑期の運動実技の実施については，近年の猛暑日の増加もあり，学生から環境改善を求める指摘が多い。環境改善に合わせ，健康・スポーツ科目全体で，これら酷暑期，厳寒期を回避するような授業計画を立てられるよう，検討する必要があると思われる。

3. 今後の課題

近年の社会的ニーズとして，健康の維持増進がある。今後さらに進行する高齢社会に向けて，様々な対策を施す必要があるからである。国は「健康増進法」を制定したり，「21 世紀における国民健康づくり運動（健康日本 21）」を策定し，第二期をスタートさせる。企業等においても，人材確保，保険料，年金等の観点から，企業内における健康づくりを充実させたほうが効率が良いことが認識されるようになり，様々な健康増進に関する取り組みがおこなわれるようになってきた。このような状況の下，自分自身の健康を自らで保持増進できるような学生を育成し，社会に輩出することは，大学教育の使命のひとつであると言えよう。健康・スポーツ科目はそのための中心的役割を担わなければならない。

一方，近年の学生の傾向として，仲間づくりが苦手，他人とのコミュニケーションが苦手，場を読み周囲に合わせる，といった点が挙げられる。入学時の仲間づくり，コミュニケーションの場として，健康・スポーツ科目を活用することは十分に可能である。

以上の視点を取り入れつつ、健康・スポーツ科目が担うべき役割について検討し、新たな

枠組みを構築し、その可能性を追及していきたい。

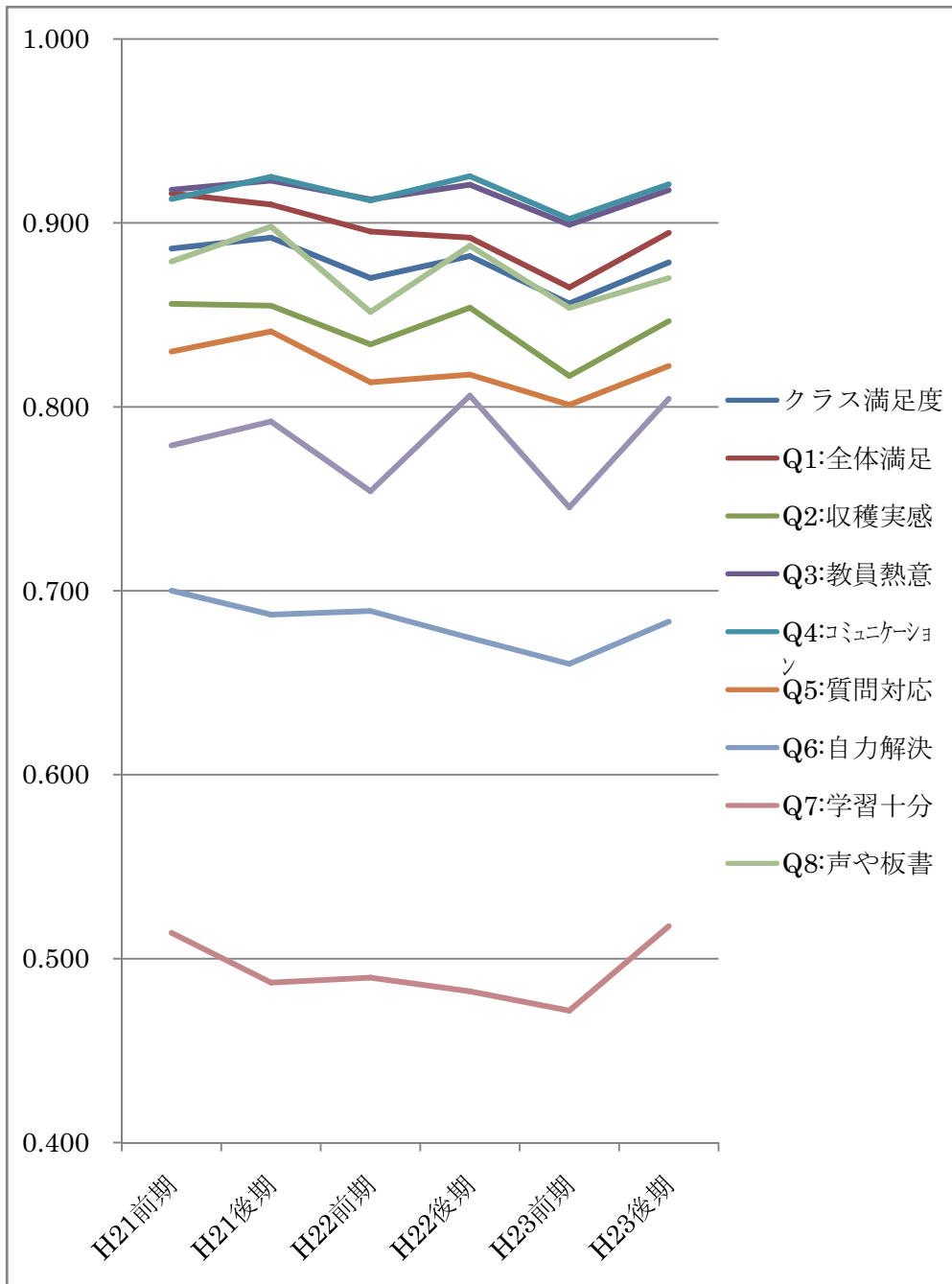


図1 平成21年度から23年度の授業アンケート結果

授業アンケートの結果について

平成23年度・前学期

教養科目授業アンケート集計報告

大学教育センター教育点検支援部

大学教育センターでは、平成23年度前学期開講の教養科目を対象に授業アンケートを実施した。授業アンケートは、次の2種類から成る。

- ・学生アンケート・・・授業運営に係る基本事項の点検や学生の満足感調査、その他学生からのフィードバックが期待される項目についての調査・公開
- ・教員自己点検・・・学生アンケート集計結果を基にした、授業担当教員の自己点検評価

本授業アンケートは平成22年度前学期と同じ形式・内容である。これらに関する各科目個別の結果は、次のページにおいて参照していただきたい。ただし学内からのみ参照可能である。

学生アンケートと教員自己点検の科目ごとの結果：

<http://www.cue.ibaraki.ac.jp/files/center/gakunai/anketo/H23z-all/H23z-all.html>

学生アンケート回答のうち自由記述部分については、匿名で当該教員に提示するにとどめ、上記ページには掲載していない。教員自己点検における自由記述部分は、本来の目的に鑑み、活字変換のうえ原則としてそのまま掲載した。ただし、アンケートそのものへの意見など、本アンケートの主旨から外れると判断された記述については、改善への検討事項として別途取り纏め、上記のページからは削除している。以下ではこれらの集計・分析結果を、次の三部構成で報告する。

- 第Ⅰ部 学生アンケート結果の概要
- 第Ⅱ部 教員自己点検結果の概要
- 第Ⅲ部 教員の「期待クラス満足度」と学生の「クラス満足度」との関係

〔用語説明〕科目区分と分野区分について

教養科目に属する授業は、総合英語科目；外国語科目（英語以外）；健康・スポーツ科目；情報関連科目；人文／教養科目（分野別教養科目の人文の分野）；人文／基礎科目（分野別基礎科目の人文の分野、以下同様）；社会／教養科目；社会／基礎科目；自然／教養科目；自然／基礎科目；総合科目；主題別ゼミナールの計12種類に大別される。本報告書ではこのような分け方を「科目区分」と呼ぶ。また、集計処理の都合上、分野別教養科目と分野別基礎科目を（分野ごとに）ひとまとめにして扱うことがある。すなわち、「人文／教養科目」に属する科目と「人文／基礎科目」に属する科目をまとめて（「人文系」などと称し）扱う場合がある。合計9つに分かれるこのような分け方を本報告書では『分野区分』と呼ぶことにする。

第 I 部 学生アンケート結果の概要

(1) 実施状況

平成23年度前学期開講の教養科目446科目のうち学生アンケート採取対象科目は442科目であり、このうち422科目で学生アンケートが実施された。全体の実施率は95.5%であった。各々の分野区分における実施率は次の表の通りである。

表1-1 分野区分ごとの実施状況

	対象数	実施数	実施率
総合英語	75	74	98.7%
外国語(英語以外)	75	75	100.0%
健康・スポーツ	47	47	100.0%
情報関連	22	21	95.5%
人文系	43	43	100.0%
社会系	46	38	82.6%
自然系	56	52	92.9%
総合科目	33	32	97.0%
主題別ゼミ	45	40	88.9%
合計	442	422	95.5%

(2) 実施方法およびアンケート内容

アンケート採取は、各授業の最終回（またはそれに準じる時期）に、教員がアンケート用紙を配布し学生の手によって回収される方式で行われた。アンケート内容は択一形式の質問と自由記述である。択一形式の質問は、すべての科目に共通に設定された12項目（「授業の基本に係る質問」3項目および「教養科目に共通の質問」9項目）と、各々の分野区分に固有の数項目（項目数は分野区分により異なる）からなる。共通12項目の質問内容を以下に記す。なお、本報告書の末尾【参考資料3】には、各々の分野区分における固有質問を掲載しているので併せて参照されたい。

<授業の基本に係る質問>

- ①この授業の初回に、授業計画（シラバス）や評価方法の説明がありましたか？
- ②授業展開は、おおむね授業計画（シラバス）に沿ったものでしたか？
- ③この授業では、何らかの方法により出欠調査が行われていましたか？

<教養科目に共通の質問>

- Q1 この授業に、全体として満足しましたか？
- Q2 この授業を受けて、新しい物の見方や知識、技能を獲得した実感がありますか？
- Q3 教員は、十分な準備と熱意で授業を行ったと思いますか？
- Q4 教員は、受講生とコミュニケーションをとりながら授業を進めていましたか？
- Q5 教員は、質問や相談に対して授業内外で適切に対応しましたか？
- Q6 あなたは、わからない部分を何らかの方法（教員に質問する・自分で調べるなど）で解決するようにつとめましたか？
- Q7 この授業のための学習（予習・復習など）に十分な時間をかけましたか？

Q8 教員の声の大きさ、話し方、板書は適切でしたか？

Q9 講義室の広さや席数、その他設備の面で不満を感じることはありませんでしたか？

(注1) 授業の基本に係る質問では、回答は {1:はい, 2:いいえ, 3:わからない} から選択。

(注2) 教養科目に共通の質問では、回答が「はい」の場合は1、「いいえ」の場合は5を選択。どちらか決められない場合は、どちらに近いかに応じて、中間の2、3、4から適当な番号を選択。

(3) 学生アンケートにおける分析指標

本アンケートの分析においては、次の2種類の指標を定義した。

【受講者満足度】受講者（回答者）それぞれに対して、質問Q1、Q2、Q3、Q4、Q5、Q8の各回答に次の5段階の数値を対応させ、計6問にわたって平均した値（回答者ひとりひとりに対して算定される値）。

[回答1→1.00 回答2→0.75 回答3→0.50 回答4→0.25 回答5→0.00]

これは当該受講者の、授業への（事後）満足感の高さを表すひとつの指標と考えられる。この値が1に近いほど、当該受講者にとってはこの授業に（ここで定義された意味で）好感触を持ったと考えられる。

【クラス満足度】それぞれの科目内で、受講者満足度を全回答者にわたり平均した値である（ひとつひとつの科目に対して算定される値）。

なお、各科目個別の集計資料（学内限定で公開中）には、受講者満足度・クラス満足度の他に参考指標として以下を算定している。

- ・ 項目別得点 ・ ・ ・ 教養科目に共通の質問（全9問）への各回答に、受講者満足度算出の際と同じ方法で5段階の数値を対応させ、質問項目ごとに科目内全回答者にわたって平均した値。
- ・ 区分内平均得点 ・ ・ ・ それぞれの質問の項目別得点を同一科目区分内の全科目にわたって平均した値。これの算出に当たっては分野区分によるくくりではないことに注意されたい（つまり、分野別教養科目と分野別基礎科目を区別している）。
- ・ 偏差値 ・ ・ ・ それぞれの項目別得点が示す通常の意味での偏差値。母集団は当該科目が属する科目区分内の全科目である。

(4) クラス満足度に関する統計

学生アンケートが実施された 422 科目について算定したクラス満足度の度数分布を図 1-1 に示す。クラス満足度の平均値は 0.810、最大値は 0.991、最小値は 0.380 であった。

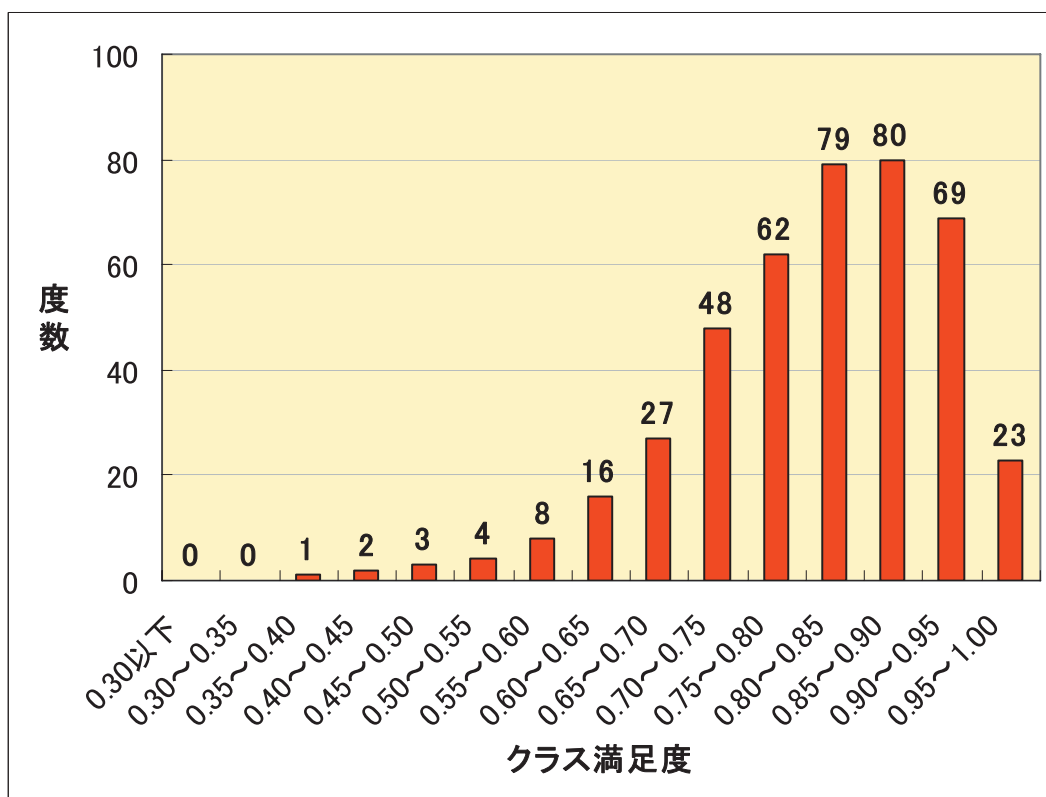


図 1-1 クラス満足度の度数分布

また、各科目のクラス満足度を分野区分ごとに平均した結果を図 1-2 に示す。

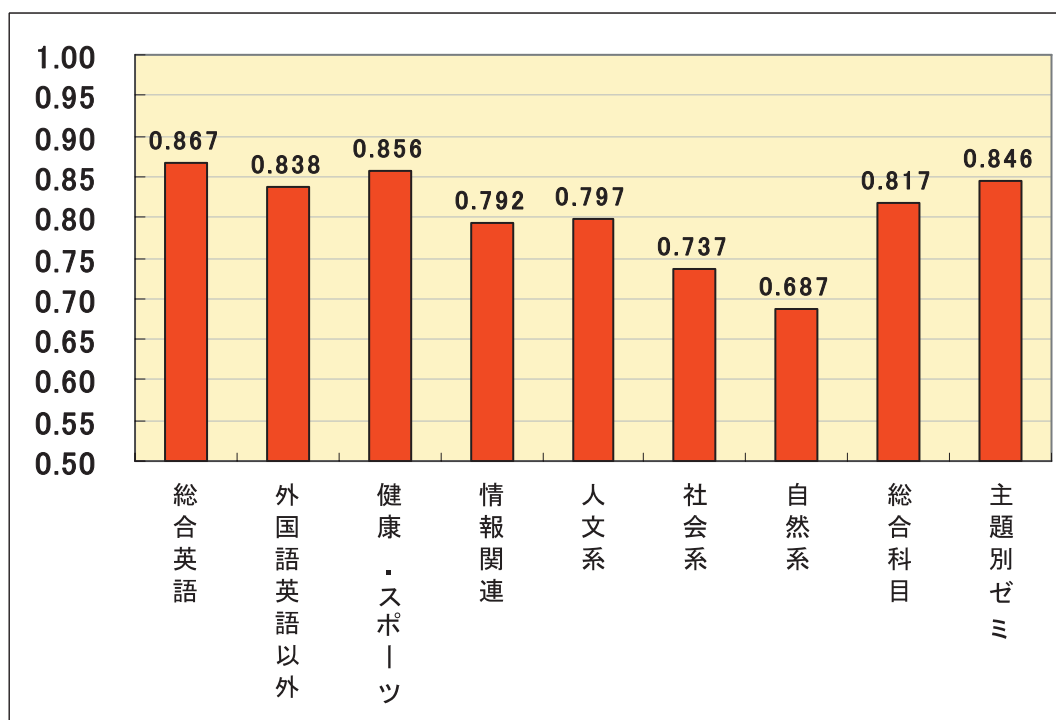


図 1-2 分野区分ごとのクラス満足度の平均

(5) 質問項目ごとの統計

教養科目に共通の質問9項目に対して、項目別得点をアンケートが実施された科目全てにわたって平均した値を図1-3に示す。略記された質問の全文については(2)節を参照されたい。

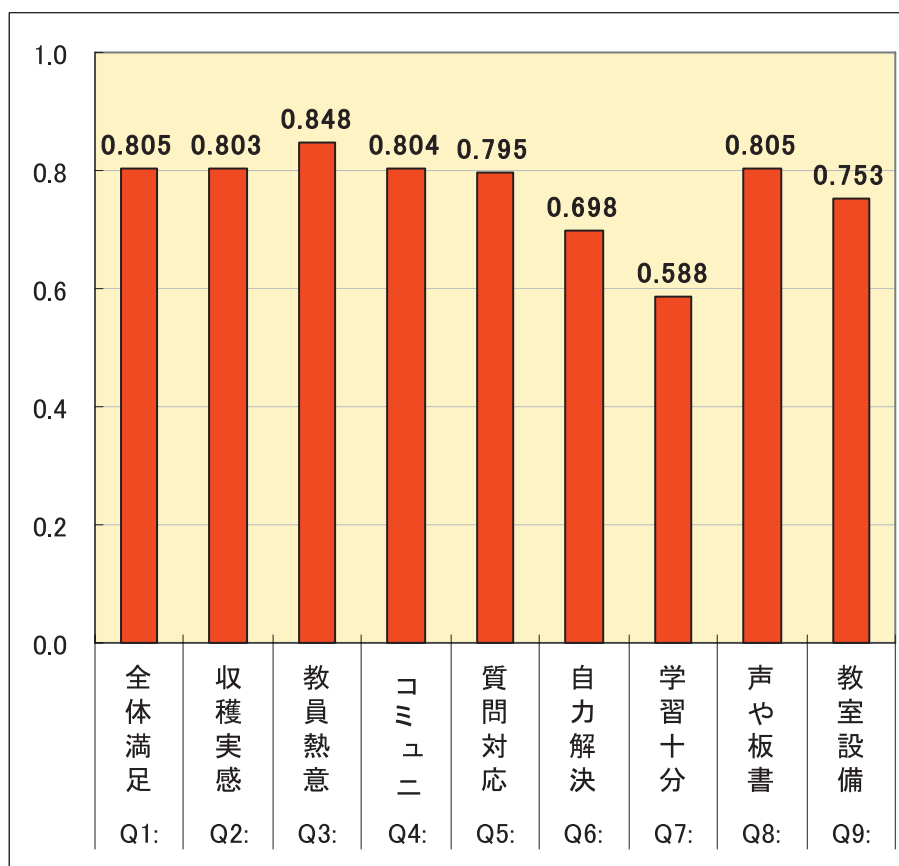


図1-3 質問項目ごとの項目別得点の平均

[参考資料1] 各質問の区分内平均得点を、分野区分別に算定した結果を表1-2に記す。ここでは、授業の基本に係る質問(基本①～基本③)についても同じ算出法で導かれる値を掲載している。

表1-2 分野区分ごとの各質問の平均値(学生アンケート)

	基本①	基本②	基本③	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9
総合英語	0.96	0.944	0.985	0.858	0.808	0.895	0.909	0.858	0.765	0.711	0.877	0.797
外国語(英語以外)	0.893	0.867	0.948	0.811	0.834	0.866	0.867	0.829	0.75	0.651	0.818	0.752
健康・スポーツ	0.897	0.831	0.987	0.865	0.817	0.899	0.902	0.801	0.66	0.472	0.854	0.746
情報関連	0.915	0.901	0.983	0.794	0.826	0.813	0.748	0.789	0.754	0.548	0.78	0.769
人文系	0.908	0.907	0.883	0.81	0.819	0.856	0.733	0.768	0.632	0.528	0.793	0.738
社会系	0.909	0.872	0.733	0.74	0.76	0.807	0.644	0.724	0.585	0.486	0.745	0.705
自然系	0.874	0.853	0.94	0.677	0.697	0.746	0.622	0.698	0.664	0.558	0.683	0.703
総合科目	0.88	0.903	0.918	0.837	0.836	0.856	0.778	0.788	0.657	0.5	0.808	0.749
主題別ゼミ	0.874	0.849	0.929	0.83	0.843	0.846	0.892	0.836	0.744	0.674	0.831	0.803

第Ⅱ部 教員自己点検結果の概要

(1) 実施状況

平成23年度前学期の教員自己点検の対象科目は422科目である（学生アンケートを実施しなかった科目は対象外とする）。このうち391科目で実際に教員自己点検が実施された。全体の実施率は92.7%である。各分野区分における実施率は次の表の通りである。

表2-1 分野区分ごとの実施状況

	対象数	実施数	実施率
総合英語	74	72	97.3%
外国語(英語以外)	75	75	100.0%
健康・スポーツ	47	43	91.5%
情報関連	21	21	100.0%
人文系	43	39	90.7%
社会系	38	29	76.3%
自然系	52	51	98.1%
総合科目	32	24	75.0%
主題別ゼミ	40	37	92.5%
合計	422	391	92.7%

(2) 実施方法および点検内容

教員自己点検は、学生アンケート結果公開後に、授業担当教員への質問（点検項目）計14項目への回答ならびに自由記述を求める形で行われた。14項目の質問事項は科目区分あるいは分野区分に依らず共通のものである。質問内容を以下に記す。

<授業の基本に係る項目>

- ①授業の初回にシラバスおよび評価方法について説明しましたか？
- ②概ねシラバスどおりに授業を展開しましたか？
- ③出欠調査は毎回行いましたか？

<主に“期待クラス満足度”に係る項目>

- q1 声の大きさ、話し方、板書に気を配り、学生が受講しやすい進行を心がけましたか？
- q2 受講生からの質問や相談に対して適切に対応しましたか？
- q3 受講生とのコミュニケーション必要かつ十分な程度とれたと思いますか？
- q4 この授業のための準備は不足無く行えましたか？
- q5 受講生の、この授業に対する興味・関心をいっそう駆り立てるための工夫に、努力しましたか？
- q6 受講生の平均的な習熟度から判断して、この授業における当初目的は達成されましたか？
- q7 この授業を受けることを、自信をもって学生に勧められますか？

<主に“教員満足度”に係る項目>

- Q1 円滑に授業を進める上で、設備面は満足のいくものでしたか？
- Q2 学期を通じて半数以上の学生が教員の熱意に見合う反応を示しましたか？
- Q3 担当クラスの期末試験の答案やレポートは概ね満足のゆく結果でしたか？
- Q4 学生の授業アンケート結果は得心して受け入れられますか？

(注 3) 上記全ての質問で、回答が「はい」の場合は1、「いいえ」の場合は5を選択。どちらか確定し難い場合は、どちらに近いかに応じて、中間の2、3、4から適当な番号を選択。

(3) 教員自己点検における分析指標

教員自己点検の分析においては、次の2種類の指標を定義した。

【期待クラス満足度】質問 q1、q2、q3、q4、q6、q7 への各回答に、次の5段階の数値を対応させ、計6問にわたって平均した値である。

[回答1→1.00 回答2→0.75 回答3→0.50 回答4→0.25 回答5→0.00]

この6問はそれぞれ、学生アンケートにおける「受講者満足度」算定の際の質問6項目に対応している(表2-2参照)。すなわち期待クラス満足度は、教員による自己点検内容(=教員自らが感じた授業への手応え)と実際の学生の受け取り方(=クラス満足度)との比較に有用な指標と考えられる。期待クラス満足度の値が1に近いほど、当該授業に対する(ここで定義されるような)手応えや成果が、教員自身により大きく期待されているといえる。

【教員満足度】質問 Q2、Q3、Q4 への各回答に対して、上と同じ要領で数値を対応させ、計3問にわたって平均した値である。当該授業完了後の、教員の総合的な充足感を計るひとつの指標と考えられる。

ここで、学生アンケートと教員自己点検の両者間に対応関係のある質問項目を示す。

表2-2 学生アンケートと教員自己点検とで対応する質問項目

「クラス満足度」算定に係る項目 (学生アンケート)	「期待クラス満足度」算定に係る項目 (教員自己点検)
Q1 この授業に、全体として満足しましたか？	q7 この授業を受けることを、自信をもって学生に勧められますか？
Q2 この授業を受けて、新しい物の見方や知識、技能を獲得した実感がありますか？	q6 受講生の平均的な習熟度から判断して、この授業における当初目的は達成されましたか？
Q3 教員は、十分な準備と熱意で授業を行ったと思いますか？	q4 この授業のための準備は不足無く行えましたか？
Q4 教員は、受講生とコミュニケーションをとりながら授業を進めていましたか？	q3 受講生とのコミュニケーション必要かつ十分な程度とれたと思いますか？
Q5 教員は、質問や相談に対して授業内外で適切に対応しましたか？	q2 受講生からの質問や相談に対して適切に対応しましたか？
Q8 教員の声の大きさ、話し方、板書は適切でしたか？	q1 声の大きさ、話し方、板書に気を配り、学生が受講しやすい進行を心がけましたか？

(4) 期待クラス満足度に関する統計

教員自己点検が実施された全科目について算定した期待クラス満足度の度数分布を図2-1に示す。期待クラス満足度の平均値は0.891、最大値は1、最小値は0.292であった。

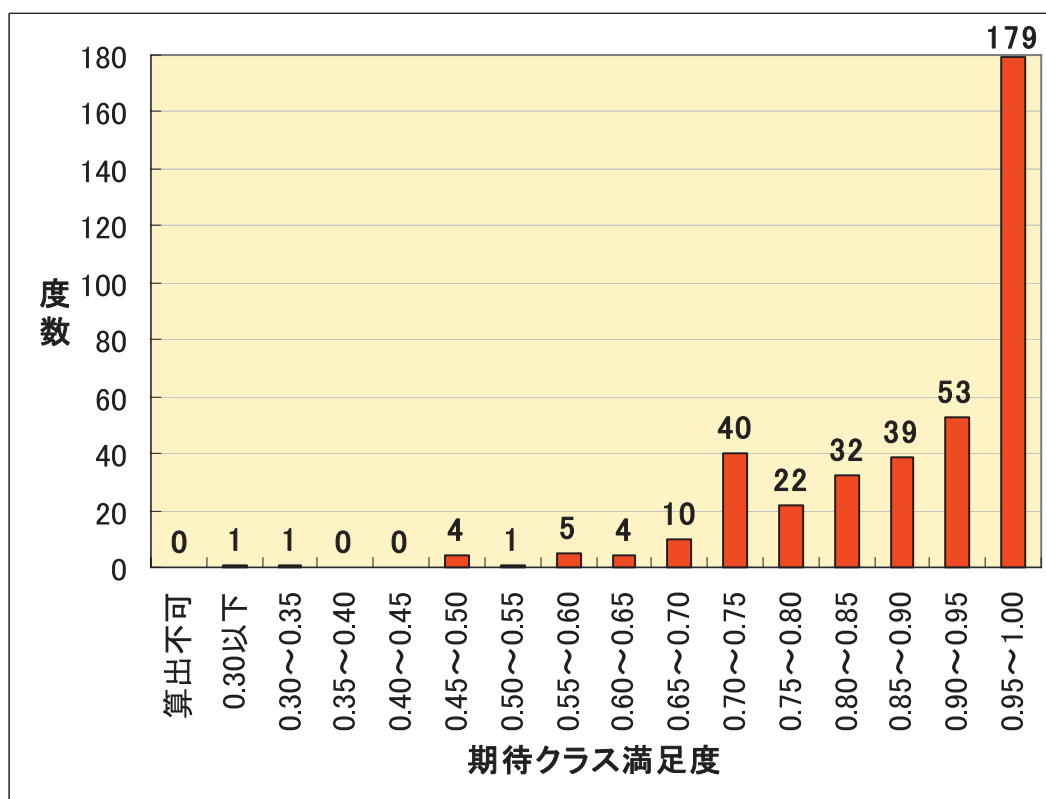


図2-1 期待クラス満足度の度数分布

また、各科目の期待クラス満足度を分野区分ごとに平均した結果を図2-2に示す。

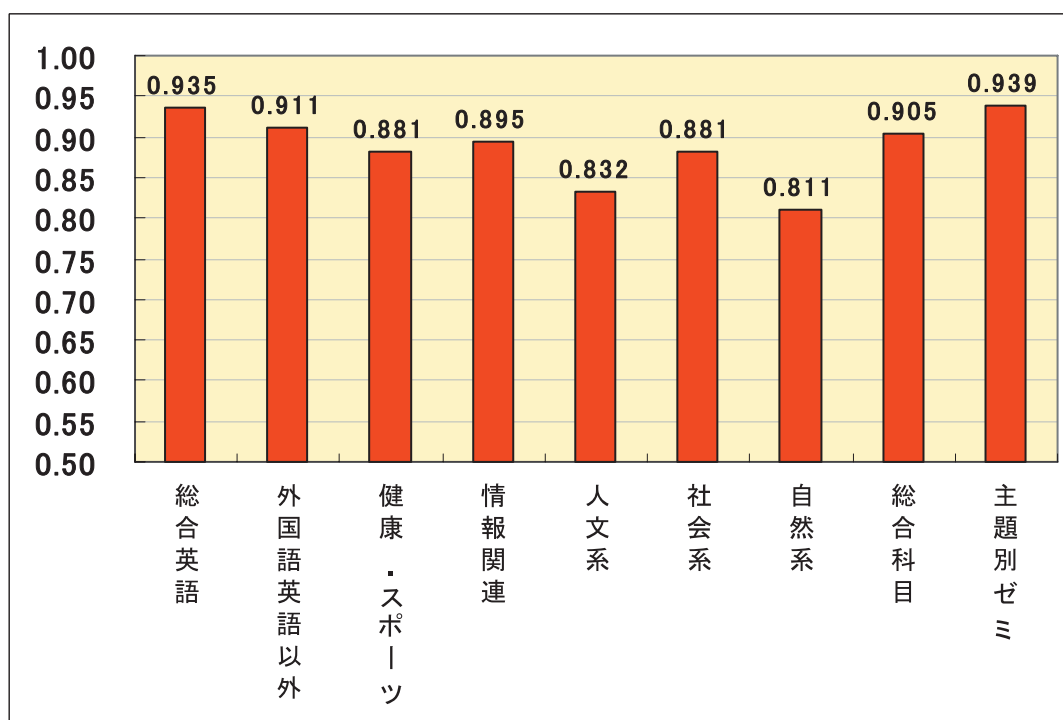


図2-2 分野区分ごとの期待クラス満足度の平均

(5) 教員満足度に関する統計

教員自己点検が実施された全科目について算定した教員満足度の度数分布を図2-3に示す。教員満足度の平均値は0.857、最大値は1、最小値は0.25であった。

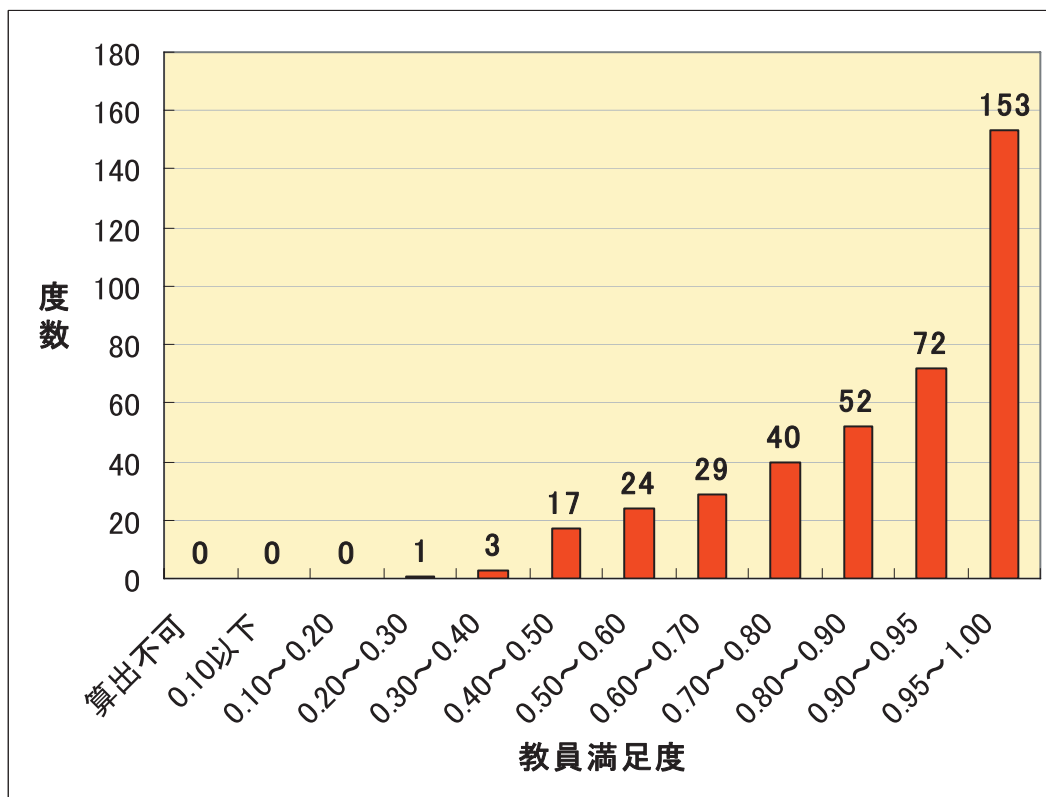


図2-3 教員満足度の度数分布

また、分野区分ごとに教員満足度を平均した結果を図2-4に示す。

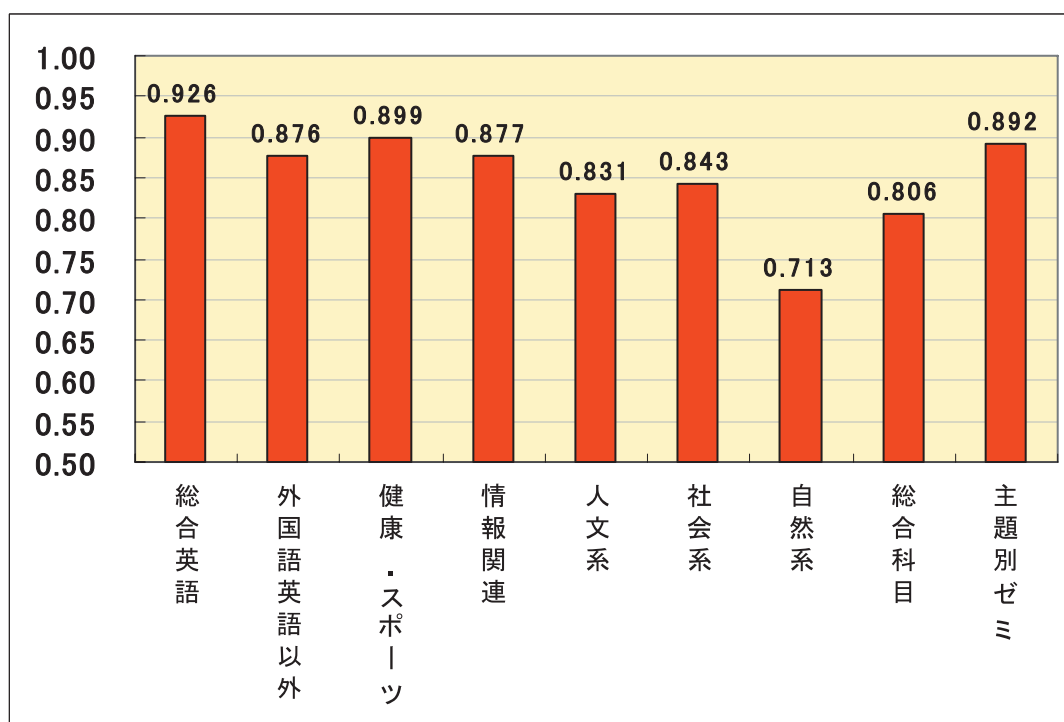


図2-4 分野区分ごとの教員満足度の平均

(6) 質問項目ごとの統計

教員自己点検の質問11項目（q1～q7とQ1～Q4）に対して、各回答に付された「数値（0から1までの5段階）」を教員自己点検が実施された科目全てにわたって平均した値を図2-5に示す。略記された質問の全文については（2）節を参照されたい。

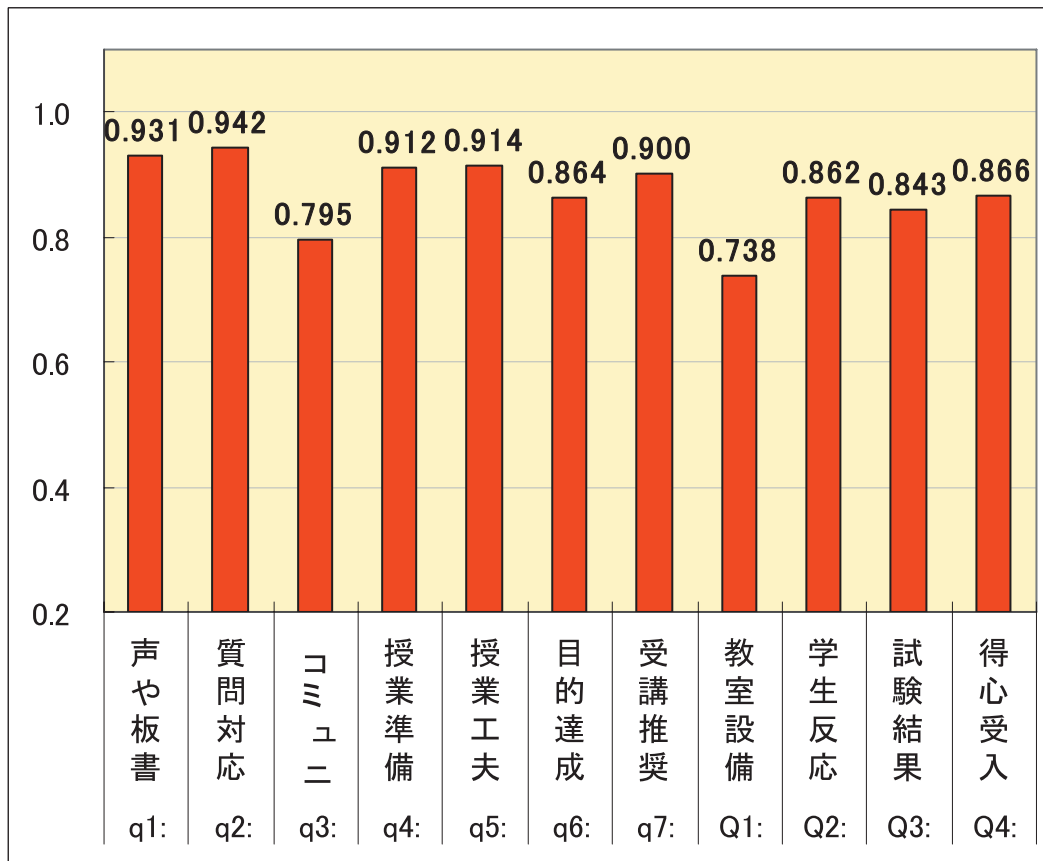


図2-5 質問項目ごとの平均値

[参考資料2] 教員自己点検の全回答に対し、表1-2と同様の方法で算出された結果（分野区分ごと、質問ごとの平均「数値」）を表2-3に記す。

表2-3 分野区分ごとの各質問の平均値（教員自己点検）

	基本①	基本②	基本③	q1	q2	q3	q4	q5	q6	q7	Q1	Q2	Q3	Q4
総合英語	1	0.971	1	0.927	0.979	0.903	0.958	0.927	0.906	0.934	0.813	0.934	0.92	0.924
外国語(英語以外)	0.943	0.897	0.967	0.943	0.963	0.853	0.933	0.943	0.873	0.897	0.814	0.88	0.877	0.868
健康・スポーツ	0.902	0.827	0.942	0.924	0.895	0.855	0.86	0.884	0.866	0.896	0.631	0.909	0.878	0.933
情報関連	1	0.964	0.988	0.952	0.952	0.774	0.857	0.952	0.94	0.893	0.6	0.881	0.845	0.905
人文系	0.968	0.897	0.763	0.897	0.859	0.654	0.878	0.872	0.821	0.885	0.692	0.831	0.84	0.809
社会系	0.983	0.974	0.776	0.964	0.974	0.583	0.964	0.879	0.871	0.931	0.688	0.839	0.845	0.836
自然系	0.995	0.922	0.966	0.882	0.917	0.667	0.868	0.858	0.725	0.809	0.691	0.74	0.662	0.74
総合科目	0.99	0.948	0.969	0.958	0.958	0.781	0.917	0.938	0.844	0.969	0.688	0.813	0.802	0.802
主題別ゼミ	0.959	0.932	0.966	0.966	0.958	0.905	0.919	0.973	0.959	0.926	0.824	0.872	0.865	0.943

第Ⅲ部 教員の「期待クラス満足度」と学生の「クラス満足度」との関係

授業アンケートの対象科目 442 科目中、学生アンケートと教員自己点検の両方ともが実施された科目は 387 科目であった (87.6%)。1 科目を 1 サンプルとしたときの、教員の「期待クラス満足度」と学生の「クラス満足度」との関係散布図を図 3-1 に示す。また、分野区分ごとの散布図を図 3-2 以降に示す。なお、作図にあたっては相異なる複数のサンプルが同一の点を共有することに起因する重複を避け、点の密度をより視覚的に表現するため、適度に小さな乱数による揺らぎを与えた。

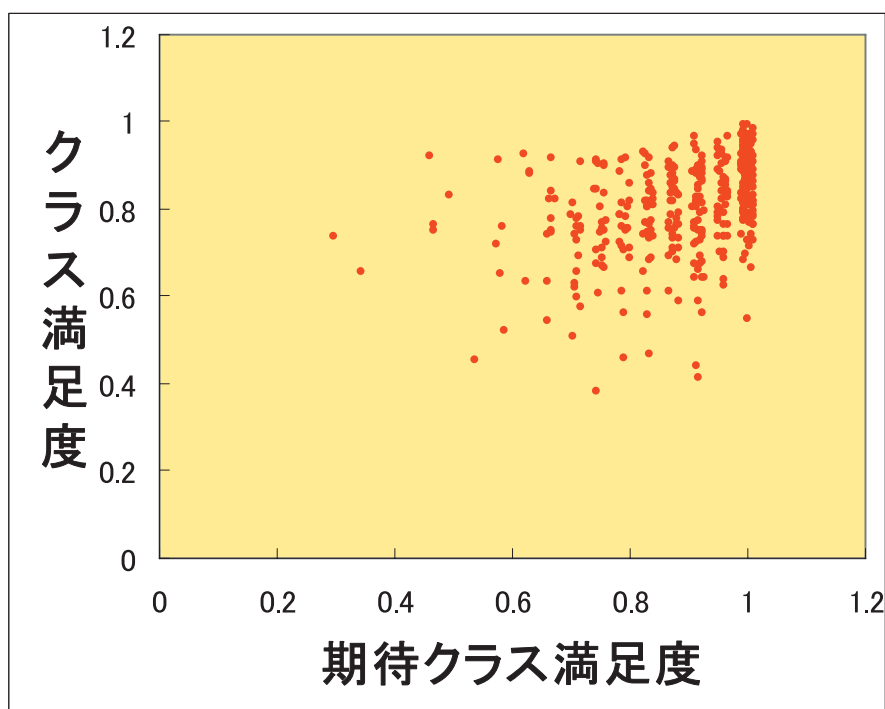


図 3-1 教員の「期待クラス満足度」と学生の「クラス満足度」との相関（全科目）

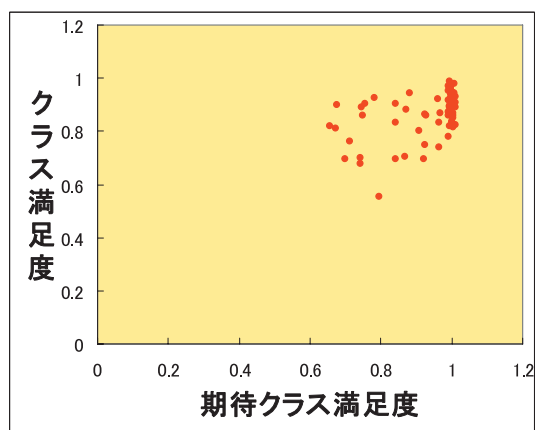


図 3-2 総合英語

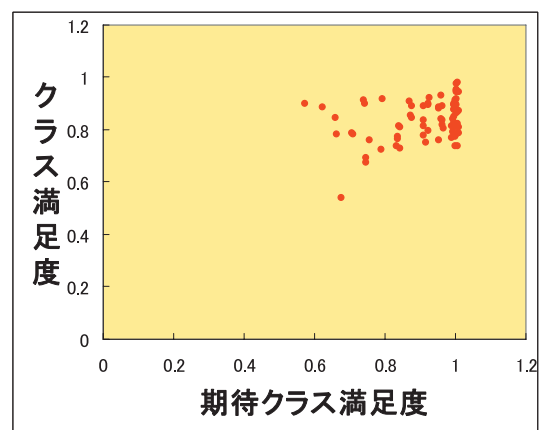


図 3-3 外国語（英語以外）

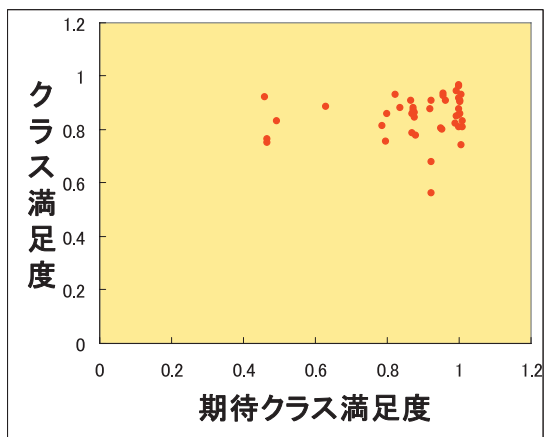


図 3-4 健康・スポーツ

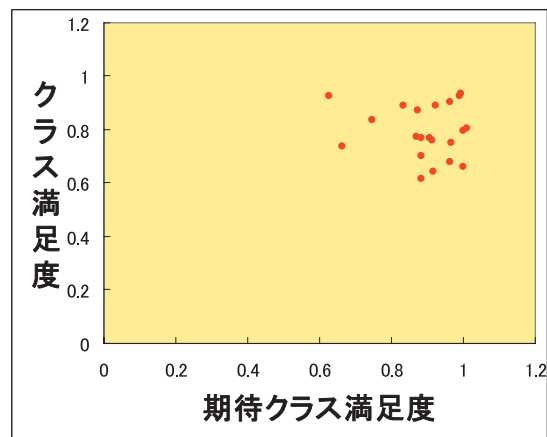


図 3-5 情報関連

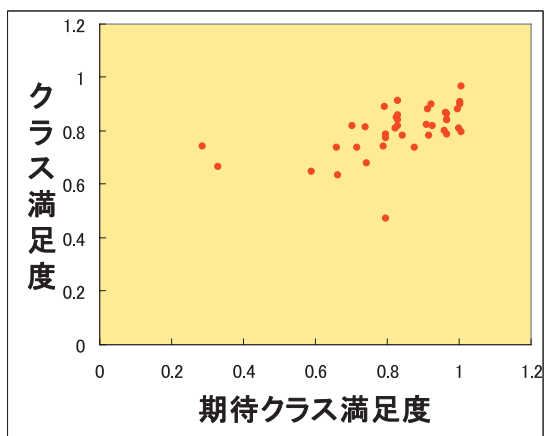


図 3-6 人文系

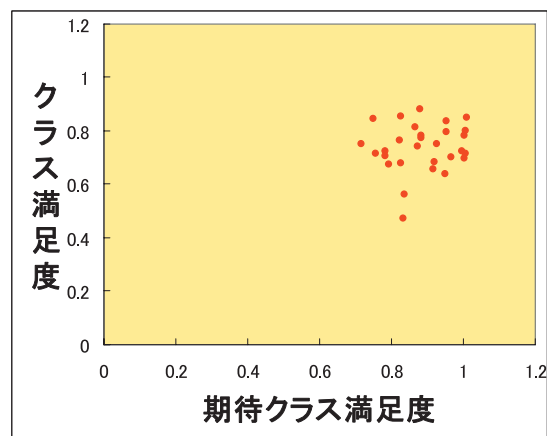


図 3-7 社会系

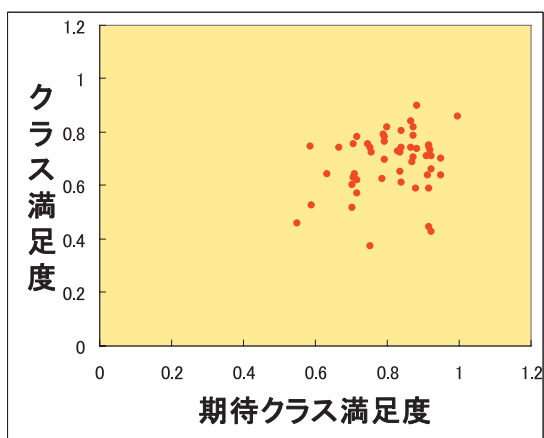


図 3-8 自然系

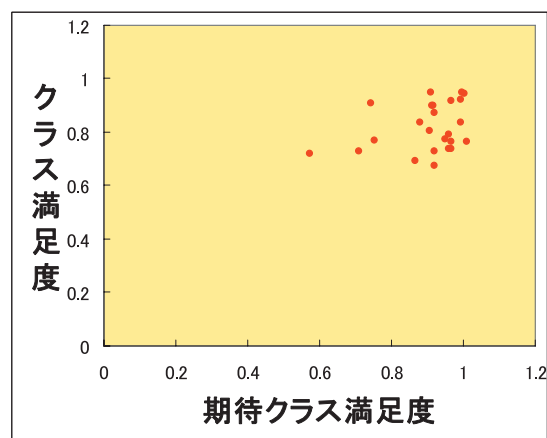


図 3-9 総合科目

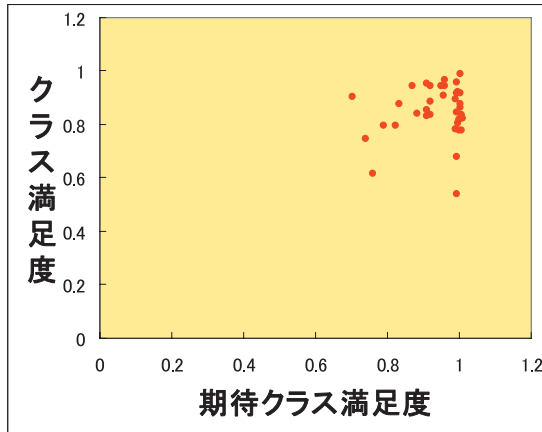


図3-10 主題別ゼミ

 [参考資料3] 学生アンケートにおける固有質問を以下に示す。分野区分ごとに異なる質問項目が定められている（第I部参照のこと）。

1) 総合英語

Q10 この授業の難易度は自分にあっていましたか？

（1:大変難しかった 2:少し難しかった 3:適切であった 4:少し易しかった 5:大変易しかった）

Q11 この授業に使用した教材は学習目標、興味・関心、難易度の点で適切でしたか？

（1:はい ← → 5:いいえ の5択）

Q12 この授業で行った活動は英語の運用能力を伸ばすのに有効でしたか？

（1:はい ← → 5:いいえ の5択）

Q13 左の質問項目について、補足があれば具体的に記述してください。（自由記述）

2) 外国語（英語以外）

Q10 この授業で読む・聞く・書く・話すのバランスは、あなたにとって適切でしたか？

（1:はい ← → 5:いいえ の5択）

Q11 この授業の受講者の数は、あなたにとって適切だと思えましたか？

（1:はい ← → 5:いいえ の5択）

Q12 この授業の教科書は、あなたにとって使いやすかったですか？

（1:はい ← → 5:いいえ の5択）

Q13 この授業で、配布資料、板書など、よかった点、悪かった点について、自由に記述してください。（自由記述）

3) 健康・スポーツ

Q10 この授業で使用した施設や用具は満足のゆくものでしたか？

(1:はい ← → 5:いいえ の5択)

Q11 この授業で指定された教科書は十分役にたちましたか？

(1:はい ← → 5:いいえ の5択)

Q12 受講生同士のコミュニケーション、とりわけ言葉以外の心や身体（運動）のコミュニケーションは十分とれましたか？

(1:はい ← → 5:いいえ の5択)

Q13 今後のより良い授業のために、この授業のよかった点、改善すべき点を具体的に書いてください。(自由記述)

4) 情報関連

Q10 Q1～Q9 及び教室や設備を含め、本授業の良かった点や、悪かった点はなんですか。(自由記述)

5) 自然系

Q10 授業のやり方や内容について、どのような点で問題がありましたか？

(1:話し方や声の大きさ 2:板書の仕方 3:特にない) (※複数選択可能)

Q11 授業の難しさはどの程度でしたか？

(1:難しかった 2:普通 3:やさしかった)

Q12 この授業について何かあれば書いてください。(自由記述)

6) 総合科目

Q10 この授業は総合科目として相応しいものだと思いますか？

(1:はい 2:いいえ 3:わからない)

Q11 この授業についての感想を、例をあげるなどして具体的に書いてください。(自由記述)

7) 人文系・社会系・主題別ゼミ

Q10 この授業に関する要望や感想などを自由に記述してください。(自由記述)

以上

平成23年度・後学期

教養科目授業アンケート集計報告

大学教育センター教育点検支援部

大学教育センターでは、平成23年度後学期開講の教養科目を対象に授業アンケートを実施した。授業アンケートは、次の2種類から成る。

- ・学生アンケート・・・授業運営に係る基本事項の点検や学生の満足感調査、その他学生からのフィードバックが期待される項目についての調査・公開
- ・教員自己点検・・・学生アンケート集計結果を基にした、授業担当教員の自己点検評価

本授業アンケートは平成23年度前学期と同じ形式・内容である。これらに関する各科目個別の結果は、次のページにおいて参照していただきたい。ただし学内からのみ参照可能である。

学生アンケートと教員自己点検の科目ごとの結果：

<http://www.cue.ibaraki.ac.jp/files/center/gakunai/anketo/H23k-all/H23k-all.html>

学生アンケート回答のうち自由記述部分については、匿名で当該教員に提示するにとどめ、上記ページには掲載していない。教員自己点検における自由記述部分は、本来の目的に鑑み、活字変換のうえ原則としてそのまま掲載した。ただし、アンケートそのものへの意見など、本アンケートの主旨から外れると判断された記述については、改善への検討事項として別途取り纏め、上記のページからは削除している。以下ではこれらの集計・分析結果を、次の三部構成で報告する。

- 第Ⅰ部 学生アンケート結果の概要
- 第Ⅱ部 教員自己点検結果の概要
- 第Ⅲ部 教員の「期待クラス満足度」と学生の「クラス満足度」との関係

【用語説明】科目区分と分野区分について

教養科目に属する授業は、総合英語科目；外国語科目（英語以外）；健康・スポーツ科目；情報関連科目；人文／教養科目（分野別教養科目の人文の分野）；人文／基礎科目（分野別基礎科目の人文の分野、以下同様）；社会／教養科目；社会／基礎科目；自然／教養科目；自然／基礎科目；総合科目；主題別ゼミナールの計12種類に大別される。本報告書ではこのような分け方を「科目区分」と呼ぶ。また、集計処理の都合上、分野別教養科目と分野別基礎科目を（分野ごとに）ひとまとめにして扱うことがある。すなわち、「人文／教養科目」に属する科目と「人文／基礎科目」に属する科目をまとめて（「人文系」などと称し）扱う場合がある。合計9つに分かれるこのような分け方を本報告書では『分野区分』と呼ぶことにする。

第 I 部 学生アンケート結果の概要

(1) 実施状況

平成 23 年度後学期開講の教養科目のうち学生アンケート採取対象科目は 340 科目であり、このうち 329 科目で学生アンケートが実施された。全体の実施率は 96.8% であった。各々の分野区分における実施率は次の表の通りである。

表 1-1 分野区分ごとの実施状況

	対象数	実施数	実施率
総合英語	66	66	100.0%
外国語(英語以外)	59	55	93.2%
健康・スポーツ	41	41	100.0%
情報関連	7	7	100.0%
人文系	37	34	91.9%
社会系	25	24	96.0%
自然系	33	33	100.0%
総合科目	38	37	97.4%
主題別ゼミ	34	32	94.1%
合計	340	329	96.8%

(2) 実施方法およびアンケート内容

アンケート採取は、各授業の最終回（またはそれに準じる時期）に、教員がアンケート用紙を配布し学生の手によって回収される方式で行われた。アンケート内容は択一形式の質問と自由記述である。択一形式の質問は、すべての科目に共通に設定された 12 項目（「授業の基本に係る質問」3 項目および「教養科目に共通の質問」9 項目）と、各々の分野区分に固有の数項目（項目数は分野区分により異なる）からなる。共通 12 項目の質問内容を以下に記す。なお、本報告書の末尾 [参考資料 3] には、各々の分野区分における固有質問を掲載しているので併せて参照されたい。

<授業の基本に係る質問>

- ①この授業の初回に、授業計画（シラバス）や評価方法の説明がありましたか？
- ②授業展開は、おおむね授業計画（シラバス）に沿ったものでしたか？
- ③この授業では、何らかの方法により出欠調査が行われていましたか？

<教養科目に共通の質問>

- Q1 この授業に、全体として満足しましたか？
- Q2 この授業を受けて、新しい物の見方や知識、技能を獲得した実感がありますか？
- Q3 教員は、十分な準備と熱意で授業を行ったと思いますか？
- Q4 教員は、受講生とコミュニケーションをとりながら授業を進めていましたか？
- Q5 教員は、質問や相談に対して授業内外で適切に対応しましたか？
- Q6 あなたは、わからない部分を何らかの方法（教員に質問する・自分で調べるなど）で解決するようにつとめましたか？
- Q7 この授業のための学習（予習・復習など）に十分な時間をかけましたか？

Q8 教員の声の大きさ、話し方、板書は適切でしたか？

Q9 講義室の広さや席数、その他設備の面で不満を感じることはありませんでしたか？

(注1) 授業の基本に係る質問では、回答は {1:はい, 2:いいえ, 3:わからない} から選択。

(注2) 教養科目に共通の質問では、回答が「はい」の場合は1、「いいえ」の場合は5を選択。どちらか決められない場合は、どちらに近いかに応じて、中間の2、3、4から適当な番号を選択。

(3) 学生アンケートにおける分析指標

本アンケートの分析においては、次の2種類の指標を定義した。

【受講者満足度】受講者（回答者）それぞれに対して、質問 Q1、Q2、Q3、Q4、Q5、Q8 の各回答に次の5段階の数値を対応させ、計6問にわたって平均した値（回答者ひとりひとりに対して算定される値）。

[回答 1→1.00 回答 2→0.75 回答 3→0.50 回答 4→0.25 回答 5→0.00]

これは当該受講者の、授業への（事後）満足感の高さを表すひとつの指標と考えられる。この値が1に近いほど、当該受講者にとってはこの授業に（ここで定義された意味で）好感触を持ったと考えられる。

【クラス満足度】それぞれの科目内で、受講者満足度を全回答者にわたり平均した値である（ひとつひとつの科目に対して算定される値）。

なお、各科目個別の集計資料（学内限定で公開中）には、受講者満足度・クラス満足度の他に参考指標として以下を算定している。

- ・ 項目別得点 . . . 教養科目に共通の質問（全9問）への各回答に、受講者満足度算出の際と同じ方法で5段階の数値を対応させ、質問項目ごとに科目内全回答者にわたって平均した値。
- ・ 区分内平均得点 . . . それぞれの質問の項目別得点を同一科目区分内の全科目にわたって平均した値。これの算出に当たっては分野区分によるくくりではないことに注意されたい（つまり、分野別教養科目と分野別基礎科目を区別している）。
- ・ 偏差値 . . . それぞれの項目別得点が示す通常の意味での偏差値。母集団は当該科目が属する科目区分内の全科目である。

(4) クラス満足度に関する統計

学生アンケートが実施された 329 科目について算定したクラス満足度の度数分布を図 1-1 に示す。クラス満足度の平均値は 0.850、最大値は 1、最小値は 0.433 であった。

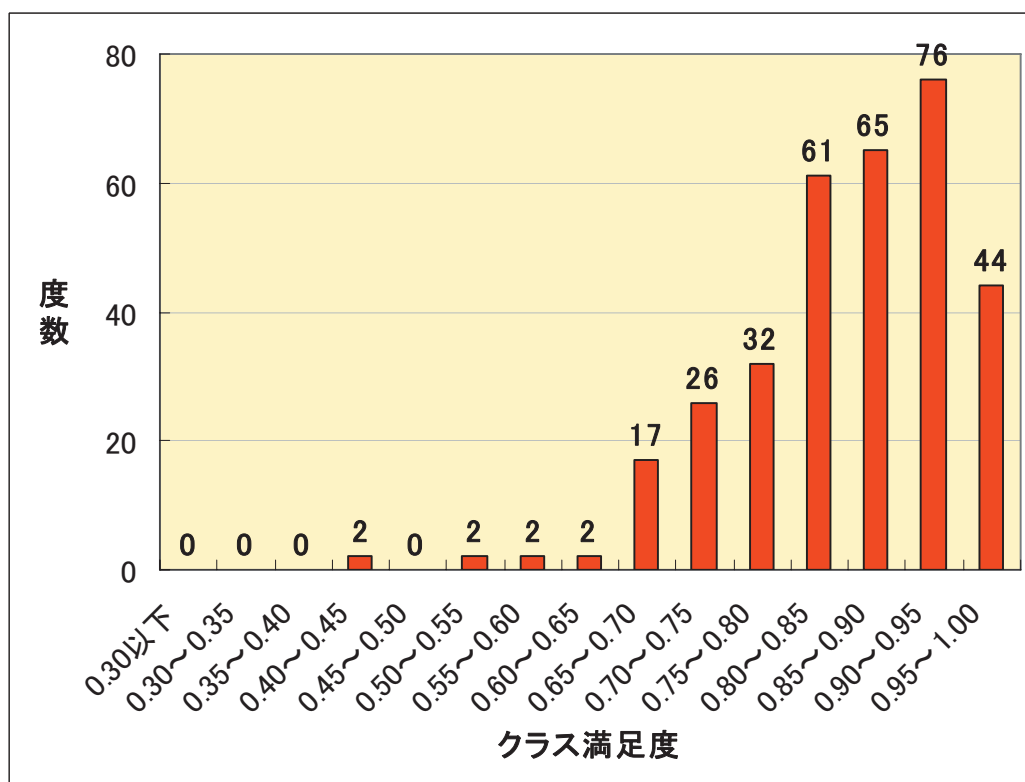


図 1-1 クラス満足度の度数分布

また、各科目のクラス満足度を分野区分ごとに平均した結果を図 1-2 に示す。

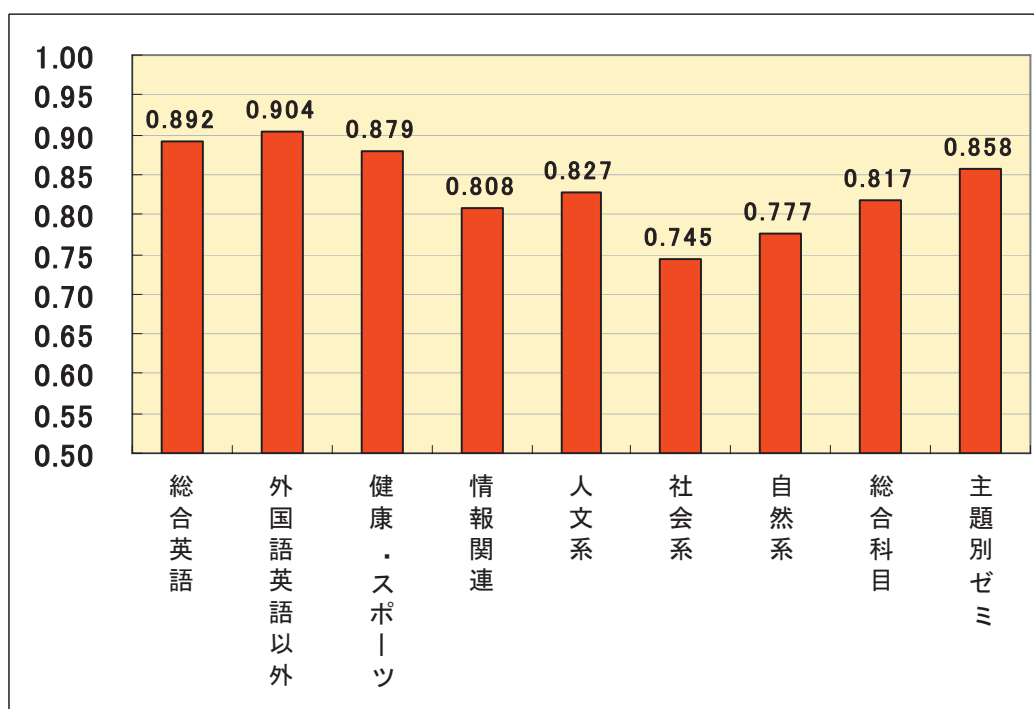


図 1-2 分野区分ごとのクラス満足度の平均

(5) 質問項目ごとの統計

教養科目に共通の質問9項目に対して、項目別得点をアンケートが実施された科目全てにわたって平均した値を図1-3に示す。略記された質問の全文については(2)節を参照されたい。

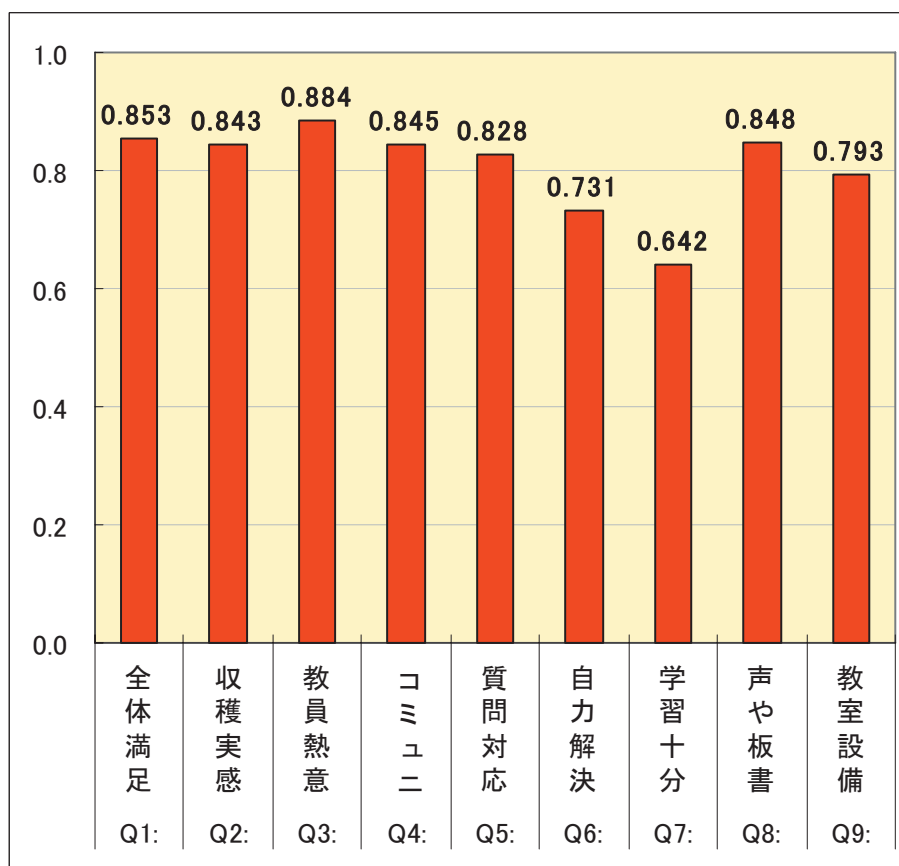


図1-3 質問項目ごとの項目別得点の平均

[参考資料1] 各質問の区分内平均得点を、分野区別に算定した結果を表1-2に記す。ここでは、授業の基本に係る質問(基本①～基本③)についても同じ算出法で導かれる値を掲載している。

表1-2 分野区分ごとの各質問の平均値(学生アンケート)

	基本①	基本②	基本③	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9
総合英語	0.965	0.95	0.986	0.878	0.847	0.914	0.928	0.888	0.806	0.755	0.9	0.821
外国語(英語以外)	0.92	0.917	0.96	0.896	0.889	0.926	0.922	0.905	0.801	0.715	0.889	0.791
健康・スポーツ	0.921	0.887	0.989	0.895	0.847	0.918	0.921	0.822	0.683	0.517	0.87	0.804
情報関連	0.909	0.908	0.961	0.816	0.841	0.821	0.758	0.805	0.786	0.639	0.81	0.779
人文系	0.941	0.929	0.925	0.844	0.85	0.874	0.787	0.779	0.668	0.595	0.827	0.765
社会系	0.915	0.879	0.693	0.749	0.766	0.814	0.665	0.731	0.597	0.505	0.746	0.753
自然系	0.933	0.935	0.963	0.788	0.79	0.819	0.72	0.764	0.71	0.619	0.782	0.762
総合科目	0.934	0.911	0.9	0.841	0.843	0.869	0.766	0.767	0.67	0.531	0.816	0.776
主題別ゼミ	0.936	0.912	0.974	0.847	0.86	0.864	0.876	0.841	0.769	0.748	0.857	0.844

第Ⅱ部 教員自己点検結果の概要

(1) 実施状況

平成23年度後学期の教員自己点検の対象科目は329科目である（学生アンケートを実施しなかった科目は対象外とする）。このうち284科目で実際に教員自己点検が実施された。全体の実施率は86.3%である。各分野区分における実施率は次の表の通りである。

表2-1 分野区分ごとの実施状況

	対象数	実施数	実施率
総合英語	66	64	97.0%
外国語(英語以外)	55	40	72.7%
健康・スポーツ	41	39	95.1%
情報関連	7	6	85.7%
人文系	34	32	94.1%
社会系	24	18	75.0%
自然系	33	30	90.9%
総合科目	37	30	81.1%
主題別ゼミ	32	25	78.1%
合計	329	284	86.3%

(2) 実施方法および点検内容

教員自己点検は、学生アンケート結果公開後に、授業担当教員への質問（点検項目）計14項目への回答ならびに自由記述を求める形で行われた。14項目の質問事項は科目区分あるいは分野区分に依らず共通のものである。質問内容を以下に記す。

<授業の基本に係る項目>

- ①授業の初回にシラバスおよび評価方法について説明しましたか？
- ②概ねシラバスどおりに授業を展開しましたか？
- ③出欠調査は毎回行いましたか？

<主に“期待クラス満足度”に係る項目>

- q1 声の大きさ、話し方、板書に気を配り、学生が受講しやすい進行を心がけましたか？
- q2 受講生からの質問や相談に対して適切に対応しましたか？
- q3 受講生とのコミュニケーション必要かつ十分な程度とれたと思いますか？
- q4 この授業のための準備は不足無く行えましたか？
- q5 受講生の、この授業に対する興味・関心をいっそう駆り立てるための工夫に、努力しましたか？
- q6 受講生の平均的な習熟度から判断して、この授業における当初目的は達成されましたか？
- q7 この授業を受けることを、自信をもって学生に勧められますか？

<主に“教員満足度”に係る項目>

- Q1 円滑に授業を進める上で、設備面は満足のいくものでしたか？
- Q2 学期を通じて半数以上の学生が教員の熱意に見合う反応を示しましたか？
- Q3 担当クラスの期末試験の答案やレポートは概ね満足のゆく結果でしたか？
- Q4 学生の授業アンケート結果は得心して受け入れられますか？

(注 3) 上記全ての質問で、回答が「はい」の場合は1、「いいえ」の場合は5を選択。どちらか確定し難い場合は、どちらに近いかに応じて、中間の2、3、4から適当な番号を選択。

(3) 教員自己点検における分析指標

教員自己点検の分析においては、次の2種類の指標を定義した。

【期待クラス満足度】質問 **q1、q2、q3、q4、q6、q7** への各回答に、次の5段階の数値を対応させ、計6問にわたって平均した値である。

[回答1→1.00 回答2→0.75 回答3→0.50 回答4→0.25 回答5→0.00]

この6問はそれぞれ、学生アンケートにおける「受講者満足度」算定の際の質問6項目に対応している(表2-2参照)。すなわち期待クラス満足度は、教員による自己点検内容(=教員自らが感じた授業への手応え)と実際の学生の受け取り方(=クラス満足度)との比較に有用な指標と考えられる。期待クラス満足度の値が1に近いほど、当該授業に対する(ここで定義されるような)手応えや成果が、教員自身により大きく期待されているといえる。

【教員満足度】質問 **Q2、Q3、Q4** への各回答に対して、上と同じ要領で数値を対応させ、計3問にわたって平均した値である。当該授業完了後の、教員の総合的な充足感を計るひとつの指標と考えられる。

ここで、学生アンケートと教員自己点検の両者間で対応関係のある質問項目を示す。

表2-2 学生アンケートと教員自己点検とで対応する質問項目

「クラス満足度」算定に係る項目 (学生アンケート)	「期待クラス満足度」算定に係る項目 (教員自己点検)
Q1 この授業に、全体として満足しましたか？	q7 この授業を受けることを、自信をもって学生に勧められますか？
Q2 この授業を受けて、新しい物の見方や知識、技能を獲得した実感がありますか？	q6 受講生の平均的な習熟度から判断して、この授業における当初目的は達成されましたか？
Q3 教員は、十分な準備と熱意で授業を行ったと思いますか？	q4 この授業のための準備は不足無く行えましたか？
Q4 教員は、受講生とコミュニケーションをとりながら授業を進めていましたか？	q3 受講生とのコミュニケーション必要かつ十分な程度とれたと思いますか？
Q5 教員は、質問や相談に対して授業内外で適切に対応しましたか？	q2 受講生からの質問や相談に対して適切に対応しましたか？
Q8 教員の声の大きさ、話し方、板書は適切でしたか？	q1 声の大きさ、話し方、板書に気を配り、学生が受講しやすい進行を心がけましたか？

(4) 期待クラス満足度に関する統計

教員自己点検が実施された全科目について算定した期待クラス満足度の度数分布を図2-1に示す。期待クラス満足度の平均値は0.909、最大値は1、最小値は0.5であった。

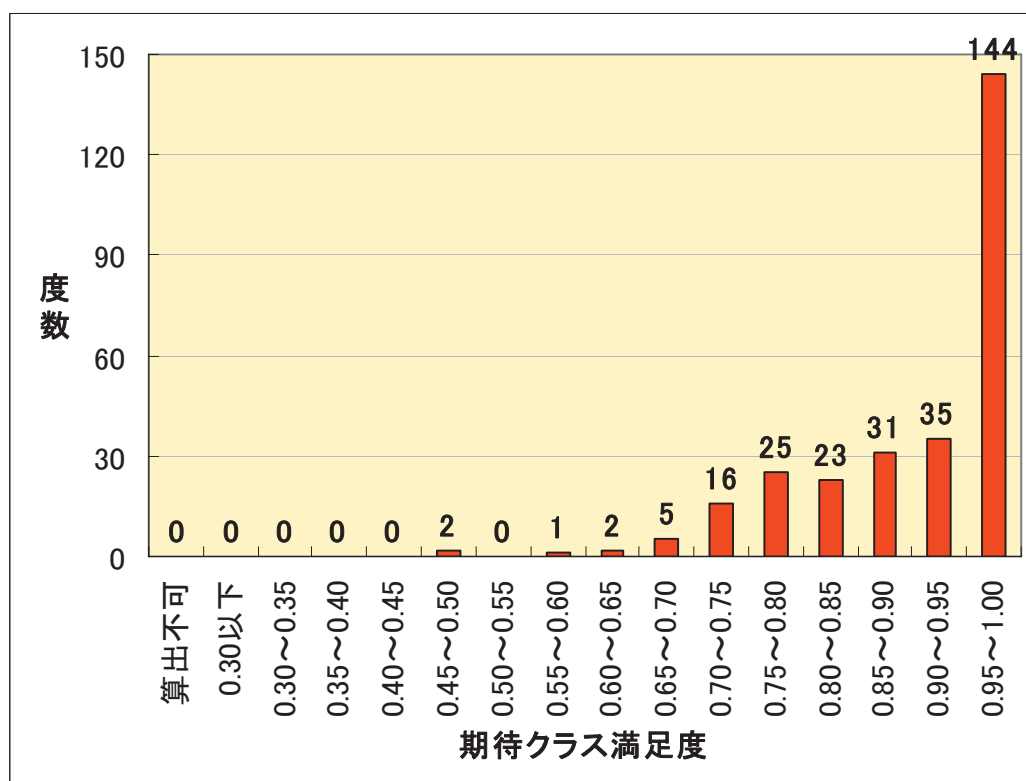


図2-1 期待クラス満足度の度数分布

また、各科目の期待クラス満足度を分野区分ごとに平均した結果を図2-2に示す。

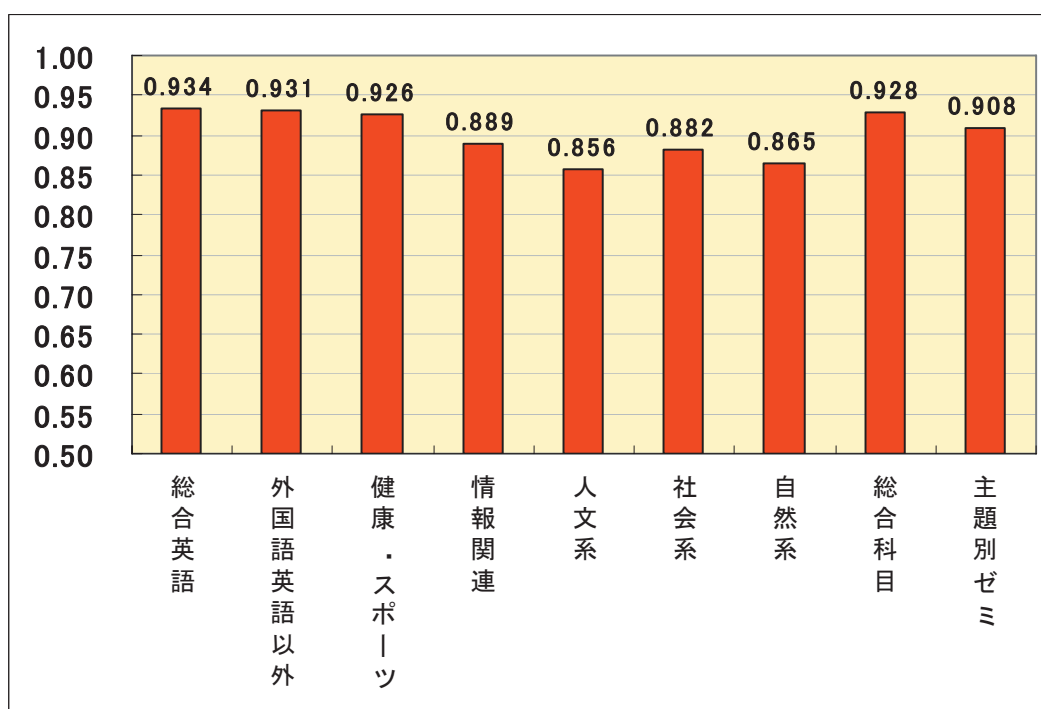


図2-2 分野区分ごとの期待クラス満足度の平均

(5) 教員満足度に関する統計

教員自己点検が実施された全科目について算定した教員満足度の度数分布を図2-3に示す。教員満足度の平均値は0.875、最大値は1、最小値は0.083であった。

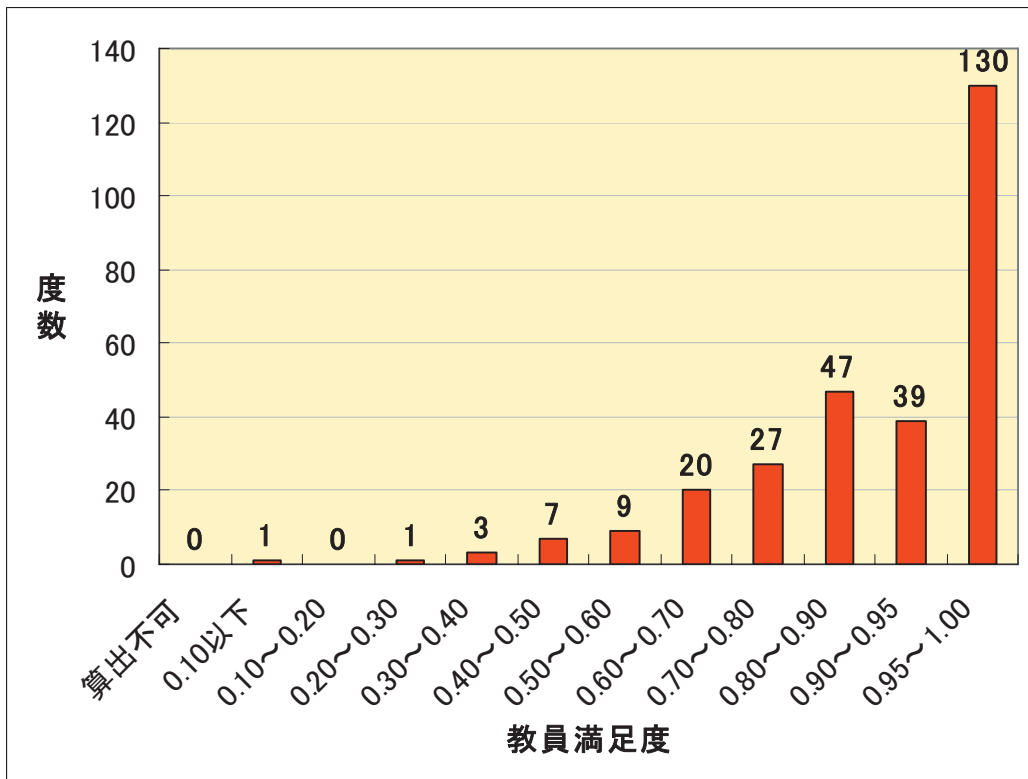


図2-3 教員満足度の度数分布

また、分野区分ごとに教員満足度を平均した結果を図2-4に示す。

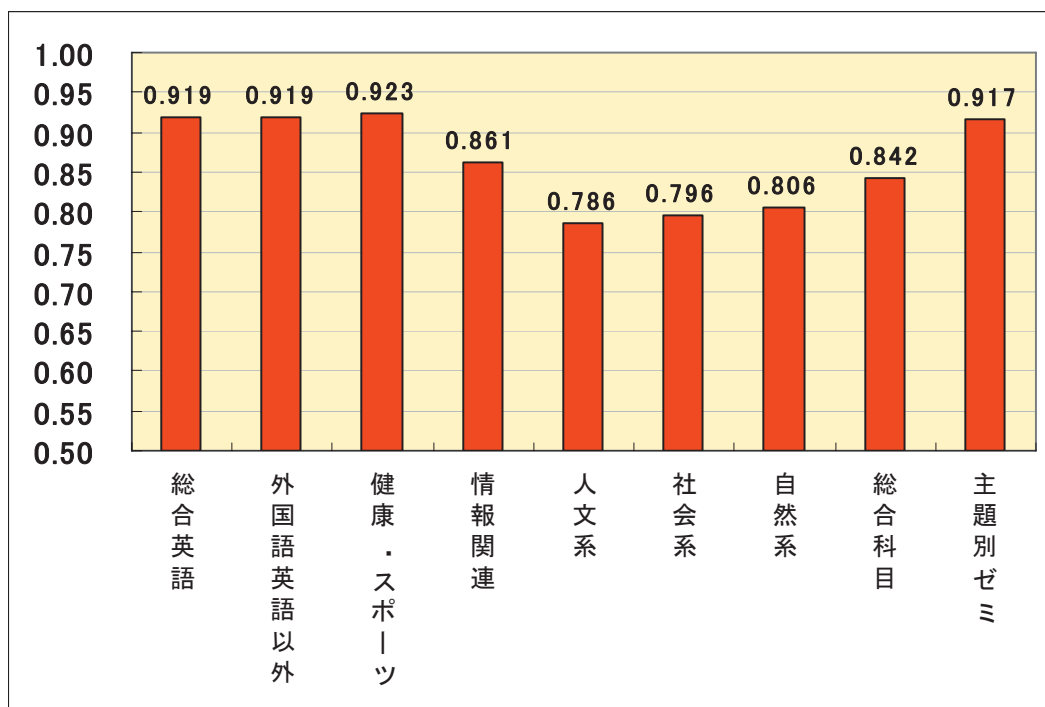


図2-4 分野区分ごとの教員満足度の平均

(6) 質問項目ごとの統計

教員自己点検の質問11項目（q1～q7とQ1～Q4）に対して、各回答に付された「数値（0から1までの5段階）」を教員自己点検が実施された科目全てにわたって平均した値を図2-5に示す。略記された質問の全文については（2）節を参照されたい。

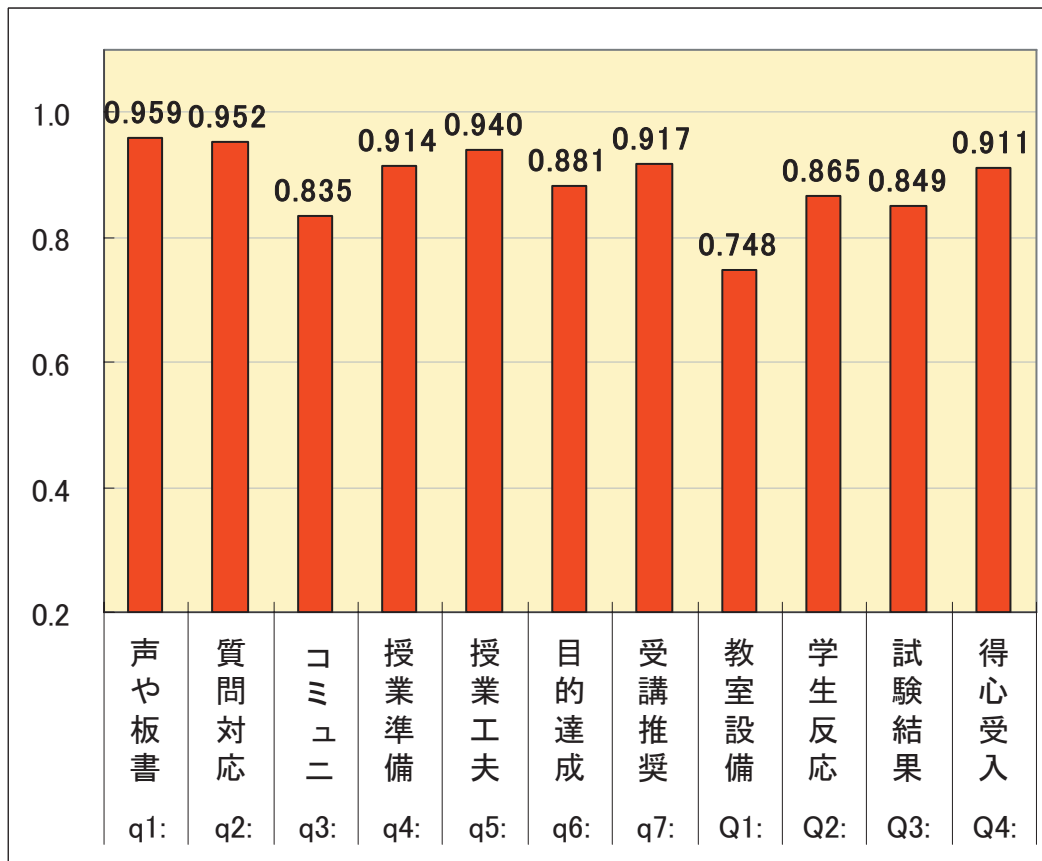


図2-5 質問項目ごとの平均値

[参考資料2] 教員自己点検の全回答に対し、表1-2と同様の方法で算出された結果（分野区分ごと、質問ごとの平均「数値」）を表2-3に記す。

表2-3 分野区分ごとの各質問の平均値（教員自己点検）

	基本①	基本②	基本③	q1	q2	q3	q4	q5	q6	q7	Q1	Q2	Q3	Q4
総合英語	1	0.961	1	0.973	0.98	0.93	0.91	0.988	0.895	0.918	0.789	0.918	0.891	0.949
外国語(英語以外)	0.975	0.881	0.969	0.981	0.969	0.913	0.925	0.963	0.881	0.919	0.781	0.925	0.881	0.95
健康・スポーツ	0.994	0.891	1	0.981	0.936	0.878	0.917	0.923	0.917	0.929	0.789	0.91	0.891	0.968
情報関連	1	1	1	0.875	0.875	0.792	0.958	0.875	0.833	1	0.667	0.917	0.792	0.875
人文系	0.977	0.914	0.93	0.914	0.906	0.75	0.898	0.922	0.79	0.875	0.625	0.797	0.711	0.863
社会系	1	0.972	0.75	0.944	0.958	0.653	0.944	0.931	0.917	0.875	0.778	0.819	0.764	0.806
自然系	0.992	0.958	0.975	0.942	0.925	0.692	0.883	0.883	0.842	0.908	0.725	0.758	0.817	0.836
総合科目	1	0.957	0.933	0.958	0.942	0.828	0.942	0.95	0.925	0.974	0.716	0.784	0.833	0.897
主題別ゼミ	1	0.98	1	0.96	0.99	0.83	0.89	0.91	0.88	0.9	0.75	0.9	0.93	0.92

第Ⅲ部 教員の「期待クラス満足度」と学生の「クラス満足度」との関係

授業アンケートの対象科目 340 科目中、学生アンケートと教員自己点検の両方ともが実施された科目は 284 科目であった (83.5%)。1 科目を 1 サンプルとしたときの、教員の「期待クラス満足度」と学生の「クラス満足度」との関係散布図を図 3-1 に示す。また、分野区分ごとの散布図を図 3-2 以降に示す。なお、作図にあたっては相異なる複数のサンプルが同一の点を共有することに起因する重複を避け、点の密度をより視覚的に表現するため、適度に小さな乱数による揺らぎを与えた。

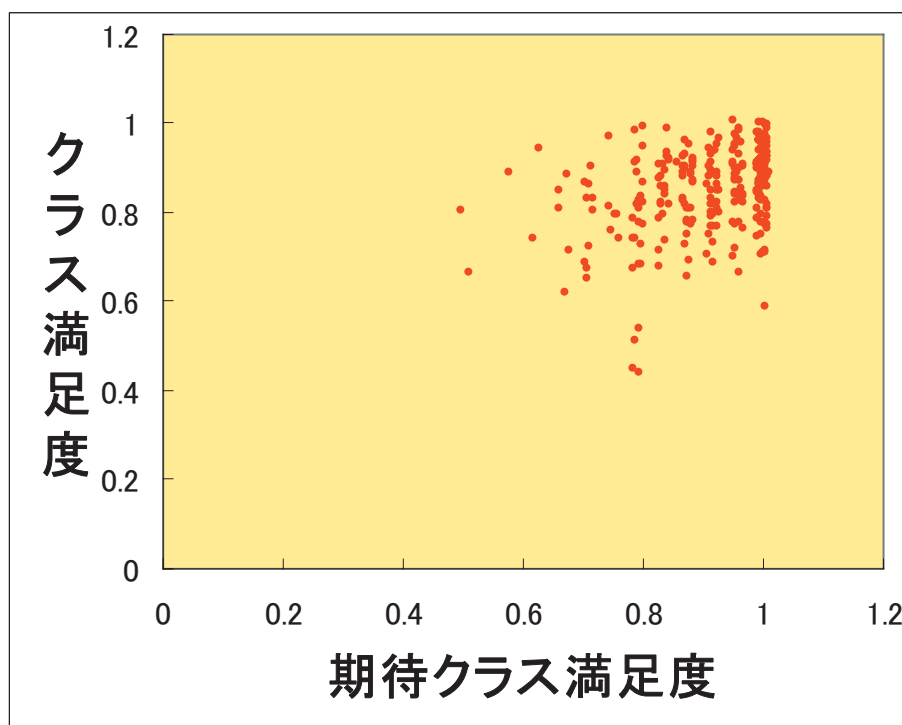


図 3-1 教員の「期待クラス満足度」と学生の「クラス満足度」との相関（全科目）

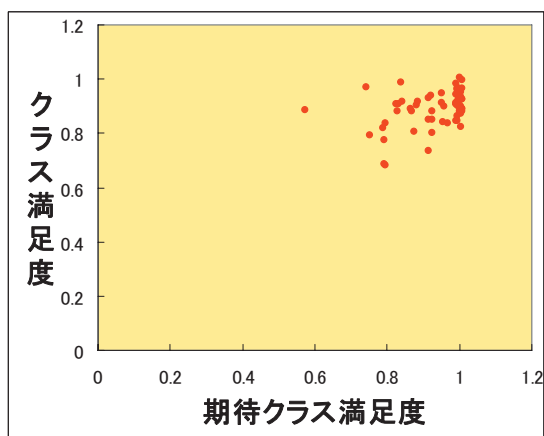


図 3-2 総合英語

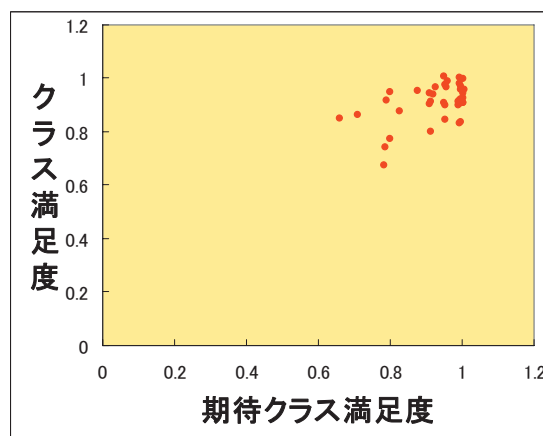


図 3-3 外国語（英語以外）

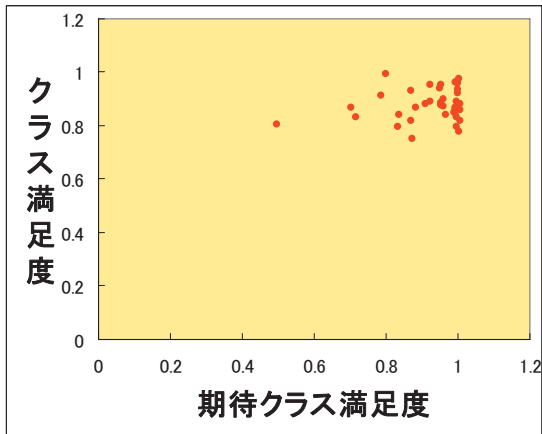


図3-4 健康・スポーツ

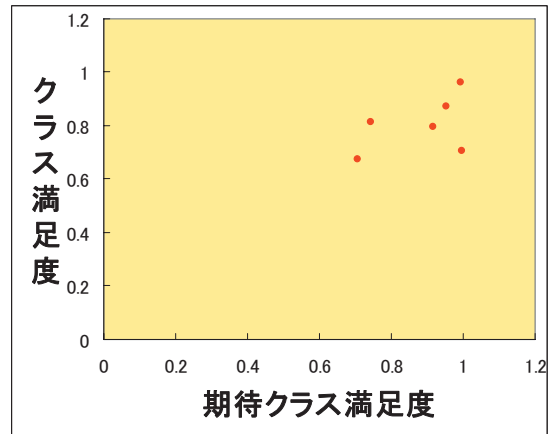


図3-5 情報関連

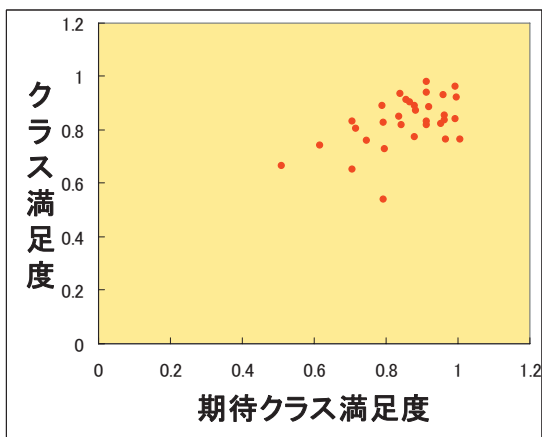


図3-6 人文系

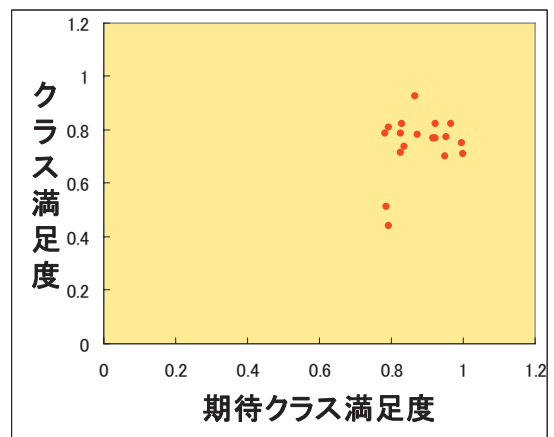


図3-7 社会系

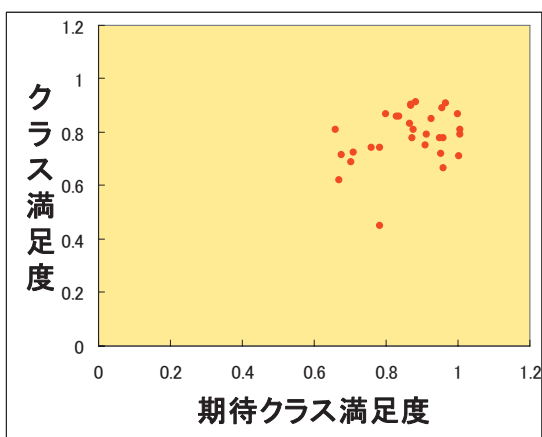


図3-8 自然系

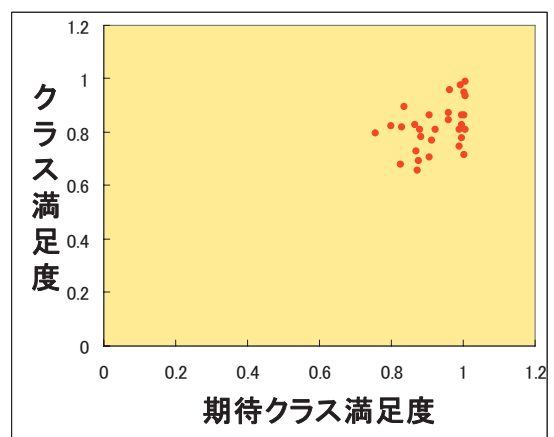


図3-9 総合科目

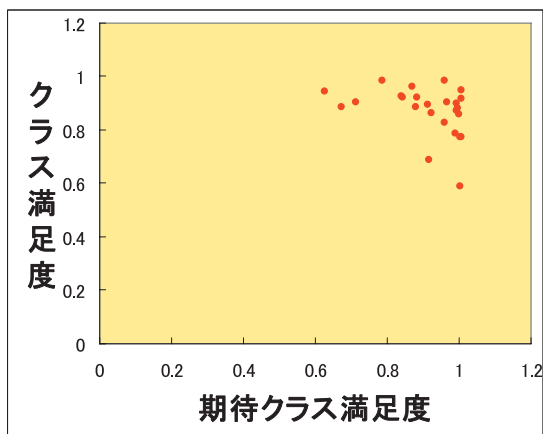


図3-10 主題別ゼミ

[参考資料3] 学生アンケートにおける固有質問を以下に示す。分野区分ごとに異なる質問項目が定められている（第I部参照のこと）。

1) 総合英語

Q10 この授業の難易度は自分にあっていましたか？

(1:大変難しかった 2:少し難しかった 3:適切であった 4:少し易しかった 5:大変易しかった)

Q11 この授業に使用した教材は学習目標、興味・関心、難易度の点で適切でしたか？

(1:はい ← → 5:いいえ の5択)

Q12 この授業で行った活動は英語の運用能力を伸ばすのに有効でしたか？

(1:はい ← → 5:いいえ の5択)

Q13 左の質問項目について、補足があれば具体的に記述してください。(自由記述)

2) 外国語（英語以外）

Q10 この授業で読む・聞く・書く・話すのバランスは、あなたにとって適切でしたか？

(1:はい ← → 5:いいえ の5択)

Q11 この授業の受講者の数は、あなたにとって適切だと思えましたか？

(1:はい ← → 5:いいえ の5択)

Q12 この授業の教科書は、あなたにとって使いやすかったですか？

(1:はい ← → 5:いいえ の5択)

Q13 この授業で、配布資料、板書など、よかった点、悪かった点について、自由に記述してください。(自由記述)

3) 健康・スポーツ

Q10 この授業で使用した施設や用具は満足のゆくものでしたか？

(1:はい ← → 5:いいえ の5択)

Q11 この授業で指定された教科書は十分役にたちましたか？

(1:はい ← → 5:いいえ の5択)

Q12 受講生同士のコミュニケーション、とりわけ言葉以外の心や身体(運動)のコミュニケーションは十分とれましたか？

(1:はい ← → 5:いいえ の5択)

Q13 今後のより良い授業のために、この授業のよかった点、改善すべき点を具体的に書いてください。(自由記述)

4) 情報関連

Q10 Q1～Q9 及び教室や設備を含め、本授業の良かった点や、悪かった点はなんですか。(自由記述)

5) 自然系

Q10 授業のやり方や内容について、どのような点で問題がありましたか？

(1:話し方や声の大きさ 2:板書の仕方 3:特にない) (※複数選択可能)

Q11 授業の難しさはどの程度でしたか？

(1:難しかった 2:普通 3:やさしかった)

Q12 この授業について何かあれば書いてください。(自由記述)

6) 総合科目

Q10 この授業は総合科目として相応しいものだと思いますか？

(1:はい 2:いいえ 3:わからない)

Q11 この授業についての感想を、例をあげるなどして具体的に書いてください。(自由記述)

7) 人文系・社会系・主題別ゼミ

Q10 この授業に関する要望や感想などを自由に記述してください。(自由記述)

以上

教養科目推奨授業選定の経過及び結果

平成 22 年度推奨授業表彰式を挙

茨城大学大学教育センターでは授業の改善及び教育力の向上を目的として推奨授業の選定を行っています。この推奨授業表彰制度は 2001 年度に制定され、年度終了毎に教養科目の中から優れた取組みをし、成果を上げた授業を選定しています。選定の対象となるのは、専任教員が担当する正課授業です。「推奨授業推薦書」、「学生による授業評価」、「当該授業の成績評価」、「シラバス」などを基に人文、社会、自然、外国語（英語、未修外国語）、健康・スポーツ、情報科目の各代表者を中心にして教育上の努力や工夫、優れた教育技術や到達度などの観点から評価が行われます。

平成 22 年度の授業からは 3 件の授業、藤縄明彦先生（理学部）「水惑星の地球科学」、藤原智栄美先生（留学生センター）「異文化理解」、永井典子（人文学部）「学術用英語」が選ばれました。平成 23 年 6 月 7 日午後 2 時より、これら 3 人の先生方に対して表彰式が執り行われ、池田幸雄学長より表彰状が授与されました。表彰式終了後 3 人の受賞者を囲んでそれぞれの先生方の教養科目授業にかける意気込み、工夫、学生の反応などを中心に話を伺いました。

（文責：大学教育センター、佐藤和夫）



ニュースレター「ローザ・プルムラ」の軌跡



茨城大学へようこそ

大学教育センター長 佐藤 和夫



一年生の皆さん、ようこそ茨城大学へ。皆さんは大学教育4年間のスタートを切りました。ゴールを目指して一直線の人もいれば、ゴールがよく見えてない人もいるかもしれません。「迷うは人の常」、当然のことです。ですから大学には案内人がいます。まず入学者全員、そして学部や学科ごとのガイダンスがあり、これから学ぶべき道筋、つまりカリキュラムを始め、学内施設の利用の仕方、生活上気をつけるべきことなどさまざまな案内をしてくれます。よくわからないことがあったら、遠慮なく尋ねてください。尋ねることは学生生活の重要な一歩です。

一年生はまず教養科目を中心に勉強を始めます。教養科目は幅広く人文・社会・自然について学び、外国語や健康・スポーツの習得をし、加えて分野を横断して総合的な視野をも獲得しようとする欲張った入り口であり、たくさんのメニューが用意される贅沢なコースでもあります。食べ過ぎると消化不良になります。ガイドのアドバイスに従って適量をお摂りください。

「知らぬが仏」で、知らない幸せということもあります。しかし皆さんは知識や知恵を得る道を選んだのです。「不愉快な真実」にも触れなくてはなりません。もっとも知ってうれしいことの方がはるかに多いはず。しっかりと教養のコースを味わったら、さらに水戸、日立、阿見で専門のコースに進んで深く学んでください。

そしてもう一つ。優れた教育実践（GP）として文部科学省に選定された「就業力育成支援」のプログラムが今年度から始まります。これは卒業して社会に出てからの力をさらに伸ばそうとするものです。皆さんの成長とともにプログラムも充実していきます。どうぞご活用を。

この大学で学んだことが後の皆さんにとって良い思い出になりますように。私たち教職員はそのお手伝いをします。ではしっかり学び、元気に遊んでください。

追記：今回の大地震で被災された方々には心から御同情とお見舞いを申し上げます。本年度のカリキュラムは履修案内どおりには実施できないと思われれます。掲示等で通知しますので、見落としのないようお願いいたします。

（前・大学教育センター長 森野 浩）

ローザ・プルムラ 第42号

（平成23年度4月発行）

目次

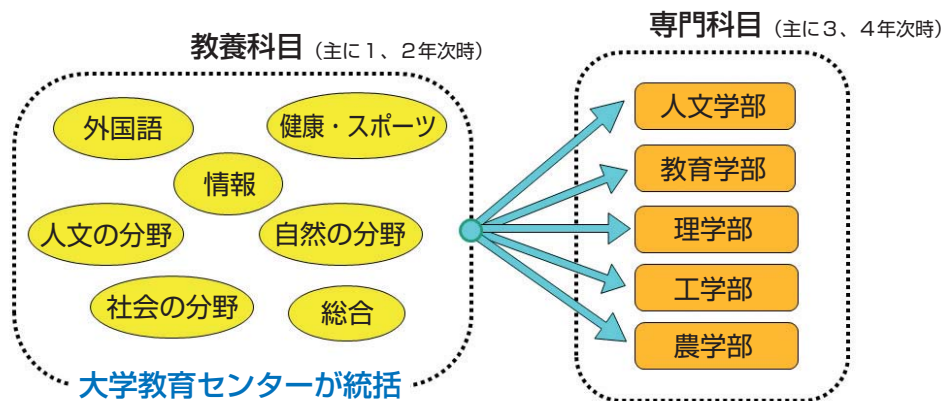
巻頭言 茨城大学へようこそ.....	1
大学教育センター紹介 ・大学教育センターってどんなところ？...	2
・大学教育センター専任教員紹介	
・総合英語	
・理系基礎教育	
・根力（ねぢから）育成プログラム	
水戸キャンパス便利帖.....	6
お知らせ・学生の声.....	8

大学教育センター紹介

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます！これから2年間、みなさんが学ぶのは、主に「教養教育」に関する科目です。茨城大学の教養教育は、大学教育センターというところが主体となって運営しています。今号のローザ・ブルムラでは、これからみなさんとの関係が深くなる大学教育センターについて紹介します。

大学教育センターってどんなところ？

大学教育センターの大きな役割のひとつは、教養教育の運営です。教養教育（教養科目）とは、みなさんが主に1年次、2年次で習得をめざす科目群であり、下の図のように、外国語（英語やドイツ語など）やスポーツ、情報など、全ての分野の基礎となるような内容が中心になっています。また、人文・社会・自然などの各分野の基礎習得をめざす授業が幅広く用意されており、後の専門教育（専門科目）への土台作りとなるように計画されています。



このように、教養教育の運営に責任を持つのが大学教育センターです。センター専属の専任教員もいて、主に教養科目を担当しています。もちろん、教養科目にはたくさんの授業がありますから、各学部にも所属するたくさんの先生方が教養教育の実施を支えています。茨城大学の教養教育は全学出動体制であり、それらを統括しているのが大学教育センターです。

茨城大学の教養教育の中で、大学教育センターが特に力を入れて展開しているのが

『総合英語』 と 『理系基礎教育』

です。このふたつは茨城大学の特色ある取り組みとしても知られています（後のページで、もう少し詳しく説明します）。

大学教育センターは他にも、茨城大学の教育に関して次のようなことを行っています。

- ★eラーニングの推進活動（茨城大学のeラーニングシステム RENANDI、ALCの運用・管理）
- ★授業改善のための活動

お知らせ

今年度は、前学期と後学期に教養科目（総合科目）『茨城大学の学問を楽しもう』の開講が予定されます。自然、環境、文化、歴史、健康など様々なテーマについて、学長や副学長、学部長らがそれぞれの専門的視点から講義します（授業は毎回担当者が変わるオムニバス方式です）。いろいろな学問の「入り口」が体感できると思います。どうぞお楽しみに！

大学教育センター専任教員紹介

大学教育センターには、現在6名の専任教員がいます。それぞれが各自の研究分野（専門）に関係する授業を担当しています。みなさんと授業でお会いすることもきっとあるでしょう。

それでは、専任教員からのごあいさつをどうぞ！（かっこ内は主な担当科目・分野です。）

上田 敦子 先生（総合英語 Level 1）

専門：外国語教授法

ひとこと：茨城大学に入学したみなさん、こんにちは！総合英語を担当している上田敦子です。語学は毎日触れて使って上達するもの！授業だけが勉強ではありません。なるべく毎日触れるようにしてくださいね！



有田由紀子 先生（総合英語 Level 2）

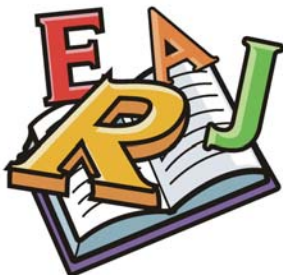
専門：英語学（語用論）、英語教育学（多読と語用論の相互作用）

ひとこと：新入生の皆さん、茨城大学へようこそ！総合英語の授業で使える英語を楽しく身につけていきましょう！皆さんと一緒に学ぶことを楽しみにしています！ Have a great time at Ibaraki University！

岡山 陽子 先生（総合英語 Level 4）

専門：外国語としての英語教育

ひとこと：総合英語レベル4では難しい英語を楽しく学ぶことを目指しています。課題も個人で行うものからグループで行うものまでいろいろあります。クラスの中で友達をたくさん作って、皆で協力しながら学んでいきましょう。



吉田 宏二 先生（物理）

専門：固体物性物理（磁性、超伝導）

ひとこと：公式の暗記に苦勞し、物理嫌いの人は多いでしょう。でも桁の多い計算を1つ1つ丸暗記する人はいません。基礎知識の修得こそが大事であり、物理学習にも当てはまります。するときと物理の楽しさが見えてくるでしょう。



梅原 守道 先生（数学）

専門：偏微分方程式（流体現象の数学解析）

ひとこと：新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます！大学で学ぶ数学は、一段と（？）近寄り難く感じてしまうかもしれません。1年生のうちが肝心だと思います。困ったら、あまりひとりで悩まずに『理系質問室』へgo！皆さんからの積極的な質問・相談をお待ちしています。



宇野美由紀 先生（情報）

専門：離散数学（離散幾何・応用暗号）

ひとこと：皆さんは自由な時間やお金が増えて活動範囲が格段に広がるでしょう。興味があることを気ままに試してもよいし、目標があればそれを極めてもいいでしょう。担当の情報処理概論の授業でお会いするかもしれませんね。楽しみにしています。



大学教育センターの取組① 総合英語

高校での英語基礎力をもとにさらにレベルアップした英語を学習できる「総合英語」を紹介します。入学時の英語力に応じてレベル1～3に分けられ、レベル3修了が卒業要件となっています。レベル3修了後はレベル4及びレベル5やEAP（学術英語）を選択できます。各レベルの特徴は次のとおりです。

レベル1 基本的な文法や語彙を、楽しく、多読多聴などの高校英語とは異なったアプローチで学びます。さらにシャドーイングコンテストでは、感情をこめネイティブのようなリズムでの英語を披露できるようになります。「英語は決して苦手科目ではない！」をモットーにしています。

レベル2 日常生活に関する話題について実践的な英語基礎力をつけていきます。教科書学習の他にプロジェクト的タスクを4回実施し、英語で調べ、エッセイを書き、発表するという経験を通し英語が使える楽しさを実感していきます。

レベル3 レベル3は、レベル4及びEAPへ繋げ、さらに学部で必要とされる英語力養成を目標としています。

日常的なあるいは社会的な話題に対して、2分間以上の会話を成立させられるコミュニケーション力に始まり、最終的な目標として、300ワードのエッセイの書き方を学び、3分間のプレゼンテーションを行える力を養います。National Geographicのauthenticな美しい映像を見ながら世界の英語を堪能することができます。

レベル4 社会問題に関して、「5分間の発表をすること」と「500語以上でレポートを書くこと」の2点を目標としています。Research Questionsを設定し、リサーチの仕方、文献引用方法も含め、エッセイの本格的な書き方を学びます。これにより、大学生として社会問題についても発信できる大きな英語力がつくこと間違いありません。

レベル5およびEAP レベル5では特に社会的な問題に対してディベートできるだけの英語力を培います。EAPはTOEICなどの英語検定試験に対応したクラスや各担当の先生方の専門的な英語を学べます。



14 番教室での授業の様子

全学生は学内学外どこからでも **ALC NetAcademy（アルクネットアカデミー）** を使ったeラーニングが可能です（アドレスは <https://alc.ibaraki.ac.jp/anet2/>）。図書館2階には多くの英語多読用本が用意されており豊富な学習ができます。以上のように、英語の得意な学生はさらなる英語の深遠さに触れ、苦手意識のある学生も「目からうろこ」のように英語の魅力を再発見することでしょう！

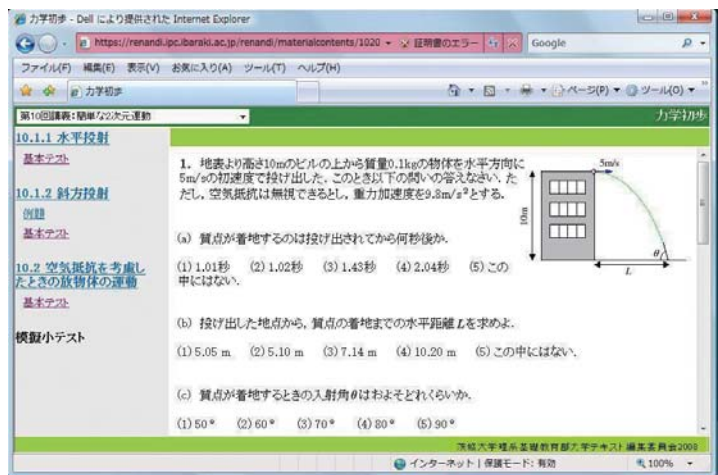
大学教育センターの取組② 理系基礎教育

数学などの理系科目では、基礎からの積み上げ型の学習が必要であり、段階ごとの確実な習得が求められます。また、異なる習得状況にある多様な学生に対して、それぞれに合ったやり方で意欲と自律性を引き出す必要があると考えられます。茨城大学では、これらのことに応える体系的で効果的な理系基礎教育プログラムを提案しています。このプログラムは現在おもに、工学部・農学部学生向けに数学（微分積分学）、物理（力学）で行っています。概要は以下の通りです。

☆高校レベルの内容が相当量習得できていない学生に対し、特別クラスを設け、週2回の授業を行います。授業の内容や方法も特別に工夫して、半期で通常のグループ（通常クラス）と同程度の学力になるようにします。

☆通常クラス（週1回の授業）では、学科によらないクラス編成を行って、複数クラス間で教科書や試験問題を統一します。教員間でも事前の打ち合わせを行っています。

☆茨城大学のeラーニングシステム **RENANDI**（レナンディ）を使って、授業や宿題等に積極的にeラーニングを取り入れています。反復練習によって基礎的な学力（計算力）を定着させることが狙いです。右の画面は、物理学（力学）の特別クラスで用いているeラーニング教材の一部です。物理が苦手なひともし楽しく感じちゃうかも…！



理系質問室 のススメ

大学教育センターでは、皆さんが理系科目でわからないところを質問したり、学習相談ができる環境を用意しています。その名も『理系質問室』。茨大生なら誰でも利用できます。ぜひ気軽に利用してください（詳細は掲示等で確認してください）。

大学教育センターの取組③ 根力（ねぢから）育成プログラム

茨城大学は、「大学・社会人生活を含むライフステージに不可欠な能力・素養」を『根力（ねぢから）』と定義し、その育成に力を入れます。「就職後に光る人材」の育成を目的として、従来の大学教育に加えて、就業して役立つ実学的な専門教育（単なる就職試験対策支援ではなく）を含むカリキュラムを提供します。この就業力育成支援カリキュラムを、「根力育成プログラム」と呼んでいます。

この取り組みは、2010年度の文部科学省「大学生の就業力育成支援事業」GP（グッドプラクティス）に採択されました。下の表のように、学年が進むにつれてより本格的・実践的なプログラムが用意されています。まだスタートしたばかりの取り組みですが、これからどんどんと中身を充実させていきますので、積極的に活用してください！（学部によって履修の形態などは異なりますので、詳しくはガイダンス等で確認してください）

各期の全学目標		根力(ねぢから)育成プログラム			電子ポートフォリオにより、 更には地理的に分散している 部局間でも共有
第一段階 学生の自発的学びを後押しし、 社会で活躍するための基盤となる 能力＝根力を育成するための 土台を築く フレッシュマンセミナー： 高校生から大学生へ キャリアアップ科目群： 自らの方向性を確認して 次の段階へ	根力養成プログラム				
	1年	必修	4	フレッシュマンゼミナール	
	2年前期	選択 必修	2	キャリアアップ科目群	
第二段階 根力強化プログラム： 座学と実地体験を通じて社会 人として要求される能力を理 解・養成する スキル養成プログラム： 個々の分野で直接求められる 基礎的スキルを養成し、「資格」 としてオーソライズする準備を整 える	根力強化プログラム		スキル養成プログラム (教育課程外)		
	2年後期 ～ 3年前期	選択	4	「社会人・卒業生による講義を聞く」「社会人・卒業生と話す」「企画・プレゼン・コンペを自ら行う」「イベントを運営する」「インターンシップを行う」等 「情報系」「語学系」「公務員系」等、予想される学生のニーズに合わせて提供	
第三段階 実際の活動を通じて、これまで 培ってきた力を確認し、不足点 を自覚して、自らを高めて行く	根力実践プログラム				
	3年後期 ～ 4年	選択	2	「就職センター主催の各種就職イベント参加と事前準備・事後レポート」「実践・SAとしてのリーダーシップ」「同窓会／地域との連携企画(入学式・新入生ガイダンス・新歓祭・OC・茨苑祭・卒業式等を活用)」等	

水戸キャンパス便利帖

2011.4

3 IT基盤センター

理学部 S棟 の1~2Fにセンターの施設があります。
 1F:マルチメディア第1教室(MM1)、
 2F:マルチメディア第2教室(MM2)、端末室、サイバーメ
 ディア演習室、事務室など。

事務室:平日 8:30~18:00

2 共通教育棟2号館

多くの教養科目の講義が行われます。

1F 共通10~15番教室
 (14番はCALL教室)

2F 21~27番教室

3F 30~37番教室

4F 41~47番教室

授業時間

第1講時 08:50~10:20

第2講時 10:30~12:00

第3講時 13:00~14:30

第4講時 14:40~16:10

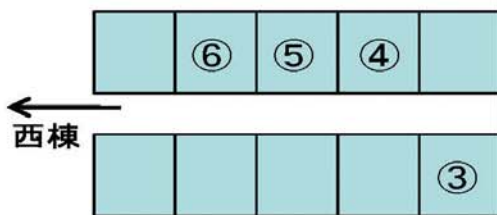
第5講時 16:20~17:50



1 共通教育棟1号館

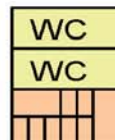
大学教育センターや学生センター(学務部)、講義室などがあります。

東棟 1F



⑦学生生活課

⑧学生就職支援センター



ライトコート

玄関ホール

⑨

②学生情報室

①教養教育係
学務調査係、他

英語多読室 (西棟2F第5講義室)

講義室・自習室

東棟3F 第1~4講義室

西棟2F 第5・6講義室、200A演習室

西棟3F 300A教室、学生自習室(無線LAN)

留学交流課(東棟2F)

留学支援・奨学金・留学情報・国際交流館に
 関する窓口

⑤理系質問室(予定)

理系科目に関する質問を受け付けてい
 ます。平日12:00~13:00

時間と場所が変更になるかもしれませ
 ん。詳細は掲示等で確認してください。


⑨自動証明書発行機


学割・成績証明書など即時交付



4 茨苑会館 
1階に談話室及びレストラン&ベーカリーが設置されています。
レストラン&ベーカリー「SHIEN」

5 保健管理センター
定期健康診断や健康に関わる各種相談、応急処置等の業務を行います。近隣の病院マップももらえます。
平日 8:30~17:15

6 図書館 
蔵書は10万冊、共同学習室を備え、夜遅くまで利用可能
休日でも開館しています！
・授業のある期間 平日8:30~21:45 土日11:00~19:00
・休業期間 平日8:30~17:00 土日閉館
※ 詳しくは図書館ウェブ等にあるカレンダーも見てください。

7 福祉センター(生協) 
茨城大学生生活協同組合が次の事業を行っています。
(1F) 食堂、コンビニ、サービスショップ
(2F) グリル・カフェ、書籍部、理容室

パソコン室案内

①教養教育係(学務課)

教養科目の履修に関する窓口
各種証明書・学割発行に関する窓口(1年次生)

②学生情報室

インターネットに接続可能なコンピュータが設置されています。他にも学内でコンピュータが設置されている教室がたくさんあります。(右参照)

③非常勤講師控え室

非常勤の先生方の控え室です。

④履修相談室(学務課)

履修に関する質問や相談を受けています。(利用の際は教養教育係まで)

⑥なんでも相談室(学生生活課)

いろいろな困りごとや悩みごとについて自主的な解決を援助するため、学生相談体制を設けています。

⑦学生生活課

課外活動・奨学援助・学生寮・授業免除等に関する窓口

⑧学生就職支援センター

各種就職説明会を開催したり、就職相談も行っています。また求人票の開示やインターネットによる求人情報の検索ができるようになっています。

- ①** 総合科学棟S棟 1F
マルチメディア教室1(MM1) 80台
平日 08:50~18:00 で授業のないとき
- ②** 総合科学棟S棟 2F
マルチメディア教室2 75台
平日 08:50~18:00 で授業のないとき
- ③** 総合科学棟S棟 2F
センター端末室 30台
平日 08:50~18:00 で授業のないとき
- ④** 理学部B棟 1F
英語学習室 60台
平日 08:30~17:30 で授業のないとき
- ⑤** 総合研究棟K棟 1F
情報スペース 12台
平日 08:50-18:00
- ⑥** 理学部C棟 1F*
学生自習室 33台
平日 08:30-17:30
- ⑦** 共通教育棟2号館 1F
CALL教室 62台
月~木 13:00-17:50 (ヘッドホン有)
- ⑧** 共通教育棟 1号館1F
学生情報室 26台
平日 08:30-18:30
- ⑨** 図書館 2F*
図書館 48台
図書館の開館時間中に開放

* 持込ノートパソコンによる無線LAN接続も可能
他にも、各学部が開放しているPC室もあります
休業期間中等は開放時間が変わります。

学生の声

先輩より、新入生へ

工学部情報工学科
3年 升本 つぐみ

教育学部社会選修
3年 小川 政幸

私の2年間の大学生活にアドバイスできるような誇れるものは一つもありません。その分後悔なら、たくさんあります。

私の後悔を教訓に、皆さんには実りある大学生活を送っていただきたい。

特に、まだ将来の展望がないという我が同志に。まずは何か始めてください。

それもできるだけたくさんのこと。

勉強や資格取得なんて堅いものじゃなくてもいい。

バイトやサークル、なんでもいい。人と関わることであればなおいい。

飲みすぎるくらいがいい。恋もたくさんすればいい。

記憶と出席回数と口座の残高だけあればなんだったっていい。

バカやるくらいがいい。失敗談もいつかはネタになる。

やってみてつまらなければやめてしまえばいい。また新しいことを始めればいい。

自分の為になりそうなことは辛くてももう少し続けてみる。

直接やりたいことにつながらないようなことだったっていい。

それでやりたいことが見つければ儲けだと思えばいい。

経験はマイナスにはなりません。

有り余る「暇」に溺れず、毎日を有効に使ってください。

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。今回は、皆さんがこれから受講する主体となる教養教育系の話を交えてお話させていただきたいと思います。

教養教育は、語学や人文、自然などといった科目に分けられ、「自らが選んだ授業」を受講することができます。その時に考えることは「どの授業を受講すればいいの?」ということだと思っています。

「面白い授業がいいなあ」「単位は落とさたくないなあ」と様々な選ぶ基準があると思います。そんな中でも、教養教育を受講した時に私が感じたことで、授業を選ぶ際に大切なことは自らの「興味・関心」です。

たしかに単位を落とせば卒業などに支障をきたします。しかし、単位を落とす大きな理由として「欠席の多さ」や「勉強の不足」が挙げられます。いくら単位がとりやすいと言われる授業でも、大学では自ら学び取るという意志が大切です。「興味・関心」を持ちにくい授業でそのような意志を貫くことは容易ではありません。

シラバスをよく読み、自分が受けたい、受けてみたいと感じる授業を見つけ受講していただきたいと思います。

編集後記

■今回の震災により不運にも亡くなられた方のご遺族に心よりお悔み申し上げます。合掌。(編集委員一同)



「熟慮する力」を

茨城大学理事・副学長(教育担当) 田代尚弘

かつて、ショウペンハウアー (1788-1860) というドイツの哲学者がいました。学生の皆さんには、なじみのない名前かも知れませんが、彼は『読書について』という本の中で、次のような内容のことを書いています。〈食物は食べるだけで栄養になるのではなく、消化されて栄養となる。同じように、読書が本当に自分の栄養になるには、熟慮が必要だ〉。これは「読書」の大切さを説くための「類比 (アナロジー)」です。

ショウペンハウアーの思想自体はかなり難解ですが、この「アナロジー」は、とてもわかりやすいものです。この「アナロジー」は、いろいろな文脈で一般化したり、解釈したりできますが、ここでは「熟慮」という点に焦点を合わせてみましょう。「熟慮」とは文字どおり、「ある事柄について真剣に、十分に考えること」ですが、その目的は「ある何らかの真実や深層」を「読み解き、その上で何らかの判断・決定を下す」ことにあります。読書の形と目的はさまざまですが、すくなくともその目的の一つは、自分自身や社会、また自然界の「真実や深層」を読み解き、そうして自分の考えや行動に何らかの方向性を与えることにあるでしょう。それはわたしたちが「食物」をよく噛み砕いて消化し、そうして栄養を摂取し、その栄養を何らかの目的のために使う行為と似ているかも知れません。

わたしたちは、今日、情報の量と速さ、効率性、視角の優位などに圧倒され、上述のような意味で、物事を「熟慮」して「判断・決定」する余裕をもてないような状況に置かれているように思われます。しかし、「熟慮」するという姿勢や行為は、いわば川の流れの表面ではなく、川の流れを作り出す川底を洞察し、流れの危険性を察知する「力」でもあります。社会や自然の諸現象についても、その現象を作り出している「底」を「熟慮」することがなければ、わたしたちの生活する社会や自然の「真実や深層」を「読み解き」、社会の方向性やその危険性、自然の脅威などを察知することは難しいのではないのでしょうか。

学生の皆さんには、時代の表層的な流れに流されることなく、大学でのさまざまな「学び」をとおして「熟慮する力」を培って頂ければと思います。



ローザ・プルムラ 第43号

(平成23年度10月発行)

目次

巻頭言 「熟慮する力」を (副学長 田代尚弘).....	1
大学教育センターより.....	2
特集① 平成22年度推奨授業表彰.....	3
特集② 就業力GPI「根力(ねぢから)育成プログラム」.....	6
学生の声・編集後記.....	8

大学教育センターより

見つめなおしてみよう

大学教育センター副センター長(企画実施部長) 戸嶋 浩 明



平成23年度から大学教育センターの副センター長として、皆さんの受ける教養教育に関するお手伝いをするようになりました。私の所属は阿見にある農学部ですので、週に数回は水戸の大学教育センターに通っています。この春から新しい勤務体制になって私もようやく落ち着いてきたかなという状況です。

さて、1年生の皆さんも前学期、夏休みを経て大学生活にそろそろ慣れたころだと思います。特にこの春は3月11日の東北地方太平洋沖地震による東日本大震災、原発事故(その後の政治の混迷等々)、私たち日本人が忘れてはならない事象が発生した混乱の最中での変則的な学務日程での入学となり、皆さんにとっても教職員にとっても記憶に残らざるを得ないスタートとなりました。皆さんの多くは高校生(またはそれぞれの異なる経歴)から大学生へと、私は農学部だけの職務から大学教育センターも兼務するという新しい環境に置かれたわけです。そのような節目のときに過去を見つめ直して、見つめ直した解答を活かして現在から未来に向かってどう対処していくか考えてみましょう。個人で考えるのもよし、語り合える友人をたくさんつくって議論するもよし、授業で興味を持った先生方と話してみるのもよしでしょう。大学生に求められる一番重要なことは、これまでどちらかという受動的であった学び方を能動的に変えていくこと、そこに気づいて実践していくことだと思います。皆さんの学ぶ教養教育を見つめ直して上手く利用していきましょう。

3月11日の巨大地震は自然現象であり避けようがなかったわけですが、その後の国難と言える惨状は回避できた部分も相当にあることでしょう。復興に向けて日本社会全体でも様々なことを見つめ直すべき時期に我々はいまいます。教養教育は個人レベルでは生涯におよぶ自己形成の基礎として何を学ぶか、社会レベルでは複雑化し多様化する現代社会を分析して将来の職業観を身に着けるための基礎と今後につなげる何を学ぶか、そして国難を解決するために何を総合的に学んでおけばよいのか、その答えが教養教育のなかにちりばめられていると思います。どうか能動的に見つめ直して、価値あるよき大学生活を送ってください。

『理系質問室』からのお知らせ



授業や自習でわからないことはありませんか？理系質問室では、理系科目についての質問を大学教育センターの専任教員と指導員が受けています。質問内容は理系科目であれば何でもOK。「この科目をもう少し深く勉強したい」、「勉強の仕方がわからない」などの相談でもかまいません。気軽に、そして大いに利用して下さい。

場 所 共通教育棟1号館1階130室
開室時間 月曜から金曜まで 11:30～13:00

(※開室曜日と時間帯は変更になる場合があります。掲示等で確認をお願いします。)

特集①

平成22年度推奨授業表彰

推奨授業表彰制度は、年度終了ごとに教養科目の中から推奨授業を選定し、担当教員を表彰することによって授業の質的向上を図ることを目的として、2001年度に制定されました。

推奨授業の対象は、専任教員が担当するすべての正課授業であり、「推奨授業推薦書」、「学生による授業評価」、「当該授業の成績評価」、「シラバス」など教育上の努力や工夫、優秀な教育技術等を総合的に評価し選定されます。

平成22年度推奨授業には、次の3つの授業が選定されました。

●「水惑星の地球科学」(分野別教養科目【自然系】/身近な地球科学)

理学部 藤縄 明彦 先生

授業概要：地球は多量の液体の水を有し、多様な生命を宿している、唯一の惑星である。この水の存在は、地球表層や気圏ばかりでなく、固体地球（地球の内部）の営みの中にも、大きな影響を与え続けている。一見、水とは関係のないことのように思われる地学現象にも、水は大切な役割を果たしている、ということ、この授業を通じて学んでいこう。

●「異文化理解」(総合科目/人間・文化系科目)

留学生センター 藤原 智栄美 先生

授業概要：このクラスでは、異なる文化の人たちを理解するための基本的な考え方、また異文化理解の際に役に立つ概念を学んでいきます。また、日本、そして世界における様々な問題・トピックに関して日本人と留学生が討論することで、互いの文化、世界、そして日本の中に存在する様々な異文化に関わる問題に対する理解を深めます。

●「学術用英語」(外国語科目/総合英語(学術))

人文学部 永井 典子 先生

授業概要：この授業では、パワーポイントを使用してプレゼンテーションが効果的に行えることを最終目標とします。そのために、情報を英語で検索し、必要な情報を取捨選択し、英語でまとめ、発表用の原稿を作成し、効果的に口頭発表ができるようになるためのプロセスと技能を学びます。

*授業概要は平成22年度教養科目シラバスより抜粋



池田学長を中央に、左が藤縄先生、右が藤原先生
平成22年度推奨授業の表彰式



池田学長を中央に、左が永井先生、右に藤原先生
平成22年度推奨授業の表彰式 (H23. 6. 7 学長室において)

平成22年度推奨授業紹介

今回表彰された平成22年度の推奨授業を紹介します。3人の先生方が授業に注がれている熱い情熱を感じてください。学生のみなさんへのメッセージも必見です。

藤縄 明彦 先生 「水惑星の地球科学」

公開授業の参観感想文

藤縄先生の講義は対話重視型です。とは言え、「さあ質問をどうぞ」と促されても、通常学生は互いに譲りあって、下や横を向いてしまいます。そこで先生は理解内容のチェックとともに質問をカードに書かせる手法をとっています。質問に対する先生の回答はまるでご褒美のようです。パワーポイントを用い、文字、静止画像、動画、さらには実物見本(私が参観した講義ではさまざまな火成岩でした)をフル動員して直感的把握も助けてくれれば、想像力もかき立ててくれます。これは本人のためのみならず、クラス全員への恩恵にもなるありがたい「賞品」です。



講義の後で「学生の質問に丁寧に答えて、内容の把握・深化を確実なものとする一方で、シラバスにも配慮して授業も進めていってほしいですね」と申し上げたところ、

「ルーチンワークなら、準備も楽ですが、教員の存在価値は「対人説法」をすることです。一方通行ではなしえない付加価値をつけていくことで、「サポーター」を増やしていくことが経営戦略としては正しいのではないのでしょうか。すぐに効果が見える訳でも、専門とする学生が増える訳でもありません。手間暇がかかる割に、効率は悪いです。

シラバスにも意味はありますが、自分にとっては「学生の反応」こそが宝物です。人と人との息づかいを感じることのできるコミュニケーションが授業の基本だと思っていますので、話の間とか観客との呼吸とかの点で、落語も非常に参考になります。芸に完璧がないのと同じで、我々の授業にも、常に改善すべき所があります。学生さん達の応援を糧に取り組み続けたいと思います。」

と丁寧にご回答いただきました。質問のしがいのあることがよくわかりいただけると思います。

佐藤 和夫 (大学教育センター長)

藤原 智栄美 先生 「異文化理解」

公開授業の参観感想文

参観日の授業は、通常の講義形式ではなく、「世界の仕組みを理解する～貿易ゲーム～」というグループ活動でした。100人近くの学生が、先生から説明された課題を、グループ全員で協力して問題解決に当たっている姿が非常に新鮮でした。貿易ゲームは、グループでどれだけお金を儲けるかという単純なものですが、グループの設定が同一ではなく(先進国、発展途上国、後発発展途上国と3つに分けられている)、それぞれ異なった状況の中から自分たちが戦略を立て行動し、その結果が金額としてはっきり表れます。課題の説明、役割分担、時間の設定など、先生と学生との連携が良く、準備された環境の中で活動が行われていました。また藤原先生の的確なアドバイスや様々な情報(価格の変動、スパイの出現)などがタイミングよく提供され、活動が停滞しないようにうまくコントロールされていました。この授業形態が、PBL (Problem Based Learning) 学習の1つであると後で分

かったのですが、初めてこのような授業を見ることができ、今後の授業展開のヒントを多く得ることができ、非常に有益な授業参観になりました。

勝本 真 (大学教育センター副センター長)

藤原先生からのコメント



このクラスでは、普段なかなか学内でコミュニケーションの機会のない留学生と日本人学生が、ディスカッションや上記の「貿易ゲーム」のような参加型タスクを通して互いを知り合い、自身の見方について発見する様々な活動を行っています。異文化というと「国」と「国」の違いを考えがちですが、実はそれは文化を分ける一つの境界でしかなく、それにとらわれすぎると、ステレオタイプという画一的な見方で世界を捉えてしまうことになります。近年、その境を越えて人の移動が盛んになることで、日本、そして世界の文化が多面的になっています。茨城大学の皆さんには、そうした文化的な多様性を知る面白さを、学内にいる留学生との対話や留学等を通して、感じてほしいと思います。

永井 典子 先生 「学術用英語」

永井先生へのインタビュー

最初に、推奨授業表彰のご感想をお願いいたします。

びっくりしました。この授業は課題が多く、学生にとってはとても大変な授業だったので、学生は、後々良かった、と思うことはあるかもしれないけれど、授業終盤で満足度が高いとはあまり思っていませんでした。驚いたのが正直な気持ちです。でも、表彰されて大変感謝しております。

学生の満足度が高かった、というのは、授業に様々な工夫がされていたからだと思うのですが、どのような点が学生にとって良かったと思われますか。

この授業は、英語での発表のスキル向上に特化した授業だったのですが、そのためには、発表そのものに関するスキルだけではなく、準備段階で英語の資料を読み、必要な点を探し、まとめることも大事なスキルとなってきます。また、クラスメートの発表を聴き、評価もします。ですから、読む、聞く、話す、書く、という4技能すべてがトレーニングされることになったと思います。また、発表を4回行ったので、最終発表では、教員である私自身が感心するほど、全員が上手になりました。おそらく自分自身でも進歩を感じたのではないかと思います。評価も「発表」で行いましたので、学生にとっては目標が分かりやすく、どのように課題に取り組めば良いのか明確だったとも言えると思います。



学生が全員上手になった、というのは素晴らしいですね。では、学生たちへのメッセージをいただけますか。

最初の頃はあまりやる気がなかったような学生も、発表の回を重ねるごとに乗ってきて一生懸命課題に取り組んでいました。本当にどの学生にも無限の力があると思います。やればやるだけ伸びるすばらしい潜在能力を秘めています。私の課題は、その力をいかに伸ばすか、ということです。茨城大学の学生は素直で真面目なので、そのまま伸びていってくれれば、と願っています。

本日はどうもありがとうございました。

聞き手：岡山陽子 (大学教育センター専任教員)
2011年7月19日

特集② 就業力GP『根力(ねぢから)育成プログラム』

茨城大学は、平成22年、文部科学省の「大学生の就業力育成支援事業 GP」に採択され、大学生の就業力を育成する取り組みを5年計画で進めています。この特集では、茨城大学の就業力育成支援事業の中心である『根力(ねぢから)育成プログラム』について紹介します。

「GP」とは？

文部科学省が大学教育改革を促進するために、大学等が実施する教育改革の取組の中から優れた取組（Good Practice 略称「GP」）を選んで支援し、かつ広く社会に情報提供を行うことにより、他の大学等における教育改革の参考とすることを目的とした事業です。

…要するに、「他大学の模範となる優秀な取り組みの支援事業」です。

「就業力」とは？

「就業力」は単なる「就職力」ではありません。「就職試験を突破する力」を含むことは勿論ですが、就職後に社会人として活躍して行くために必要な知識・技能・課題解決能力から職業観・人生観まで、より広く・深い「力」の総称です。



就職力 就業力

「就業力育成支援事業GP」とは？

「新卒学生の就職率の向上、学生の資質能力に対する社会からの要請や、卒業後の職業生活などへの移行支援の必要性等の高まりを踏まえ、就業力の育成に主眼を置いて、全学的に教育改革を行おうとする大学に、国として緊急かつ強力な支援を行うこと」を目的としています。採択された大学に対しては、平成22年度から5年間にわたり、支援が行われます。

GP採択以前の茨城大学の取組は？

茨城大学では、今回のGP採択以前から、学生就職支援センターを中心にさまざまなレベルで多様な支援活動を展開してきました。その姿勢は、日本経済新聞社の『日経キャリア 親と子のかしこい大学選び2010』で「北関東・甲信越地域で最も就職支援に熱心な大学」に選ばれるなど、高く評価されてきました。

茨城大学の取り組みの特徴は？

1:「根力(ねぢから)」の定義…「茨大生にとっての<就業力>とは何か？」を追求し、「根力(ねぢから)」という名称で明確に定義しました。「根力」は、次の5つの要素から構成されます。

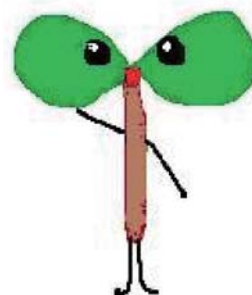
- ①基礎的素養 ②社会生活力 ③行動力 ④思考力 ⑤チームワーキング能力

1. 基礎的素養 *この素養の上に「根力」を構築していく	読	み	文章読解能力、論理的思考力、分析力
	書	き	文章作成能力、論理的思考力、分析力
	ソ	ロ	基本的なIT能力
	話	す	説明能力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力
2. 社会生活力	生	活	自立した生活を実践できる力
	人	間	生活を送る上で必要な、人間関係を円滑するための力
3. 行動力	情	報	生活を送る上で必要な、情報がどこにあり、どのようにすれば入手できるかを把握する力
	主	体	物事に進んで取り組む力
	働	き	他人に働きかけ巻き込む力
	実	行	目的を設定し確実に行動する力
4. 思考力	対	応	物事に流されず、疑問に思い主体的に対応する力
	課	題	現状を分析し目的や課題を明らかにする力
	計	画	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
5. チームワーキング能力	想	像	課題が抱える影響、課題解決方法の影響など、状況をイメージする力
	課	題	課題の本質を捉え、適切な解決方法を提示する力
	発	信	自分の意見をわかりやすく伝える力
	傾	聴	相手の意見を丁寧に聴く力
	柔	軟	意見の違いや立場の違いを理解する力
状	況	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	
規	律	社会のルールや人との約束を守る力	
ス	ト	ストレスの発生源に対応する力	



2：体系的で多彩なカリキュラム…「根力」育成に向けて、4年間を通じて学んでいく体系的なカリキュラム「根力育成プログラム」を構築します。根力養成－根力強化－根力実践の三段階合計12単位とスキル養成プログラム（教育課程外＝単位なし）という枠組みの下、多彩な授業科目を準備して根力を育成していきます。とりわけ「課題解決型（PBL）学習」を重視し、「電子ポートフォリオ」等の支援ツールも充実させます。プログラムは平成24年度から本格始動します！

1年	根力養成プログラム ①フレッシュマンゼミナール		スキル養成 プログラム (教育課程外)
2年	②ステップアップ 科目群	根力強化 プログラム	
3年			
4年	根力実践プログラム		



● 第一段階 根力養成プログラム（6単位）

- ①フレッシュマンゼミナール（4単位） 目標：高校生から大学生へ
- ②ステップアップ科目群（2単位） 目標：自分の方向性を確認して次の段階へ

● 第二段階：根力強化プログラム（4単位）

従来のインターンシップを発展・強化させるとともに、社会人による講義やPBL授業としての「企画実現・スタッフ編」など、「教室での勉強」から「実社会での経験」まで、幅広く準備していきます。

● 第三段階：根力実践プログラム（2単位）

「企画実現・実践編」や「SA」など、「実践」を重視した内容を中心に準備しています。また、学生就職支援センターと協力して、実際の就活を「勉強の場」としてより積極的に活用する手だても考えています。

● 教育課程外：スキル養成プログラム

昨年度は、東京の専門学校「LEC 東京リーガルマインド」の先生をお招きして、IT関係の国家資格である「ITパスポート」取得のための対策講座を開講しました。講義は水戸キャンパスで行いましたが、茨城大学の遠隔講義システムを活用して、日立・阿見の両キャンパスでもたくさんの先輩たちが受講しました。スキル養成科目として今後どのような科目を開講していくべきか、現在、みなさんのニーズを調べているところです。



水戸キャンパスでの講義風景

基本姿勢は「学生の自発的取組の後押し」 茨大生は、もともと高い能力を持っています。足りないのはそれを活かして磨いていくために「はじめの一步を踏み出す勇気」。茨城大学はその「一步」を後押しするしくみを提供します。

さあ、「はじめの一步」を踏み出そう！

茨城大学の就業力GPについての詳細は、下記までお問い合わせください。
学務部学務課大学教育センター係（共通教育棟1号館1階）
電話 029-228-8414

学生の声

先輩から、一年生へのアドバイス

茨大生版* 自立式学習法

人文学部社会科学科
2年 塚田千尋

長い夏休みも終わり、後期日程が始まります。専門科目の準備期間でもあるこの時期を有効に使い、周囲の友人より先にステップアップしませんか。その方法として、集中講義の履修を提案します。週末や長期休暇中に開講される集中講義では、休日を返上し授業に臨む学生が集まるため、受講生の意欲が高いです。また、集中講義は平時の講義とは異なり、1年生に偏らず1年生から4年生まで幅広く学生が集まり、先生だけでなく先輩方からも多くの知識を吸収できます。そのような中での授業は活気があり、ディスカッションはおおいに盛り上がります。集中講義のテーマとして、茨城大学ならではの地域社会に焦点を当てた講義が多く設定されており、学部問わず受講できるのも魅力です。2年生から始まる専門科目に向けて、様々な角度から物事を捉える力を身につけ、学問面でも充実した生活を送りましょう。前期に、椅子に座ってただ何となく講義を聞いていた人は心機一転、自分からトライしてみませんか。

後学期を迎える一年生へ

農学部地域環境科学科
2年 篠崎晴菜

後学期に入ると、農・工学部生にとって水戸で過ごす時間はあとわずかになります。二年生になると、他学部の友達ともなかなか会えなくなるので、今のうちに思い出作りをしておきましょう。私は大学生活を楽しむために、何か一つでも夢中になれるものを見つけるといって考えます。私はボート部のマネージャーの仕事をする事で大学生活を充実させています。部活があるから勉強も頑張ろうと思えます。授業の方もおろそかにせず、農・工学部生は特に水戸通いにならないように真面目に受けておくようにしましょう。一年生の皆さんにはきちんとした目標を持って遊びすぎないように授業にのぞんで欲しいです。できる限り一年生のうちに単位を取っておけば、資格試験の勉強ができたり、四年生では就職活動に集中できたりと、将来のための準備ができるので時間を大事に使う事ができます。一年生の皆さんには前学期の自分を見直し、無駄な時間を過ごす事のないよう、勉強と遊びでけじめをつける事が後学期を楽しむ事に繋がると思います。

編集後記

- 暑さもすっかり影を潜め、朝晩はだいぶ冷え込むようになりました。体調に気をつけつつ励んでください。(宇野)
- 月日が経つのは早いもので、23年度も早や秋…。震災の最中スタートした前学期はドタバタと本当にあっという間でした。学生の皆さんにとってもいろいろと心配事が多かったことでしょう。今学期からはやっとふつ々の大学生活ですね。エンジョイしてください！(梅原)
- 2011年という大変な年に入学された皆さん、後学期は落ち着いて勉学に励むことができるのではないのでしょうか。部活動等も忙しいかとは思いますが、1年生の後学期は大切な時期です。勉強もがんばりましょう。(岡山)

発行日 平成23年10月/発行者 茨城大学 大学教育センター 水戸市文京2-1-1 029(228)8414(大学教育センター係)

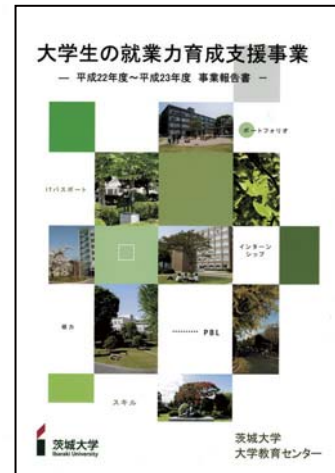
キャリア教育部活動報告

キャリア教育部活動報告

副センター長・キャリア教育部長 鈴木敦

1：はじめに

茨城大学では、平成22年度～23年度にかけて、文部科学省「大学生の就業力育成支援事業 GP」（以下「就業力 GP」）による補助金を受けて、学生の就業力を高める取り組みを進めて来た。取り組みの具体的内容については、『大学生の就業力育成支援事業－平成22年度～平成23年度事業＜根力育成プログラム＞成果報告書』（茨城大学大学教育センター 平成24年8月1日刊 図1 以下、「GP 報告書」）に詳しい。そこで本稿では、本事業の運営と大学教育センターとの関わりを中心に記述する。



2：申請のコンセプトと大学教育センターとの関わり

[図1]就業力 GP 報告書

茨城大学は、平成22年に「就業力 GP」に申請し、幸いにも採択を勝ち取ることができた。本学では、これ以前にも多数の GP に申請・採択されて来たが、いずれも学部単位のものであり、全学的な取り組みとしてはこれが最初のことであった。

申請書に記した「取組の概要」を図2に示す。

茨城大学は、かねてより学生の就職支援に積極的に取り組んできており、日本経済新聞社『日経キャリア・親とのかしこい大学選び2010年版』において、「北関東・甲信越地域で就職活動支援に最も熱心な大学」に選ばれた実績を持つ(図3・4)。しかし、それらの活動は概して個別的・孤立的に行われ、大学全体としての体系的な取り組みとなっていない憾みがあった。このため、今次申請に当たっては、「全学的」「一元管理」をキーワードとし「体系性の確立」をコンセプトに据えることとした。この方針の下に、主として以下の4項目について作業を進め、その総体としての体系的なカリキュラムである「根力育成プログラム」を構築することとした。

- ① 茨城大学卒業生が最低限有すべき能力を「根力」と規定し、その「根力の構成要素」の定義、それらへの効果的な教育内容・教育方法の展開
- ② 「PBL（課題対応型学習：Project Based Learning）技法」の導入
- ③ 学生一人一人の学習過程を教職員・学生自身、更には地理的に分散している部局間でも共有するための「電子ポートフォリオシステム」の導入
- ④ 学生同士の相互教育体制（教育体制の循環）を構築するためのステューデントアシスタント（SA）制度の構築

取組の概要【1ページ以内】

茨城大学では、就業してからも役立つ実学的専門教育を含む体系的なカリキュラムを構築する。これを「**根力（ねぢから）育成**プログラム」と称する。

従来からあるカリキュラムを、「就業力育成」という観点から「効果的・コンパクト」な**一元管理体制**のカリキュラムに再構築し、「最適な教育内容を、最適な教育方法で、最適なタイミング」で展開する。またこうした体制を整えることで、各部署がそれぞれ行ってきた業務のパッケージ化を促し、業務体制・情報提供体制にも還元することが期待できる。

こうした**根力育成**プログラムを導入するためには、従来の教育方法・内容、業務のあり方に対する反省を踏まえなければならない他、3つのキャンパスに分散している地理的ハンディキャップを克服するためのツールも必要であり、今回の申請に至った。具体的には、大きく分けて4つの事業を全学的に展開することとしている。

- ① 茨城大学卒業生が最低限有すべき能力を「根力」とし、その「根力の構成要素」の定義、それらへの効果的な教育内容・教育方法の展開
- ② 「**PBL（課題対応型学習：Project Based Learning）技法**」の導入
- ③ 学生一人一人の学習過程を教職員・学生自身、更には地理的に分散している部局間でも共有するための「**電子ポートフォリオシステム**」の導入
- ④ 学生同士の相互教育体制（教育体制の循環）を構築するためのステューデントアシスタント（SA）制度の構築

これらの事業は、単に一斉に全学的に実施するものではなく、入学から卒業までの学生の成長に合わせ、「**根力育成**」及び「**学生自身の自発的行動の後押し**」という統一理念で「大学教育センター」の**一元管理体制**の下に展開していく。学生指導にあたる教職員は、キャンパスや部局の垣根を越えて、入学から卒業までの学生一人一人の状況に応じた適切な教育・指導を行う。勿論、学生に対して「手取り足取り」指導を行うのではなく、あくまで**学生自身の自発的行動の後押し**を行うのであり、そのための環境整備を第一義として展開していく。

既存のカリキュラムと根力育成カリキュラムの関係		根力(ねぢから)育成プログラム	
1年前期	既存のカリキュラム	根力養成プログラム	
1年後期		根力強化プログラム	
2年前期		根力実践プログラム	
2年後期			
3年前期			
3年後期			
4年前期			
4年後期			
各期の全学目標			
第一段階	学生の自発的学びを後押しし、社会で活躍するための基盤となる能力＝根力を育成するための土台を築く フレッシュマンゼミナール： 高校生から大学生へ キャリアアップ科目群： 自らの方向性を確認して次の段階へ	根力養成プログラム	
		1年 必修 4	フレッシュマンゼミナール
		2年前期 選択必修 2	キャリアアップ科目群
第二段階	根力強化プログラム： 座学と実地体験を通じて社会人として要求される能力を理解・養成する スキル養成プログラム： 個々の分野で直接求められる基礎的スキルを養成し、「資格」としてオンライン化する準備を整える	根力強化プログラム	
		2年後期～3年前期 選択 4	「社会人・卒業生による講義を聞く」「社会人・卒業生と話す」「企画・プレゼン・コンペを自ら行う」「イベントを運営する」「インターンシップを行う」等
		スキル養成プログラム（教育課程外）	
		「情報系」「語学系」「公務員系」等、予想される学生のニーズに合わせて提供	
第三段階	実際の活動を通じて、これまで培ってきた力を確認し、不足点を自覚して、自らを高めて行く	根力実践プログラム	
		3年後期～4年 選択 2	「就職センター主催の各種就職イベント参加と事前準備・事後レポート」「実践・SAとしてのリーダーシップ」「同窓会/地域との連携企画（入学式・新入生ガイダンス・新歓祭・OC・茨苑祭・卒業式等を活用）」等

電子ポートフォリオにより、入学～卒業までの学生一人一人の学習過程を、教職員・学生自身、更には地理的に分散している部局間でも共有

〔図2〕申請書「取組の概要」

順位	大学名	順位	大学名	順位	大学名
1	茨城大学	8	高崎経済大学	14	上越教育大学
2	筑波大学	8	長野県看護大学	15	筑波学院大学
3	信州大学	8	山梨学院大学	16	都留文科大学
3	長岡技術科学大学	11	茨城県立医療大学	16	常磐大学
5	宇都宮大学	11	諏訪東京理科大学	16	新潟経済大学
5	群馬大学	11	流通経済大学	16	松本大学
7	新潟大学				

[図3]北関東・甲信越地域における「就職活動支援に熱心な大学」ランキング

地域	トップ校	地域	トップ校
北海道・東北	北海道大学	近畿	立命館大学
首都圏	早稲田大学	中国・四国	広島大学
東海・北陸	名古屋大学	九州・沖縄	福岡大学

[図4]北関東・甲信越以外の地域におけるランキング・地域別トップ校一覧

問題は、一元管理のための全学の「司令塔」をどうするかであった。茨城大学は、性格を異にする5つの学部からなる総合大学であり、教育面においても個々の学部の自主性が尊重されている。このため、今回のような教育面での取り組みにおいて5学部を統括するような「司令塔」相当の組織は存在していなかった。

唯一の例外が大学教育センター（以下「大教センター」）であったが、その管轄範囲は教養教育に限られている。一方で、本事業で構築しようとしている「根力育成プログラム」は専門課程を含む学士課程の全域をカバーするものである。とはいえ「全学の教育分野での司令塔」として大教センター以上の親和性を有する組織はなく、ここに大教センターは「管轄外の専門課程までも視野に入れた対応を求められる司令塔」として位置づけられるに至ったのである。

3：平成23年度の活動

平成22年度の活動は、就業力GP採択の遅れと事業仕分けによる廃止決定、首相のお声掛けによる一年限りの延長決定と、政治に翻弄され続けた。加えて年度末には東日本大震災が発生し、本学も施設・機材に多大な損害を被った。就業力GPに纏わる作業も中断を余儀なくされたが、平成23年度に入ると復興作業の傍ら幸いにも早期に取り組みを再開することができた。

(1)大教センターキャリア教育部の設置

申請書に記したロードマップには、立ち上がり2年間の重点項目として「大教センターの司令塔機能の強化」を掲げている。これを受けて平成22年度中に準備を進め、平成23年4月1日付けで大教センター内に「キャリア教育部」が新設された。同時に副センター長ポストを1つ増設してキャリア教育部長とし、全学実施委員長を兼ねることとした。当該ポストには、申請時からの経緯を踏まえて、筆者がその任に当たることとなった。同時に森野センター長の任期満了による佐

藤副センター長のセンター長就任、その後任としての戸嶋浩明副センター長の就任という異動が発令された。これに伴い専門部会長の分担も変更となり、最終的に図5に示す新体制が成立した。

(2) 専任教員・事務補佐員の採用

PBL 教育の導入・推進は、本事業の柱と位置付けられており、その専門家を任期付きの専任教員として採用することは、キャリア教育部設置と並んで大教センターの司令塔機能強化構想の両輪であった。かくして、就業力 GP 採択が決まると早速任用に向けた手続が開始されたが、前述の事業仕分けにより、たちまち予算の先行き不安問題が浮上した。平成 23 年度一年限りの保証しかないポストでは、応募があろう筈もない。森野センター長（当時）のご尽力と大学執行部のご理解により、最終的に「就業力 GP の継続・廃止に拘わらず、ともかくも二年間は任期を保証」して戴けることとな

った。しかし、この間に任用手続は遅れに遅れ、漸く平成 23 年 9 月 1 日付けで蜂屋大八准教授に赴任して戴くことができた。

同様の問題は、事務補佐員の任用にも陰を落とすとした。平成 22 年度採用の事務補佐員の退職に伴い、新たに藤澤真紀子氏にご担当戴くことができたが、こちらは「一年限り・先行きの保証一切無し」という更に危うい条件であった。

(3) 平成 23 年度の取組（専門部会単位）

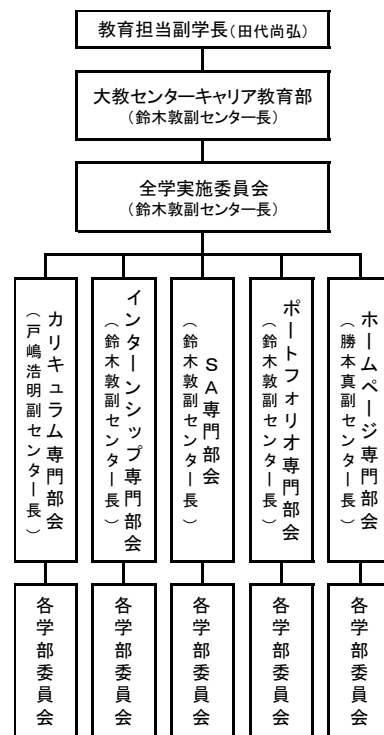
上記の如く、不安材料を内包しつつも司令塔機能の強化は完徹された。これを受けて全学実施委員会－各専門部会－各学部委員会は活発に活動を行った。以下、専門部会単位で行われた主な活動について列記する。

① カリキュラム専門部会

今年度は「フレッシュマンゼミナール」の試行と「ステップアップ科目群」並びに「PBL 授業」開講に向けた環境整備が進められた。

i : フレッシュマンゼミナール

既存の「主題別ゼミナール」と「情報処理概論」を就業力育成の観点から有機的に結びつけ、「フレッシュマンゼミナール」として再構築する計画であった。このことは、両者の連携がなおざりになれば正に羊頭狗肉に終わってしまう危うさも孕んでいた。結果的には、各学部教務委員会と大教センターの情報教育専門部会を中心に調整が進められ、授業担当者各位のご尽力により「情報処理概論で学んだ内容を速やかに主題別ゼミナールで活用し、その結果を情報処理概論の授業にフィードバックする」という



[図5]平成 23 年度の実施体制

サイクルが一定程度確立された。なお不十分な部分も残りはするが、平成24年度からの正式開講に向けた実績を蓄積することができた。

ii : ステップアップ科目群

検討の結果、その趣旨に鑑み既存の「総合科目」の中に「就業力育成・ステップアップ系」枠を新設し、新設科目ならびに既存科目の中で同系の趣旨に合致する科目をここに集めることとなった。当初より部分参加であった教育・理学の二学部を除く、人文・工学・農学の三学部が、それぞれの学生数を受け入れられるだけの開講本数を用意する方向で努力すると共に、学生就職支援センターにもご協力を戴き、大教センターが提供する科目と合わせて、平成24年度にはある程度余裕のある開講本数を確保できることを目指した。平成23年度末時点で登録された授業一覧を図6に示す。平成24年度は試験開講であるため、当面は十二分な開講本数が確保できた。

<平成24年度前期>

K7401	前学期	キャリア形成と自己実現(1)*	望月厚志	教育	2	火	5	2年全学共通		
K7402	前学期	生きるということ死ぬということ*	蜂屋大八	大セ	2	火	5	2年全学共通		
K7403	前学期	企業社会と働く人々*	深谷信夫、他	人文	2	火	5	2年LSTA		人文学部優先
K7404	前学期	実践・レポート作成と討論*	鈴木敦	人文	2	火	5	2年LSTA		人文学部優先
K7405	前学期	ベンチャービジネス入門*	上原健一	非	2	集中		2年LSTA	工学部開講	工学部優先
K7406	前学期	社会人入門特別講義*	近藤久、他	工・非	2	水	5	2年LSTA	工学部開講	工学部優先
K7407	前学期	キャリア教育と大学教育・研究*	西木戸武	非	2	集中		2年LSTA	農学部開講	農学部優先

<平成24年度後期>

K7408	後学期	人間科学と対話の知*	伊藤哲司	人文	2	金	3	2年全学共通		人文学部優先
K7409	後学期	情報活用技術論*	鈴木敦	人文	2	金	3	2年LSTA		人文学部優先
K7410	後学期	「もののけ姫」を見て考える自然と人間の共生*	蜂屋大八	大セ	2	火	5	2年LSTA	工学部開講	工学部優先
K7411	後学期	生命倫理*	土屋陽介	非	2	金	3	2年LSTA	農学部開講	農学部優先

[図6]総合科目・就業力育成支援系 平成24年度試験開講科目一覧

ここに言う「学部で準備する開講本数」は、あくまでも受入可能人数のことを意味している。換言すれば、学生は自らの所属学部拘束されることなく、個々の判断で他学部が張り出している科目を選択する事も可能である。これは学生の選択の幅を拡げると同時に、学部ごとの開講可能本数のバラツキを一定程度吸収させることも意図しての措置であった。しかし、2年次生は既に3キャンパスに分かれて学んでおり、他キャンパスへの移動を要する履修は、現実には極めて困難である。VCSによる遠隔授業の活用は解決策の一つではあるが、ステップアップ科目群の中には、遠隔授業にはなじまない内容の授業も含まれる。平成25年度の正式開講に当たっては、キャンパスが離れかつ学生定員の多い工学部（日立キャンパス）での運用

に、慎重かつ周到な対処を工夫する必要がある。

iii : PBL 授業

PBL 授業は、主として根力強化・根力実践プログラムとして開講することを想定している。蜂屋准教授により精力的に準備が進められた結果、平成 23 年度末時点で常陸太田市里美地区をフィールドとする学外 PBL 授業に目処が立った。筆者による学内 PBL 授業と併せて、平成 24 年度の試験開講に向けた環境整備は基本的に完了した。平成 24 年度は、平成 25 年度からの正式開講を睨んで、試験開講授業の運営と併せて PBL 技法の学内への拡大と開講本数の増加に向けた作業を進める予定である。

② インターンシップ

前年度は工学部のインターンシップコーディネーター 4 名の雇用に多大な予算を投入し、いわばパイロット事業として全学のインターンシップ体制整備を牽引して戴いた。平成 23 年度も工学部からは引き続き同様の予算要求がなされたが、就業力 GP 予算が 2 割減となる中で前年度同様の予算を割くことはもとより不可能であった。そこで、工学部分については学内予算である「教育改善経費」に支援を求め、何とか要求に応えることができた。工学部における 2 年間の取り組みの成果については、GP 報告書を参照されたい。

代わって、今年度は農学部でインターンシップコーディネーター 1 名を就業力 GP 予算で雇用し、同様に全学のインターンシップ体制整備を牽引して戴いた。こちらも具体的なデータについては GP 報告書に譲るが、震災の影響さめやらぬ状況下にも拘わらず、今年度の同事業は受入企業数・履修学生数共に大幅増という成果を上げた。

一方で、日立・阿見の両キャンパスを優先させた結果、水戸キャンパスでは依然としてインターンシップ事業に対する梃子入れがなされていない状態にある。インターンシップもまた本学の就業力育成支援事業の重要な構成要素である。工学部及び農学部においては不十分とはいえ、これまでの助走期間の経験を生かして実を上げていただきたい。また水戸地区をどうするかについてはキャリア教育部を中心に案を考えていきたいと思うが、全学の資金的援助も重要となる。

③ SA (スチューデントアシスタント)

本年度前半の検討結果を受けて、SA は「根力強化プログラムの単位を修得済みの者が、根力実践プログラムの一環として受講する」「SA は授業補助を必要とする授業において、当該授業担当教員との協議と指導の下、創意工夫を凝らして活動する」という基本線が確認された。イメージとしては「TA (ティーチングアシスタント・対象は大学院生) の学部生版的なもの」であった。

しかし、ここで「SA」の概念に関する問題が明らかとなった。本来の「SA」とは、近年全国の大学で導入が進められており、本学においても導入に向けて作業が進められていたものであり、文字通り TA の学部生版である。換言す

れば、「担当教員の指示に基づき」「授業の補助を行い」「相応の賃金を得る」存在である。「無償かつ自発的な取組が求められ」「その結果が成績評価の対象となる」本事業における「SA」とは、根本的に性格を異にする。

偶々導入に向けた時期が重なり、加えて同一の名称を使ってしまったため、思いがけない混乱を生ずることとなった。議論の結果、本事業における「SA」を「SL（スチューデントリーダー）」と仮称して区別し、細かな内容については本来の意味での「SA」の概念が整理され正式に設置が決定するのを待ち、両者の明確な棲み分けを念頭に詰めることとした。

ところが、本来の意味での「SA」についても、全学方針との摺り合わせや従来の規則との調整作業が年度末までかかってしまった。その結果、仮称「SL」問題もまた年度を越えてしまうこととなった。幸いにして仮称「SL」の試行は平成25年度と、なお時間的に余裕がある。平成24年度の検討に待ちたい。

④ポートフォリオ

前年度に「共通の土台」を完成した実績の上に、今年度は「各学部の独自性を活かした上屋」を載せる作業を進めた。

ポートフォリオ構築は、本事業の中でも最も予算を必要とする事業である。就業力GPの先行き不安を念頭に、今年度中に完成させねば後がないという認識で、集中的に作業を進めた。この間のトピックスとしては、6月10日に行われた前年度に完成した「土台」部分のデモと、8月3日に開催された大教センター主催のFDが上げられる。

i：前年度完成部分のデモ

6月10日に、今年度も引き続きポートフォリオの構築を担当されるラーニングアイ・新堀社長をお招きし、理学部インタビュースタジオにおいて各学部関係者向けにデモを行った。実際の画面や操作性を確認するのはこれが初めてという関係者も多く、熱心な質疑応答が繰り広げられた。各学部の「上屋」は、前年度中に大枠ができていたが、今回のデモを経て最終的な仕様固めが進められることとなった。

ii：大教センターFD

8月3日に、大教センター主催で「eポートフォリオの導入と今後の展開～ポートフォリオの教育的意義～」と題するFDが開催された(図7)。意図する所は、一つには各学部のプランを紹介し合うことで、学部独自で進めることになってい

大学教育センターFD 2011

eポートフォリオの導入と今後の展開
～ポートフォリオの教育的意義～

大学教育センターでは、標記のFDを企画しました。今回は、就業力育成支援GP[能力育成プログラムの構築]の大きな柱である、ポートフォリオをテーマにして開催いたします。この機会にポートフォリオに対する理解を深め、今後の利用に活かして頂きたいと思っております。多くの先生方の参加をお待ちしております。

茨城大学
eポートフォリオ

FD概要

名称	大学教育センターFD 2011
日時	平成23年8月3日(水) 14時～17時(受付1時30分より)
会場	茨城大学人文学部2階研修センター
対象	大学の全教職員
主催	茨城大学 大学教育センター
申込	問い合わせ先
	学務課 大学教育センター係
E-mail	uic@u-aizu.ac.jp (事前受付)
電話	029-229-0414

プログラム

- 開会の辞 (14:00-14:10)**
佐藤 和夫 (茨城大学 大学教育センター長)
- 各学部報告 (14:10-15:10)**
人文学部
工学部
理学部
教育学部
- 特別講演 (15:20-16:20)**
鈴木 克明 (熊本大学教授)
- 質疑応答 (16:30-16:50)**
- 閉会の辞 (16:50-17:00)**
藤本 真 (茨城大学 大学教育センター副長)

司会進行 梅原守道 (大学教育センター講師)

〔図7〕大教センターFD ポスター

る「上屋」の構築が蛸壺化することを防ぐこと、今一つには、ポートフォリオ構築で先行する他大学において、多額の予算を投入したにも拘わらず学生にも教職員にも浸透しないケースが散見されるとの認識に基づき、早い段階からの周知と浸透に向けた対策の検討を促すことにあった。

当日は、まず各学部の「上屋」プランに関する報告が行われた。その後、eポートフォリオ構築について豊富な実績をお持ちの熊本大学・鈴木克明教授より各学部のプランに関するアドバイスを含めたご講演を戴き、活発な質疑応答が行われた。



[図8]大教センターFD 会場風景

なお、この模様はVCSで日立・阿見両キャンパスにも送信された(図8)。ここまで、各学部の「上屋」プランは基本的に学部独自に構想してきたものであったが、以上を踏まえて共有可能部分は積極的に共有して効率化を図った。その上で構築作業が精力的に進められた結果、年度内に無事完成させることができた。

⑤ ホームページ

昨年度完成した枠組みに、順次コンテンツをアップしていく作業を進めた。根力育成プログラムを構成する諸授業は、学年進行で開講されていくため、なお「工事中」の部分も目立つ。不幸にして就業力 GP は打ち切りとなってしまったが、プログラム自体は引き続きロードマップに沿って開講して行く。これに伴い、ホームページの内容も今後順次充実してゆく予定である。今年度のトピックスとしては、以下の二点が上げられよう。

i : スキル養成プログラム「IT パスポート講座」開講に纏わる活用

スキル養成プログラムとして、今年度も IT パスポート講座を開講した。今年度から有料での正式開講となったため、受講申込を確実に集計する必要が生じた。紙媒体での集計には手間を要するため、昨年同様、株式会社パワーコンピュータに依頼して申込用ページを作成し、学生が自ら入力することで手続きが完了するシステムとした。この方式は、ホームページのもう一つの活用法として、今後応用が期待できる。

ii : 根力育成事業イメージキャラクター「根力ブラザーズ」

後述のオープンキャンパスにおける展示広報の際に作成し、特に女子高校生に好評を博した「根力ブラザーズ」を、当事業のイメージキャラクターとし、新たに「根力ブラザーズの部屋」を追加した。つい固くなりがちな本ホームページのイメージアップに繋がることを期待している(図9)。



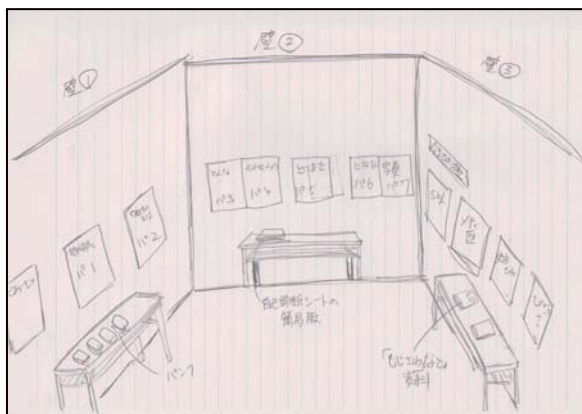
[図9]「根力ブラザーズの部屋」へのリンク

(4)平成 23 年度の取組（キャリア教育部による直轄）

ここでは、キャリア教育部として直接行った活動の内、主なもの二件について略記する。

①オープンキャンパスでの広報

入学センターからのお誘いに応じて、7月23日に本学水戸キャンパスで開催されたオープンキャンパスにおいて、本事業の紹介展示を行った。近い将来のPBL授業に向けた試行を兼ねて、プランニングは本学OGで現在筑波大学大学院在学中の岡沙織氏に依頼し、展示パネルの作成から準備―当日の会場運営―撤収については学生有志によるチームを結成して当たった。人文学部歴史・文化遺産コースの高橋修教授を始め多くの教職員の方々のご支援もあり、幸いにして多くの高校生・保護者の来訪を得て成功裏に終えることができた。加えて、次年度から筆者が担当する予定の「学内ベースのPBL授業」の運営に向けて自信を深めることもできた(図10～13)。



[図 10] 絵コンテ



[図 11] パネル作成風景



[図 12] 展示室と学生スタッフ



[図 13] 会場風景

②スキル養成プログラム「ITパスポート試験対策講座」

昨年度の試行に続き、今年度はスキル養成プログラムとして「ITパスポート試験対策講座」を正式に開講した。今年度は十分な準備期間を確保できたため、複数の専門学校から見積もりを取り、大教センター執行部で比較検討

した結果、学校法人大原学園に発注することとなった。前述の通り、ホームページ上で広報・申込手続を行うと共に、学内に広報ポスターを多数掲示した。講座は昨年同様 VCS で工・農二学部にも送信し、両学部の学生が自キャンパスで受講できる体制を確保した。また、講座終了後には昨年度同様受講者アンケートを実施した。昨年度の経験もあり、講義は滞りなく終了し、学生アンケートの結果も良好であった。しかし、今年度もまた受講生は想定を下回り三キャンパス合計で 73 名に留まった。

IT パスポートはパソコンの技術という点では理学・工学の学生には初歩的すぎるということは承知している。しかし IT パスポートは単純にパソコンの技術を問うものではなく、パソコンを使って効果的に業務をこなしていく能力全般を問う内容である。この点がもっと正確に伝わっていれば、理工系の学生ももう少し集まったのではないだろうか。広報面での課題が残る。しかし、何よりも深刻なのは正に対象層そのものと思われる人文学部・教育学部の受講生数が思いの外伸びなかった事である。これは単なる IT パスポート講座の広報不足という問題ではなく、正に当該学部の学生たちの就業意識に起因するものと言わざるを得ない。就業に対する意識を向上させるのが根力育成プログラムであるが、根力育成プログラム全体の受講率の向上には就業に対する意識の向上が不可欠であり、それがスキル養成プログラムの受講率向上にもフィードバックされる。「卵が先か鶏が先か」という問題になってしまうが、よい循環を引き起こすには、なお時間が必要と思われる。

4 : 「司令塔」の今後に向けて

本学にとって、今回の就業力 GP への取組は、

- (1) 本学を構成する 5 学部全てにまたがる
- (2) 本学学士課程（教養教育＋専門教育）の全てにまたがる

という二つの意味で「初めて」の試みであった。

しかし、実際にはもう一つ、重要な「初めて」が含まれている。すなわち

- (3) 教員組織と職員組織の両方にまたがる

がこれである。

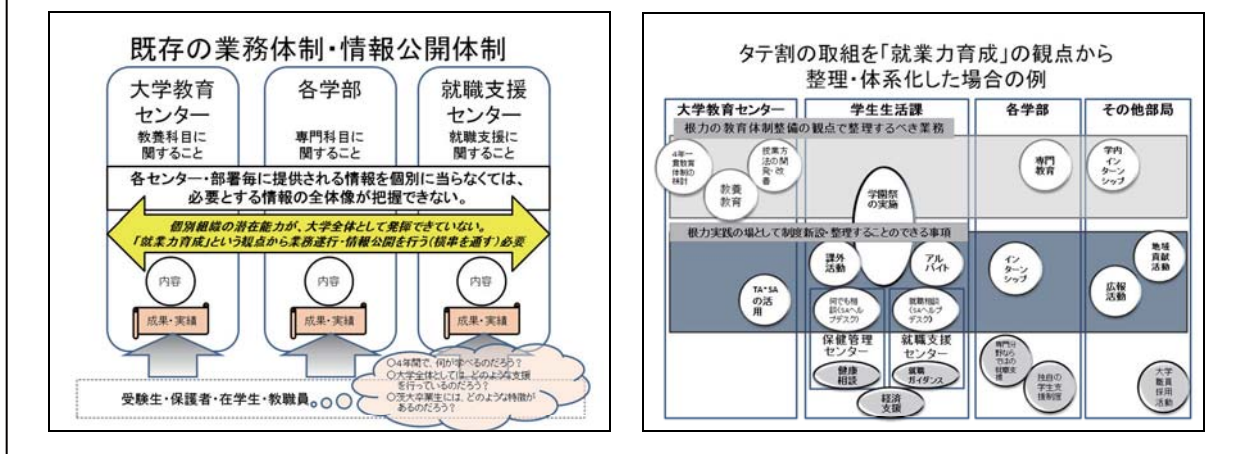
申請書概要（図 2）においては、僅かに「各部署がそれぞれ行ってきた業務のパッケージ化を促し、業務体制・情報提供体制にも還元することが期待できる」と記すのみであるので、以下に申請書本文の当該箇所の記述を転載する（図 14）。

就業力 GP におけるこれまでの取組では、専ら根力育成プログラムの構築に力が注がれてきた。「業務のパッケージ化」は根力育成プログラムの完成の上に進められる作業と位置付けていた為である。勢い、GP 報告書においても、本件に纏わる記述はごく僅かに留まらざるを得なかった。

「根力育成プログラムの構築」が、主として教員サイドでの取組になるのに対し「業務のパッケージ化」は、その性質に鑑み教員－職員両サイドでの緊密な連

茨城大学においては、「全学の教育に関する点検評価及び教育改革の支援」ならびに「教養教育」については大教センター、「専門教育」は各学部、「就職支援」は学生就職支援センター（以下「就職センター」）、「学生の健康管理」は保健管理センター、等々と、各組織に個別に業務分担がなされてきた。この「タテ割の体制」下にあっても一定の教育効果は得られてきたが、多様化する入学者・育成すべき能力の明確化と全学的な対応が焦眉の課題であることに鑑み、従来の業務分担のありかたを見直して、大教センターを司令塔に大学生活全般を通じた根力育成の体系を構築することが決定されている。

茨城大学では、教育課程内外を通じて「最適なタイミング・最適な教育方法・最適な教育内容」により根力育成を実行していくこととしている。全学の個々の部署で蓄積してきたノウハウを司令塔に集約し、有機的な連携体制下において、初めて可能な効果的手法を構築してゆく。手始めに、新規に導入する電子ポートフォリオを基軸に、**各部署がそれぞれ実施してきた「就業力育成関係各種施策」をパッケージ化した上で**、入学から卒業までの一連の学生生活動情報を一元的に管理し、学生対応を行う各センター・各部署とで学生情報を共有する体制を構築することとする。



【図14】申請書本文「業務のパッケージ化」部分・抜粋

携に基づく取組となる。根力育成プログラム完成の目算が立つと予想される平成25年度末頃を目処に、本格的な取組に向けた準備が必要となろう。

就業力 GP に纏わる過去2年間の活動を振り返って特筆すべきは、事務方の尽力であった。とりわけ文部科学省補助金申請に関して豊富な経験を持つ某氏には、単なる事務手続を越えた様々なご助力を戴いた。今にして思えば、筆者の原案は、専ら自己の「思い」と「体験」に基づく甚だ情緒的な代物であったが、氏の公的・私的に蓄積してきた知識に基づく種々の提言により、申請書に見合ったレベルに高めることができた。

「職員と教員は車の両輪」とは常々言われることである。しかし、現実にはそれぞれの拠って立つ基盤の違いもあり、必ずしもうまく回るとばかりは限らない。今次の取り組みにおいては、教員が教育・研究・地域貢献活動等の具体的な実績

と事業のアイデアを持ち寄り、職員が文部科学省の審議会情報や他大学の事例等の知識を持ち寄ることで、「両輪」が理想的に回り競争的資金の獲得に繋げることができた。上述の「業務のパッケージ化」においても、職員と教員の協働作業が円滑に進み大きな成果が上がることを期待している。

就業力 GP への取組に当たり、司令塔機能は大教センターが担ってきた。しかし冒頭にも述べた通り、同センターの本来の機能は、全学の「教養教育」の実施・調整組織である。学士課程全体にまたがる根力育成プログラムは、本来の機能を越える対象である。今回、キャリア教育部の設置と副センター長の1名増員がなされたが、専任のいない執行部体制であり、依然として過重負担状態にある。

過去二年間における根力育成プログラム構築作業の中心は、教養教育に属する部分であった。平成24年度からはいよいよ専門教育に属する部分の整備が本格化する。さらにその先には、前述の「業務のパッケージ化」作業も待ち受けている。山積する課題を前に、現状の大教センターは、その権限においても予算・マンパワーにおいても、あまりに弱体であると言わざるを得ない。「全学の学士課程教育の統括組織」「全学の学士課程教育改革の中心組織」さらには「全学の教員組織と職員組織を、教育という観点で繋ぐハブ組織」としての機能を担う、強力な組織が求められているのではないだろうか。近い将来、大教センターを核とした抜本的な組織改編・機能強化策が採られることを期待したい。

おわりに

公募要領の公開から約2年、採択の遅れや廃止－復活の混乱に加えて東日本大震災による中断もあり、実質的には僅か1年余で就業力 GP は廃止となってしまった。「道半ば」にさえ至らない内での補助金廃止は、文字通り痛恨事ではある。しかし、曲がりなりにも事業は立ち上がった。もとより GP は立ち上がりを補助する予算である。今後は、茨城大学独自の予算と教職員・学生の努力と工夫で完成を目指して行くことになる。また、予算規模は大幅に縮小されるものの、近く就業力 GP の実質的な後継事業が募集されるとも聞く。焦らず・怒らず・諦めず、今後も着実に作業を進めて行かねばならない。

立ち上がりの2年間、幸いにも本学執行部・教職員諸氏ならびに有志学生諸君の強力な支援を得て、よろけながらもどうにかここまで辿り着くことができた。その過程で最も就業力を鍛えて貰ったのは、実は筆者自身ではなかったかと思う。

筆者は平成23年度末を以て留学生センターに異動となり、代わって伊藤哲司教授が大教センター副センター長・キャリア教育部長に就任された。上述の通り取り組むべき課題は山積しているが、氏の就任で大幅な若返りを果たしたキャリア教育部を率いて、大きな成果を上げて下さるものと期待している。

末尾ながら、ご支援戴いた全ての皆様に心より感謝申し上げますと共に、引き続き本事業の発展に向けてご協力を賜りたく、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

理系質問室の活動報告

平成 23 年度 大学教育センター学習支援活動『理系質問室』報告

茨城大学大学教育センター理系基礎教育部

茨城大学大学教育センター理系基礎教育部では、茨城大学の理系基礎教育に関する学習支援の充実を目的に、平成 21 年 4 月より「理系質問室」を開設している。この理系質問室では、工学部の初年次学生を主な対象として、理系基礎科目についての個人的な質問を受け付ける他、学習相談などにも対応している（茨城大学の全ての学生が利用可能であり、要望があれば“理系基礎科目”以外の質問にも対応する）。本稿では、平成 23 年度の理系質問室における学習支援活動の概要を報告する。（報告者：梅原守道）

1 平成 23 年度 理系質問室の開室状況

○開室期間…前学期：5 月 16 日（月）～8 月 5 日（金）

毎週 月・火・木・金…11：30～13：00

後学期：11 月 10 日（木）～12 月 22 日（木）、1 月 6 日（金）～2 月 13 日（月）

毎週 月・木・金…11：30～13：00、

火…13：30～14：30（12 月 6 日～）、16：30～18：00

○場所…茨城大学共通教育棟 1 号館 130 室

○駐在教員…大学教育センター専任教員 2 名、他学部専任教員 3 名（工：2 名、教育：1 名）

2 平成 23 年度 理系質問室の利用状況

理系質問室の利用状況の詳細を下記の表にまとめる。なおここでの「対応人数」は、同一人物の複数回訪問であってもそれらを独立した訪問（人数）と見てカウントしている。また、「稼働率」とは、1 名以上の訪問者があった回の割合である。

前学期

	開室回数	対応人数	平均	来室なし	稼働率
4月					
5月	10	8	0.80	3	70.0%
6月	17	12	0.71	10	41.2%
7月	17	16	0.94	6	64.7%
8月	4	10	2.50	0	100.0%
小計	48	46	0.96	19	60.4%

後学期

	開室回数	対応人数	平均	来室なし	稼働率
10月					
11月	11	21	1.91	1	90.9%
12月	16	16	1.00	5	68.8%
1月	17	16	0.94	5	70.6%
2月	8	17	2.13	2	75.0%
小計	52	70	1.35	13	75.0%

年間 100 116 1.16 32 68.0%

質問の種類(前学期)

微分積分	21件
力学	14件
線形代数	12件
その他	5件
計	52件

質問の種類(後学期)

線形代数	18件
電気回路	15件
微分積分	13件
ベクトル解析・電磁気	13件
その他	14件
計	73件

質問者の内訳(年間)

工学部生	94名
理学部生	21名
農学部生	1名
計	116名

以上

初年次学生の欠席者調査報告

初年次学生の欠席者調査報告

大学教育センター副センター長
勝本 真

平成 22 年度より、初年次学生の学習支援の取り組みの一つとして、前期の早い段階で大学生活や大学の勉学でつまずき、授業への参加が悪い学生の調査を実施した。

前期、初年次学生全員が必修として受講する「総合英語」科目の教員に協力を得て、5 月末までの間に 5 回以上の欠席があったものを教養教育係に報告する形で実施した(資料 1)。その結果は下記の表とおりである。

各学部の欠席者数

	人文学部	教育学部	理学部	工学部	農学部
平成 22 年度	1	3	3	15	4
平成 23 年度	1	2	3	4	0

調査結果をもとに、各学部の担任・教務担当と連携しながら対応した。今後このような学生が増えて行くことが十分考えられており、早期の対処が必要だと考えている。昨年度に比べて、わずかながら減少傾向にあるが、今後も注意深く対応して行きたいと考えている。

初年次教育支援は、第 2 期中期計画で本学が上げている重要な項目の一つであり、この調査は継続して実施して、相談室をはじめ様々な組織と連携しながら、対応できる支援体制を構築していきたいと考えている。

平成 23 年 6 月 7 日

総合英語(1年生対象)担当教員 殿

大学教育センター長
佐藤 和夫

履修学生の出席状況確認について(依頼)

総合英語の担当につきましては、ご協力、誠に有り難うございます。さて、本科目はご存じのように全学生必修となっています。そのことを活かしまして、初年次学生の修学状況調査を計画いたしました。

ご存じのように、入学直後に大学生活や大学での勉学につまずいたために後々まで復帰が困難となる学生が少なからず存在します。係る学生には早期の対処が有効です。そこで先生方のクラスに、6月2日(木)までの授業で5回以上欠席の学生が居ましたら、学生番号と氏名を下記欄にご記入の上、6月17日(金)までに教養教育係にお届けください。

初年次教育支援は、第2期中期計画で本学があげている重要な項目の一つです。ご多忙中とは存じますが、どうかよろしくご協力の程、お願いいたします。

なお、本件は関係部会長との協議・諒解を得ながらすすめています。

***** 切り取り線 *****

シラバスコード _____ 授業担当教員名 _____

学生番号	氏名	備考(欠席回数など)

多読室利用状況報告

平成 23 年度多読室利用状況報告

報告者：岡山陽子（大学教育センター）

多読室（第5および第6講義室）が平成22年度後学期より利用可能となったので、その利用状況について報告したい。

この多読室では、教室の後方にロッカーが設置され、英語学習用多読用図書が収納されている。

月曜日および水曜日の午後12時から5時までは、学生が多読用図書を自由に読めるように多読室を解放した。前学期は利用者がほとんどいなかったが、後学期は、総合科目「簡単な絵本からペーパーバックへ」を取っている学生を中心に、平均1日に2～3名だった。この総合科目は、社会人への公開科目なので、この科目に出席しておられる社会人の方がよく利用されていた。図書館にある多読用図書は、社会人でも貸出ができるが、この多読室では落ち着いて本が読める、とのことで利用されていた。また、この多読室では、貸出がないので、シリーズものの本も欠けることなく揃っているのも良かったようだ。

後学期、毎週火曜日第5講時では、総合科目「簡単な絵本からペーパーバックへ多読多聴でめざせ100万語講座」が開講（担当教員：上田敦子・岡山陽子）され、その教室として第5および第6講義室を使用し、英語図書およびCD付英語図書を使用した多読・多聴を中心とした授業を行った。この講座は、公開授業でもあり、社会人にも公開されていた。

また、月曜日から木曜日の午前中（月・水曜は第1・2講時、火曜は第2講時、木曜は第1講時）には、総合英語の授業に、第5および第6講義室を教室として使用して、共通教育棟の教室不足解消に貢献した。

RENAND I 活用報告

RENANDI 利用状況報告

大学教育センター 宇野美由紀

茨城大学では、平成 18 年度から「RENANDI」を運用している¹。RENANDI は、いわゆる CMS (Course Management System) や LMS (Learning Management System) と呼ばれる種類の授業支援システムである。教材の提示、オンラインテスト・アンケート、課題回収、等々の機能を備えている。ここでは主に昨年度の利用状況や運用について述べる。

1. 利用状況

● 科目管理

2009 年度から、運用側が教務情報システム LiveCampus から取得した情報をもとに、RENANDI 上に科目を作成している。この作業は自動登録と呼ばれており、現在は学部向けの開講科目が対象となっている。科目の自動登録がなされると、教員は特別な申請なしに RENANDI で授業の準備を始めることができる。2011 年度は約 5000 科目を登録した(自動登録・それ以外を含む)。これらの科目のうち、教員から「登録/更新/複製/割当て/削除」の変更操作が 1 回以上あった科目は約 600 科目、教員からの「科目入室」が 1 回以上あった科目は約 1200 科目である。変更操作を一回以上行った教職員は約 200 人であった。下のグラフは 2008 年度～2011 年度までの利用状況の推移である。ここでは、科目内で変更操作が 7 回以上行われた科目・教職員数を抽出している。2011 年度は約 380 科目、約 160 人の教職員が利用した。

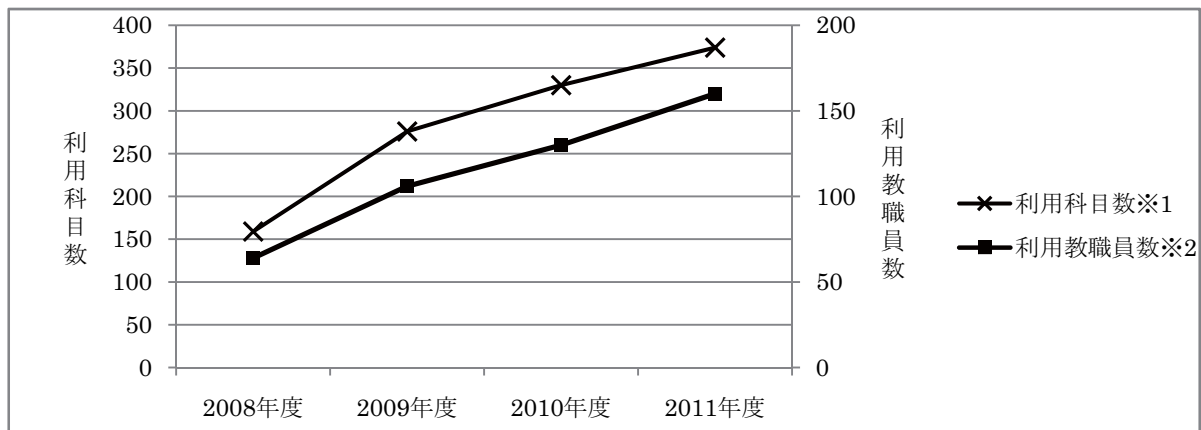


図 1 年度別の利用科目数・利用教職員数

※1 担当教職員によって、科目内で変更操作(登録/更新/複製/割当て/削除)が 7 回以上²行われた科目の数。

※2 変更操作を 7 回以上行った教職員の数。

¹商用ソフト。開発元は日本ユニシス株式会社。

²2009 年度までは、管理者が科目に実際に入室して利用状況を調べていた。その頃の利用科目数をもとに、変更操作 7 回を閾値に利用ログを集計すると実際に利用された科目に近かったため、現在もその設定で集計している。

● 自動登録の現状

自動登録は RENANDI への「科目登録および科目への教員登録(3月末)」「科目への受講者登録(前期5月初旬、後期11月初旬)」からなる。教務情報システムから取得した情報を RENANDI に手動で流し込む弱連携である。履修情報の流し込みは前期・後期ともに各一回である。履修追加/取消しは RENANDI に自動では反映されない。自動登録での「科目への受講者登録」は学生の履修登録期間後のため、学期初めから RENANDI を利用したい場合には、担当教員などから履修者リストを送ってもらって個別に登録をしている。

教員が RENANDI で使いたい科目は教務情報システム上の科目情報とは必ずしも一致せず³、科目等履修生や聴講生など非正課生の情報は教務情報システムにはないため個別に対応する必要がある。したがって、仮にバッチ処理などで機械的に教務情報システムの履修情報を RENANDI に反映したとしても、実際に教員が望むものとは異なる状態が発生してしまう。また、RENANDI の科目から受講生を削除する際には、提出物やテストの履歴などが一緒に削除されるため、特に注意が必要である⁴。

下表は 2011 年度の授業用に RENANDI 上に開設した科目を専門科目(学部毎)・教養科目別に集計したものである。依頼によって早期受講者登録をした科目、教員から利用された科目も区分ごとに集計した⁵。表中では年度間比較をしていないが、早期の受講生登録依頼が急増しており、当然ではあるが実際に使われている科目においては早期登録の割合が多い。

利用のされ方を見ると、特に教養科目・工学部向け専門科目では一科目に対する教員の操作が多く、RENANDI の多くの機能を利用していると思われる。一方、人文・教育向け専門科目では、一科目あたりに対する教員からの操作が少ないが、教材配布などをメインに利用する場合にはそのようになるため、教員からの変更操作が7回未満でも利用されている科目が多い可能性はある。

区分	教養科目	(農)専門科目	(人文)専門科目	(教育)専門科目	(理)専門科目	(工)専門科目	その他(授業で利用・大学院科目含む)
開設科目数	836	351	800	1362	567	765	57
早期受講者登録依頼あり	90	19	28	29	11	43	49
教職員からの変更操作あり(7回以上)	115	23	49	35	15	63	30
教職員からの変更操作あり(1回以上)	158	39	92	74	27	88	42

表1 2011年度用科目の区分ごとの利用状況

³たとえば、シラバスは学年別・学部別に分裂しているが、実際は同一授業のため RENANDI では一つの科目として扱いたい場合や、履修者の希望によって実担当教員と授業内容を振り分ける、など様々な個別ケースがある。

⁴LiveCampus の科目にある学生の履修情報がないことが、単なる登録忘れか履修取り消しかの区別がつかない。また、履修していない学生であっても、教材等の閲覧のために教員が登録を希望する場合もある。

⁵科目コード・利用ログから抽出集計しているため、誤差を含んでいる。

RENANDI には、授業科目の他にも教員からの希望を受け付けて科目を作成している。ゼミ、就職活動支援、FD 情報共有、学科情報共有等、教育や教育力の向上に資するものが対象である。

● ユーザ種別

下は、教職員を所属ごとに分けて利用者の割合を示したグラフである。利用者数は工学部教員が断トツに多い。センター・全学共同利用施設等教員が利用者数の割に科目アクセスが多いのは、大学教育センターなどに RENANDI を多用する教員が所属しているためである。

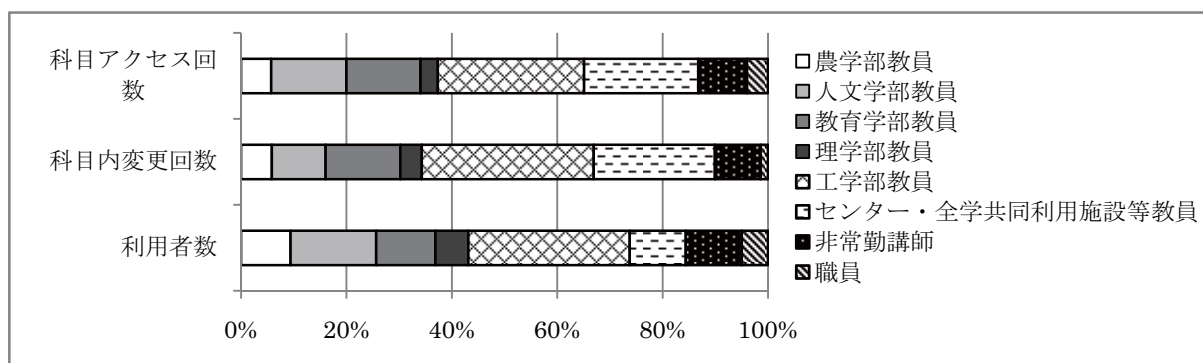


図 2 利用教職員の所属別の割合 (2011 年度)

RENANDI は多様な身分のユーザ（正課学生、非正課生⁶、常勤教職員、非常勤教員、など）から利用されているのが特徴でもある。2011 年度は 20 科目以上を非正課生が実際に利用している。

● アクセス状況

図 2『日別の機能遷移ビュー』は毎日の機能遷移ビューをグラフ化したものである⁷。前期・後期とも年毎にアクセスが増加しているのを見て取れる。夏季休業中に一時的にアクセスが増大しているのは、教養科目の事前申告⁸と結果発表に RENANDI を利用しているためである。2011 年度は年間平均にして一日当りのログインが約 900 回、機能遷移ビューが約 5000 回であった。

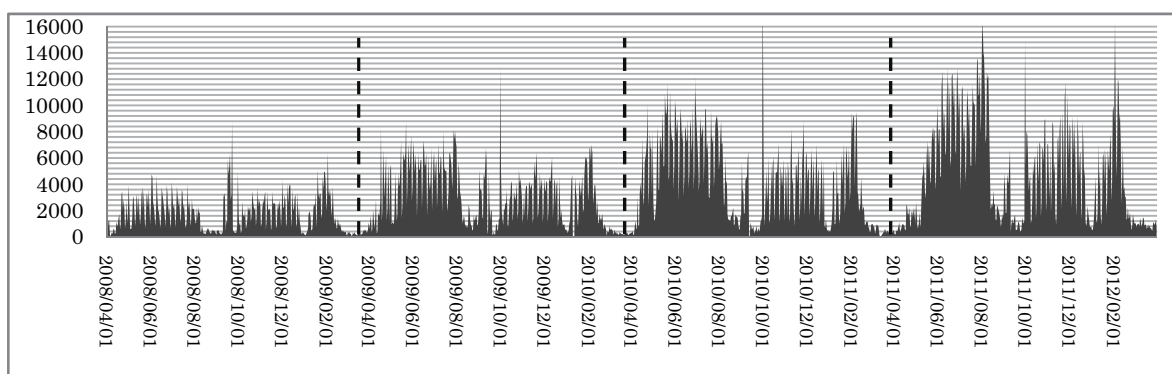


図 3 日別の機能遷移ビュー (2008 年度～2011 年度)

⁶科目等履修生・研究生・研修生・短期留学生・聴講生・単位互換学生など。

⁷機能遷移ビューでは画面閲覧の際に機能に関するもののみがカウントされる。画面遷移数などの一般に言うアクセス数ではないが、アクセス数を測る指標と考えてよい（アクセス数はさらに多い）。

⁸教養科目の一部を対象にして学生からの履修事前調査を行い、人数が超過する科目は抽選を行うなどの調整を行う仕組み。

下は、時間帯別のログイン回数を年間に均したものである。ログイン回数自体は増加しているが、時間帯によるログインの推移にはほとんど変化がない。19時以降から夜半にかけての利用が比較的多くなっており、授業時間外の利用が見て取れる。

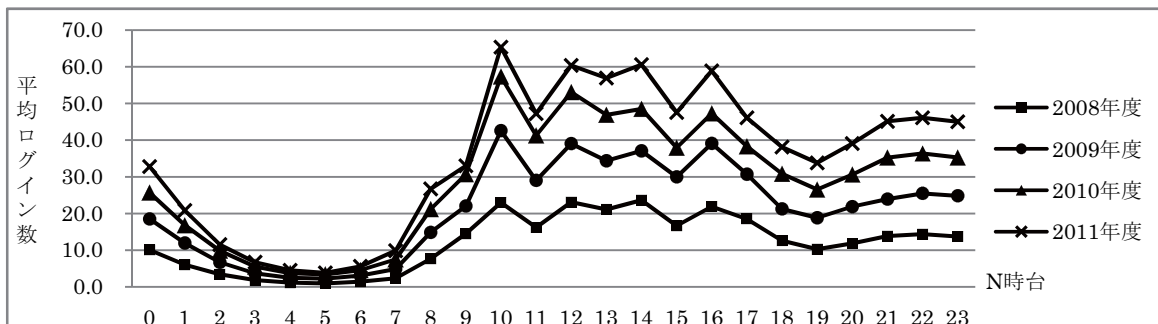


図4 時間帯別ログイン回数 (2008年度～2011年度)

下は、ログイン当りの機能遷移数の時刻当たりの変化をグラフ化したものである。時間帯によりばらつきがあるが、1ログイン当たりの機能遷移数は微減している。「とりあえずログインしてチェックする」という使い方が増えていると推測される。若年層のスマートフォン・タブレット端末の所有率が増えており、それに合った利用形態といえるかもしれない。

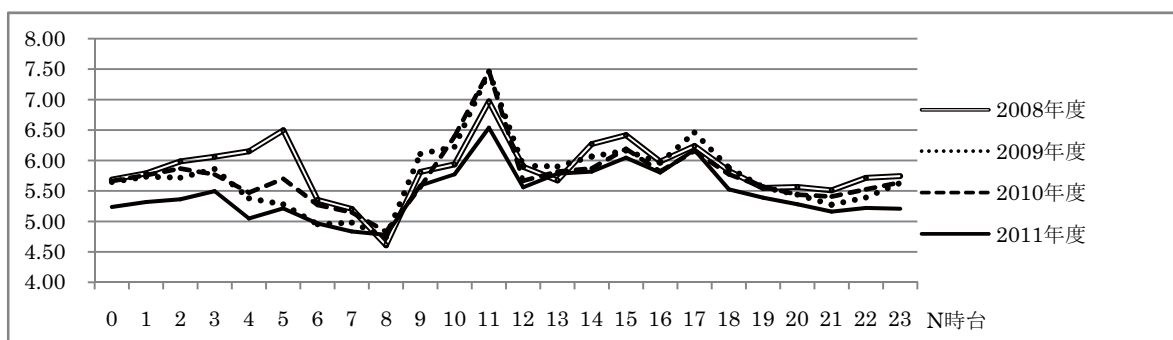


図5 時間帯別1ログイン当たりの機能遷移ビュー (2008年度～2011年度)

RENANDI に接続してくる端末種別では、3G 対応の携帯電話・スマートフォンが増えているようである。2011 年度末に学内無線 LAN が広範囲に整備され、大学の構成員は建屋内のほとんどの場所から無線 LAN を使えるようになった。コンピュータ教室外の場所でも、RENANDI を使った授業が増えてくると予想される。

2. 普及活動

● 教職員向け講習会

2009 年度までは e-learning ワーキンググループが、ワーキンググループ終了後の 2010 年度以降は大学教育センターが主体となって教員向け講習会を実施している。2010 年度は人文・農・工学部で計 3 回、2011 年度は水戸キャンパスで計 5 回開催した。2011 年度の講習会の概要は下表のとおりである。実際に RENANDI を利用している教職員が講師となり、各自の事例などを紹介してもらった。

	日時	講師
第1回	6月29日(水) 12:15~12:45	宇野美由紀 (大学教育センター)
第2回	7月22日(金) 12:15~12:45	曾我日出夫 (教育学部)
第3回	7月29日(金) 12:15~12:45	郡司晴元 (教育学部)
第4回	11月24日(木) 12:15~12:45	菅野未来子 (RENANDI 担当事務)
第5回	11月29日(火) 12:15~12:45	梅原守道 (大学教育センター)

表2 RENANDI 講習会講師一覧 (2011年度)

2011年度の参加者は延べ42名であった(センターのスタッフを含む)。講習会後に参加者から登録依頼や問合せがあり、一定の普及効果があったと期待される。各回とも日立地区・阿見地区へのVCS配信が可能な体制をとっていたが、水戸キャンパス以外からの参加者はほとんどなかった。他キャンパスの教職員に対しリアルタイムで講習会をするには、出張したほうがよいだろう。

● マニュアル・配布物等

新入生向けに「RENANDI および ALCNetAcademy2 の利用方法」をまとめたパンフレットを配布している。学生への案内のほか、教員が授業で学生に説明をする際の労力の省力化にもつながることを期待している。

RENANDI ログイン後の左メニュー「FAQ」には、本学が用意したマニュアルが多数登録されている。毎年 RENANDI はバージョンアップによる機能追加/改善がなされており、2011年度末にはメジャーバージョンアップが行われ、画面のレイアウトを含めて大きな変更があった。運用側が独自にマニュアルをきめ細かく整備しようすると、頻繁な修正が必要になる。幸い開発元の日本ユニシス株式会社は、バージョンアップごとにマニュアルを更新しており、これはログイン後の「ヘルプ」から参照できる。今後は、茨城大学の運用に関する部分の利用案内や、言語での説明が難しい箇所には動画チュートリアルを用意するなど、開発元が提供していないものについて、必要な部分を整備するのが効率的と思われる。

利用者からの問い合わせは随時整理して左メニュー「FAQ」のQ and Aに登録している。

3. まとめ

RENANDI は着実に普及している。授業での利用形態も様々である。お知らせを使って授業時間外に学生への周知が可能なことから、次の授業までに準備してほしいことを伝えるもの、小テスト・課題回収などをオンラインで行うもの、コンピュータ演習室で授業中に教材を提示するもの、出席情報を RENANDI 上で管理するものなどがある。利用状況からも見て取れるが、RENANDI は学外アクセスが可能で大学の業務時間外での利用が比較的多いシステムでもある。今後とも、安定稼働と依頼への迅速な対応が求められてくるだろう。

平成23年度
大学教育センター活動内容

平成 23 年度（第 48 回）国立大学教養教育実施組織会議報告

大学教育センター

この会議は、かつて教養部があった国立大学間で開催されていた旧教養部長会議の後継会議で、その目的は質の高い教養教育の実施のための情報交換を行うことにある。本年度は静岡大学を当番校として下記の日程で開催された。

以下この日程の順序に従ってその概要を報告する。

平成 23 年度国立大学教養教育実施組織会議及び事務協議会日程表

1. 期 日 平成 23 年 5 月 26 日（木）～27 日（金）

2. 会 場

(1) 会 議 静岡県男女共同参画センター「あざれあ」

(静岡県駿河区馬淵 1 丁目 17-1 電話番号：054-255-8440)

<http://azarea.pref.shizuoka.jp/>

(2) 懇親会 静岡グランドホテル中島屋

(静岡県駿葵区紺屋町 3-10 電話番号：054-253-1151)

<http://www.sn-hotels.com/sgh/index.html>

3. 開催日程

5 月 26 日（木）

受 付 13:15～14:00

会 議

分科会 14:00～17:00

事務協議会 14:00～17:00

懇親会 18:00～19:30

5 月 27 日（金）

会 議

全体会議（事務代表者同席） 9:00～12:00

解 散 12:00

A. 第1分科会報告

課題：「学習履歴」を基礎とする教育システムの構築とその利用

報告：鈴木敦（キャリア教育部長）

1. 佐藤龍子座長による問題提起

学生の学習歴、学力、将来の志望等の多様化により、教員は教育研究上のガイダンス・指導及び授業デザインが困難になっている。一方、学生は人生における「立ち位置」を確認し、「どの科目をなぜ学ぶのか」について考えを深めなければ「学びのモチベーション」は上がらない。秋田大学・静岡大学では、それぞれに特色ある「学習履歴＝ポートフォリオ」を構築してこの問題に立ち向かっている。本分科会では「学習履歴＝ポートフォリオ」の効率的かつ効果的な活用のための具体的な方策について意見交換を行いたい。

2. 話題提供

1)秋田大学（佐藤博 工学資源研究科教授）

web上に学業・キャリア形成ポートフォリオ「Trace&Do」を構築し、学務管理システムに組み込む。学生の主たる入力項目は「勉学・活動実績」「考えたこと・分かったこと」「今必要なこと・困っていること」「就活状況」等。

2)静岡大学（須藤智 静岡大学大学教育センター講師）

現在作成中の「履修カルテ」をデモ。学生に向けて志望進路別の「履修パッケージ」を作成・提示し、履修目標を意識化させる計画。web上の学務システムと連携して、教員による学生指導・授業改善のPDCAサイクルに活用することを検討中。

3)お茶の水女子大学（小林哲幸 教育機構教育企画室長）

H20から文理融合リベラルアーツを設定。H23から「複数プログラム選択履修制度」をスタート。全科目を難易度で色分けし、視認性を高める。学生の目標・志望進路に合わせた履修モデルを提示。学生は複数のプログラムを選択。とまどった学生のフォローの為に「総合学修支援センター」を設置。

4)名古屋大学（佐野充 教養教育院副院長）

英語学習のポートフォリオ。自己教育力養成を通じて国際基準のAcademic English教育。自習室の効果は期待したほど上がっていない。

3. 意見交換とまとめ

全体にシステム構築が先行しており、なお課題は多い。大量の個人情報扱うので、システムとしてのセキュリティー対策は勿論であるが、「どういう内容を・どこまで記入させ・だれがアクセスして・どう使うのか」という、システム以前の、より根本的な部分での検討と意思統一が急がれる。実用段階においては、「システム運用要員の確保」「学生のサポート体制の確立」「学生による記入・活用を促す諸施策の実施」が必須である。

B. 第2分科会報告

課題：教養教育としての保健体育（健康・運動）科目について

報告：勝本 真（教育点検支援部長）

1. 座長による問題提起

体育のテーマが、この会議の中であまり取り上げられていない状況であり、各大学の状況・取り組みを聞き、今後の改善につなげて行きたいと考えている。貴重な情報交換の場としてとらえている。

2. 話題提供

1)福島大学（中村民雄福島大学理事・副学長）

実践力（リテラシー）の養成をねらいとして6年間実施してきたが、人員削減問題もあり、授業のスリム化や見直しが迫られている。学生のアンケート結果から、コミュニケーション力、リーダーシップなど面で高い評価は得ているが、種目とのミスマッチなど課題も明らかになった。シラバスの統一（学習の狙い、望ましい水準、授業回数・内容）を行い、評価の割合の目安（Aは15%前後、Bは25%前後、Cは50～60%）を決めているが、完全実施にはいたっていない。原発問題の対応が大変な状況である。1年前後期の授業が必修で、2年次以降は選択になっている。

2)長崎大学（橋本建夫大学教育機能開発センター長）

1年次で、前期・健康科学1単位、後期・スポーツ演習1単位の計2単位必修で行っている。平成23年度は、専任教員が7名で、健康科目18コマ、スポーツ演習54コマ(1056時間)で、非常勤の依存率が61%になっている。これを依存率10%に減らすために、根本的に「スポーツ演習」が必修である必要があるのかという議論しようと考えている。

3)富山大学（水谷秀樹人間発達科学部准教授）

平成17年度に、富山医科薬科大学と高岡短期大学が合併して、富山大学になったが、3キャンパスが別々のカリキュラムで運営している。五福キャンパスでは、約1000名の初年次学生が受講しており、卒業要件として2単位必修にしている。1年次前期：「健康スポーツ(実技)」、1年次後期：「健康・スポーツ論(講義)」と「健康スポーツ(実技)」を開講し、2年次には1年次の科目に加えて、「健康・スポーツ演習」を開講し、全て選択必修科目として1単位で設定している。アンケートは4年に1度実施しており、高い評価を得ている。3キャンパスのカリキュラム統一(卒業要件が他の2キャンパスは1単位になっている)の働きかけをしている。平成24年度に向けて、非常勤時間の削減はすでに実施済みで、今後の問題は教員の高齢化と人員確保の問題が大きい。現在、五福キャンパスは11名の教員で運営している。

4)山梨大学（小山勝弘教育人間科学部准教授）

2002年に山梨医科大学と統合し、2007(平成19)年に教養教育の改革を実施した。全学生に対して、保健体育科目を必修とした。教育人間科学部・工学部は4単位、医学部は2単位である。21クラスで合計42コマの授業のうち、約60%が非常勤で運営している。非常勤時間削減は、数年前までは問題になっていたが、現在はまったく取り上げられていない。15回の授業を6回の講義と9回の実技に分けて実施している。講義に関しては、家政教育講座や保健管理センターなどの協力を得ながら実施している。

5)岐阜大学（杉森弘幸教養教育推進センター執行委員会委員）

実技主体の「スポーツ演習（54科目）」と講義主体の「健康科学（5科目）」に分け、59科目開講している。専任教員9名で、最低1授業を担当し、54コマ中32コマを非常勤が実施している。5学部あるが、2単位必修で実施している。体育以外の教官に協力を得て、授業運営を行っている。

6)三重大学（山本俊彦共通教育センター長）

専任教員が11名、非常勤が9名で運営している。教育学部だけが4単位必修であるが、他の4学部は2単位必修である。

7)大阪大学（坂東隆男大学教育実践センター教授）

全学部1年間2単位必修が卒業要件になっている。スポーツ実習A(半期・1単位)+スポーツ科学(半期・1単位)・健康科学実習A(半期・1単位)・健康科学(半期・1単位)として、後半が選択形式になっている。インターナショナルカレッジ(英語だけの講義)を今年から開設した。ガイダンス室と連携して、学生生活指導に生かしている。科目の独自マニュアルを作成し共通理解を深めている。FD活動として公開授業を行っている。

8)愛媛大学（庭先隆愛媛大学教育・学生支援機構共通教育センター）

専任教員は10名、非常勤11名、初年次科目「スポーツ（1年次必修1単位）」は年間50クラス程度実施している。E-fitによる授業モデルを作成し、授業の標準化を行った。指導モデル（E-fit DVD、E-fit カード、指導者用テキスト、シラバス登録の手引き等など）を作成した。

3. 意見交換とまとめ

1)教養教育の担当本数の確認と変更について

長崎大学は、年間1コマが最低で、保健体育は+1の2コマを担当している。福島大学は4～5コマは担当している。スポーツ実技・演習では、多くの種目を準備しなければならないので、非常勤の削減にならない。選択肢が種目でないような工夫も考えられる。

2)教養教育実施体制の共通理解

非常勤担当者のFD活動の受講の義務化(長崎大学)。指導方法の標準化の試み(愛媛大学)。

C. 第3分科会報告

課題：専門学部教員を教養教育に巻き込むための理念と具体的方策について

報告：戸嶋浩明（企画実施部長）

1. 群馬大学（吉田亨 大学教育基盤センター副センター長）による提案理由説明

群馬大学は4学部3キャンパスに分散しており教養教育体制の遅れを認識している。1年生（7割が理系）の教養教育は文系学部所在地の1キャンパスで行われ、責任部局はない。各学部に分属された教養部経験者の多くが退職しつつあるなかで、専門学部教員に教養教育への関心を高めてもらい巻き込むことが不可欠であり、各大学の理念や具体的方策について協議したい。新しい取り組みとして、全学FD、カリキュラムマップの作成、大学教育基盤センターへの改組と教育企画室の設置等を進めている。

2. 話題提供

1) 弘前大学（神田健策 理事・副学長）

①全学担当制として助教以上の教員の授業担当時間を年間30時間（2単位）とすることを原則としている。②科目主任者、原則の授業時間以上を担当した教員、カリキュラム開発推進者を評価しインセンティブとして研究費を配分する。

2) 香川大学（武重雅文 大学教育開発センター長）

①全学出動体制を学則に明記して2年に1回程度の授業担当を義務化した。専門担当分の軽減により教員あたり年0.5コマ程度になる。②全学のDPの共通部分として「香川大学教育スタンダード（5項目）」を学士力の規定として全学共通教育の位置づけを明確にした。③「共通教育コーディネーター制」全学から21人をコーディネーター（2年任期）として教育開発センターの兼任教員、専任教員とともに全学共通教育に関わる体制を整備した。④新学部（新教養部に相当するもの）構想も検討している。

3) 名古屋大学（山本一良 教育教育院長）

①専任および兼任の教員を各学部から配置し（5部門：専任10人、兼任15人）、教養教育院長とともに全学教育のマネジメントを行い、教養教育院統括会議を置き教授会に準じた意思決定機関とした。②全学教育実施体制の原則は有効教員数に基づく全学参加、担当の公平化、担当部局と世話部局の明確化、全学教育への貢献の評価を柱としている。

3. 意見交換とまとめ

運営・実施の担い手の退職、教員不補充や教養プロパーの不在等は各大学に共通の問題

であり、本議題は参加者も多くタイムリーなものであった。担当の定量化・透明化に基づくインセンティブの導入や教養教育担当を行う組織の様々な工夫や再組織化等の工夫がみられた。コーディネーター制や新組織（学部から25～60人程度）によって一定の成果を上げている例がみられた。成果を上げるには、教員の意識改革についての取り組みが重要であり、高い意識と資質を持った教員を人選する必要がある。

D. 第4分科会報告

課題：教養教育における第二外国語について

報告：佐藤和夫（センター長）

1. 石井潔座長（静岡大学理事・大学教育センター長）による問題提起

英語に比して「実用性」が明確でない第二外国語は人件費削減の流れの中でその教育の位置づけや学習上のモチベーションをしっかりと高めるなどの方策を明確にしないと今後ますますその意義が希薄になりかねない。今後のあるべき姿について意見を交換したい。

2. 話題提供

1) 静岡大学（田村充正人文学部教授）

2006年度から学部により必修が学部により、8、4、0単位となっている。言語毎のクラスサイズの差、交流協定校の公用語とのずれ、教養部廃止後の負担感の増大など問題点がある。

2)（小澤弘明千葉大学普遍教育センター副センター長）

必修としている法経学部と医学部を除き、他学部は0～4単位の範囲で選択としている。ヨーロッパ、中国、朝鮮、アラビアの他古典ギリシア語、ラテン語など幅広く学習できる。ただ教授の担い手が歴史や社会学などさまざまな分野の教員であるため、その人たちが退職した後の保証はない。

3) 滋賀大学（北村隆明理事・副学長）

近年、従来の独・仏・中・露などの他にスペイン、ポルトガル語も開講したところ評判がよく、必修を外しても受講者は増えている。2年次に習熟度の関門を設けている。

4) 愛媛大学（弓削俊洋理事・副学長）

組織改革の後、一部の学科・課程を除き第2外国語を「切り捨てた。しかしそうなるはいけない。反面教師として学んでいただきたい。」自由履修とした結果、前期で第2外国語を学習する新生は40%、後期はその中の60%である。

3. 意見交換とまとめ

専任教員や非常勤講師の減少や確保の困難さ（特に地方大学）は共通していたが、初修外国語の受講者はそれほど減少していない。選択肢を増やせば受講者数が増大する可能性もある。やめた方がよいという意見はなかった。「英語とそれ以外の言語は役割を分担し、英語は地域や文化から切り離して純粋にツールとして学ばせる。初修外国語は逆に地域や文化と密接に関連して学ばせたらよい」とする注目すべき意見もあった。英語教育への不満を抱く大学も少なくなかった。英語「関連」教員の自由裁量に任せられ、十分な学習効果が上がっていないことへの危機感が語られた。本学のレベル別英語教育はその点で一歩前進していると言える。

第2 外国語では学生の興味関心やニーズに応じたプログラムを用意すること、運営の安定を図ること、成績評価や単位数、習熟度に応じた展開など検討と工夫が必要なことが確認された。

E. 全体会議（事務代表者同席）

1. 講演 「これからの大学に求められる教養教育について」

文部科学省大学振興課 高橋学務係長

→ 詳細は「文部科学省 配布資料」を参照のこと。とりわけベースは「学士力」にあること、入学から卒業まで全学と学部毎の支援（「点から線へ」）、今日のテーマに沿えばキャリアデザイン、FD部門が重要なこと、人員が減少していることから共通化を目指すこと、私立大学モデルは適用できないし、する必要はない、したがって各大学の実情、内容に応じて国立大学モデルを育てていくべきことが述べられた。

2. 各分科会報告

上記参照。

3. 協議題

「就業力」の育成と教養教育

まず秋田大学、佐藤博工学資源学研究科教授より、GPの資金援助により従来の授業時間数の制限の克服を目指して「授業パッケージ方式による就業力の育成」に取り組んでいること、アカデミックな視点とは異なる角度からの履修指導や授業内容の見直しに取り組んでいる状況が報告された。強調されているテーマは「役に立たないと言わせない大学教育を目指して」である。

*「授業パッケージ方式」：特定の学問体系を前提とした概論、特論、演習、実験等からなるいわば積み

上げ型の授業科目群とは異なり、特定の職業とそこで求められる人材像を具体的にイメージした場合に必要な資質能力を育成する授業科目をパッケージしたもの。具体的職業生活と結びついて限定された科目数からなるパッケージとして提供されるため、それらの授業科目を履修することによって獲得される資質能力と目標となる人間像との関係が比較的明白であり、学生が自らの成長を実感できる。(当番校、静岡大学のHPの説明から)

続いて本学の鈴木敦大学教育センターキャリア教育部長より「根力」、「全学的な組織構成」、「カリキュラム」、「電子ポートフォリオ」を中心に報告があった。

さらに金沢大学、笠井純一共通教育機構長から、学生が社会的・職業的に自立する力を培う「金沢就業塾」を新たに構築し、既存の就業力向上への取組を体系的に取りまとめる予定であること、これまでも、就業に必要な力を「就業基礎力」と名づけ、コンピテンシー理論に基づき解析し、「実行力」「課題発見力」「計画力」「創造力」「発信力」など、12の要素(就業基礎力12の力)に分類してきたこと、これを「就業力に関する指標」として活用し、就業力の向上を目指していることなどについて報告があった。

最後に大分大学、宮町良広経済学部教授より、「持続的就業力を育む地域連携型キャリア教育～28歳時に社会の中核を支える自立した職業人を産・官・学・高で養成するための成果内外の取組」として、1. 学生の職業観・労働観の涵養、2. 職業に必要な基本的知識・技能の修得、3. 経験に裏打ちされた職業適応力という3つの能力の育成を通じ「人生の節目である28歳を迎えた時に社会の中核を支える自立した職業人」の養成をめざしていること、全学的実施体制を整備した上で、教養および専門教育におけるキャリア関連科目を高度化し、新設すること、正課外の就職支援プログラム群の拡充、就業力育成に資する各種地域連携事業の実施、学生の主体的キャリア活動の支援などの事業を、再発見、巻き直し、連携・発展、完成の4段階に分けて年度別に実施することなどについて報告があった。

3. その他

来年度の当番校を千葉大学(関東甲信越)とすること、その次の年度は九州地区の担当であることを確認して解散となった。

平成 23 年度大学教育センター等協議会について

平成 23 年 8 月 2 日と 3 日の二日にわたって一橋大学を会場として同協議会の総会が開催された。都合により初日（2 日）のみの参加となったが、その中から事務局長挨拶要旨、メンバー代表校による発表の要旨、そして第 1 分科会（大教センターが共通教育運営型）と第 5 分科会（高等教育研究拠点、IR（評価・分析型）での意見交換について以下簡略に報告する。第 5 分科会については戸嶋が、その他については佐藤がとりまとめた。

大学教育センター
佐藤和夫、戸嶋浩明

1. 山本眞一事務局長（広島大学高等教育研究開発センター長）挨拶

本協議会は 1996 年発足、1990 年代の大学改革が一段落したところで発足した。単なる情報交換ばかりでなく、クリエイティブなものになっている（分科会等を通じた討論など）。東日本大震災に象徴されるように今年は大きな変わり目であり、2010 年代の変化を考えると大変な時代を迎えている。

質保証の意味するものは新たな学歴社会の出現であり、より高学歴、より高いキャリア、これが世界中を駆け巡っている。教育が大きく変わりつつある。マスター、ドクターが求められている。どの大学を出たかではなく、何を学んだかが重要。自分の関心事だけでなく、広く社会に視野を向け、研究をし、発信していくことが大切。とはいえ、センターは学部・研究科に比べると弱い。しかし必要性・重要性を伝えていくことが大切である。

2. メンバー代表校による発表

(1) 香川大学 「香川大学大学教育開発センターと『教養学部構想』」

武重雅文（教育学部社会科教育教授、政治学）

1) 概要

1990 年代に教養部が委員会方式になった。一般教育部は主として教養科目を受け持つ人たちの集まりであり、身分的には教育学部に属する。その後新しい学部へ移ることがあり、全学的な組織が求められた。香川大学の全教員が 2 年に一度は教養科目を担当する（評議会決定）こととされ、全学的な組織が必要となったことから大学教育開発センター（以下センターと略す）が発足した。2003 年に香川医科大学との合併があり、外国語教育部がセンターに加わった。この年から「大学教育研究センター等協議会」にも加わった。

センター長は副学長が兼ねており、専任教員は 6 名である（すべて外国語）。英語を少人数クラス化し、非常勤講師だが、特命教員 3 名が加わった。事務部門は課長に当たるリーダーを始め 8 名で構成されている。

2) 改革について

学士課程答申に刺激を受けてプロジェクトを立ち上げた。共通教育スタンダード 5 項目を定め、到達基準を設定した。教養科目の区分を改革し、主題科目を二つに分けた。コミュニケーション科目を導入した。共通教育コーディネーター制度を導入し、21 名の教員に依頼。部会長として活動いただくこととした。他の担当者を加えて 30 名ほどで運営委員会を構成した。

3) 学部構想

人文社会系の、教養教育にも貢献する教養学部を構想した。ただ文科省からこの名称を拒まれたので、別の名前（現在はただ「専門学部」としている）を模索中である。中身は 4 つのメジャーと 10 のサブメジャーからなり、サブメジャーを上級学年に受けさせてこれを副専攻とする（ただし、まだ動いていない）ことを考えている。

(2) 金沢大学、「学部教育改革支援」

西山宣昭（金沢大学大学教育開発・支援センター、センター長、大学教育研究開発部門教授）

センターが設置されたのは平成 15 年。部門は三つ（大学教育研究開発部門、評価システム研究部門、教育支援システム研究部門）あり、専任 5 名から成る。評価システムには授業のみならず、教員の教育・研究の評価に対する助言も含まれる。

設立後 2 年くらいは他部局へどうコミットするか模索が続き、盆と正月以外は週間ニュースを出し続けた。こうして認知が進み、第 2 期中期計画に反映させることができた。

センターがいかに全学に貢献できるかをアピールし、認知させるかに努力している。攻め口は学類のディプロマ・ポリシーと教授法（PBL 等）であり、そのためにカリキュラムマップを作成し、カリキュラムへの貢献を図っている。

今後の課題としては共通科目へのいっそうの貢献、教育プログラムの策定、英語教育等へセンターがコミットすることが挙げられる。さらには教養教育のコア科目を策定することも考えている（この部分は発表者の私見とのこと）。

(3) 北海道大学 「アカデミック・サポートによる学習支援」

(共同発表)

北大では総合入試が導入され、文系と理系の別を除き、学部・学科は決めない募集を行っている。この方式で入学した学生は 2 年生になるとき、本人の希望と成績によって所属先が決まる。そのような入試を経た 1 年生に対し、50 人クラスのまとまりを作っている。ここには総合入試の学生も、学部の決まっている学生も含まれる。非常に多様な学生で構成されており、その進路・修学支援をするのもアカデミックサポートセンター（ASC）の役割である。

注：「ASC の 6 名の専任スタッフ（ナビゲーター、インストラクター、アナリスト各 2 人）は北大で博士号を取得した若手研究者で、自らの経験と最新の知識に基づいて、学生の目線での支援を目指しています。また、あわせて広い見識を備えたベテラン教員である 3 人のアドバイザーが、進路選択の相談に応じています。」（北大 ASC の HP より）

学習サポートとは学生に主体的に利用してもらうもの。院生（TA）と専任スタッフで対応する。総合入試の関係からか相談者が多く、特に数学の利用が多い。英語で 2 % 程度であり、ドイツ語、中国語はほとんどない。利用満足度は高い。利用者は平均的學生は少なく、成績のよい、あるいは振るわ

ない学生の利用が多い。「各種アンケートの実施とデータの集計・分析を通してフィードバックする「データ分析機能」(出典、同上)を果たしている。

(4)東北大学 「学生支援としての保健管理センター」

羽田貴史(高等教育開発推進センター高等教育開発部長、大学教育支援センター長)

高等教育開発推進センターは平成16年に各種センターを再構成し、設置された。アドミッションセンター、大学教育研究センター、保健管理センター、学生相談所、情報シナジーセンター情報教育研究部、留学生センター(一部)を改組・統合し、教養教育以外の学生支援を行っている。教員数62名(雇用の資源の出所はさまざま、管理運営のみで教育の義務がない教員もいる、定員はない。任期付きも含め毎年評価があり緊張感がある。)

その中に保健管理センターもある。毎年2万8千名を相手に健康診断をする。学生の10%に肥満がある(DMI基準)。高血圧が問題。高血圧の学生が2千人いる。睡眠検診(肥満には睡眠障害、「眠い」が伴うことが多い)、睡眠中の無呼吸障害も起こる。

○精神保健相談(毎年100名超が新たに相談に訪れる)

○感染症対策:行動計画をたてる(本年4月から)

○結核検診(少数ながらいる)

○AEDの設置(部署ごと)

以上のように多忙な業務を抱えているが、他にも

○全学教育として「健康科学」

○喫煙対策。キャンパス全面禁煙(喫煙所はある)。

○薬物への啓蒙活動

○一般市民への健康支援活動

も担当している。

アンチエイジング(腎機能)を学生に教育(40代以降になってから対策をとってももう遅い)しているが、受診率の点で2、3年生や留学生の受診率が低い。健康と学生の学習行動には密接な関係が、身体(血)と知には大きな関連がある。

運営交付金の削減に小さなセンターでは耐えられない。合併することで大きな決定の重荷を背負わずにすむ。大きくなった所帯の課題は機敏な意志決定。

(5)東京大学 「学生調査、大学評価、国際ランキングの動向研究」

吉見俊哉(大学総合教育研究センター長)、小林雅之(同教授)、劉文君(同特任研究員(野村證券共同研究部門))

大学総合教育研究センターの専任スタッフは7名、3部門(大学改革基礎調査部門、教育課程・方法開発部門、マイクロソフト先進教育環境寄附研究部門)からなる小規模なセンターである。加えて現在「大学の財務基盤に関する共同研究」を野村證券株式会社との間で行っている。

本日のキーワードは「IR」と「ベンチマーク」である。IRはさまざまな形で日本に入ってきてい

る。定義を定めることが（本センターについて述べる場合）有効である。IR の解釈はさまざま（日本でもアメリカでも）である。大学のミッション、役割、変化に応じて考えるべきであり、分散型、統合型がある。IR の組織は東大のような大きな組織では分散型となっている。大学ランキングよりは（比較する対象を絞って指標を定める）ベンチマークを重視している。仕事としては

○大学情報の収集（マクロなもの、広島大学と重複しない形で）

○大学財政の研究（財務センターと連携、外部資金で）

○IR 組織に関する調査

等を行っている。IR の担当部署として国立大学はほとんどが評価関係部署であり、財務関係はやっていない。

ベンチマークは少数の比較対照となる大学を取り上げ、比較するものであり IR をする上で有効である。

日本の IR は入ってきたばかり、まだまだである（中国では盛んにやっている）。各大学が独自に取り組むべきであり、標準的なものはない。

3. 分科会

(1)第1分科会（共通教育運営型）

I. 香川大学への質問

○教養学部こだわりの背景は？

現在、6学部（工、農、教育、経済、法学、医学）から成っているが、もともとは経済と教育の2学部のみだった。人文系の学部がない。理学部がない。教養、総合科目の学部がほしいというのがあった。教育学部への対処が始まり：もともとはゼロ免の問題があった。地域社会学科（経済学部の第4学科、新設）。これを使えば教養学部ができるのではないか、←学長の発想

○共通教育のスタンダードについて？

学士課程の再構築を受けて16の項目に分けて検討。そのうち5つを抽出。バランスを考え、科目を再構成。例：四国学(地域に根ざした科目)、市民としての責任など。

大教センターの中でプロジェクトチームを立ち上げ、3年間検討した。報告書もある。カリキュラムのみならず組織改革を行ったところ20校くらい訪問調査した。信州は人を集めている。愛媛はコーディネーター制度。カリキュラムについては一貫性があるのは11くらいあった。山口、愛媛、金沢、新潟など。

今までの人にも納得してもらいながら、作り上げた。科目の三分の二は従来のもの、残りは新しい、あるいは換骨奪胎。高学年科目にはギリシア、ラテン語などがある。他学部の専門科目は教養科目になる。

II. 各大学教育センター等の報告

農工大: 科学技術系にふさわしい教養科目が歌い文句。しだいに教養科目も学部の方に移りつつある。大教センターが歯止めをかけている状況。独法化以後キャンパス間移動はなく、1学校2制度状態である。

単位にはならないが、ベルリッツの語学コースを希望者に導入。学生に好評である（60名程度の

受講者がある)。

山口大学：共通教育の見直しをアンケートで調査したら、共通で必修との回答があったのは英語のみ、準じて情報リテラシーだった。

ポートフォリオの導入が中期計画に入っている。そもそも論ではなく、方法論が問題になっている。すでに紙ベースの履修カルテは導入済み。電子化が求められている。問題は予算（副学長がしぶっている）。カリキュラムフローチャートをまとめようとしているが、うまくいっていない。

カリキュラム・チェックリストは教養科目に関してはこれから作ろうとしている。非常勤講師が減らされる中で専門科目をどれだけ、提供できるかが鍵。

TOEIC は 6 回（ブリッジを含め）受験機会がある。経済学部の英語の先生ががんばっている。1 回目は全学対象（平均は 600 点を越えており、取り残す者は少数）。ただ 4 年生になっても残している者もいる。

香川大：TOEIC の試験を運営委員会が担っている。

福井大学：高等教育推進センターでは特命教授＋特命助教を採用（この教授は目指すところと合致していなかったなので退任後より若い教員を補充の予定）。

医科大学と統合したが、教養科目は統合できなかった。教養科目のバランスが欠けている（定年退職等による不補充、転用）。就業力 GP を市民的教養として組み込んだ。語学センター設置し、外国語リテラシー、週 2 回、集中方式などを取り入れた。コアカリキュラムも視野にワーキングを立ち上げた。

山梨大学：改組を計画している。外国語改革をして 2 年目である。目標の設定が学生からはわかりにくいと不評。新学部は教育人間学部の空ポストを使う予定。ただ全く別の分野に使われるので元の学部には不満がある。

神戸大学：センターと学部横断の専門分野の集団で教育集団を形成してあっているが、学部ごとにアンバランスがある。各学部評議員を加えることでようやく組織的には安定してきた。

一橋大：英語、TOEFL を全学部対象として 1 年後期に試験を実施し、成績評価に組み込んでいる。成績は学部によりばらつきがある。

教養科目の担当は教養部から配置換えになった教員が担当するのが原則であり、欠員が出た場合、書面できちんと（専任であれ、非常勤であれ）出してもらって確保している。細かい規定がある。

千葉大学：センターには専任 8 人いる（うち 3 人は任期が終われば、学部に帰る）。全学出動体制。教養コア科目が六つある。7.5 回で単位認定。教員にとっては構成が難しい。受講学生が多い（200～300 超）。

課題は情報リテラシーで、もっと新しいものを導入したい。1 単位化には教職の関係で抵抗がある。教養科目のカリキュラムポリシーを作成中。これに基づいてマップを作る予定。

鹿児島大学：教養部改組以来組織改革は行われていない。三つの部でやっている。大学院教育、資格科目も取り込むことも計画している。平成 24 年度からできればよいが、おそくとも 25 年度には実施したい。

九州大学：センターは当初専任 3 名で出発した。改革は当初進まなかった（総長と理事の対立もあった）。九州工科大学との統合問題があり、二つのスタンダードができた。ノルマ制度に代わる大義名分が見出せないでいる。分属の教員ポストを 20 名程度が出して、基幹教育院の設立を目指している。現在キャンパスを移転中であり、改革はその後になってから進捗することになるのかもしれない。

事務局幹事、有本氏（現作陽大学長）：

問題はセンターの位置づけ定まっていないこと。研究を入れておかないと根無し草になる。次のところへいけない。

教養教育について国大協の調査に、「提言」を 100 枚書いた（その後「論点」に変えられてしまった。「迫力に欠ける」）

III. まとめ

一口に「大学教育（研究、開発）センター」とは言っても実態はさまざまである。多数の専任教員を擁して旧教養部とほぼ変わらないものもあれば、純粹に大学教育を「研究」しているところまである。しかし「教養教育（共通教育）」を運営する困難さは概ね共通している。担当体制を「紳士協定」のような強制力のないものや教員の「良心」に頼れば、改革当初はともかく長年のうちにはエゴが積もって破綻する。一橋大学のように採用時の「出身」をあくまでも固定化し、そのポストが空いたときはきちんと教養教育担当の「念書」を確認するくらいにしないと維持できないように思われた。

(2)第 5 分科会

課題：「高等教育研究拠点、IR（評価・分析）」について

日時：平成 23 年 8 月 2 日（火）、14:50～16:50

場所：一橋大学（国立西キャンパス、第 1 講義棟・105 室）

座長：松塚ゆかり（一橋大学教育研究開発センター教授） 出席者：14 名

1. 座長（松塚先生）：本会議の前日（8 月 1 日）に開催された平成 22 年度採択文部科学省大学教育推進プログラム公開シンポジウム「単位実質化マキシマムモデルの実践と普及 ―評価、教育、支援をつなぐカタリストとしての IR―」の講演内容に触れながら、一橋大学における教育改善を实践、普及させるための手法、カリキュラム改革や GPA 導入にむけたデータ収集として 2006 年から IR（Institutional Research）の導入した経緯が説明された。GP 予算によりデータベースを構築し、全学的に情報共有するなかで教育改善や支援の取り組みに活用している。その後 IR に関することを基本的には自由討論する形で分科会は進められた。

2. 小林雅之教授（東京大学）：8 月 2 日の全体会での事例報告の延長的な話として、IR に適切な日

本語訳はなく初期にはデータ収集・分析という観点が強調されていたが、現在では調査・診断・分析等を大学改革や教育改善の促進するために活用するなど広い定義になってきている。日本におけるIRはアメリカやヨーロッパですでに普及しているIRの取り組みを、いくつかの先進的な大学においてその大学独自の必要性に応じて導入してきた段階であり、日本的あるいは各大学独自のIRをこれから確立していく段階であるとの説明があった。東大では学生生活実態調査をデータベースとして、それを基に各学部への情報提供を行い教育改善に活かす取り組みが始まっている。

3. 参加者A: FD的な面もあるのであえてFDと区別する必要があるのか。大学の特性に応じてIRも広い意味でとらえて様々な形態であってよい。大学として戦略的にどのようなデータがほしいのか、どのような組織(例えば大教センター的組織)がIRを担当するのか、それぞれの事情によるだろう。続いて小林教授から、東大は完全に分散型のIR組織形態(評価・分析室、大学総合教育研究センター、入試追跡室)でやっている。各学部においても名称こそないがIR機能を果たしているのも、それらも含めてやっている。全学レベルで合意形成はまだ今後の問題である。

4. 参加者B: 大学設置基準でFDが義務化されたようにIRも義務化されてくるのか? 現在でもIR的な各種情報の収集は様々な評価への対応の基礎データとして大学で行われている。その中から教育改善に何をを使うかという大学執行部の考えか方が問われる。

5. 参加者C: 大教センター的組織に所属する教員のみがIRを担当するのではなく、学生情報を管理している職員も加わって大学としてIRに取り組むべきで、IRを担当できる教員と職員ではない新しい形態の職務を担当できる人材(現在はGP予算等でそのような立場で採用されている方々もおられる)を育成していく必要がある。続いて、松塚教授の個人的意見として大学の方針が明確になってデータベースが構築できているような場合は職員にIRのデータ収集管理はお願いしたいとの意見があった。

6. 参加者D: 同じようなニーズを持っている大学同士、文科省の機能分化項目に対応するようなものも一つの目安として、コンソーシアムを形成してデータ共有・交換が可能なシステムを作っていく道もある。これにより大学ベンチマークが確立されて、指標の定性的あるいは定量的な比較も行えるようになり、有用なデータが大学改革や教育改善につながる。

7. 参加者E: 情報公開、アカウントビリティーに耐えうる観点でデータベースを構築する。

未修外国語に関する訪問調査

本調査は平成 23 年度教育改善経費「習熟度別授業の推進に係る調査と学習相談室の拡充」他の経費の支援に基づき行われたものである。島根大学に関しては神田大吾（大学教育センター未修外国語基礎教育専門部会長）と佐藤和夫（大学教育センター長）、山形大学及び香川大学については佐藤、静岡大学については神田と井澤耕一（人文学部准教授）がそれぞれ担当した。

A. 島根大学外国語教育センター

日時：平成 23 年 9 月 21 日、10:00～12:00

場所：同センター・ワークステーション

応対者：西脇宏（外国語教育センター長、ドイツ語）、廣瀬浩三（同副センター長、英語）

1. 発足とスタッフ

H16 年度の国立大学法人化に伴う大学改革の中で誕生（法人化以後同大で設立された最初のセンター）。教養教育の統括・運営、FD、カリキュラム開発、授業評価等は「教育開発センター」（センター長は副学長、教育開発の専任教員が 3 名）が担当している。学部の教員は教養外国語を担当しない。同センターはセグメントとして独立し、人事権、予算権をもつ。なお島根大学に教養部はなかった。

外国語教育センターの特色はすべての「初修外国語」をセンター専任教員と特別嘱託講師（1 年任期、半期 8 コマ及び 12 時間の学習相談等担当、任期更新あり、公募制）で担当していること。

英語（専任 6、特別嘱託講師 5）

ドイツ語（専任 3、特別嘱託講師 1）

フランス語（専任 1、特別嘱託講師 1）

中国語（専任 0、特別嘱託講師 3）

韓国・朝鮮語（専任 0、特別嘱託講師 3）

日本語（専任 1、特別嘱託講師 0）

2. 外国語教育の目的

- 学生と社会のニーズに即した組織的な外国語教育の実現
- 授業外における積極的な学生支援
- 外国語学習を通じた地域貢献・国際貢献

3. カリキュラム等

- 1) 英語 4、初修 4 必修（ただし今後初修は 2 となる可能性がある。H23.7 に英語 4、初修 2 を最小限とすることが決定された）。原因は今後教養教育の必修単位が圧縮されること。
- 2) 習熟度別：番号の小さいものを終えないと大きいものに進めない。英語はⅠ、Ⅱ、Ⅲ。初修はⅠ、Ⅱ（Ⅱはメニュー方式で「応用」（文法・講読を通じて基礎力向上）、「総合」（外国語資格試験対応）、「運用」（会話・リスニング中心）を選択）。
- 3) 習熟度の低いクラスはネイティブが担当し、モチベーションを高める。

4. 評価

- 1) 100点法による：統一試験80＋平常点20。統一試験は60分。問題は手作り、記述式。解答に60分かかるとような試験問題を作成。ただし、英語はTOEICによるマークシート方式。
- 2) 中間試験が不振の学生に補習を課す（50点台：2時間、40点台：4時間、30点台：6時間）
- 3) かつては恣意的な評価がされ、信じられないような成績分布が見られた。

5. 表彰制度

各言語上位3名を表彰（4単位の合計点）。副賞あり（1位：5,000円、2位：4,000円、3位：3,000円、商品カタログから学生に選ばせる）。資金は外部試験の謝金を寄付してもらいプール（「賞金をもう少し引き上げても対応できる」）。

6. その他補足

○特別嘱託講師は「非常勤講師」と同じく業務委託扱い。専任1名分で2名採用。実労働時間は28時間（授業8コマ＝16時間＋学習支援等12時間）。1時間の賃金は5,200円×28時間＝145,600円、12ヶ月で1,747,200円だが、1人当たり500万円弱かかっているとのこと、かつての「外国人教師」枠分もセンターへ配属）。採用は人材データバンク（WEB）を通じて募集。1件当たり20名程度の応募があるとのこと。基本はネイティブの採用。

○教養部はなく、かつては法文学部の教員が教養も専門も担当した。

○教科書：統一教科書を作成。ドイツ語は出版しているが、フランス語は受講者が少ないので手製（学生の教科書代負担なし）毎年使うが小テスト等を工夫。

○語録

「大事なものは、やる気のあるトップと資金」

「大切なものは教養、専門の別ではなく、学士課程の構築。センター系の部局がこれに貢献する。」

（文責：佐藤）

B. 山形大学

日時：平成23年11月25日13:30から15:30

場所：山形大学基盤教育院

応対者：基盤教育実施会議議長 須賀一好（地域教育文化学部副学部長）

小白川キャンパス事務部 武田仁志（教務課基盤教育担当）

1. 初修外国語の位置づけ

山形大学では本学の教養教育に当たるものを専門との一貫性を考慮して「基盤教育」と称している。基盤教育は大きく下記の5つに分かれており、初修外国語は共通科目の「コミュニケーションスキル2」に位置づけられている。

2. 基盤教育の体系

下記の5つに分類される。

- (1) 導入科目：大学生になるための、自立した姿勢を身につけさせる科目。必修。
「スタートアップセミナー」と称され、2単位必修。
- (2) 基幹科目：学問への動機付け、問題意識の育成。必修（選択必修）。
「人間を考える」と「強制を考える」の2領域に分けられ、それぞれ1科目2単位、計4単位の選択必修。
- (3) 教養科目：学問の多様性を経験させ、知識を広げる。
「文化と社会」「自然と科学」「応用と実際」「山形に学ぶ」の4領域に分けられ、履修方法と修得単位数は各学部が定める。
- (4) 共通科目：学問の実践役立つ知識や能力、健康で強い体力を身につけさせる。
 - 1) コミュニケーション・スキル
「コミュニケーション・スキル1(英語)」4単位と「コミュニケーション・スキル2(初修外国語)」4単位の2領域に分かれ、履修方法と修得単位数は各学部が定める。未修外国語にはドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、韓国語があり、他に留学生用の日本語が開講されている。
 - 2) 情報リテラシー
2単位で原則全員が履修する。
 - 3) 健康・スポーツ
「スポーツ実技」、「健康・スポーツ科学」、「スポーツセミナー」の3区分があり、必修・選択の別及び修得単位数は各学部が定めるが、原則として全員履修。
 - 4) サイエンス・スキル
理系の専門領域を学ぶための基礎的な科目で、各学部（各学科）の意向を踏まえて開設し、履修方法も各学部が定める。
- (5) 展開科目：専門領域を越えた広い視野と健全な批判精神を養成する科目。
各学部が専門教育との関連で開講するタイプと上記教養科目から履修するタイプがある。

3. 初修外国語の履修について

初修外国語は上記のように5言語：ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、韓国語があり、週2回の授業がセットで開講され、一方だけの受講は認められない。前期の2コマに番号Ⅰ、後期の2コマに番号Ⅱが付され、それぞれ2単位となる。これをⅠ年次で学ぶ。

上記Ⅰ及びⅡを履修した後は「発展コース」としてⅢとⅣが用意されているが、これは人文学部の専門科目として開講されているものであり、同学部の学生は基盤教育科目として履修することはできない。したがって他学部の学生のみが履修することになる。

なお、各番号は履修の順序を示しているが、Ⅰが不合格であってもⅡを履修することができる。ただし、Ⅱから始めることはできない。また発展コースのⅢ及びⅣを履修するためにはⅠ及びⅡの両者とも単位取得済みであることを要する。

4. 学部別の履修方法

(1) 人文学部

- 1) ドイツ語を選択する場合は、授業クラスを選択して、Ⅰ（前期）及ドイツ語Ⅱ（後期）の授業を順次履修し、それぞれ2単位合計4単位を修得する。*
- 2) フランス語、ロシア語、中国語又は韓国語を選択する場合は、指定された授業クラスで、Ⅰ（前

期) 及びⅡ (後期) の授業を順次履修し、それぞれ2単位合計4単位を修得する。

(2) 地域教育文化学部

1) Ⅰ及びⅡの履修のしかたは人文学部に同じ。

2) ドイツ語, フランス語, ロシア語及び中国語では発展コースとしてⅢ及びⅣの授業を開講し、それぞれ週1回の授業をもって2単位とする。ただし、発展コースの履修に当たっては、Ⅰ及びⅡの4単位を修得していることを要する。

(3) 理学部

教育学部に同じ。

(4) 医学部

○ 医学科 ほぼ教育学部と同じだが、選択肢に韓国語がない。

○ 看護学科 教育学部と同じ。

(5) 工学部

ほぼ教育学部と同じだが、ドイツ語を選択した場合システム創成工学科所属学生は授業クラスを選択できず、指定となる。

(6) 農学部

教育学部と同じ

* ドイツ語はクラスを選択できるようになっており、次の三つのコースから選択できる。

A コース：ドイツ語基礎＋文献を読むための読解力。文法と読み・書きに重点。

B コース：ドイツ語基礎＋総合的な運用力。文法、文化理解、4技能をまんべんなく学習。

C コース：ドイツ語基礎＋文化理解。文法と文化理解に重点。

5. ⅢとⅣ

Ⅲ及びⅣは下記の専門科目が当てられている。

(1) ドイツ語

Ⅲ：ドイツ語学演習(中級)

Ⅳ：ドイツ語会話・作文(上級)

(2) フランス語

Ⅲ：フランス語学演習(中級)

Ⅳ：フランス語会話・作文(上級)

(3) ロシア語

Ⅲ：ロシア語学演習(中級)

Ⅳ：ロシア語会話・作文(上級)

(4) 中国語

Ⅲ：中国語会話

IV：中国語作文

聞き取り及び下記文献を参照した。

1)平成 23 年度山形大学基盤教育案内

2)2011 山形大学基盤教育シラバス

3)山形大学基盤教育院 web サイト：<http://campus3.kj.yamagata-u.ac.jp/kyoikuin/index.html>

(文責：佐藤)

C. 香川大学の初修外国語について

日時：平成 24 年 2 月 29 日 10:00～12:00

場所：香川大学幸町キャンパス総合企画室

対応：高木文夫大学教育開発センター外国語教育部会長他

(この調査は新学部に関する調査に付随して行われた。)

1. 外国語の履修

既修（英語）と初修（ドイツ語・フランス語・中国語・韓国語）の二つに分かれ、必要修得単位は学部・学科（課程）により異なる。留学生には日本語・日本事情が開講されている。

2. 必修単位

1)教育学部

学校教育教員養成課程

既修・初修から 1 種類 6 単位以上

人間発達環境課程

同じく 1 種類 6 単位以上、あるいは 4 単位以上（→要問い合わせ）

2)法学部

既修・初修のいずれか一方を 6 単位以上、他方を 4 単位以上、合わせて 10 単位以上。

3)経済学部

法学部に同じ。

4)医学部

医学科：既修 5 単位以上、初修 4 単位以上

看護学科：既修 6 単位以上

5)工学部

既修 6 単位以上、初修（1 種類）4 単位以上

6)農学部

工学部に同じ。

3. 担当体制

専任教員の所属先は経済学部社会システム科学科（？要確認）。既修と同じく半専任（特任講師：任期 1 年、5 年まで更新可）非常勤講師は地域柄得にくいので、年 15 コマ担当する特任講師を雇

用している。専任のいない外国語はない。かつてロシア語も開講していたが、韓国語に代わった。受講者が多いのは中国語とドイツ語それぞれ 200 名。ついでフランス語と韓国語それぞれ 100 名くらい。近年アジア系の外国語受講者が増えている。

4. 特色

- 1)連動型とし、週 2 回通しの授業で構成され、単位は 2 単位。分割はできない。
- 2)2 年次は非連動型で週 1 回開講 1 単位。
- 3)外国語の選択は入学時に希望を取り、クラス分けは掲示で発表する。学生は必修としては希望通りの外国語を学ぶことができる。
- 4)どの外国語を選択してもメニューが同じくなるように計画している。
- 5)外国語の担当教員は一般教育部から一斉に経済学部へ移動した (→要確認)。

6)区分

ローマ数字で区別：

I は 1 年前期、II は 1 年後期、III は 2 年前期、IV は 2 年後期。I と II は通しで初級の前半と後半を学ぶ。従って習熟度別にはしていないが、I は II を学ぶための前提となっており、「全学共通科目修学案内」は「II の履修は I を履修しておく必要があります」と説明されている。III を学ぶためには I 年次に I か II か少なくとも II 単位を履修する必要がある、IV を学ぶためには III を履修する必要がある。順番をそろえる必要がある、I と III、あるいは II と IV という組み合わせはできない。

(文責：佐藤)

D. 静岡大学

日時：平成 24 年 2 月 16 日、10:00～11:30

場所：静岡大学

対応者：石井潔 (理事/副学長)、田村充正 (入文学部教授、ドイツ語) ほか

1. 外国語の履修

既修 (英語) と初修 (ドイツ語・フランス語・中国語・現代韓国語・スペイン語・ロシア語) の二つに分かれ、必要修得単位は学部・学科 (課程) により異なる。留学生には日本語・日本事情が開講されている。

2. 必修単位

	1 年次必修	同選択	2 年次必修	同選択
人文学部 (言語文化学科・法学科)	8 単位	---	---	4
人文学部 (社会科学科・経済学科)	8	---	---	---
教育学部	4	---	---	2
理学部	4	---	---	2
農学部	---	---	---	4
工学部<浜松>	---	---	---	---
情報学部<浜松>	4	---	---	8

経緯：2006年度から英語科目「スタンダード・イングリッシュ」及び「パワー・イングリッシュ」の新規開講に伴い、共通教育の大幅なカリキュラム改革が行われ、初修外国語の履修単位数が大幅に削減された。

3. 担当体制

主に人文学部の専任教員が担当しているが、教養部所属教員の担当本数がそのまま学部担当責任本数と換算され、かつ、後任教員は前任教員の担当本数を引き継ぐものとされているため、同一学部内でA教員2コマ、B教員6コマといった担当本数の違いが存在したまま今日に至っている。

加えて、大学教育センターに専任教員2名（ドイツ語とフランス語各1名。5年任期で再任は1回のみ。但しポスト変更は新規採用扱い）がそれぞれ年間12コマずつ担当している。

4. 特色

- 1) 倍読み：外国語1科目が2単位なので、例えば人文学部の場合、前期に「I-a」と「I-b」、後期に「I-c」と「I-d」の計4科目8単位を必修で履修し、二年次に「II-a」と「II-b」の2科目4単位を選択履修する方式となっている。
- 2) 名称が二本立て：同じ教養外国語科目であっても、教育学部等の学生が履修する科目は週一回であるため、一年次前期「A-1」、同後期「A-2」、二年次「B」という名称となっている。「全学不統一な教育編成になったため、改革の目的であった経費運営の削減に貢献できないばかりか、余分な負担さえかかる実情がある」（「国立大学教養教育実施組織会議」2011年5月26日付け報告書「静岡大学初修外国語教育の現状と問題点」より）。
- 3) 習熟度別履修は実施していない。

(文責：神田)

5月25日(水) 第47回12大学教養教育実施組織代表者会議・事務協議会
～5月26日(木) (主催：愛媛大学)

- ・教養教育のカリキュラム評価について
- ・教養教育と副専攻型プログラムについて
- ・キャリア教育に対する大学教育センターとしての取組状況
- ・体系的な学士教育課程における教養教育の役割について
- ・新生に対する共通教育ガイダンス及び履修登録指導について
- ・リメディアル教育におけるeラーニングの有効活用について
- ・教養教育におけるGPAおよびCAP制の活用状況と有効性
- ・教養教育実施組織における防災対策
- ・eポートフォリオへの取組事例

5月26日(木) 平成23年度国立大学教養教育実施組織会議及び事務協議会
～27日(金) (主催：静岡大学)

- ・「就業力」の育成と教養教育
- ・「学習履歴」を基礎とする教育システムの構築とその利用
- ・教養教育としての保健体育(健康・運動)科目について
- ・専門学部教員を教養教育へ巻き込むための理念と具体的方策について
- ・教養教育における第二外国語教育について
- ・危機管理対応について

6月23日(木) 大学教育センター基礎教育運営委員会(第2回)

- ・平成24年度教養バンドについて
- ・平成24年度教養科目ガイドラインについて
- ・平成23年度前学期授業アンケートについて
- ・平成23年度非常勤講師任用計画の変更について
- ・平成23年度後学期「事前申告」について
- ・茨苑祭準備に伴う休講措置について

6月28日(火) 大学教育センター会議(第3回)

- ・入試問題(英語)共通化に関する懇談会について
- ・入学戦略会議について
- ・教育改善経費について
- ・東日本大震災の影響による夏期の節電対策について

7月26日(火) 大学教育センター会議(第4回)

- ・共通教育棟1号館西棟講義室等の貸与について

- 7月26日（火） 大学教育センター専門部会長会議（第2回）
- ・平成24年度非常勤講師時間数配分（案）について
 - ・平成24年度教養教育基本計画について
- 8月 3日（水） 茨城大学大学教育センターFD
- 「eポートフォリオの導入と今後の展開
～ポートフォリオの教育的意義～」
- 講師 鈴木 克明 氏（熊本大学大学院教授）
- 8月 4日（木） 大学教育センター基礎教育運営委員会（第3回）
- ・平成24年度教養教育の基本計画（案）について
 - ・平成24年度分野別基礎及び主題別ゼミナールの開講バンドについて
 - ・平成24年度茨城大学学年暦（案）について
 - ・平成24年度新入生オリエンテーション日程表（案）について
 - ・平成23年度非常勤講師任用計画の変更について
 - ・就業力育成GPインターンシップコーディネータ採用について
- 9月27日（火） 大学教育センター会議（第5回）
- ・茨城大学グリーン化推進委員会規則の制定について
 - ・平成24年度の概算要求に関する諸問題について
 - ・節電対策について
- 9月29日（木） 大学教育センター専門部会長会議（第3回）
- ・平成24年度教養教育実施計画（1次案）について
- 9月29日（木） 大学教育センター基礎教育運営委員会（第4回）
- ・平成24年度茨城大学学年暦（案）について
 - ・平成24年度新入生オリエンテーション日程表（案）について
 - ・平成23年度非常勤講師任用計画の変更について
- 10月25日（火） 大学教育センター会議（第6回）
- ・各部（企画実施、教育点検支援、キャリア教育、総合英語、理系基礎教育）の報告を定例化することについて
 - ・総合英語新採用人事について
 - ・年報および紀要について
 - ・節減検討諮問会議について
 - ・大学教育シンポジウムの準備について

- 10月27日（木）大学教育センター基礎教育運営委員会（第5回）
- ・平成24年度教養教育実施計画（第2次案）について
 - ・茨城大学における教養科目に係る履修規則の一部改正について
 - ・平成23年度非常勤講師任用計画の変更について
 - ・交流協定校における研修の単位認定について
 - ・茨城大学FDネットワーク委員会規則（案）について
- 11月 2日（水）茨城大学大学教育センターシンポジウム
「機能するGPA」
講師 半田 智久 氏（お茶の水女子大学教育開発センター教授）
- 11月24日（木）大学教育センター基礎教育運営委員会（第6回）
- ・茨城大学FDネットワーク専門委員会細則（案）について
 - ・茨城大学との交流協定校での短期語学研修に基づく教養科目の単位認定に関する申し合わせ（案）について
 - ・仁済大学校韓国語短期研修に係る単位認定（案）について
 - ・シドニー工科大学英語短期研修に係る単位認定（案）について
 - ・平成23年度非常勤講師任用計画の変更について
- 11月29日（火）大学教育センター会議（第7回）
- ・各部（企画実施、教育点検支援、キャリア教育、総合英語、理系基礎教育）の報告について
 - ・入試問題（英語）共通化について
 - ・平成24年度大学入試センター試験実施に伴う試験監督委員等の配置について
 - ・ローザ・ブルムラ編集委員の任期等について
 - ・「法政大学第9回FDシンポジウム」について
 - ・平成24年度大学入試センター試験当日の水戸キャンパスの入構規制について
 - ・授業中に学生による問題行動が発生した場合の暫定的な対応指針について
 - ・節減検討諮問会議について
 - ・冬期の暖房運転について
- 12月20日（火）大学教育センター会議（第8回）
- ・各部（企画実施、教育点検支援、キャリア教育、総合英語、理系基礎教育）の報告について
 - ・ローザ・ブルムラ編集委員の任期等について

- ・ 科研費の間接経費の用途について
- ・ 理系基礎G Pで購入したP Cの扱いについて

- 1月24日（火） 大学教育センター会議（第9回）
- ・ 各部（企画実施、教育点検支援、キャリア教育、総合英語、理系基礎教育）の報告について
 - ・ ローザ・ブルムラ編集委員会に関する申し合わせについて
 - ・ 教育研究評議会
- 1月26日（木） 大学教育センター基礎教育運営委員会（第7回）
- ・ シドニー工科大学英語短期研修に係る単位認定（案）について
 - ・ 平成23年度非常勤講師任用計画の変更について
 - ・ 平成24年度非常勤講師任用計画について
 - ・ 平成24年度教養科目ガイドライン（H23.6.23承認済）の修正について
 - ・ 総合英語（学術英語）の受講について
 - ・ 教養科目における成績評価に関する申し立て制度（案）について
- 1月31日（火） 茨城大学FDネットワーク専門委員会（第1回）
- ・ 規則並びに各委員の紹介について
 - ・ 各学部のFD活動状況について
 - ・ 今年度の活動計画について
- 2月21日（火） 大学教育センター会議（第10回）
- ・ 各部（企画実施、教育点検支援、キャリア教育、総合英語、理系基礎教育）の報告について
 - ・ ローザ・ブルムラ編集委員会からの報告について
 - ・ 大学図書館本館の増改築について
- 2月22日（水） 大学教育センター基礎教育運営委員会（第8回）
- ・ 平成24年度非常勤講師任用計画について
- 3月22日（木） 大学教育センター基礎教育運営委員会（第9回）
- ・ 平成24年度非常勤講師任用計画について
 - ・ 平成25年度教養教育の基本方針（案）について
 - ・ 茨城大学における教養科目に係る履修規則の一部改正（案）について
 - ・ 平成24年度の専門部会長及び兼務教員について
 - ・ 茨城大学大学教育センター規則の一部改正（案）について

- 3月27日(火) 大学教育センター会議(第11回)
- ・各部(企画実施、教育点検支援、キャリア教育、総合英語、理系基礎教育)の報告について
 - ・図書館本館増改築WGについて

平成23年度大学教育センター関係委員名簿

【基礎教育運営委員会委員】

センター長 佐藤和夫（人文学部）
副センター長 戸嶋浩明（農学部）
副センター長 勝本真（教育学部）
副センター長 鈴木敦（人文学部）
専任教員（教育点検支援部）梅原守道（大学教育センター）
専任教員（教育点検支援部）宇野美由紀（大学教育センター）
教務委員長 渋谷敦司（人文学部）木村勝彦（教育学部）大西和榮（理学部）
今井洋（工学部）久留主泰朗（農学部）
留学生センター専任教員 安龍洙
学務部長 椎名俊雄

【企画実施部基礎教育専門部会委員】

企画実施部長 戸嶋浩明
人文系基礎教育専門部会
部会長 山田桂子（人文学部）
兼務教員 加藤篤志（人文学部）有富美代子（人文学部）金本節子（人文学部）
甲斐教行（教育学部）
社会系基礎教育専門部会
部会長 中田潤（人文学部）
兼務教員 金光男（人文学部）原口弥生（人文学部）石井智弥（人文学部）
賀来健輔（教育学部）
自然系基礎教育専門部会
部会長 岡田誠（理学部）
兼務教員 吉田龍生（理学部）下村勝孝（理学部）石見幸男（理学部）
森聖治（理学部）伊藤孝（教育学部）堀辺忠志（工学部）
赤羽秀郎（工学部）坪井一洋（工学部）井上栄一（農学部）
伊丹一浩（農学部）吉田宏二（理系基礎）
総合基礎教育専門部会
部会長 安田健一（教育学部）
兼務教員 青山和夫（人文学部）村山朝子（教育学部）関友作（教育学部）
榭守（教育学部）

外国語基礎教育専門部会

部会長 神 田 大 吾 (人文学部)

兼務教員 真 柳 誠 (人文学部) 鄭 基 成 (人文学部) 糟 谷 政 和 (人文学部)
安 龍 洙 (留学生センター)

総合英語教育専門部会

部会長 福 田 浩 子 (人文学部)

兼務教員 岡 山 陽 子 (大学教育センター) 岡 崎 正 男 (人文学部)
小 林 邦 彦 (人文学部) 上 田 敦 子 (大学教育センター)
君 塚 淳 一 (教育学部) 長谷川 博
篠 嶋 妥 (工学部) 小 島 俊 雄 (農学部)

情報基礎教育専門部会

部会長 羽 渕 裕 真 (工学部)

専任教員 梅 原 守 道 (大学教育センター) 宇 野 美由紀 (大学教育センター)
兼務教員 大 瀧 保 広 (IT基盤センター)

健康・スポーツ基礎教育専門部会

部会長 日 下 裕 弘 (教育学部)

兼務教員 吉 野 聡 (教育学部) 渡 邊 將 司 (教育学部) 寺 本 輝 正 (教育学部)

理系基礎教育部 吉 田 宏 二 (大学教育センター) 梅 津 健一郎 (教育学部)

渡 邊 辰 矢 (理学部) 金 幸 夫 (理学部)

平 澤 剛 (工学部) 青 野 友 佑 (工学部)

梅 原 守 道 (大学教育センター)

総合英語教育部 福 田 浩 子 (人文学部) 小 林 邦 彦 (人文学部)

岡 山 陽 子 (大学教育センター) 上 田 敦 子 (大学教育センター)

有 田 由紀子 (大学教育センター)

【教育点検支援部】

教育点検支援部長 勝 本 真

梅 原 守 道 (大学教育センター) 宇 野 美由紀 (大学教育センター)

専門部会長 山 田 桂 子 (人文学部) 中 田 潤 (人文学部)

岡 田 誠 (理学部) 安 田 健 一 (教育学部)

神 田 大 吾 (人文学部) 福 田 浩 子 (人文学部)

羽 渕 裕 真 (工学部)

大学教育センター理系基礎教育部教科書編集委員会（2011年度）について

教養科目の分野別基礎科目・自然系のうち工学部生対象の下記授業は、大学教育センター理系基礎教育部の主導のもと、複数クラスで授業内容をそろえ統一的な枠組みで実施されている。

科目名	学期	対象
数学／微分積分Ⅰ	前学期	工学部1年生（機械工学科を除く）
物理学／力と運動	前学期	工学部1年生（機械工学科・生体分子工学科を除く）
数学／微分積分Ⅱ	後学期	工学部1年生（メディア通信工学科を除く）

これらの授業で用いる教科書は、科目ごとに設置する編集委員会において作成・改訂されている。各編集委員会の委員は年度ごとに定められる。下記に、2011年度の各委員会の構成員名、および当該年度の出版概要を記す。

○微分積分Ⅰ教科書編集委員会

代表委員：梅原守道（大学教育センター）

委員：梅津健一郎（教育学部）、岡裕和（工学部）、曾我日出夫（教育学部）、
平澤剛（工学部）、渡邊辰矢（理学部）

書名：微分積分Ⅰ（第2版第2刷、2012年3月30日発行）

出版社：学術図書出版社

I S B N : 978-4-7806-0251-7

○力学教科書編集委員会

代表委員：吉田宏二（大学教育センター）

委員：青野友祐（工学部）、湊淳（工学部）

書名：大学生のための力と運動の基礎（初版第2刷、2012年3月30日発行）

出版社：培風館

I S B N : 978-4-563-02295-2

○微分積分Ⅱ教科書編集委員会

代表委員：岡裕和（工学部）

委員：植木誠一郎（工学部）、梅原守道（大学教育センター）、平澤剛（工学部）、
細川卓也（工学部）

書名：微分積分Ⅱ（第2版第1刷、2011年9月30日発行）

出版社：学術図書出版社

I S B N : 978-4-7806-0264-7

以上

大学教育センター理系基礎教育部

平成23年度大学教育センター
専任教員研究活動

平成 23 年度活動内容報告

岡山 陽子 OKAYAMA, Yoko

(大学教育センター総合英語教育部)

本年度の活動概要

担当授業は、総合英語レベル4を8コマ、レベル3を4コマ担当した。および、教養総合科目表現・言語系科目「簡単な絵本からペーパーバックへー多読多聴でめざせ100万語講座】(後学期2単位)(共同担当者:上田敦子)を担当した。また、この講座は、社会人への公開授業とした。

総合英語レベル4のコーディネータを担当し、カリキュラム・教育法構築作成と教材選定、レベル4の担当教員への日常的FD等を行った。さらに、総合英語FD担当者として総合英語FD(平成24年1月18日、参加者20名)の企画実施を行った。このFDでは、総合英語の授業の質向上のために、大学教育センター推奨授業表彰者1名とネイティブの非常勤講師3名に総合英語の授業内容の工夫についての講演を行ってもらい、意見交換を実施した。

「大学教育センターTAガイダンス」を平成23年5月14日に実施し、TA希望の大学院生に対して、「茨城大学ティーチング・アシスタント用説明資料」を使用してTAの仕事内容を中心に説明した。

前学期・後学期の月・水曜日午後1時から5時まで多読室を公開し、学生や社会人の受講者の便宜を図った。

ローザブルムラ編集長としてローザブルムラ44号出版に携わった。後学期には、学習相談室(英語・数学・物理)の企画実施に係わった。

平成21~23年度の科研費補助金【基盤研究(C)課題番号:21520631-0004】「英語習得用多読的シャドーイングと多読的音読の効果的併用方法の研究と普及」を研究代表者(他研究分担者1名)として、また、平成21~23年度科学研究費補助金【基盤研究(C)課題番号:21520564-0003】「高等教育における効果的な多読授業の研究ー具体的な指導法の提案と普及ー」(研究代表者:上田敦子)に、研究分担者として参加し研究を行った。

平成24年8月22日~9月10日まで、目下取組中の論文”The Interplay of Language Policies, Planning and Practices in Palau”(仮題)のために、パラオ共和国において現地調査を実施した。

平成 23 年度活動内容報告

上田敦子

研究・発表

平成 23 年度も前年度に引き続き、多聴多読を取り入れた英語教育の研究を進めた。

○4月 "Extensive reading and the effect of shadowing". Takayuki Nakanishi & Atsuko Ueda, Reading In A Foreign Language Vol23, Number 1, pp.1-16, 2011 (研究論文)

多読とシャドーイングを同時に行った場合の効果を質的および量的分析を行った。

○7月29日 "The effect of learning styles on extensive reading" Atsuko Ueda & Takayuki Nakanishi, The 9th ASIA TEFL International Conference Seoul, Korea (学会発表)

学習スタイルが多読の学習に影響を与えうるか、という調査を行った。結果としては、どのような学習スタイルをとる学習者も、多読において学習効果は変わらないということがわかった。

○12月 "Extensive Reading and Learning Styles" Ibaraki JALT Mini-conference (発表)
多読の授業方法の解説を行いつつ、学習スタイルと多読学習の関係も説明した。

○科学研究費受給による研究が3年目を迎えた。「高等教育における効果的な多読授業の研究—具体的な指導法の提案と普及—」共同研究者は岡山陽子(大学教育センター準教授)、神田みなみ(平成国際大学教授)、黛道子(順天堂準教授)、高瀬敦子(近畿大学講師)。

この科学研究費は23年度で終了したが、24年度以降も科学研究費の受給が決定している。

授業

授業は年間14コマ担当した。

前期 週6コマ(総合英語3本×2、総合科目1本)、夏季集中1本、後期 週7コマ(総合英語3本×2コマ、総合科目1本)

地域・社会貢献

○総合科目(「絵本からペーパーバックまで 100万語多読講座」)にて社会人受け入れ

○水戸地域にある常磐大学においても非常勤講師を担当(内容は多読多聴)

○茨城大学 ESS が主催するスピーチコンテスト「茨城大学学長杯」審査員を担当

その他の活動

総合英語教育部員として、レベル1のコーディネータ、CALLを担当した。

活動内容（平成 23 年度） 梅原 守道 (UMEHARA, Morimichi)
大学教育センター専任教員（職名：准教授）

所属・委員会など

本務	教育点検支援部
兼務	理系基礎教育部 (企画実施部)、情報基礎教育専門部会 (企画実施部)
他委員会など	微分積分 I 教科書編集委員会委員 (代表委員) 微分積分 II 教科書編集委員会委員 茨城大学 FD ネットワーク専門委員会委員 (平成 24 年 1 月～) ローザ・プルムラ編集委員会委員 (委員長：～平成 23 年 9 月)

授業担当

- 微分積分入門 (茨城大学前学期、教養科目 (分野別基礎科目【自然系】)、2 単位)
- 微分積分基礎 (茨城大学前学期、教養科目 (分野別基礎科目【自然系】)、2 単位)
- 微分積分 I (茨城大学前学期集中、教養科目 (分野別基礎科目【自然系】)、2 単位)
- 微分積分 II (茨城大学後学期 B コース、教養科目 (分野別基礎科目【自然系】)、2 単位)

出張 (教育関連のもの)

1. 法政大学第 9 回 FD シンポジウム (主催：法政大学教育開発支援機構 FD 推進センター)、2011 年 10 月 8 日、法政大学、聴講参加
2. 2011 年度第 17 回 FD フォーラム (主催：大学コンソーシアム京都)、2012 年 3 月 3 日～4 日、京都産業大学、聴講参加

研究論文

- [1] M. Umehara and A. Tani, Free-boundary problem of the one-dimensional equations for a viscous and heat-conductive gaseous flow under the self-gravitation, submitted. (査読付き学術雑誌に投稿中)
- [2] M. Umehara, Global existence of the spherically symmetric flow of a self-gravitating viscous gas, submitted. (国際会議プロシーディングス (査読付き) に投稿中)

口頭発表 (研究発表)

1. 梅原守道, Global behaviour of the spherically symmetric flow of a self-gravitating and viscous gas over the rigid core, 第 62 回 YU NONLINEAR SEMINAR, 山口大学, June 28, 2011.
2. 梅原守道, 自己重力粘性ガスの球対称な流れの長時間存在, 日本流体力学会年会 2011, 首都大学東京, September 7, 2011.
3. M. Umehara, Global existence of the spherically symmetric flow of a self-gravitating viscous gas, *The 4th MSJ-SI Nonlinear dynamics in partial differential equations (in contributed talks)*, Kyushu Univ., Japan, September 20, 2011.
4. 梅原守道, Global existence of the spherically symmetric motion of a self-gravitating viscous gas over the rigid core, 第 7 回非線型の諸問題, 熊本大学, September 24, 2011.
5. M. Umehara, Spherically symmetric flow of the self-gravitating viscous gas over the rigid core, *Third China-Japan workshop on mathematical topics from fluid mechanics*, Northwest Univ., Xi'an, China, October 25, 2011.
6. 梅原守道, Large-time behaviour of the spherically symmetric flow of a self-gravitating and viscous gas, 非線形解析セミナー, 慶応義塾大学, December 2, 2011.

研究助成

1. 科学研究費補助金 (日本学術振興会)、種目：若手研究 (B)、研究課題名：連続体近似による天文現象のモデル化と数学解析、平成 23～25 年度、課題番号：23740099、研究代表者

以上

活動内容 宇野 美由紀

大学教育センター教育点検支援部（情報基礎教育専門部会，IT 基盤センター教育 IT 化推進部門兼任）

授業

- ◆ 前期：情報処理概論×2
- ◆ 夏季集中：情報処理概論×1

出張

- ◆ Japan Conference on Discrete and Computational Geometry 2011（2011年11月28日～29日，東海大学代々木キャンパス）
- ◆ クラウドサービスのための SINET 及び学認説明会（2011年12月21日，国立情報学研究所）
- ◆ Ja Sakai カンファレンス（2012年3月9日～10日，法政大学）

出版物

論文

- ◆ “4-colored visual cryptography schemes with high contrast”，[Miyuki UNO](#)，Yukiko ISHIBASHI and Mikio KANO，International Journal of Information Science and Computer Mathematics, vol. 4, no. 2, pp. 61-77, November 2011.

その他の活動

- ◆ RENANDI・ALC、e-learning システムの管理・運営、利用者へのサポート
- ◆ RENANDI 講習会講師
- ◆ e-learning システム利用状況のデータ提供
- ◆ 情報基礎教育専門部会 FD の一部担当
- ◆ 大教センター教育用 PC 端末群管理・更新方針策定
- ◆ 大教センターウェブサイト管理

活動内容 蜂屋 大八 HACHIYA, Daihachi

(大学教育センターキャリア教育部)

1. 本年度の活動概要

9月に本学に採用になって以降、「根力育成プログラム」の運営に関わった。本プログラムでは、本学卒業者の能力指標として「根力」を掲げ、①その構成要素を定義し、②体系化により効果的な教育の展開を図るとともに、③その有効な教育法の一つである PBL の推進と、体系化したカリキュラムの「見える化」推進のための④ポートフォリオシステムの導入を進めることとなっている。このため、本年度の私の活動は、①及び②を優先課題として、他大学及び関連企業の調査を行った(「2.本年度の出張」のとおり)。その成果は、並行して進められてきた④として実現を図ることができた。また、③については、平成24年度開講のステップアップ科目の授業設計を行うとともに、特に人文学部を対象として行われる根力強化プログラムと根力実践プログラムの開発として行った。後者については、地域連携の要素を取り入れた PBL 科目の創設に向け、地域との協働でカリキュラムづくりを進め、一部、平成24年度から実施することとなっている。

2. 本年度の出張

他大学および就業力育成関連企業等における先行研究・事例調査を行うにあたり、本プログラムの強化・深化・具現化を図るために必要な事業推進項目を抽出し、時系列的に工程として並べた。これらの「作業工程」をベースに、それぞれの項目に対応した調査先を設定し、以下のとおり実施した。各訪問調査内容については概略にとどめるが、各調査先で受けた示唆や新たな発見は、本学のシステム設計およびPBL開発等に反映されている。

		事業推進項目					
		A	B	C	D	E	F
		根力指標化・測定手法の確立	ポートフォリオ開発	フレッシュマン・ゼミ	PBLの開発・普及	フォローアップ体制	点検・評価・連携
行程	1	根力プログラムの対象範囲の確定(正課・課外・就職)	仕様策定 記載項目及びインタビューフェイス	育成内容の精選 最低限盛り込む内容の平準化	PBL導入目的・対象範囲の確定	根力育成のプロセス管理	就職状況の把握(達成目標評価)
	2	根力構成要素の抽出方法の検討	教育課程体系化、CPの確立	共通テキスト作成ガイドライン	PBL手法の研究と実践	ポートフォリオを活用した就学支援の確立	自己点検・評価システム確立
	3	評価指標明確化、社会的通用性の確保	カリキュラム・ディベロップメント、FD	担当教員FD	PBL活用の手引き作成	アドバイザー教員FD	外部(第三者)による評価の実施(企業の視点)
	4	根力証明書 学生が面接等で提示できるように	マニュアル作成 使用方法、学生指導方法	根力の基盤スキル キャリア・プランニングの位置づけ	カリキュラム上の位置づけ 全学的普及促進	根力育成の視点でのフォローアップ	改善・充実、新しい展開へ

○山形大学

平成23年9月26日、11月25日

調査項目：A-1、A-2、A-3、B-1、B-2、

B-3、B-4、C-1、C-2

○キャリアデザイン学会(日本大学)

平成23年10月1~2日

調査項目：A-3、B-1、D-1、D-2

○首都大学東京FDセミナー

平成23年10月6日

調査項目：D-1、D-2

○関西外国語大学

平成23年10月17日

調査項目：A-1、A-2、A-3、C-1、C-2、

D-1、D-2

○大阪市立大学

平成23年10月18日

- 調査項目：A-1、A-2、A-3、A-4、B-1、D-2、D-3、D-4
F-1
- 同志社大学PBL教育フォーラム
平成23年10月22日
調査項目：D-1、D-2、D-3、D-4
- PROGセミナー (RIASEC)
平成23年11月4日
調査項目：A-1、A-2、A-3
- 岩手県立大学
平成23年12月9日
調査項目：A-1、A-2、A-3、B-1、D-1、D-2
- 倉敷芸術科学大学キャリアデザインシンポジウム
平成23年12月20日
調査項目：A-1、A-2、A-3、B-1、B-4、E-3
- 京都産業大学
平成23年12月21日
調査項目：A-1、A-2、A-3、C-1、C-4、D-1、D-2、D-4、E-1
- 三重大学
平成24年1月17日
調査項目：C-1、C-2、C-3、C-4、D-1、D-2、D-3、D-4
- 高田短期大学
平成24年1月18日
調査項目：A-1、A-2、A-3、B-1、B-4、E-1、E-2、F-1、F-4
- 広島大学教育GP総括シンポジウム
平成24年2月7日
調査項目：B-2、C-1、D-1、D-2、D-3、D-4
- 長崎大学
平成24年2月16日
調査項目：D-1、D-2、D-3、D-4
- 下関市立大学就業力シンポジウム
平成24年2月18日
調査項目：D-1、D-2
- 大学コンソーシアム京都FDフォーラム (京都産業大学)
平成24年3月3～4日
調査項目：A-1、A-3
- 京都大学教育研究フォーラム
平成24年3月15～16日
調査項目：A-1、A-3、B-2、B-3、D-4

3.学外での講演等

- 平成23年10月29日 佐賀大学事務系職員勉強会
「魅力ある大学作りのために—佐賀大学の教育力向上を目指して—」
第2回「魅力ある大学作りのために～私たちにできること～」講師
- 平成23年11月11日 横浜国立大学連続公開シンポジウムパネリスト
「大学を支えるマネジメント 国立大学行政運営のイノベーション」
- 平成23年11月18日 大学創生エンジン2011 実行委員会委員長
「つながる、つなげる、未来を創る+」
- 平成23年11月29日 第2回大学等事務系職員コンソーシアム in おおいた講師
「魅力ある大学づくりに必要な能力について考えてみよう」
- 平成23年12月9日 岩手県立大学ランチョンセミナー講師
「魅力ある大学づくりに必要な能力について考えてみよう」

- 平成 23 年 12 月 26 日 横浜国立大学学務部職員研修講師
「教員と職員がともに創りあげる魅力的な大学
～教員の“支援”から一歩踏み出してみよう～」
- 平成 24 年 1 月 18 日 名古屋大学高等教育研究センター第 105 回招聘セミナー講師
「あらためて考えてみる大学で働くということ」
- 平成 24 年 1 月 24 日 宮城教育大学有志 S D 講師
「事務職員に必要な能力とは？」
- 平成 24 年 2 月 6 日 広島大学有志 S D 講師
「事務職員に必要な能力とは？」
- 平成 24 年 2 月 17 日 中村学園大学 S D For Lab 講師
「魅力ある大学づくりに必要な能力について考えてみよう」

[補足]

なお、本年度をもって退職した下記2名の職員については、活動報告の掲載を省略しました。

記

氏名	在職期間
有田由紀子	平成20年4月1日～平成23年9月30日
吉田 宏二	平成19年5月1日～平成24年3月31日

平成23年度

大学教育センター一年度計画実施報告対処資料

平成23年度大学教育センター一年度計画実施報告対処表

<p>1.教養教育の成果と改善</p> <p style="padding-left: 20px;">習熟度別授業の充実GPA(R111a01-1)、GPAを活用した学生指導(R111a02-2)</p> <p style="padding-left: 40px;">「茨城大学におけるGPA制度について」の講演 (p3)</p>
<p>2.大学教育センターの改革</p> <p style="padding-left: 20px;">全学の教育に関する点検評価および教育改革の支援(R112010-1)、教育系センターとの組織的連携(R112010-2)</p> <p style="padding-left: 40px;">「eポートフォリオの導入と今後の展開～ポートフォリオの教育的意義～」の報告 (p39)</p>
<p>3.教育の点検評価</p> <p style="padding-left: 20px;">教育改善評価の実施(R112z18-0)</p> <p style="padding-left: 40px;">各基礎教育専門部会からのFD報告 (p53)</p> <p style="padding-left: 40px;">授業アンケートの結果報告 (p71)</p> <p style="padding-left: 40px;">教養科目推奨授業選定の経過及び結果 (p99)</p>
<p>4.学習・生活・経済支援の改革</p> <p style="padding-left: 20px;">学習進捗管理システムの構築と運営(R113019-2)、初年次学生の学習支援(R113019-3)</p> <p style="padding-left: 40px;">理系質問室の活動報告 (p129)</p> <p style="padding-left: 40px;">初年次学生の欠席者調査報告 (p131)</p> <p style="padding-left: 40px;">多読室利用状況報告 (p133)</p> <p style="padding-left: 40px;">RENANDI利用状況報告 (p135)</p>

大学教育センター年報編集委員会

平成23年度

委員長 勝 本 真 (副センター長 教育点検支援部長)
委員 梅 原 守 道 (専任教員 教育点検支援部)
委員 宇 野 美由紀 (専任教員 教育点検支援部)
委員 山 田 桂 子 (人文系基礎教育専門部会長)
委員 中 田 潤 (社会系基礎教育専門部会長)
委員 岡 田 誠 (自然系基礎教育専門部会長)
委員 安 田 健 一 (総合基礎教育専門部会長)
委員 神 田 大 吾 (外国語基礎教育専門部会長)
委員 福 田 浩 子 (総合英語教育専門部会長)
委員 羽 濑 裕 真 (情報基礎教育専門部会長)
委員 日 下 裕 弘 (健康・スポーツ基礎教育専門部会長)

この年報は、茨城大学大学教育センターの発行する年報としては第6号にあたるものであるが、同センターの前身にあたる大学教育研究開発センターの年報との連続性を考慮して通し番号を採用し、第16号とした。

発刊年月	平成24年3月
発 刊	茨城大学大学教育センター
住 所	〒310-8512 水戸市文京2-1-1
電 話	029-228-8414
F A X	029-228-8498
印 刷 所	コトブキ印刷株式会社

Annual Review of
University Education Center

No.16

2012 • March

IBARAKI UNIVERSITY
University Education Center